財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第367集

今井道上Ⅱ遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

縄文・古墳時代集落遺跡の調査

2006

国土交通省
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

今井道上Ⅱ遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

縄文・古墳時代集落遺跡の調査

2006

国土交通省
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道17号バイパス、通称「上武道路」は埼玉県深谷市と本県前橋市を結ぶ基幹道路として、国道50号までの区間が開通・供用されております。

上武道路の通過地域には多くの埋蔵文化財が包蔵されています。国道50号までの区間でも道路建設工事に先立って埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査が実施され、35もの遺跡が明らかになりました。

平成11年からは国道50号以北の建設工事が始まり、当事業団が主体となり埋蔵文化財の発掘調査を進めております。本書はそのうち、平成13年に発掘調査を実施した前橋市今井町にあります今井道上Ⅱ遺跡の調査報告書です。

今井道上Ⅱ遺跡では古墳時代後半期の集落と縄文時代前期の住居がみつかりました。特に古墳時代の集落は、周辺のいくつかの遺跡とともに、遺跡南方にある今井神社古墳という大型前方後円墳との関連が注目されています。

発掘調査から報告書刊行まで、国土交通省関東地方建設局高崎工事事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者の皆様には、一方ならぬご指導・ご協力を賜りました。厚く感謝の意を表します。

最後に、本報告書が、地域の歴史解明のため、多くの人々によって有効に活用されることを願い序といたします。

平成18年3月10日

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長　高　橋　勇　夫

今井沼と今井道上Ⅱ遺跡

1区23号住居全景

1区18号住居竈付近
遺物出土状態

例　言

1．本書は2001(平成13)年度の一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う今井道上Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。

2．今井道上Ⅱ遺跡は、群馬県前橋市今井630、632−1、634、643−1・2、641−1・2、966−1番地に所在した。遺跡名は、大字の「今井」と遺跡が広がる小字「道上」によって付けた。またⅡは昭和63年～平成3年にかけて国道50号改良工事に伴って調査された「今井道上遺跡」に隣接する同じ遺跡であることを示す。

3．発掘調査は、建設省関東地方建設局(現国土交通省)の委託により、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。発掘調査時の組織体制は次の通りである。

期　　間　2001(平成13)年8月23日～2002(平成14)年3月24日
　　2002(平成14)年6月1日～2002(平成14)年9月10日

管理指導　小野宇三郎(理事長)、吉田　豊・赤山容造(常務理事)、住谷　進(管理部長)、
　　能登　健(調査研究部長)、小山友孝（調査研究第2課長)、大島信夫(総務課長)

事務担当　笠原秀樹・小山建夫(総務係長)、須田朋子・吉田有光・森下弘美(係長代理)、片岡徳雄(主事)
　　今井もと子、内山佳子、若田　誠、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子、
　　松下次男、吉田　茂(補助員)

調査担当　13年度　飯塚卓二(課長)、小島敦子(主幹兼専門員)、今泉晃・佐藤理重(調査研究員)
　　小宮山達雄・前田和昭(嘱託)
　　14年度　洞口正史(主幹兼専門員)、新井英樹(調査研究員)

4．発掘資料の整理および報告書の作成は、国土交通省関東地方整備局の委託により、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。整理・報告書の作成の期間・体制は次の通りである。

期　　間　2004(平成16)年10月1日～2006(平成18)年3月30日

管理指導　小野宇三郎・高橋勇夫(理事長)、住谷永市・木村裕紀(常務理事)、神保侑史・津金沢芳茂(事業局長)、矢崎俊夫(総務部長)、右島和夫・西田健彦(調査研究部長)、中東耕志(資料整理部長兼資料整理第1課長)、相京建史(資料整理課長)、丸岡道雄・宮前結城雄(総務課長)

事務担当　高橋房雄・石井清(経理係長)、竹内　宏(総務係長)、須田朋子・吉田有光・今泉大作(主幹)、
　　栗原幸代・佐藤聖行・阿久沢玄洋・清水秀紀(主任)
　　今井もと子、内山佳子、若田　誠、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子、
　　松下次男、吉田　茂、武藤秀典(補助員)

編　　集　小島敦子(専門員)

本文執筆　原　雅信(課長)：第4章1－(4)b－縄文土器の型式、第6章1、2、岩崎泰一(専門員)：第4章1－(4)c－出土石器の分類、石器の概要、石器の製作構造、小島敦子：その他

遺構写真　調査担当者

遺物写真　佐藤元彦(係長代理)

遺物観察　縄文土器：原　雅信、縄文石器：岩崎泰一、中近世遺物：大西雅広(専門員)、その他：小島敦子

保存処理　関　邦一(係長代理)、土橋まり子(嘱託員)、小材浩一(補助員)

器械実測　富沢スミ江、田所順子、伊東博子、岸　弘子、廣津真希子(補助員)

遺物整理および図面作成

木暮芳枝、馬場信子、儘田澄子、新井雅子、丸橋富美子、田中のぶ子、吉澤照恵、生巣由美子、星野幸恵(補助員)

委託業務　縄文測片石器実測トレース：技研、土器トレース：(株)測研

炭化材樹種同定：株式会社パレオ・ラボ、遺構図デジタル編集：(株)測研

5．石材同定にあたっては飯島静男氏（群馬県地質研究会会員）に依頼した。

6．発掘調査および本書の作成にあたり、下記の諸氏よりご助言を得た。記して感謝の意を表したい。

前原　豊、設楽博己、杉山秀宏（敬称略）

国土交通省関東地方整備局・高崎工事事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会

また、整理作業においては当事業団職員坂口一、藤巻幸男、大木紳一郎、徳江秀夫の助言を得た。

7．出土遺物は一括して群馬県埋蔵文化財センターおよび財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が保管している。

凡　例

1．本調査に用いたグリッドは、路線上の遺跡相互の関連性が把握しやすいように1000m四方の大グリッド－100m四方の中グリッド－5m四方の小グリッドと階層的に設定した。大グリッドは全工区を南東からカバーし1～9と呼ぶ。本遺跡は1に属するが、遺跡内の個々の図面や記載では省略した。中グリッドは大グリッドの中を100個に区切り、南東隅からZ方向に1から100までとした。小グリッドは中グリッドの中を5mずつ区切り、東から西へAからT、南から北へ1～20とし、グリッド呼称は南東隅の交点をあてた。グリッドの呼称は、独立した単位の100m中グリッドと、南東隅の交点を並立して「98－A－1」のように呼称した。

なお、今井道上Ⅱ遺跡内のグリッドの座標値は、国家座標（旧座標第Ⅸ系）を用いて測量し、1－98－A－1が旧座標でX＝40.90km、Y＝－60.70km、新座標にすれば概ねX＝41.25km、Y＝－60.99kmである。

2．本書における遺構番号は、調査時に付されたものをそのまま使用した。

3．遺構図の中で使用した北方位は、すべて座標北を使用している。

4．遺構図・遺物図の縮尺は、原則として以下の通りである。縮尺の異なるものが併載される場合は、それぞれにスケールを付した。

遺構図　住居1：80　住居炉・竈1：40　掘立柱建物1：80　土坑・井戸1：40

遺物図　土器1：4　土器拓影1：3　石器・石製品1：3または1：2　大形石器1：6

小形石器1：1

5．遺物番号は種類ごとの連番で、下記のように種類の記号を付した。記号番号は本文・挿図・表・写真図版ともに一致する。

土器　記号省略　　石器　S　　金属器　M

6．図中で使用したスクリーントーン・インレタは以下のとおりである。

遺構図　灰・炭　焼土　硬化面　粘土　攪乱

遺物図　繊維包含縄文土器　石器磨り面　石器摩耗面

7．遺物写真図版の倍率は、土器は原則として1/4、石器のうち礫・剥片石器は大きさに応じて1/3あるいは1/2、石鏃等の小型のものは1/1に近づけるようにした。

8．遺物の重量の計測にあたっては6000gまでは1g単位、20kgまでは50g単位、20kg以上は100g単位の秤を使用して計測した。

9．各地図の使用は以下のとおりである。

第1図　国土地理院発行、20万分の1地勢図「長野」「宇都宮」

第2図　『群馬県史』通史編1付図を簡略化した「荒砥上ノ坊遺跡Ⅰ」第5図を修正して使用。

第3図・第5図・第7図　国土地理院発行、2万5千分の1地形図「大胡」

第4図・第52図・第131図　前橋市発行、昭和49年測図現形図57

10．各遺構の記述にあたっては以下のような点に留意して記述した。

住居　位置は、その遺構が含まれるグリッドをすべて記載した。重複は、重複する遺構とその新旧関係を述べた。形状は方形・長方形・隅丸方形・隅丸長方形にほぼ分類して記載した。規模は遺構確認面での上場で計測した。なお、竈付設住居では竈の部分を含んでいない。面積は床面積とし、住居の下場でプラニメーターの3回平均値を計測した。方位は北方向に最も近い主軸あるいは壁の方向を計測した。床面は傾斜や凹凸の有無、硬化面の残存状況を記述した。埋没土は埋没土の全体的傾向や特徴的な埋没土について記述した。炉・竈はそれぞれの位置と規模を記載し、遺存状態を述べた。周溝・柱穴・貯蔵穴等の住居施設については、検出された位置・規模・遺存状態を記述した。遺物は、住居全体の遺物の出土状態と、特徴的な遺物について記述した。所見では各住居の調査から考えられることがらがあれば記述した。また出土遺物・重複関係等から、遺構の時期を記載したが、表現は不統一である。縄文時代は土器型式名、古墳時代については隣接して調査された今井道上遺跡と同一集落であることから、既刊の『今井道上遺跡』(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第165集、1994)の時期区分を援用した。

その他の遺構　土坑・溝・墓等については、住居に準じて記述した。

目　次

序
口絵
例言
凡例

第１章　調査に至る経過
　１．国道17号改良工事と発掘調査・・・・・・1

第２章　遺跡の立地と環境
　１．遺跡の位置と地形・・・・・・・・・・・3
　２．周辺の遺跡分布・・・・・・・・・・・・6

第３章　発掘調査の方法と経過
　１．発掘調査の方法
　（１）遺跡・調査区・グリッドの設定・・・・14
　（２）基本土層と遺構確認・・・・・・・・・14
　（３）遺構・遺物の記録・・・・・・・・・・18
　２．調査の経過・・・・・・・・・・・・・・18
　３．発掘区の概要・・・・・・・・・・・・・19
　４．整理作業の方法
　（１）遺物整理・・・・・・・・・・・・・20
　（２）遺構図面写真整理・・・・・・・・・20

第４章　検出された遺構・遺物
　１．縄文時代の遺構・遺物
　（１）概要・・・・・・・・・・・・・・・・21
　（２）竪穴住居・・・・・・・・・・・・・・21
　（３）土坑・・・・・・・・・・・・・・・・47
　（４）遺構外の出土遺物・・・・・・・・・・52
　２．古墳時代以降の遺構・遺物
　（１）概要・・・・・・・・・・・・・・・・81
　（２）竪穴住居・・・・・・・・・・・・・・83
　（３）掘立柱建物・・・・・・・・・・・・・149
　（４）井戸・・・・・・・・・・・・・・・・152
　（５）溝・・・・・・・・・・・・・・・・・153
　（６）土坑・・・・・・・・・・・・・・・・154
　（７）ピット・・・・・・・・・・・・・・・159
　（８）道跡・・・・・・・・・・・・・・・・163
　（９）遺構外の出土遺物・・・・・・・・・・163

第５章　自然科学的分析報告
　１．今井道上Ⅱ遺跡出土炭化材の樹種同定・165
　２．今井道上Ⅱ遺跡から出土した炭化種実・166

第６章　調査の成果と問題点
　１．調査のまとめ・・・・・・・・・・・・・167
　２．縄文時代前期の住居について・・・・・168
　３．半截竹管文の施文方法について・・・・170
　４．古墳時代の集落構成とその変遷・・・・173

遺構一覧・遺物観察表・・・・・・・・・・・183

写真図版

報告書抄録

付図１　旧石器・縄文時代全体図
付図２　古墳時代全体図
付図３　３区道跡・６号溝・７号溝

挿図目次

第 1 図　群馬県の地勢と今井道上Ⅱ遺跡・・・

第105図　1区24号住居出土遺物・・・・・・・・・・・・・・139
第106図　1区25号住居・・・・・・・・・・・・・・・・・・141
第107図　1区25号住居竈・・・・・・・・・・・・・・・・・144
第108図　1区25号住居出土遺物(1)・・・・・・・・・・・・146
第109図　1区25号住居出土遺物(2)・・・・・・・・・・・・147
第110図　2区1号住居・・・・・・・・・・・・・・・・・・148
第111図　2区1号住居出土遺物・・・・・・・・・・・・・・149
第112図　1区1号・3号掘立柱建物の重複関係・・・・・150
第113図　1区1号掘立柱建物・・・・・・・・・・・・・・150
第114図　1区3号掘立柱建物・・・・・・・・・・・・・・151
第115図　1区2号掘立柱建物・・・・・・・・・・・・・・152
第116図　1区1号井戸と出土遺物・・・・・・・・・・・・153
第117図　1区1号溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・153
第118図　1区1号～6号土坑・・・・・・・・・・・・・・156
第119図　1区7号～14号・18号土坑・・・・・・・・・・・157
第120図　1区16号～19号・21号・22号・35号・36号ピット・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・160
第121図　1区37号～40号ピット・・・・・・・・・・・・161
第122図　1区土坑・ピット・遺構外・3区遺構外の出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・162
第123図　グリッド出土の古墳時代以降土器の分布・・・・164
第124図　縄文時代前期住居の構造・・・・・・・・・・・・168
第125図　今井道上Ⅱ遺跡出土土器の分類・・・・・・・・・174
第126図　今井道上Ⅱ遺跡の住居外形分類・・・・・・・・・176
第127図　今井道上Ⅱ遺跡の竪穴住居の分布(1)・・・・・177
第128図　今井道上Ⅱ遺跡の竪穴住居の分布(2)・・・・・178
第129図　今井神社古墳と周辺の発掘された遺跡・・・・・180

表目次

第1表　上武道路発掘調査遺跡一覧表(7工区その1)・・・2
第2表　周辺遺跡の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第3表　今井道上Ⅱ遺跡検出遺構一覧表・・・・・・・・・19
第4表　1区23号住居ピット一覧表・・・・・・・・・・・24
第5表　3区1号住居ピット一覧表・・・・・・・・・・・・36
第6表　3区2号住居ピット一覧表・・・・・・・・・・・・43
第7表　縄文土器出土数一覧表・・・・・・・・・・・・・・52
第8表　縄文石器類出土数一覧表・・・・・・・・・・・・・56
第9表　縄文時代石器類一覧表・・・・・・・・・・・・・・58
第10表　石器の器種と細分・・・・・・・・・・・・・・・・58
第11表　細別器種の出土地点・・・・・・・・・・・・・・・64
第12表　縄文時代石器類器種別石材別点数一覧表・・・・・68
第13表　1区1号掘立柱建物跡ピット計測表・・・・・・150
第14表　1区3号掘立柱建物跡ピット計測表・・・・・・150
第15表　1区2号掘立柱建物跡ピット計測表・・・・・・152
第16表　時期不明ピット一覧表・・・・・・・・・・・・・159
第17表　古墳時代以降遺構外出土遺物数一覧表・・・・・164
第18表　今井道上Ⅱ遺跡出土炭化材樹種同定結果一覧・・166
第19表　今井道上Ⅱ遺跡の土器編年・・・・・・・・・・・175
遺構一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・186
縄文土器観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・188
縄文時代石器類一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・195
土師器・須恵器・陶磁器観察表・・・・・・・・・・・・・211
古墳時代石器・石製品・礫観察表・・・・・・・・・・・・224
金属器観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・228
木製品観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・228

写真目次

写真1　空から見た荒砥川下流域・・・・・・・・・・・・11
図版1　出土した炭化種実・・・・・・・・・・・・・・・166
写真2　縄文土器につけられた円形竹管文・・・・・・・・171
写真3　円形竹管文の分類・・・・・・・・・・・・・・・172

写真図版目次

ＰＬ１－１　赤城山南麓に伸びる上武道路予定地
　　2　今井道上Ⅱ遺跡発掘区全景
ＰＬ２－１　今井道上Ⅱ遺跡と今井沼
　　2　遺跡から今井沼を臨む
　　3　調査前の今井道上Ⅱ遺跡
　　4　表土剥ぎ終了後の今井道上Ⅱ遺跡
　　5　1区から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡を臨む
ＰＬ３－１　1区23号住居全景
　　2　1区23号住居土層断面A-A'
　　3　1区23号住居土層断面B-B'
　　4　1区23号住居南半遺物出土状況
　　5　1区23号住居南半遺物出土状況
ＰＬ４－１　1区23号住居南半全景
　　2　1区23号住居土層断面A-A'
　　3　1区23号住居北半上層遺物出土状況
　　4　1区23号住居北半全景
　　5　1区23号住居炉と1号埋設土器(348)
　　6　1区23号住居炉と1号埋設土器確認状況
　　7　1区23号住居炉土層断面Ⅰ-Ⅰ'東半
　　8　1区23号住居炉土層断面Ⅰ-Ⅰ'東半
ＰＬ５－１　1区23号住居1号土器埋設土坑土層断面H-H'
　　2　1区23号住居1号土器埋設土坑土層断面H-H'

3　1区23号住居1号土器埋設土坑土層断面J-J'
4　1区23号住居1号埋設土器埋設状況
5　1区23号住居2号埋設土器全景
6　1区23号住居2号土器埋設土坑土層断面K-K'
7　1区23号住居2号埋設土器埋設状況
8　1区23号住居2号土器埋設土坑掘り方全景
PL6－1　1区23号住居1号焼土土層断面M-M'
2　1区23号住居1号焼土土層断面L-L'
3　1区23号住居1号焼土底面全景
4　1区23号住居2号焼土土層断面N-N'
5　1区23号住居2号焼土土層断面O-O'
6　1区23号住居2号焼土底面全景
7　1区23号住居遺物出土状況
8　1区23号住居石皿(S108)周辺石器出土状況
PL7－1　3区1号住居全景
2　3区1号住居土層断面A-A'
3　3区1号住居1号埋設土器確認状況
4　3区1号住居1号土器埋設土坑掘り方土層断面C-C'
5　3区1号住居1号土器埋設土坑掘り方全景
PL8－1　3区1号住居1号土器埋設土坑下部土層断面E-E'
2　3区1号住居1号焼土検出状況
3　3区1号住居1号土坑土層断面F-F'
4　3区1号住居1号土坑全景
5　3区1号住居2号土坑全景
6　3区1号住居北西隅遺物出土状況
7　3区1号住居打製石斧(S123)出土状況
8　3区1号住居凹み石(S153)出土状況
PL9－1　3区2号住居全景
2　3区2号住居土層断面A-A'
3　3区2号住居土層断面B-B'
4　3区2号住居遺物出土状況
5　3区2号住居床面下全景
PL10－1　3区2号住居1号・2号炉全景
2　3区2号住居1号・2号炉土層断面H-H'
3　3区2号住居1号・2号炉掘り方全景
4　3区2号住居1号焼土検出状況
5　3区2号住居1号焼土土層断面I-I'
6　3区2号住居1号焼土底面全景
7　3区2号住居1号土坑土層断面C-C'
8　3区2号住居2号土坑土層断面D-D'
PL11－1　1区15号土坑土層断面A-A'
2　1区15号土坑全景
3　1区16号土坑土層断面A-A'
4　1区16号土坑全景
5　1区17号土坑土層断面
6　1区17号土坑全景
7　3区1号土坑土層断面
8　3区1号土坑全景
PL12－1　3区2号土坑土層断面
2　3区2号土坑全景
3　3区3号土坑全景
4　3区3号土坑完掘状況
5　1区古墳時代住居群全景
6　1区南西隅住居群の分布
7　1区南東隅の住居・掘立柱建物の分布
8　1区南西隅50号拡幅調査区との隣接地
PL13－1　1区1号住居全景
2　1区1号住居掘り方全景
3　1区1号住居土層断面A-A'
4　1区1号住居土層断面B-B'
5　1区1号住居掘り方土層断面A-A'
6　1区1号住居掘り方土層断面B-B'
7　1区1号住居P1土層断面C-C'
8　1区作業風景
PL14－1　1区2号住居全景
2　1区2号住居掘り方全景
3　1区2号住居土層断面A-A' 西半
4　1区2号住居土層断面A-A' 東半
5　1区2号住居土層断面B-B'
6　1区2号住居掘り方土層断面A-A'
7　1区2号住居P4土層断面C-C'
8　1区2号住居土層断面D-D'
PL15－1　1区3号住居全景
2　1区3号住居掘り方全景
3　1区3号住居土層断面A-A'
4　1区3号住居掘り方土層断面A-A'
5　1区3号住居土師器高坏(51)出土状況
6　1区3号住居土師器坏(47)出土状況
7　1区3号住居土師器甕(54)出土状況
8　1区3号住居土師器甕(53)出土状況
PL16－1　1区3号住居土師器坏(46)出土状況
2　1区3号住居土師器甕(52)出土状況
3　1区3号住居竈全景
4　1区3号住居竈土層断面C-C'
5　1区3号住居竈土層断面D-D'
6　1区3号住居竈掘り方土層断面C-C'
7　1区3号住居竈掘り方土層断面D-D'
8　1区3号住居貯蔵穴土層断面E-E'
PL17－1　1区4号住居全景
2　1区4号住居掘り方全景
3　1区4号住居土層断面A-A'
4　1区4号住居土層断面B-B'
5　1区4号住居掘り方土層断面A-A'
6　1区4号住居掘り方土層断面G-G'
7　1区4号住居竈西側遺物出土状況
8　1区4号住居北東隅土師器椀(72)出土状況
PL18－1　1区4号住居竈遺物出土状況
2　1区4号住居竈土層断面C-C'
3　1区4号住居竈土層断面D-D'
4　1区4号住居竈掘り方土層断面C-C'
5　1区4号住居竈掘り方土層断面D-D'
6　1区4号住居竈掘り方全景
7　1区4号住居貯蔵穴土層断面E-E'
8　1区4号住居貯蔵穴全景
PL19－1　1区5号住居全景
2　1区5号住居掘り方全景
3　1区5号住居土層断面A-A'
4　1区5号住居掘り方土層断面A-A'
5　1区5号住居竈土層断面C-C'
6　1区5号住居竈全景

7　1区5号住居土師器鉢(85)出土状況
8　1区5号住居竈掘り方全景
P L20－1　1区6号住居全景
2　1区6号住居掘り方全景
3　1区6号住居土層断面A-A'
4　1区6号住居土層断面B-B'
5　1区6号住居掘り方土層断面A-A'
6　1区6号住居掘り方土層断面B-B'
7　1区6号住居竈土層断面C-C'
8　1区6号住居竈土層断面D-D'
P L21－1　1区6号住居竈掘り方土層断面C-C'
2　1区6号住居竈掘り方土層断面D-D'
3　1区7号住居全景
4　1区7号住居掘り方全景
5　1区7号住居土層断面A-A'
6　1区7号住居土層断面B-B'
7　1区7号住居掘り方土層断面A-A'
8　1区7号住居掘り方土層断面B-B'
P L22－1　1区7号住居掘り方土層断面A-A'
2　1区7号住居焼土出土状況
3　1区8号住居全景
4　1区8号住居掘り方全景
5　1区8号住居土層断面A-A'
6　1区8号住居土層断面B-B'
7　1区8号住居掘り方土層断面A-A'
8　1区8号住居掘り方土層断面F-F'
P L23－1　1区8号住居南西隅遺物出土状況
2　1区8号住居竈右側遺物出土状況
3　1区8号住居竈全景
4　1区8号住居竈土層断面C-C'
5　1区8号住居竈土層断面D-D'
6　1区8号住居竈掘り方土層断面C-C'
7　1区8号住居竈掘り方土層断面D-D'
8　1区8号住居竈掘り方全景
P L24－1　1区8号住居貯蔵穴土層断面E-E'
2　1区8号住居土師器壺(106)出土状況
3　1区9・12号住居全景
4　1区9・12号住居床面全景
5　1区9・12号住居掘り方全景
P L25－1　1区9・12号住居土層断面A-A'
2　1区9・12号住居土層断面B-B'
3　1区9・12号住居掘り方土層断面A-A'
4　1区9・12号住居掘り方土層断面B-B'
5　1区9号住居竈全景
6　1区9号住居竈土層断面C-C'
7　1区9号住居竈土層断面D-D'
8　1区9号住居竈掘り方土層断面C-C'
P L26－1　1区9号住居竈掘り方土層断面D-D'
2　1区9号住居貯蔵穴遺物出土状況
3　1区9号住居貯蔵穴土層断面
4　1区9号住居床下土坑土層断面E-E'
5　1区12号住居貯蔵穴土層断面F-F'
6　1区12号住居南東隅遺物出土状況
7　1区12号住居土師器坏(130・141)出土状況
8　1区12号住居貯蔵穴中層遺物出土状況
P L27－1　1区12号住居貯蔵穴上層遺物出土状況
2　1区12号住居南東隅粘土出土状況
3　1区10号住居全景
4　1区10号住居掘り方全景
5　1区10号住居竈周辺遺物出土状況
P L28－1　1区10号住居掘り方土層断面A-A'
2　1区10号住居掘り方土層断面B-B'
3　1区10号住居竈全景
4　1区10号住居竈土層断面C-C'
5　1区10号住居竈土層断面D-D'
6　1区10号住居竈掘り方土層断面C-C'
7　1区10号住居竈掘り方土層断面D-D'
8　1区10号住居貯蔵穴土層断面F-F'
P L29－1　1区10号住居貯蔵穴土層断面F-F'
2　1区10号住居貯蔵穴遺物出土状況
3　1区11号住居全景
4　1区11号住居掘り方全景
5　1区11号住居土層断面B-B'
6　1区11号住居掘り方土層断面B-B'
7　1区11号住居南隅遺物出土状況
8　1区11号住居竈全景
P L30－1　1区11号住居竈土層断面C-C'
2　1区11号住居竈土層断面D-D'
3　1区11号住居竈掘り方土層断面C-C'
4　1区11号住居竈掘り方土層断面D-D'
5　1区11号住居貯蔵穴土層断面E-E'
6　1区11号住居貯蔵穴全景
7　1区13号住居全景
8　1区13号住居掘り方全景
P L31－1　1区13号住居土層断面A-A'
2　1区13号住居掘り方土層断面A-A'
3　1区13号住居土師器壺(171)出土状況
4　1区13号住居竈全景
5　1区13号住居竈土層断面C-C'
6　1区13号住居竈土層断面D-D'
7　1区13号住居竈掘り方土層断面C-C'
8　1区13号住居竈掘り方土層断面D-D'
P L32－1　1区14号住居全景
2　1区14号住居掘り方全景
3　1区14号住居土層断面A-A'
4　1区14号住居土層断面B-B'
5　1区14号住居1号土坑土層断面F-F'
6　1区14号住居掘り方土層断面B-B'
7　1区14号住居南東隅際遺物出土状況
8　1区14号住居土師器坏(172)出土状況
P L33－1　1区14号住居竈全景
2　1区14号住居竈土層断面C-C'
3　1区14号住居竈土層断面D-D'
4　1区14号住居竈掘り方土層断面C-C'
5　1区14号住居竈掘り方土層断面D-D'
6　1区14号住居貯蔵穴土層断面E-E'
7　1区15号住居全景
8　1区15号住居掘り方全景
P L34－1　1区15号住居土層断面A-A'
2　1区15号住居土層断面B-B'

3　1区15号住居掘り方土層断面A-A'
4　1区15号住居掘り方土層断面B-B'
5　1区15号住居竈全景
6　1区15号住居竈全景
7　1区15号住居竈掘り方土層断面C-C'
8　1区15号住居竈掘り方土層断面D-D'
PL35-1　1区15号住居貯蔵穴土層断面E－E'
2　1区15号住居貯蔵穴全景
3　1区16号住居全景
4　1区16号住居掘り方全景
5　1区16号住居土層断面A-A'
6　1区16号住居土層断面B-B'
7　1区16号住居掘り方土層断面A-A'
8　1区16号住居掘り方土層断面B-B'
PL36-1　1区16号住居土師器坏(183)扁平瓢(S42)出土状況
2　1区16号住居土師器坏(182)出土状況
3　1区16号住居竈痕跡全景
4　1区16号住居竈掘り方全景
5　1区16号住居竈掘り方土層断面
6　1区16号住居竈掘り方土層断面
7　1区16号住居貯蔵穴土層断面C-C'
8　1区16号住居貯蔵穴全景
PL37-1　1区16号住居1号土坑土層断面D-D'
2　1区16号住居1号土坑全景
3　1区17号住居全景
4　1区17号住居掘り方全景
5　1区17号住居土層断面A-A'
6　1区17号住居土層断面B-B'
7　1区17号住居掘り方土層断面A-A'
8　1区17号住居掘り方土層断面B-B'
PL38-1　1区17号住居土師器坏(184)出土状況
2　1区17号住居土師器坏(185)出土状況
3　1区17号住居竈全景
4　1区17号住居竈掘り方全景
5　1区17号住居竈土層断面C-C'
6　1区17号住居竈土層断面D-D'
7　1区17号住居竈掘り方土層断面C-C'
8　1区17号住居竈掘り方土層断面C-C'
PL39-1　1区17号住居竈掘り方土層断面D-D'
2　1区17号住居貯蔵穴土層断面E-E'
3　1区17号住居貯蔵穴全景
4　1区18号住居掘り方全景
5　1区18号住居全景
PL40-1　1区18号住居土層断面A-A'
2　1区18号住居土層断面B-B'
3　1区18号住居掘り方土層断面A-A'
4　1区18号住居掘り方土層断面B-B'
5　1区18号住居土師器坏(191・192)出土状況
6　1区18号住居土師器坏(194・200・201)出土状況
7　1区18号住居1号竈遺物出土状況
8　1区18号住居1号竈全景
PL41-1　1区18号住居1号竈土層断面G-G'
2　1区18号住居1号竈土層断面I-I'
3　1区18号住居1号竈掘り方土層断面G-G'
4　1区18号住居1号竈掘り方土層断面H－H'
5　1区18号住居須恵器甕(202)土師器甕出土状況
6　1区18号住居2号竈痕跡全景
7　1区18号住居1号貯蔵穴土層断面J-J'
8　1区18号住居1号貯蔵穴全景
PL42-1　1区18号住居2号貯蔵穴土層断面F-F'
2　1区18号住居2号貯蔵穴全景
3　1区作業風景
4　1区作業風景
5　1区19号住居全景
6　1区19号住居掘り方全景
7　1区19号住居土層断面A-A'
8　1区19号住居土層断面B-B'
PL43-1　1区19号住居掘り方土層断面A-A'
2　1区19号住居掘り方土層断面B-B'
3　1区19号住居竈全景
4　1区19号住居竈掘り方土層断面C-C'
5　1区20号住居全景
6　1区20号住居掘り方全景
7　1区20号住居土層断面A-A'
8　1区20号住居土層断面B-B'
PL44-1　1区20号住居掘り方土層断面A-A'
2　1区20号住居掘り方土層断面B-B'
3　1区20号住居土師器坏(213)出土状況
4　1区20号住居中央部礫出土状況
5　1区20号住居竈全景
6　1区20号住居竈土層断面C-C'
7　1区20号住居竈土層断面D-D'
8　1区20号住居竈掘り方土層断面C-C'
PL45-1　1区20号住居竈掘り方土層断面D-D'
2　1区20号住居貯蔵穴土層断面E-E'
3　1区20号住居貯蔵穴全景
4　1区21号住居全景
5　1区21号住居礎石(S34)出土状況
6　1区21号住居南西壁際遺物出土状況
7　1区22号住居全景
8　1区22号住居掘り方全景
PL46-1　1区22号住居土層断面A-A'
2　1区22号住居掘り方土層断面A-A'
3　1区21・22号住居掘り方土層断面B-B'
4　1区24号住居全景
5　1区24号住居掘り方全景
6　1区24号住居中央部遺物出土状況
7　1区24号住居掘り方土層断面A-A'
8　1区24号住居1号土坑全景
PL47-1　1区24号住居2号土坑土層断面B-B'
2　1区24号住居南西部桃土全景
3　1区24号住居作業風景
4　1区25号住居全景
5　1区25号住居掘り方全景
6　1区25号住居土層断面B-B'
7　1区25号住居土層断面B-B'　東壁部
8　1区25号住居土層断面A-A'　南半
PL48-1　1区25号住居土層断面A-A'　北半
2　1区25号住居掘り方土層断面B-B'
3　1区25号住居掘り方土層断面A-A'

4　1区25号住居炭化材(C－1)出土状況
5　1区25号住居炭化材(C－6・7)出土状況
6　1区25号住居全景
7　1区25号住居竈土師器坏(255)出土状況
8　1区25号住居全景
PL49－1　1区25号住居竈土師器高坏(263・支脚)出土状況
2　1区25号住居竈土層断面G－G'
3　1区25号住居竈土層断面E－E'西部
4　1区25号住居竈土層断面E－E'東部
5　1区25号住居遺物出土状況
6　1区25号住居土師器小型甕(267)出土状況
7　1区25号住居土師器小型甕(266)出土状況
8　1区25号住居土師器坏(260)出土状況
PL50－1　1区25号住居土師器坏(258)出土状況
2　1区25号住居土師器坏(253・257)出土状況
3　1区25号住居南壁の焼土・炭化物出土状況
4　1区25号住居炭化物(C－13)出土状況
5　1区25号住居竈掘り方土層断面E－E'東部
6　1区25号住居竈掘り方土層断面E－E'中央部
7　1区25号住居竈掘り方土層断面F－F'
8　1区25号住居竈掘り方土層断面G－G'
PL51－1　1区25号住居竈煙道部確認状況
2　1区25号住居竈煙道部掘り方土層断面E－E'
3　1区25号住居貯蔵穴土層断面K－K'
4　1区25号住居貯蔵穴全景
5　2区1号住居全景
6　2区1号住居掘り方全景
7　2区1号住居土層断面A－A'
8　2区1号住居掘り方土層断面A－A'
PL52－1　2区1号住居南西隅土師器坏(274)出土状況
2　2区1号住居竈全景
3　2区1号住居竈土層断面B－B'
4　2区1号住居竈掘り方土層断面
5　1区1号・3号掘立柱建物全景
PL53－1　1区1号掘立柱建物P1土層断面A－A'
2　1区1号掘立柱建物P2土層断面B－B'
3　1区1号掘立柱建物P3土層断面B－B'
4　1区1号掘立柱建物P4土層断面B－B'
5　1区1号掘立柱建物P5土層断面C－C'
6　1区1号掘立柱建物P6土層断面C－C'
7　1区1号掘立柱建物P7土層断面C－C'
8　1区1号掘立柱建物P8土層断面A－A'
PL54－1　1区1号掘立柱建物P9土層断面A－A'
2　1区3号掘立柱建物P1土層断面A－A'
3　1区3号掘立柱建物P2土層断面B－B'
4　1区3号掘立柱建物P3土層断面B－B'
5　1区3号掘立柱建物P4土層断面B－B'
6　1区3号掘立柱建物P5土層断面D－D'
7　1区3号掘立柱建物P6土層断面C－C'
8　1区3号掘立柱建物P7土層断面C－C'
PL55－1　1区3号掘立柱建物P8土層断面A－A'
2　1区3号掘立柱建物P9土層断面A－A'
3　1区2号掘立柱建物全景
4　1区2号掘立柱建物P1土層断面B－B'
5　1区2号掘立柱建物P2土層断面B－B'
6　1区2号掘立柱建物P3土層断面B－B'
7　1区2号掘立柱建物P4土層断面E－E'
8　1区2号掘立柱建物P6土層断面A－A'
PL56－1　1区2号掘立柱建物P7土層断面A－A'
2　1区2号掘立柱建物P8土層断面C－C'
3　1区1号井戸全景
4　1区1号井戸土層断面
5　1区1号井戸土層礫出土状況
6　1区1号井戸中層礫出土状況
7　1区1号土坑土層断面
8　1区1号土坑全景
PL57－1　1区2号土坑土層断面A－A'
2　1区2号土坑全景
3　1区3号土坑土層断面
4　1区3号土坑全景
5　1区4号土坑土層断面
6　1区4号土坑全景
7　1区5号土坑土層断面
8　1区5号土坑全景
PL58－1　1区6号土坑土層断面
2　1区6号土坑全景
3　1区7号土坑土層断面
4　1区7号土坑全景
5　1区8号土坑土層断面
6　1区8号土坑全景
7　1区9号・10号土坑土層断面
8　1区9号・10号土坑全景
PL59－1　1区11号土坑土層断面
2　1区11号土坑全景
3　1区12号土坑土層断面
4　1区12号土坑全景
5　1区13号土坑土層断面
6　1区13号土坑全景
7　1区14号土坑全景
8　1区18号土坑土層断面
PL60－1　1区18号土坑全景
2　1区16号ピット土層断面
3　1区17号ピット土層断面
4　1区18号ピット土層断面
5　1区19号ピット土層断面
6　1区20号ピット土層断面
7　1区21号ピット土層断面
8　1区22号ピット土層断面
PL61－1　1区34号ピット土層断面
2　1区35号ピット遺物出土状況
3　1区35号ピット土層断面
4　1区37号ピット土層断面
5　1区38号ピット土層断面
6　1区39号ピット土層断面
7　1区1号溝土層断面
8　1区1号溝全景
PL62－1　3区1号～5号溝全景
2　3区1号溝土層断面
3　3区2号溝土層断面
4　3区3号・5号溝土層断面

5　3区4号溝土層断面
6　3区5号溝土層断面
7　3区道跡土層断面A-A'
8　現道と重なってみつかった3区道跡
PL63－1　3区道跡(上面)の硬化面
2　3区道跡(下面)の硬化面
3　3区道跡(上面)全景
4　3区道跡(下面)全景
5　3区谷部横断土層断面
6　3区谷部縦断土層断面
PL64　1区23号住居出土遺物
PL65　1区23号住居出土遺物
PL66　1区23号住居出土遺物
PL67　1区23号住居出土遺物
PL68　1区23号住居出土遺物
PL69　1区23号住居・3区1号住居出土遺物
PL70　3区1号住居出土遺物
PL71　3区1号住居出土遺物
PL72　3区2号住居出土遺物
PL73　3区2号住居・1区16号土坑・3区1号土坑・3区3号土坑・3区4号溝・1区遺構外・3区遺構外出土遺物
PL74　1区遺構外出土遺物
PL75　1区遺構外出土遺物
PL76　1区遺構外・2区遺構外・3区遺構外出土遺物
PL77　3区遺構外出土遺物
PL78　3区遺構外出土遺物
PL79　3区遺構外出土遺物
PL80　1区1号住居・1区2号住居出土遺物
PL81　1区3号住居・1区4号住居出土遺物
PL82　1区4号住居出土遺物
PL83　1区5号住居出土遺物
PL84　1区5号住居・1区6号住居出土遺物
PL85　1区7号住居・1区8号住居出土遺物
PL86　1区8号住居・1区9号住居・1区12号住居出土遺物
PL87　1区12号住居・1区10号住居出土遺物
PL88　1区10号住居・1区11号住居・1区13号住居・1区14号住居・1区15号住居・1区16号住居出土遺物
PL89　1区16号住居・1区17号住居・1区18号住居出土遺物
PL90　1区18号住居・1区19号住居・1区20号住居出土遺物
PL91　1区20号住居・1区21号住居・1区22号住居・1区24号住居出土遺物
PL92　1区24号住居・1区25号住居・2区1号住居出土遺物
PL93　2区1号住居・1区1号井戸・1区土坑・1区ピット・1区遺構外・3区遺構外出土遺物

第１章　調査に至る経過

1．国道17号改良工事と発掘調査

今井道上Ⅱ遺跡は群馬県前橋市の東南部今井町にある。ＪＲ両毛線の駒形駅から北北東に約3.7kmの距離に位置する（第１図）。遺跡のある地域は前橋市街地の東に広がる農村地帯である。赤城山南麓の裾野にあたり、緩斜面の火山麓性の台地とそれを開析する谷地形が入り組んだ地形を見せている。

遺跡は、国道17号の改良工事に伴って発掘調査が実施された。群馬県内の国道17号の改良工事は、埼玉県の渓谷バイパスから前橋市田口町の現道に接続する通称「上武道路」建設として実施されている。上武道路は県内の平野部を斜めに縦断する基幹道路であり、すでに平成元年度に前橋市今井町の国道50号線までのⅠ期工事が完了し、供用が開始された。

Ⅰ期工事に先だって昭和48年度から昭和63年度の15年間にわたって、群馬県教育委員会および財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団によって発掘調査が実施された。調査された遺跡は35遺跡、面積は延べ534.000㎡に及んだ。これらの整理作業は昭和56年から平成７年度の14年間、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団によって行われ、旧石器時代から近世にわたる遺構・遺物が26冊にのぼる発掘調査報告書にまとめられている。

国道50号以北の工事（７工区）は平成11年から開始された。上武道路が通過する地域は埋蔵文化財包蔵地が多くあり、考古学的にも注目される地域である。国道50号以北の道路建設工事に先立ち、建設省（現国土交通省）関東地方建設局と群馬県教育委員会との間で、文化財の保護を前提とした協議がなされた。

第１図　群馬県の地勢と今井道上Ⅱ遺跡

その結果、埋蔵文化財の包蔵地を道路建設の対象区域から除外することが不可能であり、かつ事業の実施によって埋蔵文化財が破壊される区域においては、事前に発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託されることとなり、平成11年４月１日付けで３者の協定書が交わされた。協定書では、国道50号から前橋市堤町までの調査に関する基本的事項が確認され、整理作業を含めた発掘調査を平成18年３月31日までに終了することとなった。

発掘調査は協定書に基づき、平成11年度から財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が「国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（その１）」として受託し実施した。本事業全体で発掘調査された遺跡は、当初、国道50号に接する今井道上Ⅱ遺跡から荒砥Ⅱ遺跡までの12遺跡で、表面積は20万9000㎡に及んだ。

事業の進捗に伴って、平成11年４月１日付けの協定書は、変更の必要が生じ、平成16年10月22日付けで新しい協定書が締結された。新協定書では、①当初７工区（その１）に東半分が含まれていた荒砥Ⅱ遺跡について、同一遺跡であることから７工区（その２）の協約に移行・統合し、②整理期間を含めて調査の期間を平成22年３月31日までに改めることとなった。最終的な７工区（その１）の各遺跡の発掘調査は第１表の通りである。

出土遺物等の整理作業は、平成11年の協定書に基づき、平成15年度から財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が国土交通省関東建設局の委託を受け、開始された。平成16年以降は平成16年10月22日付けの新しい協定書によって、平成16年度までに今井道上Ⅱ・荒砥北三本堂Ⅱ・富田細田・富田宮下・富田漆田・富田下大日・江木下大日の７遺跡の整理作業が着手された。このうち荒砥北三本堂Ⅱ・富田下大日・江木下大日遺跡は整理作業の一部を財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に委託した。

今年度は整理作業の３年次にあたり、今井道上Ⅱ遺跡・富田漆田遺跡の２冊の発掘調査報告書を刊行することとなった。

第１表　上武道路発掘調査一覧表　７工区（その１）

遺跡略号	遺跡名	調査区	調査担当者（ ）内は概況	調査期間
JK36B	今井道上Ⅱ遺跡		飯塚卓二・小島敦子・今泉晃・佐藤理重	13.4.1～14.3.31
		未収地	洞口正史・新井英樹	14.6.1～14.9.10
JK37	荒砥北三本堂Ⅱ遺跡	１区	新倉明彦・亀山幸弘・（小宮山達雄）	12.4.3～12.9.30
		２区	飯塚卓二・小島敦子・今泉晃・佐藤理重	13.4.1～14.3.31
		３区	石塚入則・小島敦子・関根慎二・金子伸也・池田政志・金井仁史・今泉晃・（前田和昭）	12.4.3～13.3.31
JK38	荒砥北原Ⅱ遺跡	１区	小島敦子・今泉晃	13.4.1～14.3.31
		２・３区	小島敦子・関根慎二・池田政志・金井仁史・今泉晃・（前田和昭）	12.4.3～13.3.31
JK39	荒砥前田Ⅱ遺跡	１区	小島敦子・今泉晃	13.4.1～14.3.31
		２・３区	石塚入則・小島敦子・関根慎二・金子伸也・池田政志・金井仁史・今泉晃・（前田和昭）	12.4.3～13.3.31
		４区	田村公夫・今井和久・平方施行・岡部豊	14.7.1～15.2.4
JK40	富田細田遺跡		児島良昌・津島秀章・山村英二・（黒澤はるみ）	11.4.1～11.9.30
JK41	富田宮下遺跡		飯塚卓二・児島良昌・津島秀章・山村英二・久保学・石田真・西原和久・（黒澤はるみ・小宮山達雄）	11.8.2～12.3.31
			中沢悟・坂口一・池江秀夫・根岸仁・新井英樹・西原和久	12.4.3～13.3.31
JK42	富田西原遺跡		女屋和志雄・安藤剛志・青木さおり	11.9.1～12.3.31
JK43	富田高石遺跡		飯塚卓二・女屋和志雄・安藤剛志	12.4.3～13.3.31
		未収地	女屋和志雄・青木さおり	13.4.1～13.9.30
		未収地	洞口正史・新井英樹	14.4.1～14.7.5
JK44	富田漆田遺跡		飯塚卓二・女屋和志雄・木津博明・児島良昌・田村公夫・安藤剛志	12.4.3～13.3.31
		旧石器	女屋和志雄・木津博明・吉田和夫・青木さおり	13.4.1～14.3.31
		未収地	洞口正史・新井英樹	14.4.1～14.5.15
JK45	富田下大日遺跡		木津博明・児島良昌・田村公夫	12.4.3～13.3.31
			木津博明・吉田和夫	13.4.1～14.3.31
JK46	江木下大日遺跡		女屋和志雄・洞口正史・木津博明・吉田和夫・新井英樹・高柳弘道・青木さおり	13.4.1～14.3.31
		未収地	洞口正史・新井英樹	14.8.1～14.10.25

第２章　遺跡の立地と環境

１．遺跡の位置と地形

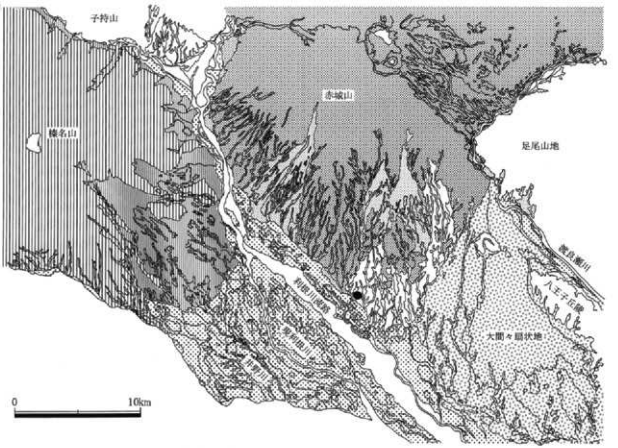
赤城山麓の地形　今井道上Ⅱ遺跡は、県北の山地と南東平野部が接する群馬県中央部に位置する。県央地域には西に榛名山、東に赤城山があり、その裾野には丘陵性の台地が広がっている。遺跡はこのうち東側に位置する赤城山の南麓に形成された火山麓扇状地端部にある。

赤城山は40～50万年前から活動を始めた複合成層火山で、3.1～3.2万年前に大規模な軽石噴火をおこして中央火口丘群を形成した後は、現在まで目立った火山活動はなく、火山麓扇状地の形成期となっている。山麓の扇状地にはさらに新期の扇状地が一部にのるが、遺跡の西側を流下する荒砥川以西は同じ赤城山の山体でも基底に大胡火砕流が堆積する古い地形面である（第２図）。

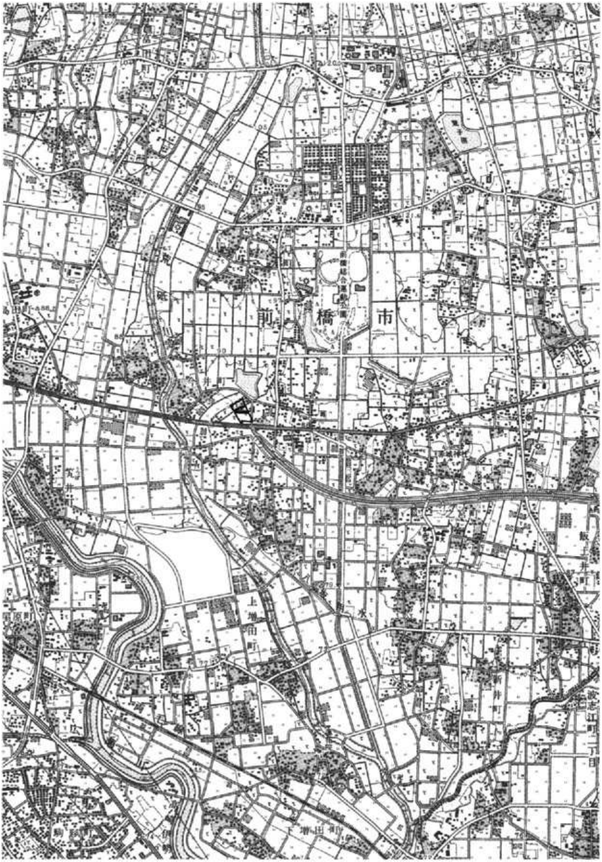
赤城山南麓には荒砥川、宮川、神沢川、江龍川などの中小河川が流下している。これらの河川や台地端部からの湧水により火山麓扇状地に樹枝状の開析が進み、台地と沖積地が複雑に入り込む地形が形成されている。特に荒砥北部地区では帯状の沖積地が発達し、起伏に富んだ地形が広がっている。

赤城山南麓の地形はローム台地、砂礫土からなる微高地、沖積地に分類される。ローム台地は火山麓扇状地の原形面に関東ローム層が堆積した台地である。いわゆる暗色帯の堆積が認められ、旧石器時代の文化層が包含されている。

ローム台地に付随するように存在する微高地は、縄文時代早期から前期にかけて、赤城山の山体が降雨災害等によって崩壊し、河川の運搬作用の結果、



第２図　群馬県中央部の地形と今井道上Ⅱ遺跡



第３図　今井道上Ⅱ遺跡の位置

0　1：25,000　1km

流速が衰える山麓端部に再堆積することにより形成されたと考えられている。縄文時代後期以降の遺跡はローム台地あるいは、この微高地に分布する。本地域では微高地を形成する再堆積土の下層から検出される縄文時代早期の遺跡も存在する。沖積地は前述した山麓を開析する谷地形内にあり、古墳時代以降の埋没水田が検出されている。

今井道上Ⅱ遺跡の立地　今井道上Ⅱ遺跡は赤城山の南麓末端に近い、標高87～89mの緩傾斜の台地上に立地する。遺跡周辺の地形は後期更新世前半に形成された山麓扇状地で、山麓に水源をもつ小河川と、山麓に谷頭をもつ細長い低地とその支谷が樹枝状に入り込んだ様相を呈している。

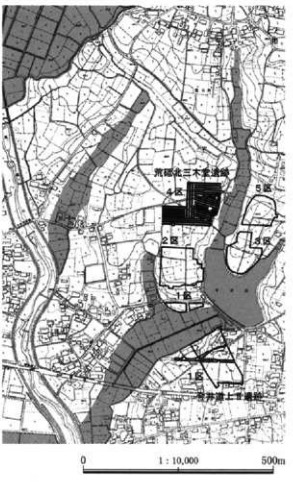
これらの樹枝状に広がった多くの帯状低地は、谷内の小水流を集めながら、主要河川につながっている。今井道上Ⅱ遺跡の西側を流れる荒砥川は、標高920m前後の山頂近くに水源をもち、流域長23km余りの、荒砥地域の主要河川の一つである。谷の幅も赤城山末端部の現状で600mあり、荒砥地域最大の沖積地をもっている。

今井道上Ⅱ遺跡のあるローム台地は西側を荒砥川に侵食され、北西部は現在今井沼のある開析谷に、東側は城南支所周辺を谷頭とする開析谷に挟まれた南北に長い台地である。遺跡は今井沼のある開析谷に面した台地北縁辺に立地する。このローム台地には、姶良丹沢パミスの層準である暗色帯とブロック状の浅間板鼻褐色軽石群、さらにその下層に八崎軽石層が堆積しており、赤城山南麓地域の更新世ローム台地の一般的土層堆積である。1区の南端では暗色帯中から旧石器の文化層も検出されている。

北側の今井沼のある帯状低地は谷頭が北方に350mほどにあり、低地内の沖積土には上層から浅間Bテフラ、榛名二ツ岳軽石層準、浅間C軽石層が堆積している。古墳時代には既に帯状低地が形成されていたことがわかる。荒砥北三木堂Ⅱ遺跡1区ではこの各テフラ層の直下から水田面が確認され調査されている。

今井道上Ⅱ遺跡では縄文時代前期の住居群と古墳時代後期の集落が検出されている。縄文時代の住居は、今井沼の帯状低地に面するローム台地北縁に3軒が検出された。この低地は今井沼の上流で二股に分かれるが、帯状低地西縁の荒砥北三木堂遺跡2・3区で3軒、中央の台地先端の4区で同時期の住居が調査されている。散漫な分布状況であるが、低地を水場にした縄文時代前期の集落群が今井道上Ⅱ遺跡周辺に展開していたのである。

今井道上Ⅱ遺跡の古墳時代後期の集落は発掘区の南半部に集中して検出されている。南側に隣接する今井道上遺跡や今井道上遺下遺跡へと連続する遺構分布である。また今井沼の開析谷の北側の台地縁辺には荒砥北三木堂遺跡が調査され、2区で古墳時代後期の集落が検出されている。今井沼のある帯状低地を生産域にした古墳時代の集落群が復元できる地域である。



第4図　今井道上Ⅱ遺跡の立地

２．周辺の遺跡分布

今井道上Ⅱ遺跡(1)がある地域は、赤城山南麓の農村地帯である。前述したように火山性の山麓扇状地で、湧水と地表面の侵食によって刻まれた開析谷が発達しており、数条の小河川が流下している。本地域には農耕集落を成立させる基盤が整っていた。

しかし、本地域は火山性地形特有の保水性の乏しい地質で、流下する小河川の水量のみでは水確保は困難である。農耕地拡大が不可欠であった古墳時代以降の農耕社会発展過程にあっては、人々の生活は用水確保の歴史でもあった。そして農業用水確保の歴史は近年まで続き、大正用水や群馬用水の掘削によって農村として安定した発展を遂げたのである。

ここでは今井道上Ⅱ遺跡で検出された遺構・遺物を理解するために、縄文時代前期と古墳時代に重点をおき、周辺の遺跡分布および歴史的環境についてふれておきたい。遺跡分布図を示した範囲は、西は荒砥川、東は神沢川に挟まれた荒砥地域で、北は標高120m付近、南は荒砥川・神沢川合流点で便宜上限った(第５図)。また古墳時代の荒砥地域については、範囲を広げて地域動向を概観した(第６図)。

なお、本地域の縄文時代全体の遺跡動向については『今井三騎堂遺跡・今井見切塚遺跡』(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団埋蔵文化財調査報告第350集2005)に詳述されているので参照されたい。

縄文時代前期の遺跡分布　群馬県では標高250～400mの丘陵性地形のところに縄文時代前期の遺跡分布が卓越する傾向がある。標高80～150mの荒砥地域はこの丘陵性地形の末端部分にあたり、中期の遺跡分布が多くなる台地地形も広がっている。したがって縄文時代の遺跡はやや小規模な前期の遺跡と、比較的大きな中期・後期の遺跡が分布している。

今井道上Ⅱ遺跡周辺の縄文時代前期の遺跡は、荒砥宮田遺跡(24)・荒砥北原遺跡(45)・荒砥上ノ坊遺跡(47)、柳久保遺跡群下鵜谷遺跡(28)、荒砥上諏訪遺跡、荒砥二ノ堰遺跡、熊の穴遺跡等で調査されている。これらの遺跡では１～数軒の竪穴住居や土坑を検出している。遺跡の立地は赤城山南麓の小河川の支流の台地縁辺や、開析谷の谷頭周辺であり、飲料水の確保がその前提と考えられる。

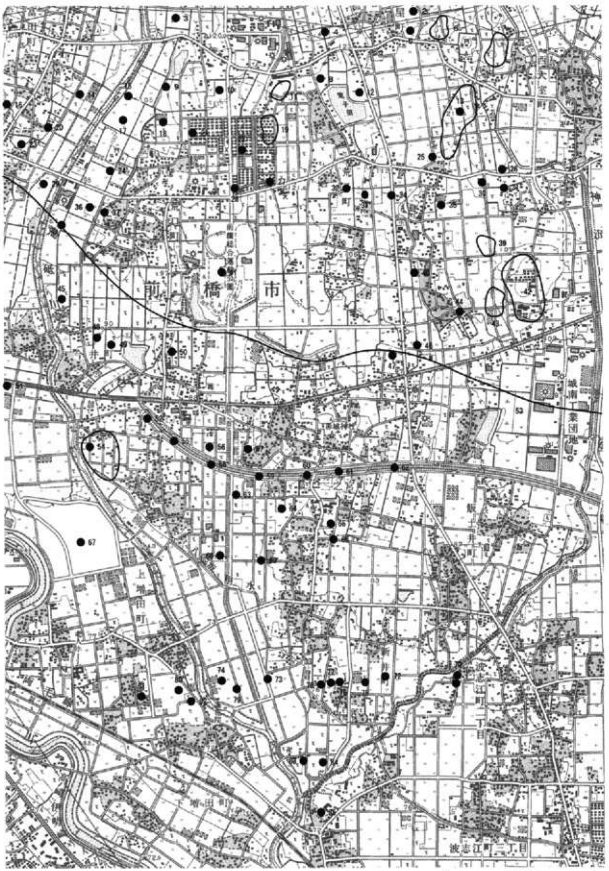
縄文時代晩期の遺跡分布　群馬県では縄文時代晩期の遺跡分布は激減するが、荒砥地域でもその数は少なくなっている。今井道上Ⅱ遺跡では古墳時代住居の埋没土からではあるが、浮線網状文のある鉢破片が出土している。本地域ではほとんどその時期の遺跡は検出されていない。

これまでに確認されている縄文時代晩期の遺跡は伊勢崎市の八坂遺跡(85)、波志江中野面遺跡(71)、前橋市の下増田越渡Ⅳ遺跡(74)、大道遺跡がある。八坂遺跡では遺構は検出されなかったが、３層から土器片が集中して出土したと報告されている。出土した土器は南関東(安行式)的な要素が強いものと東北(大洞式)的な要素が強いものに分けられるとされているが、その編年的位置は不明である。波志江中野面遺跡・下増田越渡Ⅳ遺跡では安行式土器が出土している。今井道上Ⅱ遺跡の北北東3.5kmにある大道遺跡では安行式期の住居が４軒調査されている。

また前橋市萩原遺跡(78)Ｃ区では、縄文時代末葉から弥生時代初頭と推定されている深鉢が出土した土坑が検出されている。今井道上Ⅱ遺跡では今回の調査で千網式あるいは永式の範疇に入る可能性のある浅鉢破片が出土した。八坂遺跡の遺物の時期は明確ではないが、萩原遺跡、今井道上Ⅱ遺跡とともに、いずれも荒砥川を望む左岸台地縁辺に立地している。縄文時代から弥生時代にかけての本地域の歴史解明に一石を投じる資料となろう。

古墳時代の遺跡分布　荒砥地域の古墳時代前期の遺跡は弥生時代後期の遺跡に比べると激増することが知られている。弥生時代中期竜見町式土器を出土した住居を検出した遺跡が５遺跡、後期と報告された遺跡が５遺跡であるのに対して、古墳時代前期の遺構を検出した遺跡は60遺跡余に増えているのである。これらの遺跡は集落と考えられるが、その分布は荒砥地域のほぼ全域におよんでいる。

古墳時代前期の遺跡は、谷頭周辺や小河川縁辺に



第５図　今井道上Ⅱ遺跡周辺の遺跡

立地するが、なかでも小河川とその支流の合流点に面した台地縁辺に立地する遺跡が多い。またこれらの遺跡はそれぞれの水系ごとに500～1000mほどのほぼ一定の間隔をおいて立地している。このような遺跡すなわち集落の立地は、河川合流点の比較的広い地点を生産域として、小河川の流水や谷頭からの湧水を効率的に利用した農業経営をおこなっていたことを示していると思われる。

本遺跡の周辺の古墳時代前期の集落（第６図■）は、荒砥諏訪西遺跡（17）（集落・方形周溝墓群）、諏訪遺跡（9）（方形周溝墓群）が分布する。上流域に北原遺跡（3）、丸山遺跡が、下流域に荒砥前田Ⅱ遺跡（38）、荒砥北原遺跡があり、まとまった数の住居が検出されている。また、江龍川上流域では熊の穴・熊の穴Ⅱ遺跡、大道遺跡、東原Ａ・Ｂ遺跡、村主遺跡、明神山遺跡（6）、小稲荷遺跡などがある。江龍川下流域には荒砥上ノ坊遺跡がある。宮川上流域では柳久保遺跡（22）がある。荒砥川右岸では宮下遺跡（23）が大規模集落である。大泉坊川流域には富田西原遺跡（16）や富田高石遺跡がある。

この時期の集落には隣接して周溝墓が築造される事例が多い。前述の諏訪遺跡や荒砥諏訪遺跡（18）のように居住域とはその占地を区別し、群在する状況が普遍的に見られる。その中、上縄引遺跡１基、阿久山遺跡１基、堤東遺跡（12）１基、中山Ａ遺跡１基、東原Ｂ遺跡４基の合計８基、前方後方形周溝墓が検出されている。この他荒砥川以西の富田高石遺跡でも前方後方形周溝墓１基が検出されている。

二之宮千足遺跡（59）や二之宮宮下東遺跡（61）では浅間Ｃ軽石に埋没した水田が検出された。また、荒砥天之宮遺跡（64）Ｇ区や荒砥宮川遺跡（63）の微高地上では浅間Ｃ軽石を鋤込んだ畠が確認されている。荒砥上ノ坊遺跡では浅間Ｃ軽石に埋没した畠が検出されている。

なお、荒砥地域においては前期古墳の存在は知られていない。前橋天神山古墳や華蔵寺裏山古墳が本地域を包括しえる地点にある主要古墳といえようか。本地域における前方後円墳の出現は５世紀後半の今井神社古墳（54）の築造を待たなければならない。

古墳時代中期の集落（第６図赤□）としては宮川上流域に丸山遺跡、北原遺跡、柳久保遺跡群が、荒砥川流域に荒砥宮田遺跡、荒砥前田Ⅱ遺跡がある。これらは前期から継続する遺跡である。宮川下流域では荒砥北三本堂遺跡（49）や荒砥天之宮遺跡があるが、これらは５世紀後半になってから集落の形成が開始された遺跡である。

また荒砥周辺地域には、古墳時代中期の方形区画遺構が４基検出されている。江竜川右岸の微高地上にある荒砥荒子遺跡（40）、荒砥川の一支谷の右岸台地縁辺で検出された丸山遺跡、桂川右岸の台地縁辺の梅木遺跡、貴船川右岸の台地上に検出された笂井八日市遺跡である。全体像が明確でない遺跡も含まれているが、これらは５世紀代の有力者層の居宅の可能性が考えられている。これらの遺構が、古墳時代前期の集落がなく中期以降新たにつくられた集落に付随していることが、その性格を示しているのであろう。

古墳時代後期の集落（第６図赤■）は、荒砥諏訪西遺跡、荒砥北原遺跡、柳久保遺跡群、大久保遺跡（10）、北原遺跡、丸山遺跡、新山遺跡などをはじめとして多くの遺跡をあげることができる。これらの集落のなかには古墳時代前期・中期から継続するものと、中期あるいは後期になってから居住が始まる遺跡とがある。これは生産域の拡大にともなった居住域の変遷を示していると考えられる。

古墳時代前期の集落のうちの多くは中・後期に継続し、「伝統集落」となる。このような前期から継続する集落は居住域の範囲を台地内部に変えながら継続する。これは水田耕作地を台地縁辺の傾斜地部分に拡大していくからである。

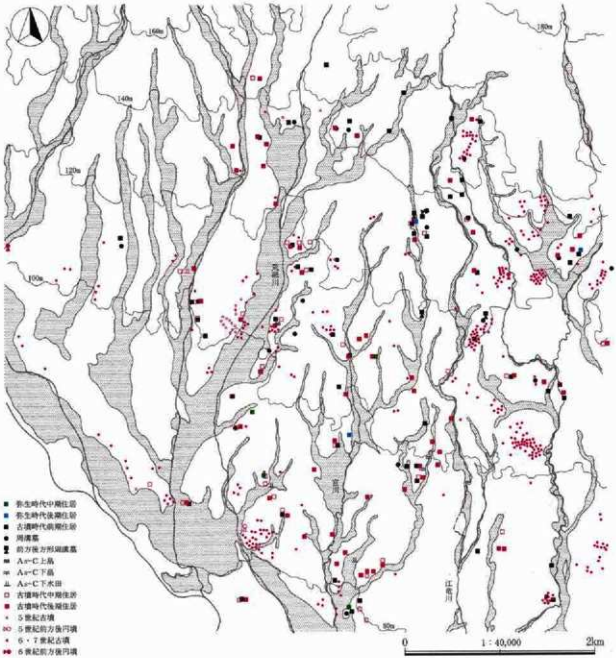
それとともに新たな地点に「第一次新開集落」の形成がなされる。それまで遺跡ではなかった地点に集落がつくられるようになるのである。荒砥天之宮遺跡では、溜井掘削によって農業用水を得た古墳時代中期から始まる集落が調査されている。このような「新開集落」成立の背景には従来からの河川灌漑

の整備とともに、溜井の掘削や灌漑土木技術の導入とそれに支えられた生産域の拡大があったと考えられるのである。

これらの分布を第6図に示したが、地域内の生産域となる開析谷沿いに集落の密度が増えていく過程を看取することができる。そこには標高差や地点別の分布差等では説明できない複雑な様相がみえている。各地点において、農耕地拡大過程における生産域の諸条件に規制された集落立地があったものと考えられる。

一方、荒砥地域の古墳は450基を超え、群馬県のなかでもひときわ多い分布状況を示している。

5世紀前半の古墳は周辺には伊勢崎市御富士山古墳・赤堀茶臼山古墳があるが本地域には未確認である。5世紀後半の前方後円墳では、今井神社古墳、舞台1号墳がある。特に今井神社古墳は、今井道上Ⅱ



第6図　今井道上Ⅱ遺跡周辺の古墳時代の遺跡分布

遺跡から南500mの至近距離にある。

この時期には小円墳がいくつかの地点で造られるようになる。荒砥川右岸には５世紀後半とされる直径29mのおとうか山古墳がある。南側の東原遺跡(20)では６基の５世紀後半の円墳が調査されており、初期群集墳の形成が開始されているのがわかる。荒砥宮川・宮原遺跡でもそれぞれ４基、２基の５世紀後半の小円墳が検出されている。また新山遺跡でも５世紀後半の円墳が１基調査されている。現在のところ、本地域の５世紀後半の小円墳の分布は、荒砥川流域に偏在しているように見える。

６世紀になると、前方後円墳が東大室町五料沼周辺に、江竜川中流域の台地上に帆立貝形古墳がつくられるようになる。特に大室古墳群には首長墓と考えられる大形の３基の前方後円墳がつくられた。一方小円墳は６世紀、７世紀と小地域ごとに立地、形成内容を変化させながら群集化が進行している。群集墳の分布は地域全体にあるが、特に江竜川の東側の地域では、古墳群の分布する地点が集落と離れて集中するように見える。本地域の古墳分布は現在わかっている範囲ではという限定付きであるが、５世紀前半の古墳が未確認であること、江竜川をほぼ境にして西側より東側に濃密であること等があげられる。このような偏在傾向の背景についてはまだ結論が出ていない。

群集墳の北の限界は標高150m前後であり、集落の分布と一致している。古墳時代の「里樋久集落」地域の範囲がここまでであったのであろう。今井道上Ⅱ遺跡の古墳時代集落も、このような古墳時代の地域社会のなかで位置づけられるべきであろう。

第２表　周辺遺跡の概要

No	遺跡名	縄文時代						弥生時代		古墳				
		草創期 前半	草創期 後半	早期	前期	中期	後期	晩期	中期	後期	前期 居住域	前期 墓域	前期 生産域	中期 居住域	中期 墓域
1	今井道上Ⅱ遺跡				●	△	△	△						●	
2	中畑遺跡														
3	北原遺跡										●	□		●	
4	上西原遺跡														
5	北田下遺跡										●				
6	明神山遺跡										●	□			
7	伊勢山古墳群														
8	川籠密戸遺跡											□			
9	諏訪遺跡											□			
10	大久保遺跡														
11	荒子小学校校庭遺跡														
12	堀坂遺跡											□			
13	阿久山古墳群														
14	おとうか山遺跡													●	
15	諏訪西遺跡										●			●	
16	富田西原遺跡										●			●	
17	荒砥諏訪西遺跡										●		○		
18	荒砥諏訪遺跡											□			
19	中畑谷遺跡				○	○									
20	東原遺跡														
21	諏訪遺跡						△								
22	柳久保遺跡			○	○	○					●			●	
23	宮下遺跡										●				○
24	荒砥宮田遺跡		△		●	△	△				●	□		●	
25	下境Ⅰ・Ⅱ遺跡										●			●	
26	富士山Ⅰ・Ⅱ遺跡														
27	狐無遺跡						○		○						
28	下鶴ヶ谷遺跡		○	○	●	△	△								
29	富田細田遺跡														
30	稲荷山Ⅱ遺跡														
31	地田梨Ⅲ遺跡										●			●	

空から見た荒砥川下流域

今井神社古墳をはじめ、古墳時代の遺跡が多く分布する。

時代				奈良時代	平安時代		中世	近世	備考
後期									
生産域	居住域	墓域	生産域	居住域	居住域	生産域			
	●								
					●				
	●				●				
				●	●				勢多郡衙と付属寺院と推定される遺跡
					●				
	●				●				
		○							伊勢山古墳を含む古墳16基
					●				
									As-B以前の溝、方形周溝墓13基
	●			●	●				
	●			●	●				古代須恵器窯跡
					●				方形周溝墓2基(前方後方形1)、平安小鍛冶
									古墳22基
	●								
	●								時期不明古墳2
						□	○	○	旧石器
	●	○				□	○	○	
									As-B以前の溝
	●	○		●	●				
					●		○		古墳11基、中世墳墓群、寺院
									As-B以前の溝
	●	○		●	●				旧石器
	●	○		●	●		○		中世墓坑、寺院
	●	○		●	●	■	○	○	
		○					○		中世寺院、中世墓
		○			●			○	直径38mの円墳、近世塚
	●				●				旧石器
				●	●				古代製塩
						■□	○		
					●			○	
	●								

No	遺跡名	縄文時代							弥生時代		古墳				
		草創期	草創期	早期	前期	中期	後期	晩期	中期	後期	前期			中期	
		前半	後半								居住域	墓域	生産域	居住域	墓域
32	荒砥中屋敷Ⅰ・Ⅱ遺跡										●				
33	荒砥下押切Ⅰ・Ⅱ遺跡														
34	舞台西遺跡														
35	舞台遺跡														○
36	荒砥前田遺跡														
37	荒口前原遺跡								○						
38	荒砥前田Ⅱ遺跡										●			●	
39	西大室丸山遺跡														
40	荒砥荒子遺跡													●	
41	鶴ヶ谷遺跡				△				○		●			●	
42	天神山古墳群														
43	上蛭沼遺跡														
44	蛭沼遺跡														
45	荒砥北原遺跡				●	●						□		●	
46	元屋敷遺跡														
47	荒砥上ノ坊遺跡				●						●	□	○	●	
48	荒砥北三木堂Ⅱ遺跡												□		
49	荒砥北三木堂遺跡		△	△	●						●	○			
50	荒砥大日塚遺跡									○					
51	今井白山遺跡					●					●			●	
52	今井道上道下遺跡				△	△	△								
53	女堀														
54	今井神社古墳群													●	
55	二之宮谷地遺跡														
56	荒砥洗橋遺跡														
57	荒砥宮西遺跡														
58	二之宮洗橋遺跡														
59	二之宮千足遺跡			○	○								□		
60	二之宮宮下西遺跡														
61	二之宮宮下東遺跡												□		
62	二之宮宮東遺跡														
63	荒砥宮川遺跡								○		●		○		
64	荒砥天之宮遺跡													●	
65	荒砥青柳Ⅱ遺跡														
66	荒砥青柳遺跡				●	●									
67	中原遺跡群										●			●	
68	荒砥宮原遺跡										●				○
69	荒砥鳥原遺跡								●		●	□		●	
70	中野屋敷														
71	波志江中野田遺跡					●	○	△			●	□			
72	新井大田関Ⅱ遺跡										◆				
73	下増田越渡Ⅱ遺跡												□		
74	下増田越渡Ⅳ遺跡						○	△		△	△	□			□
75	新井大田関遺跡														
76	萩原Ⅲ遺跡														
77	萩原Ⅱ遺跡										●				
78	萩原遺跡							○	●	△	●				
79	下増田越渡遺跡														
80	下増田常木遺跡										●				
81	上増田島遺跡														
82	下増田常木Ⅱ遺跡														
83	新土塚城														
84	荒砥前原遺跡					●			●	●	●	□			
85	八坂遺跡						△	△							

凡例　●住居　◆溝　○土坑　△土器
ただし墓域欄では□周溝墓、○古墳、生産域欄では□水田、○畠(畑)、
平安時代生産域欄では□As-B下水田、■818年洪水層下水田、
中近世欄では、○遺構・遺物の検出を表す。

時代				奈良時代	平安時代		中世	近世	備考
後期									
生産域	居住域	墓域	生産域	居住域	居住域	生産域			
	●				●	□			平安小鍛冶、As－B以前の溝
	●	○		●	●				
		○							古墳４基、埴輪円筒棺１、甕棺１
		○							舞台１号墳を含む古墳３基
						■			
					●				
						■○□	○	○	
		○							古墳時代巨石祭祀
	●			●	●	□			古墳時代中期方形区画遺構
	●			●	●				中世墳墓
		○							古墳39基
									弥生住居１、古墳住居15、古墳１
					●				
	●								方形周溝墓２基、As－B上畠
					●				古墳住居16
	●			●	●				方形周溝墓４基、As－B上畠
			□			□	○	○	
	●	○		●	●				中世墓坑
	●			●	●	□			
	●			●	●				
	●			●	●		○	○	古代方形区画溝、平安小鍛冶、中・近世道路状遺構
									古代未完成用水路
		○			●				今井神社古墳他、古墳３
			□	●	●	□			奈良時代溜井
	●			●	●	□		○	
	●			●	●				
	●			●	●				
□			□	●	●	□	○		As－C下水田以降７期の水田、古代小鍛冶、中世墓坑
	●			●	●		○	○	中・近世墓坑
	●			●	●	□	○		
□			□		●	□○	○	○	Hr－FA下水田以降７期の水田、古代小鍛冶
	●	○		●	●	□			
	●			●	●	□			溜井
	●			●	●		○	○	
				●	●				
	●		○	●	●	■	○	○	
	●			●	●	□			
							○		
				●	●	□	○	○	
					◆	□		○	
□			□		●		○		
					●		○	○	
			□		●				
						□			
	●				●	□			
	●				●	□	○	○	
				●	●		○	○	
	●			●	●				
							○	○	
						□			
							○		

第３章　発掘調査の方法と経過

１．発掘調査の方法

(１)遺跡・調査区・グリッドの設定

上武道路は赤城山南麓を斜めに横断し、発掘区も７工区(その１)だけでも総延長が５㎞にもおよぶ。

前述のように、赤城山南麓には多くの帯状開析谷が発達しており、上武道路の路線が台地と谷を交互にくりかえして通る地形になっている。加えて本地域には埋蔵文化財が豊富で、台地上はほとんどが遺跡であり、谷部にも埋没水田等が検出される。したがって遺跡が連続的に分布することになり、遺跡の区切りをどこにするか、遺跡名をどうつけるかが調査上の問題となった。

これについて調査担当者間で原案をつくり、前橋市教育委員会と協議した結果、今回の調査では一つの台地とその南側に接する谷地を含む一単位を一遺跡とすることとした。また既調査の遺跡には同名称をつけ後ろに「Ⅱ」を付すこととした。

今井道上Ⅱ遺跡は既に国道50号拡幅工事に伴う発掘調査が昭和62年～平成３年に隣接地で実施されていることから、同名称にⅡを付した。工事区の境界が台地上にあることから、今井道上Ⅱ遺跡の調査は台地北半部のみの調査となった。北側の今井沼の谷は北隣の遺跡である「荒砥北三木堂Ⅱ遺跡１区」ということにした。

今井道上Ⅱ遺跡内の調査区は、調査の進行単位ごとに南側から１、２、３区を設定した。この調査区は調査の便宜上、現道で区切られた単位とした。なお国土交通省との調整では、工事区全体の現道に区切られた最小単位に連番をつけた地区名を用いた。しかし、これは考古学的な遺跡の動向とは関連しないので本報告書では用いないこととする。

平面図を記録する測量用のグリッドは、路線上の遺跡相互の関連性が把握しやすいように、1000m四方の大グリッド－100m四方の中グリッド－５m四方の小グリッドの階層的なグリッド網を設定した。グリッド名称は各階層で異なる。1000m四方の大グリッドは全線を１～９でカバーした。今井道上Ⅱ遺跡は１の大グリッドに含まれる。グリッド呼称が煩雑になるので、報告書の記載や個々の図面では大グリッドを省略している。中グリッドは大グリッドを100個に区切り、南東隅からＺ方向に１から100までとした。小グリッドは中グリッドの中を５ｍずつ区切り、東から西へＡからＴ、南から北へ１～20とした。グリッド呼称は南東隅の交点をあて、独立した単位の100ｍ中グリッドと５ｍ小グリッドを並立して「98－Ａ－１」のように呼称した。

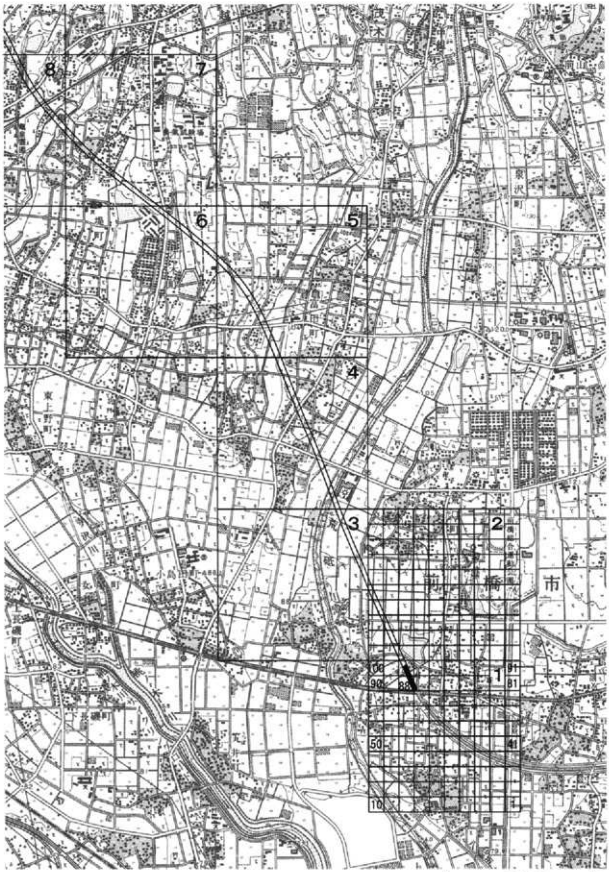
今井道上Ⅱ遺跡内のグリッドの座標値は、国家座標(旧座標第Ⅸ系)を用いて測量し、１－98－Ａ－１が旧座標でＸ＝40.90㎞、Ｙ＝－60.70㎞、新座標にすれば概ねＸ＝41.25㎞、Ｙ＝－60.99㎞である。

(２)基本土層と遺構確認

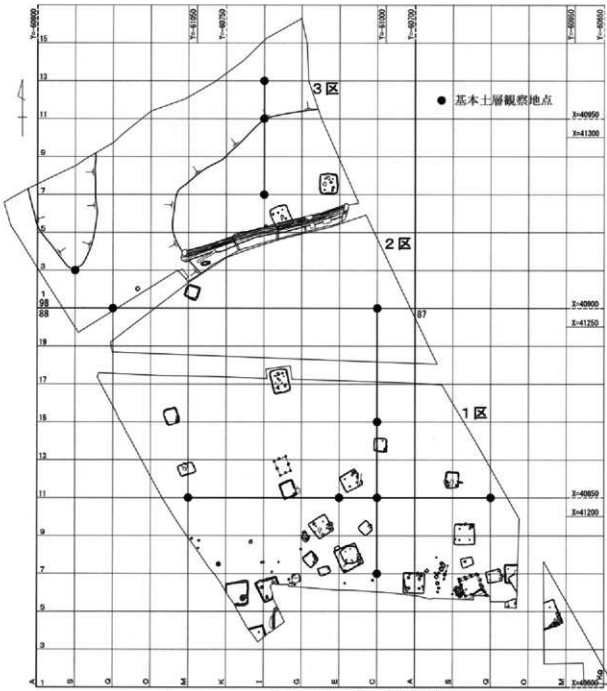
赤城山南麓の末端低台地では、通常、表土(耕作土)の下位には黒ボク土の堆積が希薄である。特に今井道上Ⅱ遺跡では表土下の黒色土がほとんど見られず、１区東壁ではわずかに層厚４～10㎝の灰色がかった褐色砂質土(Ⅰａ層)が記載されているのみである。

本層位には浅間山や榛名山の完新世以降の噴火で降下したテフラを構成していた各種の軽石粒が含まれているが、混在した状態で堆積しており、鍵層となる純堆積層ではなかった。

Ⅰａ層とローム層との間には軟質の褐色土(Ⅰｂ層)が堆積している。本層は黒ボク土中に堆積する二次堆積ローム層で、「淡色黒ボク土」と呼ばれている土層であると推定される。淡色黒ボク土は黒ボク土中に挟在する褐色土で、腐食の少ない部分であると考えられているが、成因は未解明である。赤城山麓末端の低台地上では下位の黒ボク土がないことが多く、淡色黒ボク土から漸移的に黄色みの強くなるソフト



第７図　上武道路と今井道上Ⅱ遺跡

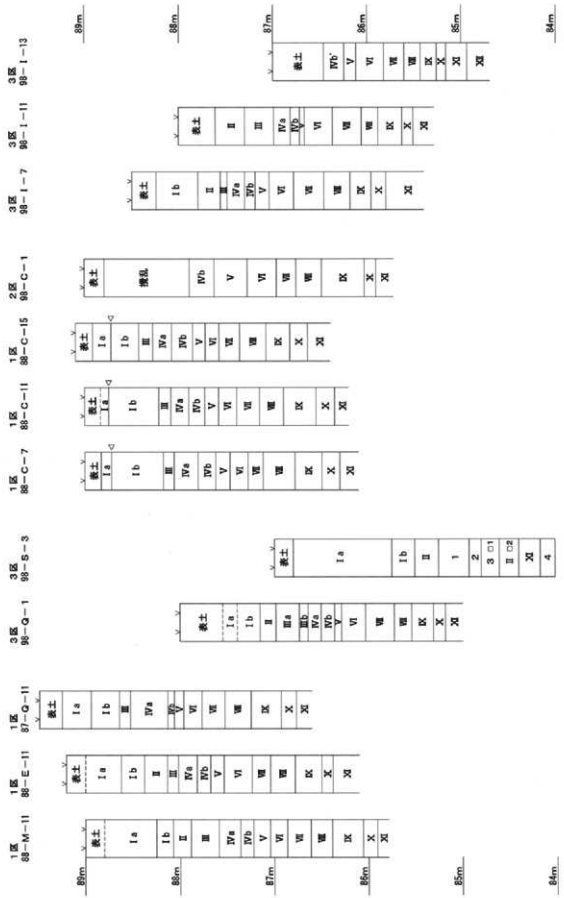


第８図　今井道上Ⅱ遺跡のグリッドと土層観察地点

ロームへと変化している。本遺跡ではⅠｂ層に縄文時代前期の土器破片が包含されていた。なお、Ⅱ層以下のローム層の堆積状況は報告書旧石器編（続巻）で詳述する。

第９図に今井道上Ⅱ遺跡の各区の基本土層を示した。１区・２区は概ね北から南へ、東から西へ緩傾斜があり、ローム層が順次堆積している。その上位に表土およびⅠａ層・Ⅰｂ層が覆っており、概ね平坦な地形を呈していた。

３区も東半部は１区・２区と同様なローム台地の堆積をしているが、北側の谷部へ向けて傾斜している。３区北西部には小支谷の谷頭が入り込んでいて、台地面には顕著でなかった黒ボク土が谷の凹みに堆積していた。



第9図　今井道上Ⅱ遺跡の基本土層

古墳時代以降の遺構は、各区とも表土および白色軽石粒を含む灰褐色土（Ⅰａ層）を重機で除去して、黄褐色土（Ⅰｂ層）上面で手作業によって確認した。縄文時代の遺構確認についてはⅠｂ層上面から手作業で徐々に掘り下げていき、浅間板鼻軽石層塊を含む黄褐色土（Ⅱ層）上面で確定した。Ⅰｂ層からは縄文土器破片や石器・剥片が集中して出土する地点があり、そこではトレンチ調査を実施し、遺構確認に努めた。

（3）遺構・遺物の記録

調査にあたっては、図面・写真および調査メモを記録した。

図面は各遺構の断面図と平面図を作成した。各遺構の埋没状況については、土層観察用の土手を十字に設定し、すべての遺構で土層断面図を作成した。土層の注記は調査担当者各自の観察に委ねたので、不統一な部分がある。また埋没土に混在する軽石については純堆積層がなかったことから同定作業を行っていないので、「白色軽石」との記述にとどめた。

平面図は竪穴住居・土坑等の遺構は20分の1、溝・道跡等については40分の1の個別の平面図を平板測量によって作成した。

遺構写真は35㎜モノクロフィルムとカラースライドフィルムおよび、ブローニーモノクロフィルムを用いて地上撮影した。1区・3区の旧石器調査状況や3区道跡は高所作業車から全景写真を撮影した。また、1区の古墳時代住居群の全景写真は、ラジコンヘリにより空中写真撮影を委託した。

2．調査の経過

今井道上Ⅱ遺跡の発掘は平成13年4月から現場設営準備に入った。当初は北側に隣接する荒砥北三木堂Ⅱ遺跡の発掘調査と平行しながら進めたが、6月から実作業に入った。2区を先行させてその調査終了後に事務所用地とした。9月・10月は国土交通省との調整の結果、荒砥北三木堂Ⅱ遺跡の調査を先行させるため一時作業を中止したが、11月からは2班体制で調査に臨み、1区と3区を平行して調査した。年度末になって1区でまとまった量の旧石器の出土があったが、調査は3月31日をもって下記の一部を残し終了した。

現道下にかかった1区23号住居の北半の調査と、設置物の撤去が遅れていた1区南東隅の一角は、次年度の条件が整った段階に調査することで調整され、平成14年6月から9月にかけて調査を実施した。

今井道上Ⅱ遺跡の調査経過の概略は次の通りである。

平成13年度

6月5～29日　3区東半部・2区・1区の順に表土掘削作業。

7月2～13日　1区の遺構確認作業。

7月16日～8月10日　2区は遺構の残存状態が悪いため、調査を先行して事務所用地とすることとし、旧石器試掘調査を実施。旧石器の出土は無かった。

8月24日～9月5日　2区1号住居の調査。

（9月6日～　荒砥北三木堂Ⅱ遺跡の調査先行のため、一時今井道上Ⅱ遺跡の調査中断。）

11月1日　3区遺構確認作業開始。

11月7～9日　3区1～5号溝調査

11月12日　3区縄文時代住居2軒調査開始。平行して縄文時代遺構確認と旧石器試掘グリッド調査開始。

11月26日　1区遺構確認・古墳時代住居調査開始。

12月3日　3区1号・2号住居調査終了。

1月7日　3区西半部表土掘削作業開始。

1月8日　3区西半部遺構確認。縄文時代土坑確認。

1月10日　1区古墳時代住居群空中写真撮影。縄文時代住居調査開始。

1月15日　1区旧石器試掘調査開始。

1月18日　3区旧石器本調査開始。

2月5日　3区調査終了。

2月6日　3区埋め戻し作業。

2月7日　1区縄文時代遺物集中区の試掘調査開始。

2月12日　1区旧石器本調査開始。試掘調査も継続。

2月14日　2区・3区間の道跡調査開始。

2月22日　1区旧石器遺物出土状況全景写真撮影。
3月8日　1区旧石器本調査終了。
3月15日　3区遺跡調査終了。
3月16日～　記録資料整理、土器洗浄・注記作業。
3月22日　記録類・出土遺物と調査器材の搬出。

平成14年度

6月24日　1区23号住居北半調査開始。
7月30日　23号住居調査終了。
7月31日　1区25号住居、18号土坑調査開始。平行して旧石器試掘調査開始。
9月2日　25号住居調査終了。
9月5日　旧石器の出土無く、調査終了。撤収作業。

3．発掘区の概要

今回の今井道上Ⅱ遺跡の発掘調査によって、1区・2区・3区の3カ所の調査区で検出した遺構は第3表に示すとおりである。

1区は荒砥川左岸のローム台地の北東部にあたる。1軒の縄文時代前期住居、縄文時代の陥穴3基、古墳時代中期から古墳時代後期の住居24軒、平安時代の住居1軒、古代のものと推定される掘立柱建物3棟、近世の井戸1基、時期不明の溝1条、土坑14基、ピット25基が検出された。

古墳時代の住居のうち3軒は南側で隣接して調査された今井道上遺跡で未完掘であった部分を調査したものである。古墳時代後期の住居群は1区の南半部に集中して分布していた。隣接して調査した今井道上遺跡の遺構分布が濃密であったことからすれば、遺構分布の北側縁辺を今回調査したことになろう。

縄文時代の住居は1区北端の北側の谷に近い地点に分布する。細別時期は明らかにできなかったが縄文時代と思われる陥穴は住居の南側に分布していた。縄文土器や縄文時代のものと推定される石器・石片が遺構に伴わない状態で多数出土した。縄文土器はそのほとんどが前期諸磯a式に比定できるものである。したがって伴出した石器類もその時期に限定できる可能性が高いと判断できよう。

旧石器は隣接する今井道上遺跡で出土していることから、10mおきに3m×3mのトレンチを設定して全域の試掘調査を実施した。表面積の9％を試掘したことになる。試掘調査によって3カ所で旧石器が出土したことから、拡張し本調査をおこなった。南東部では419点の石器集中が、中央部・南西部ではそれぞれ14点、1点の旧石器が暗色帯を中心に出土した。特に南東部の石器群は、石核、剥片、微細剥片が主要な器種を構成することから、後期旧石器時代初頭の剥片剥離活動を色濃く反映した性格を指摘することができる。これについては3区も併せて調査報告書旧石器編で報告する予定である。

2区は、1区からつながるローム台地である。ここでは既存の建物による攪乱が広く遺構面に及んでいたので、古墳時代の住居1軒のみを検出できたにとどまった。旧石器の試掘調査も実施したが、遺物は出土しなかった。

3区は、1・2区のある台地の北縁辺にあたる。台地の縁辺に2軒の縄文時代前期の住居と、同じく縄文時代前期と推定される土坑が3基検出された。旧石器は試掘坑に散在して10点が出土した。古墳時代以降の遺構は全く検出されなかった。2区と3区の現道下には1108年に降下した浅間Bテフラ直下の道跡が検出された。軽石に直接覆われた硬化面が残存していたが、硬化面はその後にトレースするように掘られた溝で分断されていた。現道はその上につくられており、古代末の地割が現在まで残されていたことになる。

今回の調査で出土した資料は60×37×15cmの遺物収納箱に48箱である。

第3表　今井道上Ⅱ遺跡検出遺構一覧表

	旧石器時代	縄文時代		古墳時代	古　代		近　世	時期不明			
	石器	竪穴住居	土坑	竪穴住居	掘立柱建物	道跡	井戸	溝	土坑	ピット
1区	434	1	3	24	3		1	1	14	25
2区				1						
3区	10	2	3			1		7		

４．整理作業の方法

今井道上Ⅱ遺跡の発掘成果・出土資料の整理作業および報告書編集・刊行作業は平成16年10月１日から平成18年２月28日に実施した。

(１)遺物整理

遺物のうち土器は遺構ごとに接合記録を作成しながら接合を行った。接合状況および遺構内の遺物出土状況を確認しながら、報告書に掲載する遺物を選択した。実測した土器・土製品は393点である。掲載を断念した遺物は遺構・出土位置ごとに種別・器種(縄文土器は細別型式まで)を分類し、出土遺構ごとに計数し、収納した。

掲載土器は復元彩色し、写真撮影をおこなった。写真は適宜、1/8～1/2の倍率でプローニー６×９フィルムを用いて撮影した。次に等倍の実測図を作成した。完形に近い土器はスリースペースシステムで測点し、その印刷出力図を補測・製図した。破片土器は当初から人力で復元実測を行った。縄文土器破片は断面実測し、縄文原体が読み取れるように留意して採拓した。土器の観察は表形式にまとめた。色調は『標準土色帖』を用いて記載し、口径・底径・高さは実測図から計測した。胎土は特徴的な夾雑物を中心に記載した。特徴は文様および整形技法の特徴を記載した。

石器はすべての石器・剥片・砕片・礫・礫片を形態分類し、石材を同定した。石材の同定はすべて群馬県地質研究会の飯島静男氏に依頼した。

古墳時代以降の遺構出土の礫は、長さ・幅・重さを計測し、このうち明瞭な使用痕跡・加工痕跡が残っているもの55点を実測し、報告書に掲載した。

縄文時代の遺構からも石器類は出土したが、遺構外のグリッドや表面採集の遺物にも多くの石器類が含まれていた。これらはともに出土している縄文土器の90％が黒浜式および諸磯ａ式であることから、当該期のものである可能性が高い。本遺跡は遺構外の石器の時期を限定できる数少ない遺跡ということになることから、すべての石器類について器種分類と石材同定を行った。その総数は1428点におよんだ。このうち石器は296点、細片・剥片・礫片は1132点である。

縄文時代の石器296点についてはすべての実測図を掲載することはできなかったので、出土位置ごとに器種が網羅できるように図化する石器161点を選択した。なお剥片石器128点の実測・トレースは作業を効率化するため外部委託した。実測できなかった石器130点は写真のみ掲載することとした。

金属製品は当事業団保存処理室でレントゲン撮影をして残存状態を確認した上でクリーニングを行った。鉄鏃１点・鉄釘１点と銭貨「寛永通宝」を実測・写真撮影し、報告書に掲載した。

木製品は水漬けで持ち帰った板破片を当事業団保存処理室でクリーニングし、写真撮影・実測し、報告書に掲載した。

本報告書の中で資料化し、何らかの形で本書中に掲載した資料は752点である。資料の内訳は土器393点、石器355点、鉄製品３点、木製品１点である。

(２)遺構図面写真整理

遺構図は、すべての図面に通し番号を付し、台帳を作成した。遺構図はすべて報告書に掲載することとし、平面図と断面図の照合・修正作業をおこなった後、デジタルトレースした。遺構全体図もデジタルデータで作成した。さらに報告書印刷原稿としてデジタルデータを編集した。

遺構写真はすべてのネガに通し番号を付し、台帳およびネガ検索台紙を作成し資料管理に備えた。報告書に掲載する写真を選択して印刷原稿版下を作成した。遺物写真も同様に倍率を揃えて引き伸ばし印刷原稿版下を作成した。

(３)報告書編集・刊行

以上のような作業で作成した印刷原稿版下に、調査所見の詳細な事実記載に努めた本文をあわせ、報告書として編集し、刊行した。

第4章　検出された遺構・遺物

1．縄文時代の遺構・遺物

(1)概要

縄文時代の遺構は、1区で前期諸磯a式期の住居が1軒、時期不明の陥穴2基、方形土坑1基が、3区で同じく前期諸磯a式期の住居が2軒、同時期の円形土坑2基、時期不明の陥穴1基が検出された。諸磯a式期の住居は3区北側に東西方向に伸びる帯状低地を望むように台地北縁辺に偏在すると推定される。さらにその南外縁に時期不明の陥穴が分布するのであろう。

住居はいずれも隅丸方形で4本柱穴である。1区23号住居はやや南北に長軸をもつ長方形を呈するが、3区1号・2号住居はほぼ正方形である。炉はあまり明確ではなかったが、北辺の主柱穴の間にいずれの住居も設置されていた。出土遺物はほとんど前期諸磯a式に限られており、胎土に繊維を含むものが一部に含まれていた。

陥穴は1区に2基、3区に1基が検出されているが時期は不明である。長軸方向は台地の緩斜面に直交し、ほぼ等間隔に分布していた。特に1区の2基は居住施設の南外縁にあたる位置にある。出土遺物はなかったが、埋没土が住居のそれと共通していたことから縄文時代の陥穴の可能性が高いと考えられる。しかし住居群に伴う、前期の狩猟施設と断定することはできない。

赤城山南麓の遺跡では縄文時代の遺構が黒色土直下のローム層上面で明確に遺構確認ができない場合が多い。特に遺物がほとんど出土しない陥穴や土坑の遺構確認についてはハードローム面まで掘り下げて初めて遺構の輪郭がわかる場合がある。

今回の調査では調査期間の制約から遺物が集中して出土した地点以外は、縄文時代の遺構確認作業を旧石器の試掘坑掘削作業と兼ねて実施した。たとえば1区北西部に検出された縄文土器出土集中地点には遺構確認トレンチを設定したが、その他の部分については遺構確認作業が十分でなかったことは否めない。陥穴や土坑については検出漏れもあり得ることを付記しておきたい。

遺構出土以外の縄文土器は1区グリッド出土が582点、表面採集が401点、2区グリッド出土が25点、表面採集が1点、3区グリッド出土が504点、表面採集が1628点にのぼった。また石器および剥片類は1区グリッド136点、表面採集164点、2区グリッド1点、表面採集4点、3区グリッド378点、表面採集157点であった。これらの分布傾向と土器型式・器種・石材等との関連性は(4)遺構外の出土遺物で述べる。

(2)竪穴住居

1区23号住居

(第10～23図　PL3～6・64～69　遺物観察表P.188～191・195～197)

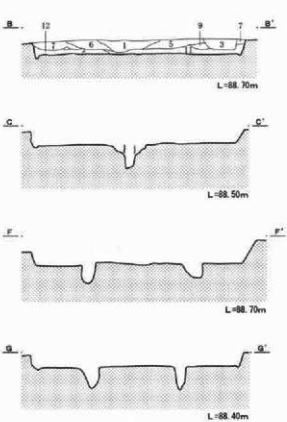
位置　88－G・H－16・17G

形状　隅丸長方形。本住居は北半部が現道下に埋蔵されていたため、工事工程との調整から2回に分けて調査した。全体形状の記録は最終面の全体写真(PL3-1)のみである。平成13年度調査で南2/3を調査し、次年度に北1/3を調査した。整理作業では出土遺物全体を対象とし、接合・分類を行った。遺構図は両者を合成し、本報告書の記載も全体形状がわかるようにした。最終面の全体写真以外の写真は2回に分けて記録したものである。

規模　長軸6.12m　短軸4.50m　**残存壁高**0.47m

床面積　24.03㎡　**長軸方位**　N－15°－W

炉　中央やや北寄り、主柱穴P1・P4間の中央に炉が検出された。炉は長軸0.45m、短軸0.34m、深さ0.04mの楕円形に窪んでおり、炭化物粒が少量混じる赤褐色土が堆積していた。炉内に遺物は出土しなかった。



1区23号住居

A－A'　B－B'

1．暗褐色土(10YR3/4)　ローム粒および塊、白色粒子含む。炭化物粒・焼土粒を少量含む。

2．褐色土(10YR4/6)　ローム主体。暗褐色土(10YR3/4)混じり。白色軽石粒を少量含む。

3．褐・暗褐色土(10YR4/6・3/4)　ローム主体。暗褐色土(10YR3/3)を斑状にやや多く含む。

4．褐色土(10YR4/4)　直径1.0～5.0mmほどの炭化物粒を均一に少量含む。直径0.5mm以下の白色粒子を含む。

5．暗褐色土(10YR3/3・3/4)　直径1.0～5.0mmほどの炭化物粒を均一に含む(4層よりやゝ多い)。直径0.5mm以下の白色粒子を含む。直径1.0～3.0mmほどの焼土粒を少量含む。

5'．暗褐色土(10YR3/3)　炭化物を4層より多く含む。

6．褐色土(10YR4/6)　4層に類似するが、炭化物粒はごく少量認められるのみ。白色粒子は同様に含む。

7．褐色土(10YR4/6)　4層や6層より明るい色調。直径1.0mmほどの白色粒子、直径3.0mmほどの炭化物粒を少量含む。

8．暗褐色土(10YR3/3)　褐色土(10YR4/6・4/4)粒および直径1.0～4.0cmほどの褐色土塊を含む。白色粒子はほとんど認められない。

9．暗褐色土(10YR3/4)　5層に類似するが、炭化物粒はほとんど認められない。

10．暗褐色土(10YR3/4)　5層、11層より黒色味あり。白色粒子、炭化物粒、焼土粒をそれぞれ少量含む。根の攪乱か。

11．6層に類似するが、褐色土(10YR4/4)の混じりが比較して多く、やや暗色味を帯びる。

12．褐色土(10YR4/6)　ローム主体。6層に類似するが、白色粒子は少量認められるのみ。

0　1:80　4m

第10図　1区23号住居(1)

P 1

a－a'
1．黄褐色土(10YR5/6)　炭化物粒をごく少量含む。しまりやや弱い。
2．黄褐色土(10YR5/6)　炭化物粒を含まない。3層の小塊を含む。1層よりしまる。
3．褐色土(10YR4/6)　炭化物粒を含む。土器片を含む。しまりやや弱い。

P 2

b－b'
1．暗黄褐色土　ローム を斑状に含む。
2．暗褐色土　ローム を斑状に含む。炭化物を粒状に少量含む。上位に白色粒子・焼土粒をごく少量含む。

P 3

c－c'
1．暗褐色土　炭化物粒を少量含む。
2．濃褐・暗黄褐色土　ピット1の1層に類似する。やや硬くしまる。
3．暗黄褐色土　ローム混じり。

P 4

d－d'
1．暗褐色土　ローム斑状に含む。
2．暗黄褐色土　ローム を斑状に含む。
3．暗黄褐色土　1層と2層の間くらいの色調。
4．暗褐色土　やや粘性あり。

P 5

e－e'
1．ピット9の2層に類似するが、しまりはやや弱い。

P 6

f－f'　g－g'
1．濃黄褐色土　ローム混じり。やや硬くしまる。
2．暗黄褐色土　ローム混じり。1層より暗色味あり。
3．暗褐色土　やや黄色味あり。
＊ピット2は後から取り直した為、セクション写真と異なる。

P 7

P 8

h－h'
1．暗黄褐色土　ローム主体で暗褐色土混じる。硬くしまる。
2．暗黄褐色土　暗褐色土主体で、ロームを斑状に含む。

P 9

i－i'
1．黄褐色土　ローム主体。

P 10

j－j'
1．濃黄褐色土　ローム混じり。やや硬くしまる。
2．暗黄褐色土　ローム混じり。
3．暗黄褐色土　2層より暗色味あり。
4．暗褐色土　やや粘性あり。

P 11

k－k'
1．暗褐色土　上位に炭化物粒を少量含む。

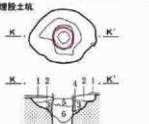
P 12

l－l'
1．黒褐色土　ローム混じり。
2．褐色土　ローム混じりでやや硬くしまる。

1号土坑

m－m'
1．黄褐色土　ローム主体。
2．暗黄褐色土　ローム主体で暗褐色土混じり。
3．暗褐色土　暗褐色土とロームの混じり。白色粒子をごく少量含む。

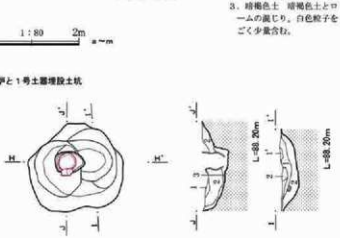
2号土器埋設土坑



K－K'
1．暗褐色土　ローム混じり。硬くしまる。住居貼り床。白色粒子粒をごく少量含む。
2．暗黄褐色土　暗褐色土混じり。1・3層より暗い色調。白色粒子粒をごく少量含む。
3．濃黄褐色土　ローム主体。
4．暗黄褐色土　3層に類似するが、より暗い色調。
5．暗黄褐色土　ローム混じり。
6．暗褐・暗黄褐色土　やや黄色味あるが、5層ほどではない。

0　1：80　2m　a～m

炉と1号土器埋設土坑



H－H'　I－I'　J－J'
1．赤褐色土(5YR4/8)　炭化物粒少量混じる。しまりやや弱い。
1'．暗色土(7.5YR4/4)　焼土小塊を含む。
2．褐色土(10YR4/6)　炭化物をごく少量混じる。しまり1層よりやや強い。
3．褐色土(7.5YR4/6・10YR4/6)　焼土粒を不均一に含む。炭化物をごく少量含む。しまり2層と同じ。
4．黄褐色土(10YR5/6)　炭化物をごくわずかに含むが、ロームを押しつぶしたような感じ。混入物少ないがややしまる。
5．褐色土(7.5YR4/4)　焼土、炭化物は見られないが、しまり2層と同じ。

0　1：40　2m
K・H～J

第11図　1区23号住居(2)

炉の北西側には１号土器埋設土坑がある。土器埋設土坑の掘り込みの上に焼土があり、土器より北西側には焼土が連続していないことから、炉と埋設土器は併存していたか、新たに炉部分に土器埋設土坑が掘られたかのどちらかが推定できるが、詳細は不明である。

柱穴　床面には12本の小ピットが検出されたが、主柱穴はＰ１～Ｐ４の４本である。主柱穴は住居対角線上に配置されている。柱間は長軸で3.05～3.20m、短軸で2.15～2.20mである。他の小ピットが柱穴かどうかは不明である。

第４表　１区23号住居ピット一覧表

長軸 6.12m　短軸 4.50m　残存壁高 0.47m					
主軸方向	N－15°－W			面積	24.03㎡
柱穴 No	規模(m)			形状	次柱穴との間隔 (m)
	長径	短径	深さ		
Ｐ１	0.57	0.40	0.31	楕円形	3.05
Ｐ２	0.49	0.46	0.61	円形	2.15
Ｐ３	0.58	0.47	0.74	楕円形	3.20
Ｐ４	0.34	0.29	0.42	楕円形	2.20
Ｐ５	0.22	0.20	0.07	楕円形	
Ｐ６	0.37	0.28	0.46	楕円形	
Ｐ７	0.18	0.18	0.57	円形	
Ｐ８	0.25	0.22	0.20	円形	
Ｐ９	0.29	0.27	0.29	円形	
Ｐ10	0.28	0.22	0.21	楕円形	
Ｐ11	0.19	0.14	0.26	楕円形	
Ｐ12	0.22	0.19	0.16	楕円形	

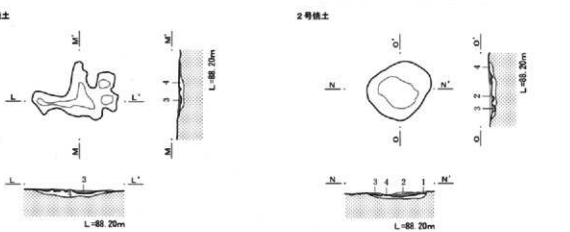
周溝　西・南・東壁際に周溝が検出された。幅は0.05～0.13m、深さは最も深いところで床面から0.03mほどである。

床面および床下施設　住居中心部を中心に主柱穴を結んだ線より内側の床面は著しく硬化していた。床面は貼床ではなく、住居掘り方面(ローム層上面)がそのまま床面として硬化していた。

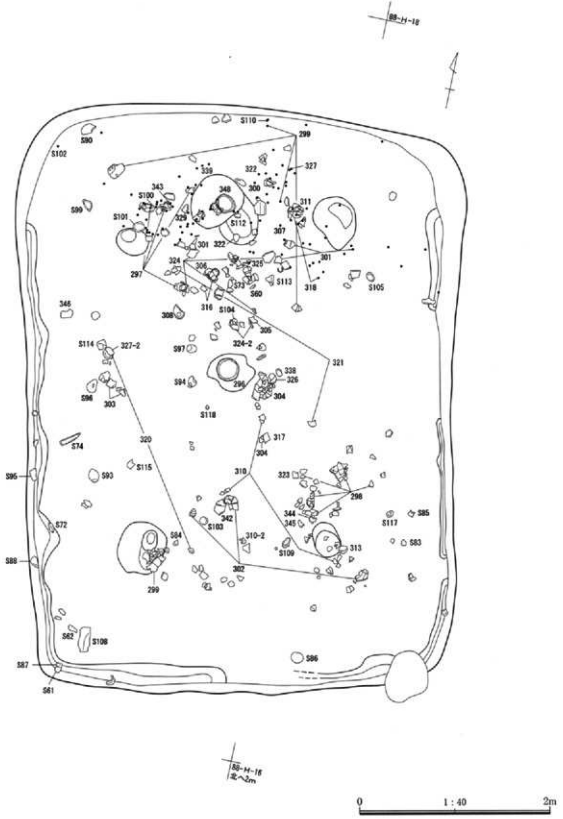
また、床面には２カ所の土器埋設土坑が検出された。これらの土器埋設土坑は主柱穴の柱軸に平行する主軸上に位置している。

１号土器埋設土坑は、炉の北西に隣接している。長軸0.58m、短軸0.48m、深さ0.29mの楕円形の掘り込みに上下端を欠く深鉢(348)が正立で埋設されていた。土器の北西側に炉の焼土は連続しない。埋設された土器は器面が全体的に荒れている。特に被熱した部分の器面の荒れがやや目立つ。

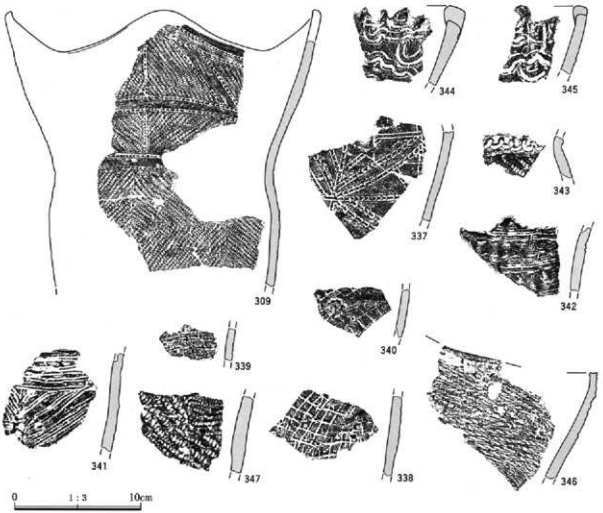
２号埋設土坑は住居ほぼ中央に検出された。土坑の掘り方は長軸0.51m、短軸0.40mの楕円形で、中央部は筒状に深くなり最も深いところで0.50mであった。上下端を欠く深鉢(296)が掘り方の上半部に埋設されていた。土器の周囲に焼土は検出されなかったが、0.3～0.4m離れた周縁部に１号・２号焼土が２号埋設土器を囲むように東西に検出されている。

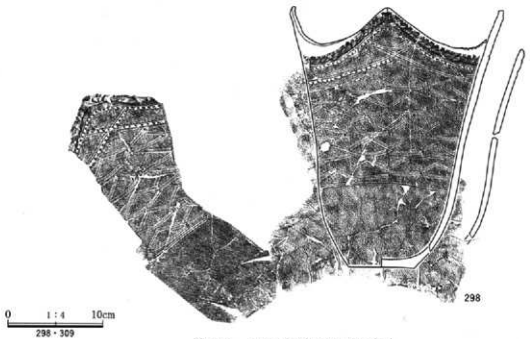


第12図　１区23号住居の焼土

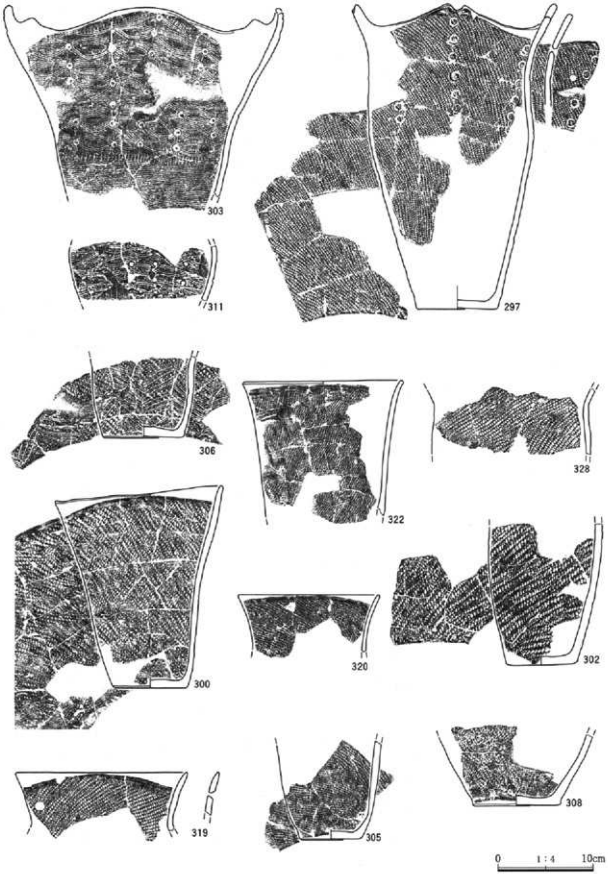


第13図　1区23号住居遺物の出土位置

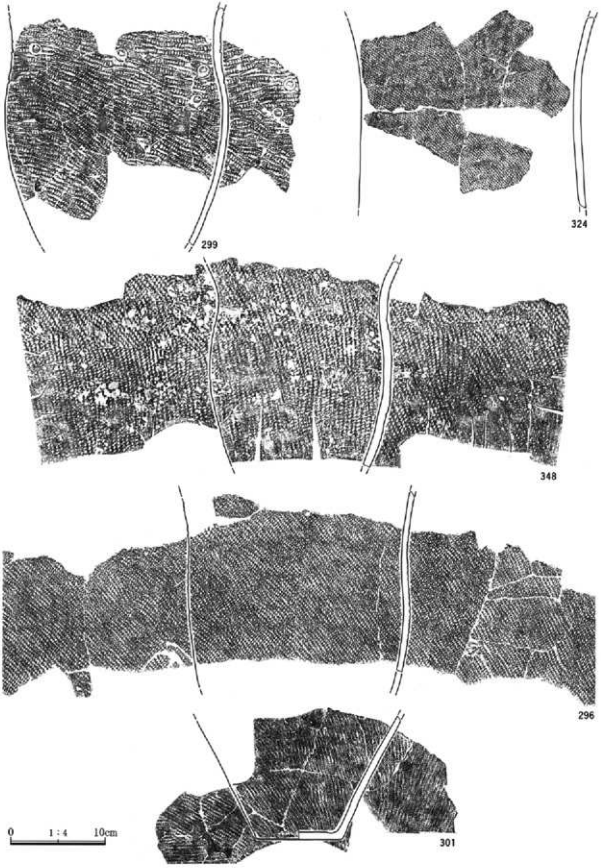




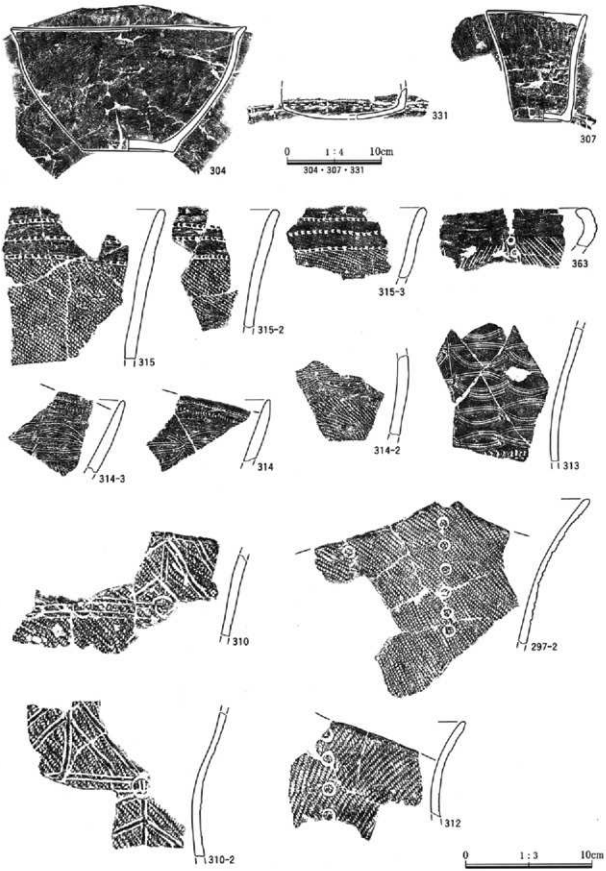
第14図　１区23号住居出土遺物（１）



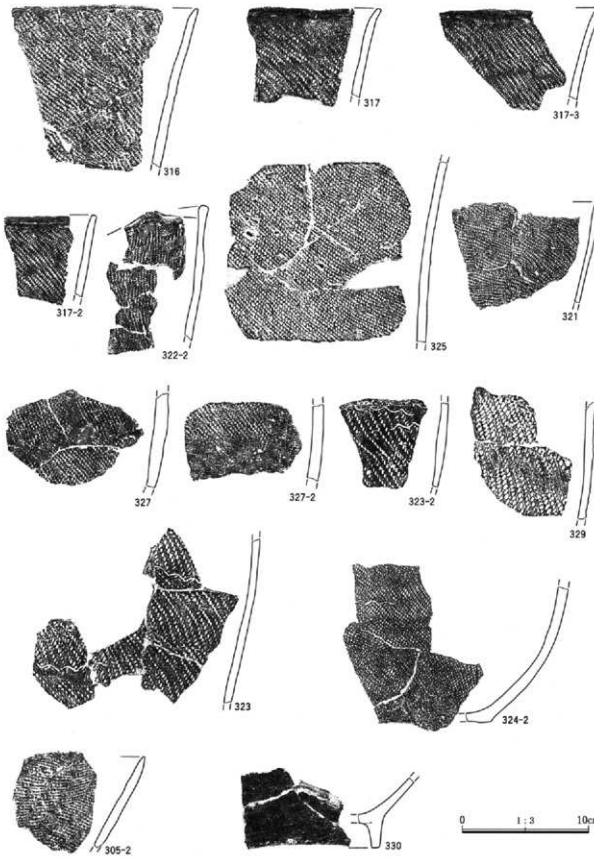
第15図　1区23号住居出土遺物（2）



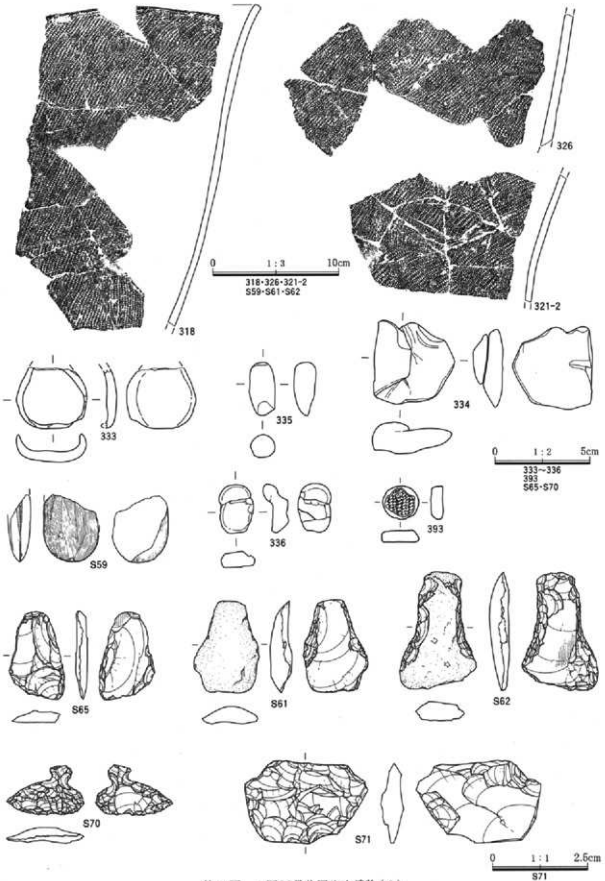
第16図　1区23号住居出土遺物(3)



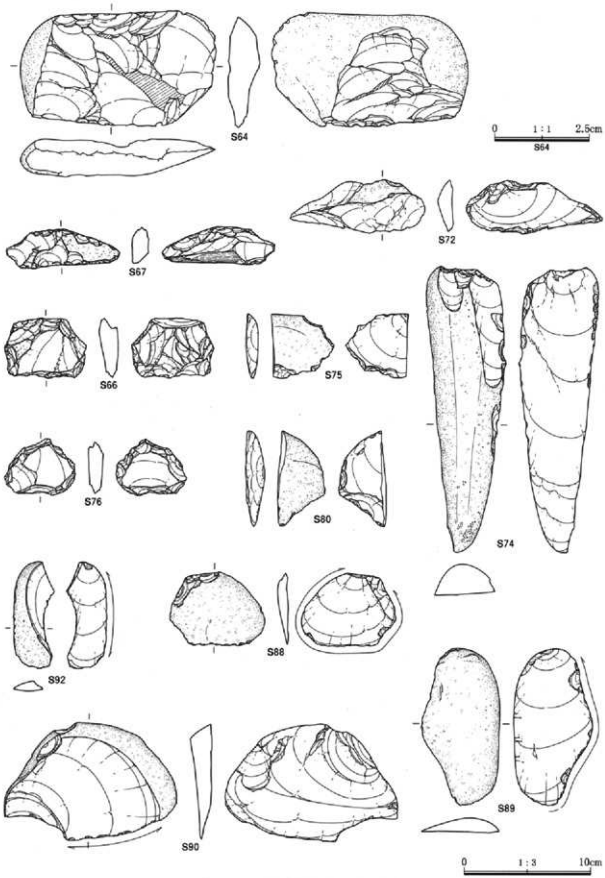
第17図　1区23号住居出土遺物（4）



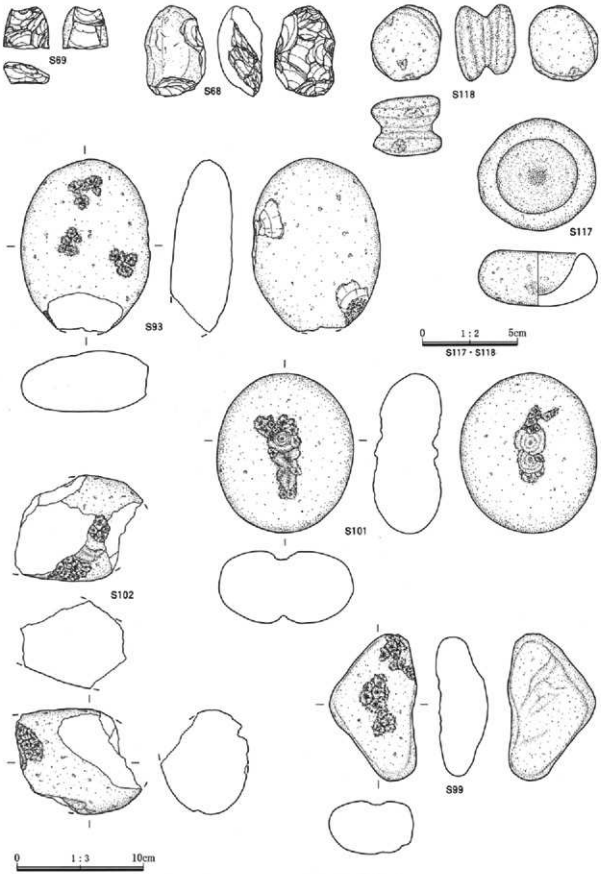
第18図　１区23号住居出土遺物（５）



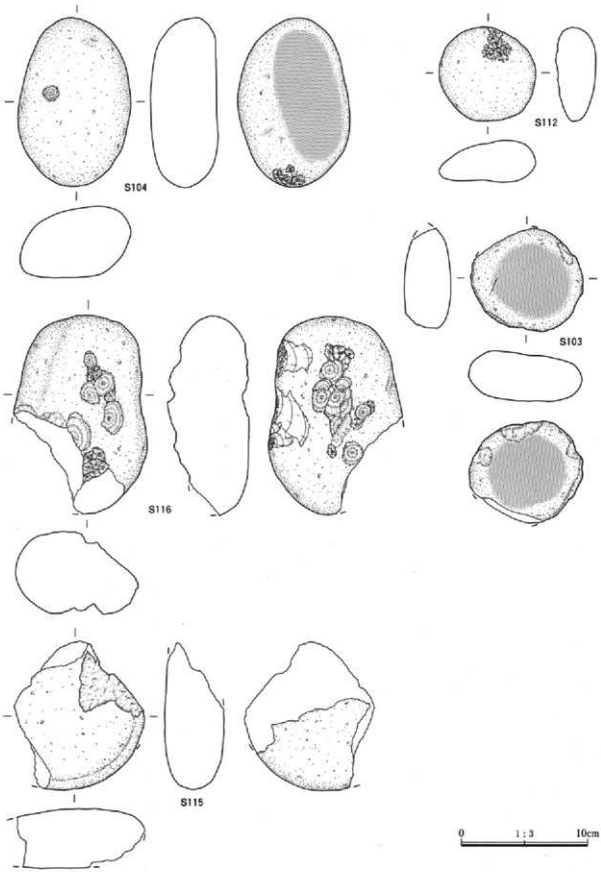
第19図　1区23号住居出土遺物（6）



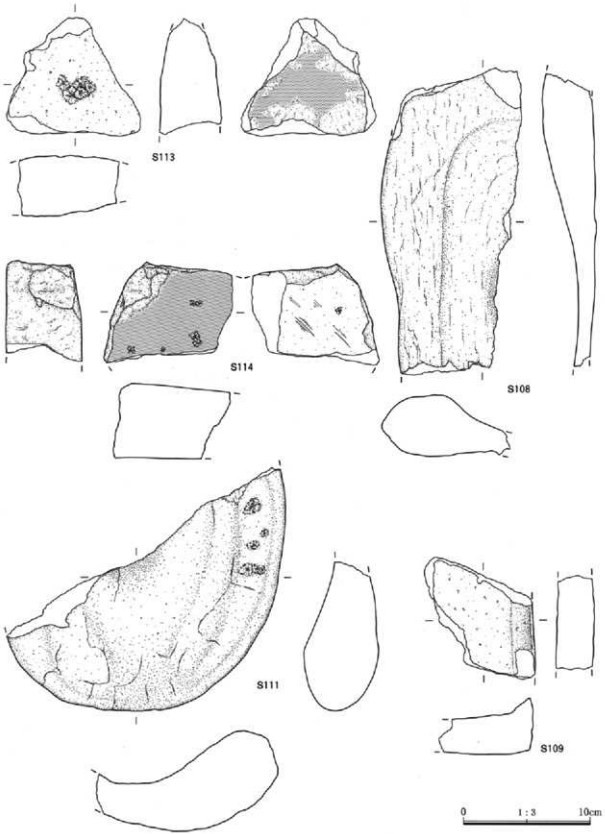
第20図　1区23号住居出土遺物(7)



第21図　1区23号住居出土遺物（8）



第22図　1区23号住居出土遺物(9)



第23図　1区23号住居出土遺物(10)

東側の1号焼土は長軸0.92m、短軸0.59m、深さ0.06mの不定形な凹みに焼土塊を多量に含む暗褐色土が堆積していた。焼土上面には硬化面は及んでいなかった。西側の2号焼土も長軸0.87m、短軸0.65m、深さ0.06mの不定形な凹みで、そこには焼土塊を多量に含む暗褐色土が堆積していた。

さらに、2号土器埋設土坑の北西部には長軸0.49m、短軸0.43m、深さ0.10mの楕円形の1号土坑が検出されている。ここでは先述した硬化面はとぎれていた。2号土器埋設土坑に近い南縁には凹石(S97)が出土している。

遺物と出土状況　出土遺物総量は土器1969点、石器・石片271点で、そのうち土器54点、石器60点を図化あるいは写真撮影した。

深鉢(296・348)は床面で検出された2基の土器埋設土坑に正立で埋設されていた。その他の大部分の土器は床面から数10cm浮いた状態もしくは埋没土中で出土した。床面直上で出土したのは、図化した遺物の中では炉の南側で検出された深鉢底部(301・306)の2点にとどまる。

石器も埋没土中から出土したものが多いが、住居周辺部に偏在する傾向がある。なかでも打製石斧(S61・S62)が南部周溝周辺、加工痕ある剥片(S73)が北部、使用痕ある剥片(S86)が南東部、凹石(S97)が中央部、石皿(S108・S109・S110)が南東部や北壁際、台石(S114)が西部の床面近くで出土している。

軽石製品は、容器状のS117が南東部床面上17cm、糸巻状のS118が中央部の床面上21cmで出土した。いずれも本住居に伴う確証はないが、類例の少ない資料である。

所見　床面に埋設された深鉢(第16図296・384)や埋没土中の出土土器の型式から、縄文時代前期諸磯a式期の住居と考えられる。

3区1号住居

(第24～29図　PL7・8・69～71　遺物観察表P.191・192・197～199)

位置　98－G・H－5・6G

形状　隅丸長方形

規模　長軸5.88m　短軸4.79m　残存壁高0.35m

床面積　24.74m²　　**長軸方位**　N－29°－W

炉　中央やや北寄り、主柱穴P1・P4間の中央に炉と考えられる土器埋設土坑が検出された。深鉢(353)が埋設され、西壁側に緑色片岩製の石皿(S156)の半欠破片が立てられていた。この土器埋設土坑は位置からすれば炉と推定されるが焼土や炭化物の堆積は顕著でなかった。

一方、住居中央やや北側には長軸0.82m、短軸0.50m、厚さ0.04mの不定型な焼土が床面に残っていた。南側には1号土坑があるが焼土は土坑には及んでいなかった。

柱穴　床面には8本の小ピットが検出されたが、主柱穴と考えられるのはP1～P4の4本である。柱間は住居長軸で2.24～2.64m、短軸で2.42～2.48mである。柱軸は住居壁方向と若干ずれている。

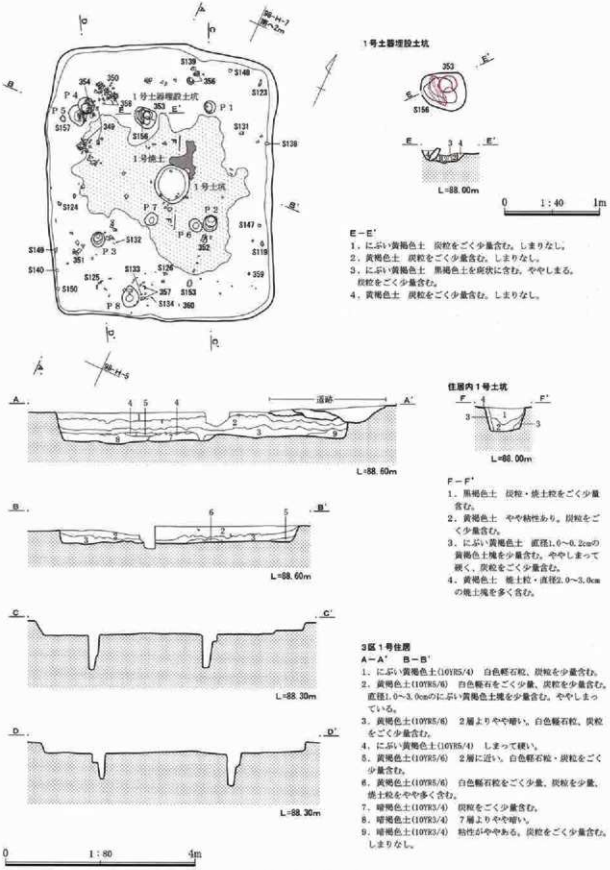
またP2・P4の西または東側にはやや小型の比較的浅いピットが付随しているが、P3には検出できなかった。これらが柱穴かどうかは不明である。P7は主柱穴の柱軸に平行し炉を通る主軸上に位置する。

周溝　周溝は検出されなかった。

床面および床下施設　住居中央部から長軸3.5m、短

第5表　3区1号住居ピット一覧表

長軸 5.88m	短軸 4.79m		残存壁高 0.35m		
主軸方向	N－25°－W			面積	24.74m²
柱穴 No.	規模(m) 長径	規模(m) 短径	規模(m) 深さ	形状	炉柱穴との間隔 (m)
P1	0.27	0.25	0.71	楕円形	2.24
P2	0.34	0.30	0.70	楕円形	2.42
P3	0.32	0.27	0.69	楕円形	2.64
P4	0.35	0.33	0.57	円形	2.48
P5	0.45	0.35	0.07	楕円形	
P6	0.30	0.24	0.27	楕円形	
P7	0.28	0.25	不明	楕円形	
P8	0.34	0.35	0.11	楕円形	


1号土器埋設土坑
1号焼土
1号土坑
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
S121
S122
S123
S124
S125
S126
S131
S132
S133
S134
S138
S139
S140
S147
S148
S149
S150
S153
S156
S157
S118
E－E'
1．にぶい黄褐色土　炭粒をごく少量含む。しまりなし。
2．黄褐色土　炭粒をごく少量含む。しまりなし。
3．にぶい黄褐色土　黒褐色土を斑状に含む。ややしまる。炭粒をごく少量含む。
4．黄褐色土　炭粒をごく少量含む。しまりなし。
住居内1号土坑
F－F'
1．黒褐色土　炭粒・焼土粒をごく少量含む。
2．黄褐色土　やや粘性あり。炭粒をごく少量含む。
3．にぶい黄褐色土　直径1.0～0.2cmの黄褐色土塊を少量含む。ややしまって硬く、炭粒をごく少量含む。
4．黄褐色土　焼土粒・直径2.0～3.0cmの焼土塊を多く含む。
3区1号住居
A－A'　B－B'
1．にぶい黄褐色土(10YR5/4)　白色軽石粒、炭粒を少量含む。
2．黄褐色土(10YR5/6)　白色軽石をごく少量、炭粒を少量含む。直径1.0～3.0cmのにぶい黄褐色土塊を少量含む。ややしまっている。
3．黄褐色土(10YR5/6)　2層よりやや暗い、白色軽石粒、炭粒をごく少量含む。
4．にぶい黄褐色土(10YR5/4)　しまって硬い。
5．黄褐色土(10YR5/6)　2層に近い、白色軽石粒・炭粒をごく少量含む。
6．黄褐色土(10YR5/6)　白色軽石粒をごく少量、炭粒を少量、焼土粒をやや多く含む。
7．暗褐色土(10YR3/4)　炭粒をごく少量含む。
8．暗褐色土(10YR3/4)　7層よりやや暗い。
9．暗褐色土(10YR3/4)　粘性がややある。炭粒をごく少量含む。しまりなし。
L=88.00m
L=88.60m
L=88.30m
0　1:40　1m
0　1:80　4m

第24図　3区1号住居

軸3.0mの放射状に硬化面が検出された。またそのほぼ中央部には長軸0.83m、短軸0.72m、深さ0.46mの楕円形の土坑が検出された。土坑の底面には焼土等は検出されなかった。南東縁には縄文土器小破片、剥片が、床面から数cm浮いた状態で出土している。本土坑の上面には床硬化面は及んでいなかった。北東縁には先述した焼土が検出されているが、これも土坑上面には及んでいなかった。

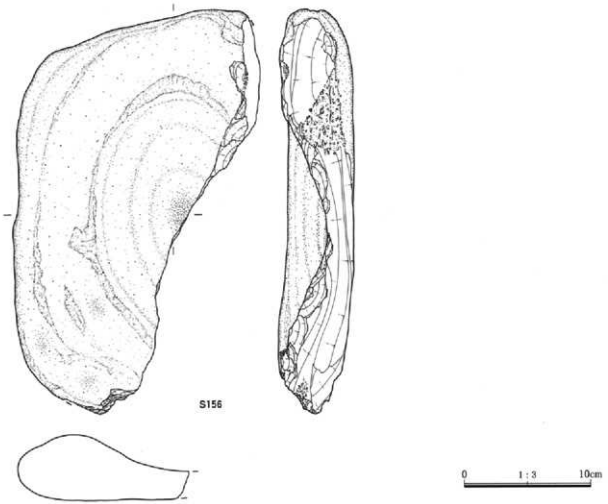
遺物と出土状況　多量の縄文土器や石器・石片が出土している。出土遺物総量は土器1227点、石器・石片236点で、その内土器17点、石器41点を資料化した。

深鉢(353)は床面で炉と考えられる土器埋設土坑に正立で埋設されていた。上下端を欠いている。その他の大部分の土器は床面から数10cm浮いた状態もしくは埋没土中で出土した。床面直上で出土したのは、図化した遺物の中では南東部で出土した深鉢口縁部(360)がある。

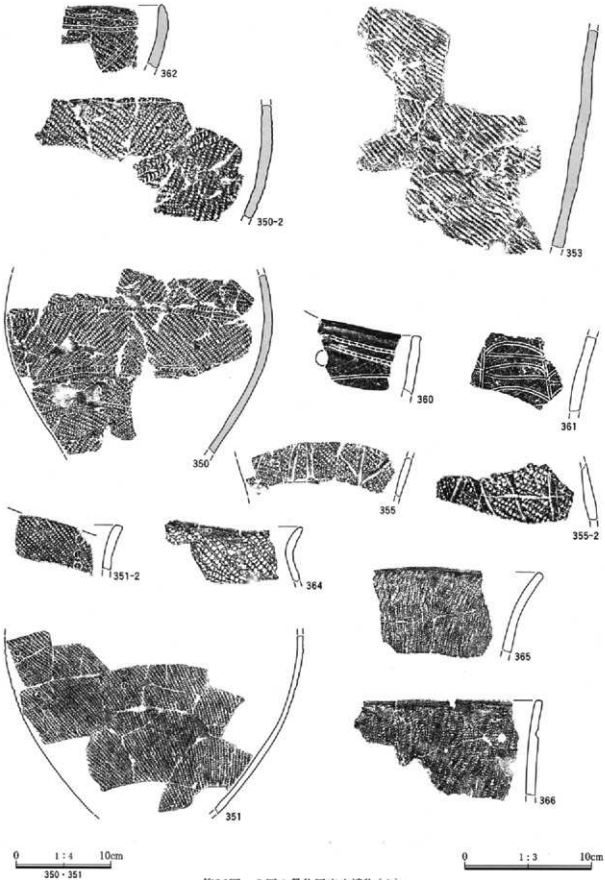
石器も埋没土中から出土したものが多い。資料化した石器は壁沿いの住居周辺部に偏在している傾向がある。なかでも磨製石斧(S119)が東壁際、打製石斧(S125・S126)が南部、削器(S132・S133・S134)が南部、使用痕ある剥片(S147)が東壁際の床面近くで出土した。

所見　床面に埋設された深鉢形土器(第26図353)や他の土器の型式から、縄文時代前期諸磯ａ式期の住居と考えられる。

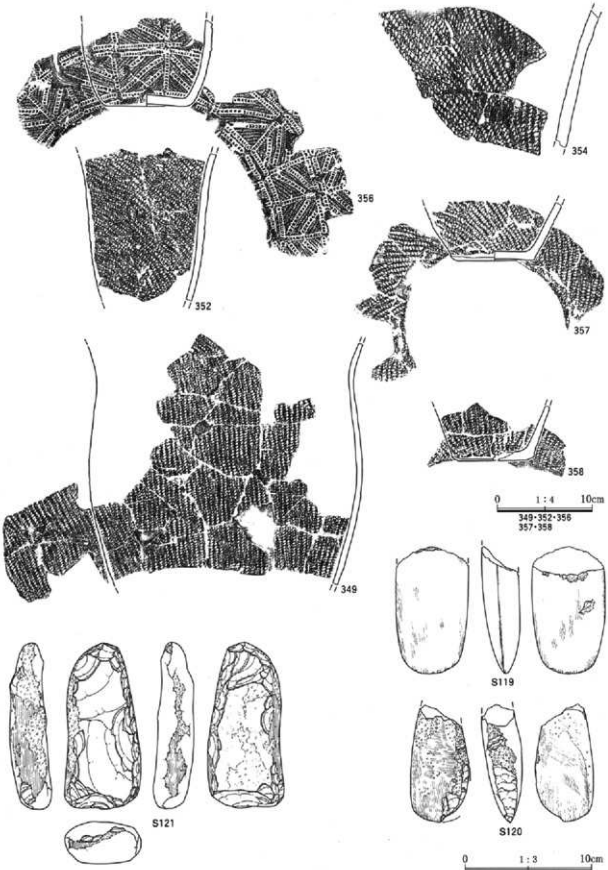
主柱穴の柱軸は住居壁方向とずれており、主柱穴が対角線上に位置しない結果となった。住居壁際には地山のローム層と酷似した黄褐色土層が堆積しており、壁の検出に問題があったかもしれない。



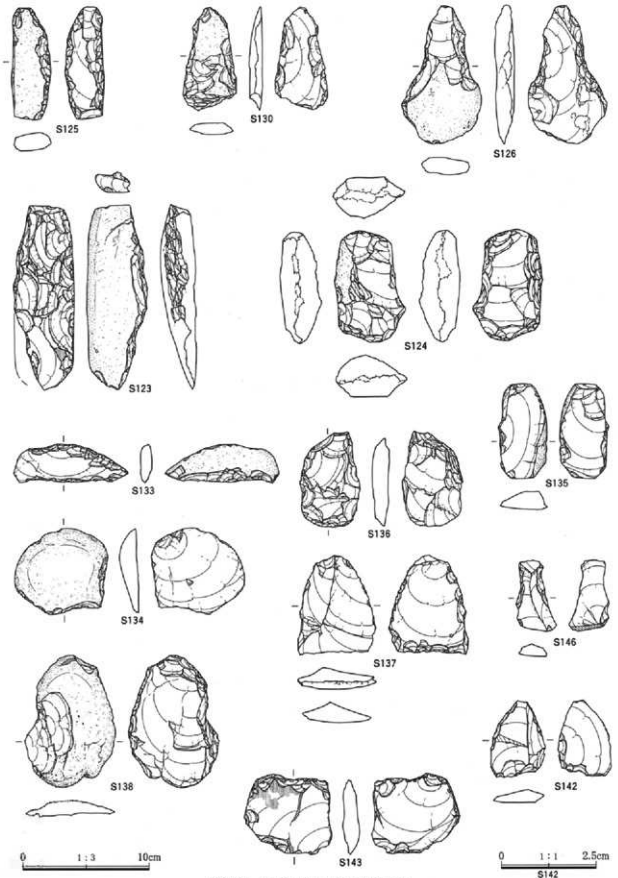
第25図　３区１号住居出土遺物(１)



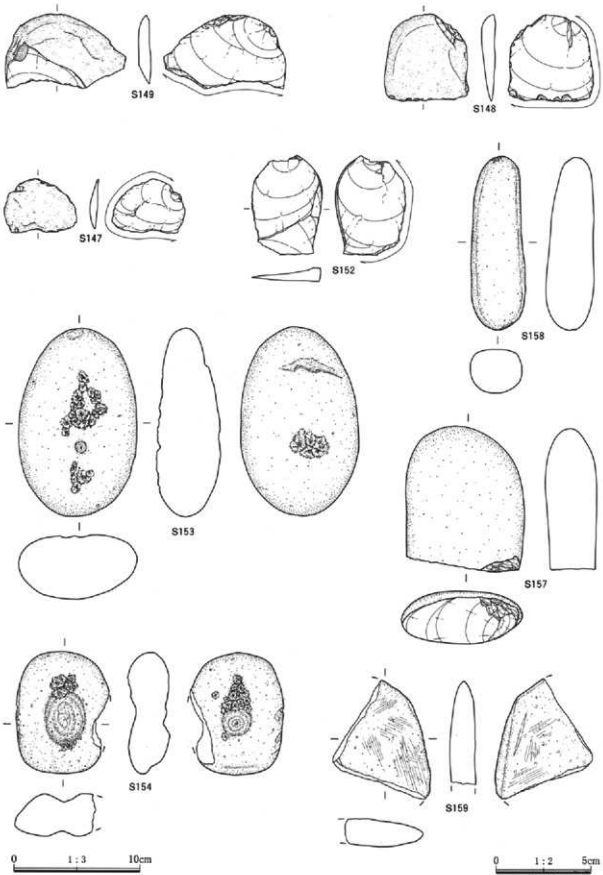
第26図　3区1号住居出土遺物（2）



第27図　3区1号住居出土遺物(3)



第28図　3区1号住居出土遺物(4)



第29図　３区１号住居出土遺物（５）

3区2号住居

（第30～33図　PL9・10・72・73　遺物観察表P.192・200・201）

位置　98－E・F－7・8G　　**形状**　隅丸方形

規模　長軸5.32m　短軸4.88m　残存壁高0.27m

床面積　22.49㎡　　**長軸方位**　N－2°－E

炉　中央やや北寄り、主柱穴P1・P4を結んだ線のほぼ中央に炉と考えられる土器埋設土坑が2基検出された。埋没土の観察からは南東部の1号土器埋設土坑が2号土器埋設土坑より古い。どちらの土坑の周囲にも顕著な焼土は見られなかったが、炉として使用されたと推定される。

1号土器埋設土坑は深鉢(368)が正位で埋設されていた。土器の下端を欠いている。土坑は長軸0.76m、短軸0.63m、深さ0.53mの楕円形で、焼土粒・炭化物粒を少量含む褐色土で埋まっていた。

2号土器埋設土坑は深鉢(367)が正位で埋設されていた。土器の上下端を欠いている。土坑は長軸0.79m、短軸0.52m、深さ0.57mの不正円形で、焼土粒・炭化物粒をごく少量含む褐色土で埋まっていた。

柱穴　床面には6本の小ピットが検出されたが、主柱穴はP1～P4の4本である。主柱穴はほぼ住居対角線上に位置している。主柱穴の柱間は長軸で3.00～3.03m、短軸で2.00～2.22mである。柱軸は1号土器埋設土坑を通る住居主軸に平行する。P5・P6の用途は不明である。

周溝　周溝はほぼ全周していた。四隅はやや浅くなっており、明確でない。周溝の幅は0.11～0.18m、深さは0.07～0.14mである。

床面および床下施設　住居北東部に長軸2.50m、短軸1.50mの不定形な硬化面が検出された。その西縁には長軸0.68m、短軸0.60m、深さ0.26mの楕円形の1号土坑が検出された。土坑の底面には焼土等は検出されなかった。土坑底面には黒色頁岩の剥片が出土しているのみである。本土坑の上面には床硬化面は及んでいなかった。

また、住居中央やや西側、主柱穴P3・P4を結んだ線のほぼ中央には長軸0.72m、短軸0.54m、厚さ0.03mの1号焼土が不定形に床面に残っていた。焼土下には深さ0.12mの凹みがあり焼土粒を含む黄褐色土が堆積していた。この1号焼土は塊状の焼土が堆積した物と推定される。遺物は使用痕ある剥片(S170)が東部で出土しているのみである。

遺物と出土状況　多量の縄文土器や石器・石片が出土した。出土遺物総量は土器141点、石器・石片85点で、そのうち土器8点、石器20点を資料化した。

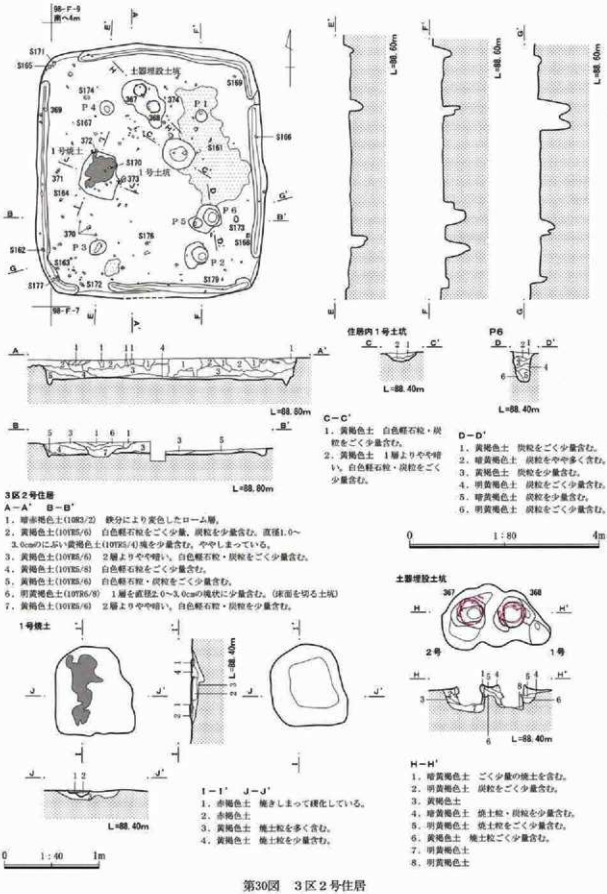
深鉢(368・367)はそれぞれ、炉と考えられる土器埋設土坑に正立で埋設されていた。上下端を欠いている。その他の大部分の土器は床面から数10cm浮いた状態もしくは埋没土中で出土した。床面直上で出土したのは、図化した遺物の中では北部で出土した深鉢胴部破片(374)があるだけである。

石器も埋没土中から出土したものが多い。資料化した石器は豎沿いの住居周辺部に偏在している傾向がある。なかでも打製石斧(S162・S163)が南西隅、石核(S165)が北西隅壁際、加工痕ある剥片(S167・S168)がそれぞれ北西部・南東周溝際、使用痕ある剥片(S170)が1号焼土上面直上、凹石(S173)が東部、砥石(S179)が南東隅の床面近くで出土した。

所見　床面に埋設された深鉢形土器(第31図367・368)や他の土器の型式から、縄文時代前期諸磯a式期の住居と考えられる。

第6表　3区2号住居ピット一覧表

長軸 5.32m	短軸 4.88m			残存壁高 0.27m	
主軸方向	N－0°－E			面積	22.49㎡
柱穴	規模(m)			形状	次柱穴との間隔 (m)
No	長径	短径	深さ		
P1	0.25	0.25	0.34	楕円形	3.03
P2	0.46	0.38	0.51	楕円形	2.22
P3	0.40	0.30	0.30	楕円形	3.00
P4	0.30	0.29	0.28	円形	2.00
P5	0.50	0.29	0.64	楕円形	
P6	0.55	0.45	0.67	楕円形	



3区2号住居

A－A'　B－B'

1．暗赤褐色土(10R3/2)　鉄分により変色したローム層。
2．黄褐色土(10YR5/6)　白色軽石粒をごく少量，炭粒を少量含む。直径1.0～3.0cmのにぶい黄褐色土(10YR5/4)塊を少量含む，ややしまっている。
3．黄褐色土(10YR5/6)　2層よりやや暗い，白色軽石粒・炭粒をごく少量含む。
4．黄褐色土(10YR5/6)　白色軽石粒をごく少量含む。
5．黄褐色土(10YR5/6)　白色軽石粒・炭粒をごく少量含む。
6．明黄褐色土(10YR6/6)　1層を直径2.0～3.0cmの塊状に少量含む。(床面を切る土坑)
7．黄褐色土(10YR5/6)　2層よりやや暗い，白色軽石粒・炭粒を少量含む。

C－C'

1．黄褐色土　白色軽石粒・炭粒をごく少量含む。
2．黄褐色土　1層よりやや暗い，白色軽石粒・炭粒をごく少量含む。

D－D'

1．黄褐色土　炭粒をごく少量含む。
2．暗黄褐色土　炭粒をやや多く含む。
3．黄褐色土　炭粒を少量含む。
4．明黄褐色土　炭粒をごく少量含む。
5．暗黄褐色土　炭粒を少量含む。
6．明黄褐色土　炭粒をごく少量含む。

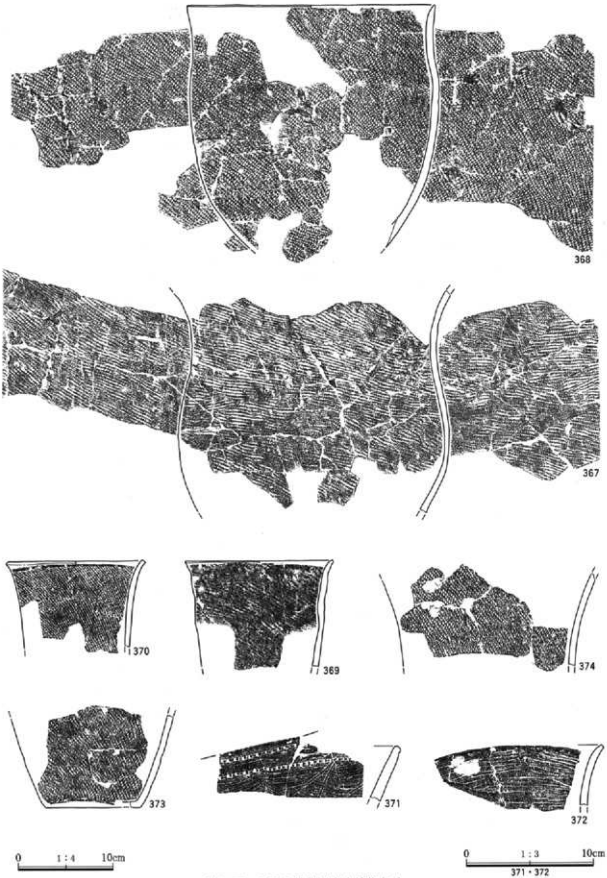
I－I'　J－J'

1．赤褐色土　焼きしまって硬化している。
2．赤褐色土
3．黄褐色土　焼土粒を多く含む。
4．黄褐色土　焼土粒を少量含む。

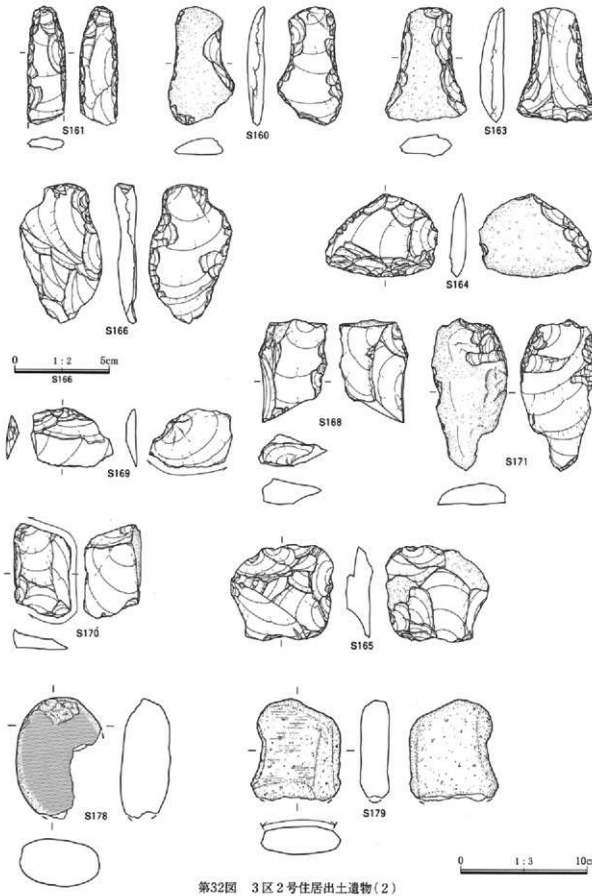
H－H'

1．暗黄褐色土　ごく少量の焼土を含む。
2．明黄褐色土　炭粒をごく少量含む。
3．黄褐色土
4．暗黄褐色土　焼土粒・炭粒を少量含む。
5．明黄褐色土　焼土粒をごく少量含む。
6．黄褐色土　焼土粒ごく少量含む。
7．明黄褐色土
8．明黄褐色土

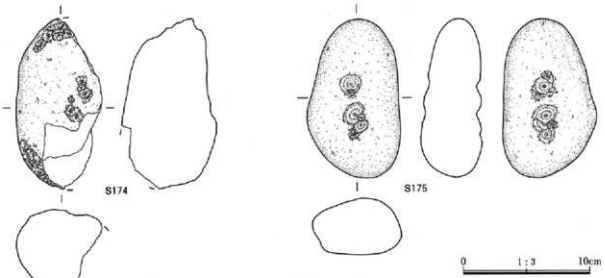
第30図　3区2号住居



第31図　3区2号住居出土遺物（1）



第32図　３区２号住居出土遺物（２）



第33図　3区2号住居出土遺物(3)

(3)土坑

1区15号土坑（第34図　PL11）

位置　87－R－5・6G

形状　隅丸長方形

規模　長軸3.04m　短軸1.44m　残存壁高0.96m

長軸方位　N－23°－W

埋没土　堅く締まる褐色土で埋まっていた。最下部は粘質のある黄褐色土で埋まっていた。

断面形　底面は平坦で、側面は上方に開いている。

底面　長軸の中央に3個の小ピットが確認された。それぞれのピットの規模(長軸×短軸×深さ)は、P1が0.23×0.17×0.20m、P2が0.17×0.16×0.15m、P3が0.20×0.14×0.21mである。

遺物と出土状況　本土坑からの出土遺物はない。

所見　底面に小ピットをもつ隅丸長方形の形態と、埋没土の特徴から縄文時代の陥穴と考えられる。

埋没土　黄褐色土塊・炭化物を含む暗褐色土で埋まっていた。最下部には粘性のある黄褐色土で埋まっていた。

断面形　底面は平坦で、下半部の側面はほぼ垂直に立ちあがり、上半部は大きく開いている。

底面　長軸の中央に6個の小ピットが確認された。中央に1個、北辺に3個、南辺に2個並んでいた。それぞれのピットの規模(長軸×短軸×深さ)は、P1が0.14×0.11×0.24m、P2が0.17×0.14×0.24m、P3が0.12×0.09×不明m、P4が0.15×0.13×0.27m、P5が0.11×0.09×0.30m、P6が0.15×0.12×0.35mである。

遺物と出土状況　埋没土中から前期諸磯a式の破片(375)1点と、削器(S180)が出土した。

所見　底面に小ピットをもつ隅丸長方形の形態と、埋没土の特徴から縄文時代の陥穴と考えられる。

1区16号土坑（第35図　PL11-73　遺物観察表P.193-201）

位置　88－F－8・9G

形状　楕円形

規模　長軸2.78m以上　短軸2.14m
残存壁高1.75m

長軸方位　N－21°－W

1区17号土坑（第35図　PL11）

位置　88－D・E－8G

形状　方形

規模　長軸1.40m　短軸1.02m以上
残存壁高0.67m

長軸方位　N－61°－E

埋没土　白色軽石粒・黄褐色土塊を含む暗褐色土で埋まっていた。最下部は粘性のある褐色土で埋まっていた。

断面形　底面は平坦で、側面はほぼ直立する。

底面　ほぼ平坦で、特別な施設は検出されなかった。

遺物と出土状況　遺物は出土しなかった。

所見　12号住居の北西壁に重複して検出された。埋没土の特徴から縄文時代の土坑と考えられる。

3区1号土坑（第36図　PL11・73　遺物観察表P.193）

位置　98－O－1・2G

形状　円形

規模　直径1.01m　残存壁高0.74m

埋没土　炭化物を少量含む暗褐色土で埋まっていた。上層には黄褐色土が入り込んでいた。

断面形　底面は平坦で、側面は直立するが、南半部はフラスコ状になっている。西端上部は上方に開いていた。

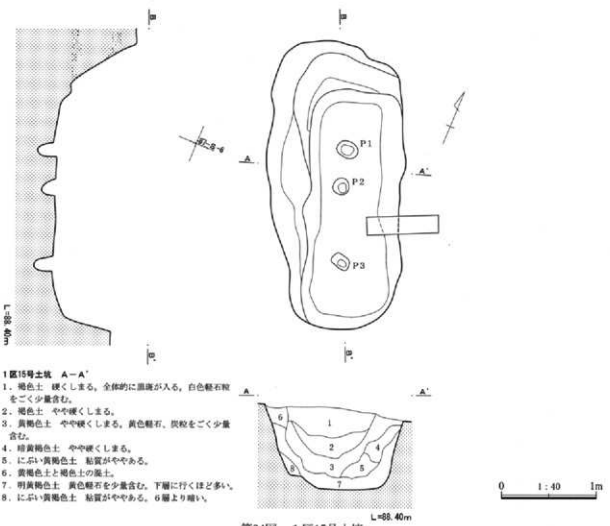
底面　底面はほぼ平坦で特別な施設は検出されなかった。

遺物と出土状況　埋没土中から土器が3点出土した。深鉢口縁部破片（376・377）を図化した。

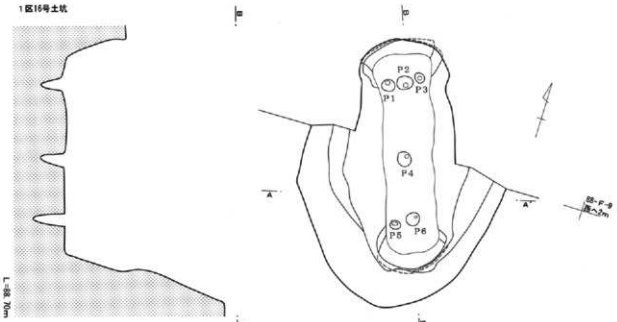
所見　形態や埋没土の特徴から縄文時代の土坑と考えられる。出土遺物から縄文時代前期諸磯a式の土坑と推定される。

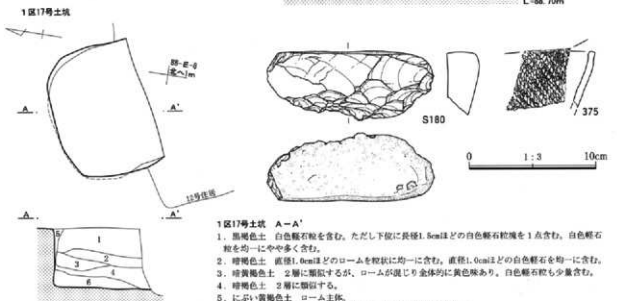
3区2号土坑（第36図　PL12　遺物観察表P.201）

位置　98－K・L－3G

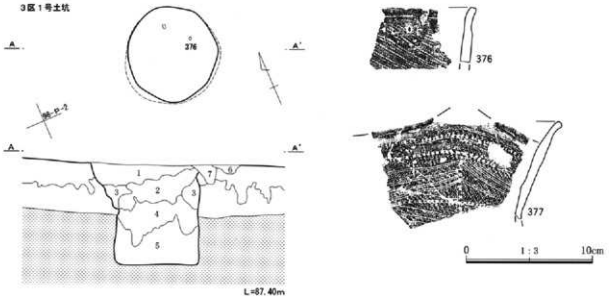


第34図　1区15号土坑





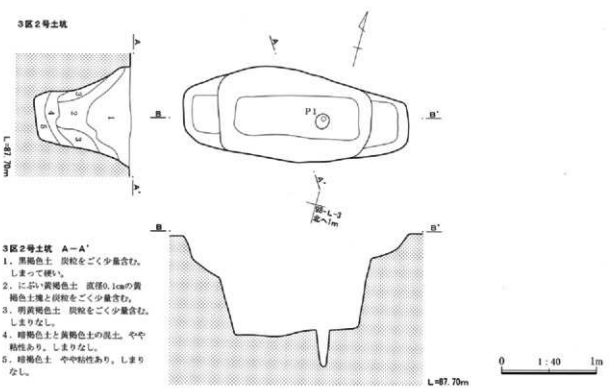
第35図　1区16号・17号土坑と出土遺物



3区1号土坑　A－A'

1．にぶい黄褐色土　炭化物をごく少量含む。
2．暗黄褐色土　炭化物を少量含む。
3．黄褐色土と明黄褐色土の混土。炭化物をごく少量含む。
4．暗褐色土　炭化物をごく少量含む。浅間板鼻褐色軽石を含むローム を塊状に混じる。しまって硬い。
5．暗褐色土　炭化物をごく少量含む。しまりなし。
6．暗褐色土
7．黒色土　白色軽石を含む。

0　1:40　1m



3区2号土坑　A－A'

1．黒褐色土　炭粒をごく少量含む。しまって硬い。
2．にぶい黄褐色土　直径0.1cmの黄褐色土塊と炭粒をごく少量含む。
3．明黄褐色土　炭粒をごく少量含む。しまりなし。
4．暗褐色土と黄褐色土の混土。やや粘性あり。しまりなし。
5．暗褐色土　やや粘性あり。しまりなし。

第36図　3区1号・2号土坑と出土遺物

形状　隅丸長方形

規模　長軸2.38m　短軸0.98m　残存壁高1.09m

長軸方位　N－76°－E

埋没土　炭化物粒と黄褐色土塊を含むにぶい黄褐色土で埋まっていた。上層には炭粒を含む黒褐色土が入り込んでいた。

断面形　底面は平坦で、側面の下半部はほぼ直立するが、上半は大きく上方に開いている。

底面　長軸のほぼ中央からやや東に１個の小ピット（Ｐ１）が確認された。Ｐ１の規模（長軸×短軸×深さ）は、0.16×0.14×0.39mである。

遺物と出土状況　埋没土中から縄文土器３片と黒色頁岩剥片１片が出土した。

所見　形態の特徴から縄文時代の陥穴と考えられる。出土土器からは前期諸磯ａ式期の土坑と推定される。

３区３号土坑（第37図　PL12･73　遺物観察表P.193･201）

位置　98－Ｈ－５Ｇ

形状　楕円形　　**断面形**　浅い皿型

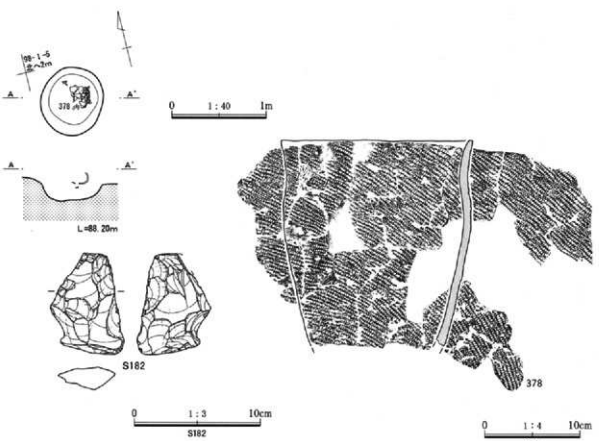
規模　長軸0.72m　短軸0.64m　残存壁高0.20m

長軸方位　N－27°－E

底面　底面は平坦である。

遺物と出土状況　埋没土中から比較的多くの遺物が出土した。土器は北東部に集中して埋没土中位で20点が出土した。その下層から半完形の深鉢（第37図378）が底面から13cm浮いたところで出土している。また埋没土中から、黒色安山岩の剥片１点、黒色頁岩の剥片12点、粗粒輝石安山岩の剥片１点、チャート剥片１点、デイサイト安山岩剥片１点を出土した。

所見　埋没土の特徴と出土遺物から、縄文時代前期諸磯ａ式期の土坑と推定される。



第37図　３区３号土坑と出土遺物

（４）遺構外の出土遺物

（第38～51図　PL73～79　遺物観察表P.193・194）

ここでは縄文時代の遺物のうち、遺構に伴わないで出土した土器・石器類を報告する。遺構外の遺物には、①古墳時代の住居埋没土中で出土した遺物、②縄文時代の遺構確認時にグリッドで取り上げた包含層遺物、③表採遺物の３種類が含まれる。

①の古墳時代住居埋没土から出土した石器類は、縄文時代のものと判断するのに困難な面があったが、今回の整理では、古墳時代の石器として特徴的な棒状あるいは扁平礫、竈構築材に使われた大型礫、滑石破片を除く、石器・石片・礫片を縄文時代のものとし計数した。ただし石器器種や石材の分布の検討の際には除外した。

ａ．遺物包含層の調査

遺構外としてあつかった遺物のうち、上記②の縄文時代遺構確認時にグリッドで取り上げた遺物は、基本土層のＩｂ層に含まれていたものである。Ｉｂ層は古墳時代遺構確認面下位にある土層で、淡色黒ボク土である。縄文時代の遺構確認作業はＩｂ層上面では十分でないことから、縄文土器・石器がＩｂ層に含まれている地点ではＩｂ層を掘り下げて遺構確認作業および包含層遺物の取り上げ作業をおこなうことが必要である。本来ならば発掘区全域についてＩｂ層の調査を実施すべきであったが、調査期間との調整から、今回の調査では旧石器調査と兼ねた試掘調査を基本とし、遺物出土量の多いところでは調査区を拡張することとした。試掘坑は３ｍ×３ｍとし、東西南北７ｍおきに配置した。この基本的調査は９％の調査率ということになる。なお個々の遺物出土地点の記録はおこなわず、遺物はグリッドごとに取り上げた。

遺物の出土量がまとまっていたことから、試掘坑の密度を増やし、周辺に包含層調査区を拡張して、Ｉｂ層の調査を実施したのは下記の４カ所である。１区西側の88－Ｈ～Ｎ－８～15グリッドでは、旧石器試掘坑の間に長くトレンチ状にＩｂ層調査区を設定し掘り下げた。１区北端の88－Ａ～Ｑ－16ラインの各試掘坑では、１区23号住居周辺で縄文土器の出土が顕著であったことから、試掘坑の位置を変更してＩｂ層の調査をおこなった。３区南東部台地上の３区１号住居・２号住居の周辺では、遺構の輪郭を明確にし、多量の遺物の出土状況を把握するために、調査区を拡張して面的にＩｂ層を掘り下げる作業をおこなった。３区南西部の98－Ｑ～Ｔ－20～３グリ

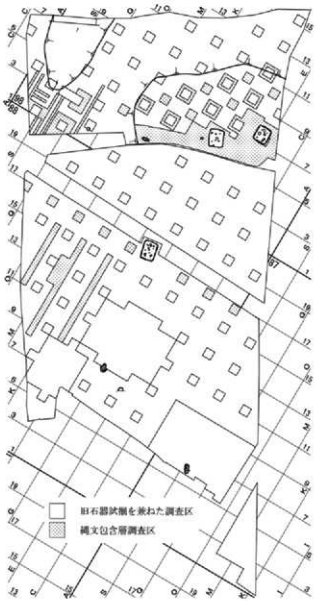
第７表　縄文土器出土一覧表

	区		掲載土器						非掲載土器						総合計
			黒浜	諸磯ａ	加曽利Ｅ	称名寺	晩期	合計	黒浜	諸磯ａ	加曽利Ｅ	称名寺	不明	合計	
遺構外出土土器	１区	表採	1	1				2	51	240			107	398	400
	１区	グリッド						0	80	467		1	18	566	566
	１区	縄文以外の遺構					2	2	35	133	1		11	180	182
	２区	表採						0		13		1	9	23	23
	２区	グリッド						0		1				1	1
	２区	縄文以外の遺構						0	3	5				8	8
	３区	表採						0	54	399		8	150	611	611
	３区	グリッド		6				6	261	1313			1	1575	1581
	３区	縄文以外の遺構	1	2				3	17	154			56	227	230
		小　計	2	9	0	0	2	13	501	2725	1	10	352	3589	3602
遺構出土土器	１区	23号住居	12	56				68	89	1432			488	2009	
	１区	15号土坑												0	
	１区	16号土坑		1				1						0	
	１区	17号土坑												0	
	３区	１号住居	4	15				19	108	886			97	1091	
	３区	２号住居		8				8	6	121			68	195	
	３区	１号土坑		2				2	1	2				3	
	３区	２号土坑							1	2				3	
	３区	３号土坑	1					1	7	2			1	10	
		小　計	17	82	0	0	0	99	212	2445	0	0	654	3311	3410
		合　計	19	91	0	0	2	112	713	5170	1	10	1006	6900	7012

ッドでは台地縁辺の遺構の有無を確認するため、Ｉｂ層試掘坑の密度を増やして調査を実施した。

なお、古墳時代の遺構調査の時にも、一部Ｉｂ層を掘り込んだところでは、遺構確認作業中に縄文土器が集中して出土する地点や遺構の存在が予想される地点が認められていた。これらの古墳時代の遺構調査時に周囲から出土した遺物についてもグリッドで取り上げた。

このような包含層調査で取り上げた遺物と、古墳時代以降の遺構埋土出土遺物・表採遺物を含めた遺構外遺物の総数は縄文土器3602点、石器類840点である。これらのすべての遺物を対象にして、土器については型式分類、石器類については器種分類と石材同定をおこなった。このうち報告書に実測図および写真を掲載できたのは土器15点、石器81点で、その他の石器92点は写真のみ掲載した。遺物実測図・写真ともに区ごと・遺物器種ごとに配列した。



第38図　縄文時代の包含層調査区

b．縄文土器

縄文土器の型式　縄文土器はその多くが諸磯ａ式土器である。遺構外で出土した縄文土器3602点のうち、諸磯ａ式と認められる破片は、掲載・非掲載をあわせて2734点で、全体の76％を占めている。胎土に繊維を含む黒浜式土器は503点14％であり、両者併せて90％となる。この比率は縄文時代の遺構出土土器とほぼ共通している。出土遺物の９割が黒浜式を若干伴う諸磯ａ式に限定されていることが、本遺跡で出土した縄文土器の特徴である。

遺構外出土遺物は大量で細片が多かったため、本書にすべてを掲載できなかった。そこで、代表的な文様構成の資料15点を実測・写真撮影して掲載した。掲載できなかった遺物については型式別の出土数一覧表（第７表）を掲げた。

ここでは本遺跡で出土した黒浜式土器、諸磯ａ式土器と分類したものについて概観しておこう。両型式について今報告では、基本的な分類基準を胎土中の植物性繊維の含有においている。これを前提に出土土器の特徴をみていきたい。

①黒浜式土器

文様要素としては、「米」字状文、波状文および縄文が認められる。

「米」字状文は、連続爪形文により構成されるが磨消縄文を伴うものと伴わないものがある。なお、斜行する連続爪形文は、地文である羽状縄文の条走向に一致する。

縄文は羽状縄文を基本とし、ＲＬ・ＬＲ横位により表出され、附加条は１種および３種が認められる。

胎土中の繊維含有量はあまり多くなく、土器表裏面にその痕跡が露出するものは認められない。いず

れも断面において機維痕が認められる程度である。

②諸磯ａ式土器

文様要素としては肋骨文、連続爪形文、「米」字状文、円形竹管文、縄文、無文などが認められる。

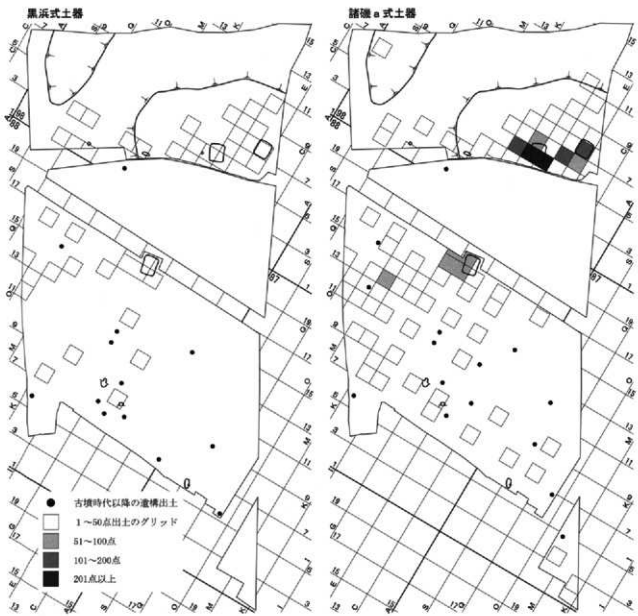
肋骨文には斜行状、木葉状のものがあり、さらに施文具として半截竹管、櫛歯状工具が用いられる。

「米」字状文は、平行線文もしくは連続爪形文により構成される。

円形竹管文は縄文地文上に縦位に施される。この文様をもつ土器は基本的に波状口縁であり、波頂部および波底部から垂下させる。さらに波頂部がU字状となる場合があるが、これは波頂部に施されていた円孔文からの変化であろう。なお、円形竹管文は通常中空の断面円形の施文具による押圧手法であると考えられるが、今回の資料には半截竹管の回転手法により施された例が観察された。

縄文施文の土器は、ＲＬ横位が多い点は同型式の傾向と一致する。なお、器形をみると水平口縁が基本であることも特徴として指摘できる。

無文土器は出土個体は少ないが、整形が極めて良

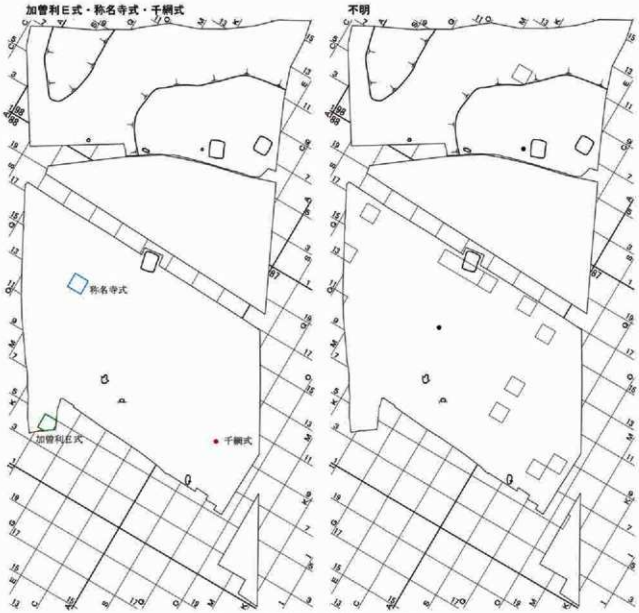


第39図　遺構外出土縄文土器の分布（1）

好で、一部であるが赤色塗彩が認められている。なお、器形は浅鉢を基本とする。

他の時期の土器は、現代の溝と考えられる3区1号溝で出土した中期加曽利E式の土器1片と、1区88－K－13グリッド、2区表採、3区表採で出土した後期称名寺式の土器10点、そして古墳時代後期の1区8号住居埋没土から出土した晩期の2点(第43図)にとどまる。1区8号住居埋没土で出土した晩期土器のうち、391は浮線網状文が施こされた鉢口縁部破片、392は外面に網代痕跡を残す底部小破片である。392は391と胎土・焼成ともによく似ており、晩期の土器と判断した。図示した土器片391・392は古墳時代後期の住居埋没土から出土したことから何らかの混入の可能性も皆無ではないが、発掘区周辺に晩期終末の遺構があった可能性が大きいと考えられよう。

縄文土器の分布　縄文土器の分布傾向は第39・40図に示した。この図は出土地点のわかる①古墳時代以降の遺構の埋没土中から出土した遺物、②遺構確認時にグリッドで取り上げた遺物の合計2591点の出土



第40図　遺構外出土縄文土器の分布(2)

位置の分布傾向を示したものである。多量に出土した黒浜式土器、諸磯ａ式土器は、ともに１区23号住居、３区１号・２号住居とその周辺に集中していることがわかる。また１区や３区の土坑が検出された地点の周辺にも黒浜式土器、諸磯ａ式土器がやや多く出土している。特に陥穴は時期が不明であるが、遺構外の土器の分布からは陥穴も住居と同時期の可能性が高いと推定されよう。

また、遺構は検出されていないが、１区北西部には黒浜式土器と諸磯ａ式土器が分布域を多少変えて出土している。この地点で何らかの生活活動があったものと考えられる。

その他の時期の縄文土器は前述したように、時期ごとに散在しており、分布の傾向を述べる資料とはなっていないが、後期称名寺式土器は台地北半の縁辺に偏在しているような印象がある。不明とした土器はごく小破片で型式を決定しにくいものであるが、その分布は黒浜式・諸磯ａ式土器の分布と同傾向にあり、これらの時期の土器の細片である可能性が高い。したがって本遺跡出土の縄文土器は、遺構外の土器も含めて、縄文前期黒浜式土器・諸磯ａ式土器にほぼ限定されるものと考えられる。

ｃ．石器類

遺構外出土の石器類は840点である。この他に94点の古墳時代住居埋没土から出土した石器類があるが、これらは石器が細片であること、出土位置が二次的であることから、器種分類や分布の検討からは除外した。

これらの石器類は、石器・石片類と礫・礫片類に分けられる。さらに石器・石片類は①加工石器と石核・剥片類、②礫石器に分けられる。遺構外の出土数は加工石器126点、石核21点、剥片286点、砕片269点、礫石器20点、礫片75点、礫37点、不明１点である。これに対して遺構（住居・土坑）から出土した石器類は、加工石器82点、石核２点、剥片191点、砕片283点、礫石器40点、礫片48点、礫22点であり、遺構外の出土量は、遺構出土石器類の1.5～２倍となっている。

本書では遺構外出土の石器173点のうち、グリッド・表採遺物を中心に81点の石器実測図と写真を掲載した。また92点を写真のみ掲載した。石器の分類については、遺構外出土石器と遺構出土石器をあわせた256点についておこなった。

出土石器の分類　出土した石器は、28器種（礫・礫片を含む、第９表）に分類が可能であった。これらは

第８表　縄文石器類出土数一覧表

	区		掲載石器類		非掲載石器類					合　計
			実測図・写真	写真のみ	石器	剥片	砕片	礫片	礫	
遺構外出土	１区	古墳時代以降の遺構			7	22	17	48		94
	１区	グリッド	16	15		50	33	18	4	136
	１区	表採	21	18		38	44	22	21	164
	２区	グリッド		1						1
	２区	表採	1			2	1			4
	３区	グリッド	31	43		149	118	30	7	378
	３区	表採	12	15		47	73	5	5	157
		小　計	81	92	7	308	286	123	37	934
遺構内出土	１区	23号住居	36	24		76	110	20	10	276
	１区	15号土坑								0
	１区	16号土坑	1							1
	１区	17号土坑								0
	３区	１号住居	26	15		77	135	14	8	275
	３区	２号住居	14	6		25	27	10	4	86
	３区	１号土坑								
	３区	２号土坑				2				2
	３区	３号土坑	1			11	11	4		27
		小　計	78	45		191	283	48	22	667
		合　計	159	137	7	499	569	171	59	1601

加工石器12種と礫石器10種に大別され、組成的には住居出土石器のそれとほぼ一致するものであった。各種石器は素材の形状・大小・加工の有無等による細分が可能であったが、数量的制約もあって、ここでは打製石斧・削器・石核・加工痕ある剥片・使用痕ある剥片・擦石・凹石の７器種に限って、下記の基準で細分した。（第10表）

①打製石斧　打製石斧については、従来の分類に従い短冊形・撥形・分銅形に分類、石器の大小を加味してａ～ｅに５細分した。５細分に際して特に数値的基準は設けなかったが、小形品・中形品・大形品・特大品（概ね、５㎝以下・８㎝前後・10㎝以上）といったような相対的なもので、具体的数値については計測値一覧表を参照していただきたい。

②削器・加工痕ある剥片・使用痕ある剥片　素材となった剥片形状に基づき、４類（１類：横長剥片を用いるもの、２類：縦長剥片を用いるもの、３類：幅広剥片を用いるもの、４類：剥片形状不明）に大別、刃部の加工位置（ａ：剥片端部、ｂ：三角、ｃ：台形、ｄ：右側縁、ｅ：左側縁）により細分した。

③石核　石核素材の形状（１類：剥片素材、２類：分割礫、３類：原礫）により細分した。

④凹石　掌に入る程度の礫を２類に、それより大形の礫を１類、小形の礫を３類として大別、凹部の形状（ａ：集合打痕を有するもの、ｂ：ロート状の凹部を有するもの、ｃ：集合打痕＋ロート状の凹部からなるもの）により細分した。

⑤擦石　凹石と同様に、掌に入る程度のサイズの礫を２類に、それより大形の礫を１類、小形の礫を３類として分類した。

石器の概要　1324点の石器・石片類（礫・礫片を除く）が出土した。組成的には、剥片類が1029点（77.7％）と圧倒的に多く、石器類では石鏃等の狩猟具が少なく、擦石・凹石等の加工具や石斧類が主体を占めるという ものであった。石器石材は黒色頁岩を用いるものが1064点（80.5％）と圧倒的多数を占め、赤城山南麓に立地する他の縄文時代前期集落遺跡と同様な傾向を示していた。本報告では器種認定した狭義の石器173点中81点を掲載・図化した。

ここでは遺構出土の石器も含めて、以下その概要を記す。

①磨製石斧　合計12点（前期住居６点・包含層６点）が出土した。形態的には典型的な乳棒状磨製石斧が９点、石材としては変玄武岩が10点と圧倒的多数を占めた。12点とも破損品であった。その残存状況は頭部破片や刃部破片、胴部破片等さまざまで、再生使用したような痕跡は見られなかった。３区１号住居出土の１点（砂岩製、第27図S121）は側縁のみ研磨するものであり、破損した打製石斧の転用品の可能性がある。

なお、出土した磨製石斧の大部分は前期特有のものであったが、１区表採の１点（黒色頁岩製、第43図Ｓ214）は「刃部磨製石斧」の刃部破片であり、縄文時代早期撚糸文期に帰属する石器と考えている。

②打製石斧　54点（前期住居15点・包含層39点）が出土した。分類不能な１点を除いて、各類の石斧は１類29点・２類21点・３類３点であった。

１・２類の石斧については側縁形態が漸移的で、明確な線引きが困難であったが、どちらかといえば、１類を広く、２類を限定的にとらえることとなった。石斧の再生・使用等に伴う形態変化は明らかであり、また、機能・用途についても未解決であり、上記分類が妥当か疑問であるが、他に適当なものがなく、従来の分類法に従った。

１類の典型例は１区表採の打製石斧（第44図S186・S224）、２類の典型例は３区から出土した打製石斧（第47図S267・S270）である。１・２類が前期、３類が中期以後の石斧として理解するのが一般的であり、伴出土器とも整合的であった。住居出土の石斧は２類が主体を占め、組成面では前段的様相を残していた。

２類の石斧刃部は、未加工であるものも多い。この種の石斧は背面側に礫面を大きく残し、その側縁は背面側にも裏面側にも偏らずレンズ状の断面形状を呈することが多く、特徴のひとつとなっている。石器刃部は直刃（第47図Ｓ274）となるものもあるよう

第9表　縄文石器類出土数一覧表

	器種	1区23号住居	1区16号土坑	3区1号住居	3区2号住居	3区2号土坑	3区3号土坑	1区グリッド	1区表採	2区グリッド	2区表採	3区グリッド	3区表採	合計
加工石器	磨製石斧	2		4				2	1		1		2	12
	打製石斧	4		7	4			6	11			18	4	54
	石匙	1			1							1	1	4
	ピエスエスキーユ	2							1					3
	有茎尖頭器											1		1
	石鏃							2	2			1	2	7
	削器	2	1	7	1			5	4	1		5	3	29
	加工痕ある剥片	11		9	3		1	6	12			16	7	65
	使用痕ある剥片	10		6	3			2	1			6	2	30
石核石器	器種不明の石器	1		1				1				2		5
	三角錐形石器								2					2
	スタンプ形石器											1		1
	石核	1			1			3	3			12	3	23
礫石器	砕片	110		135	27		11	33	44		1	118	73	552
	剥片	76		77	25	2	11	50	38		2	149	47	477
	凹石	10		2	3			1	1			2	1	20
	擦石	5		1	3			1				7		17
	石皿	4		1									1	6
	敲石	1		2				1					1	5
	砥石			1	1							1		3
	特殊擦石											1		1
	台石	3												3
	多孔石	1												1
	軽石製品	2												2
	礫器							1						1
	礫片	20		14	10		4	18	22			30	5	123
	礫	10		8	4			4	21			7	5	59
	不明								1					1
	小計	276	1	275	86	2	27	136	164	1	4	378	157	1507
							667						840	1507

第10表　石器器種と細分

器種	大分類			中分類			小分類		
打製石斧	形態	1	短冊形	大きさ	a	小型			
		2	撥形		b	中型			
		3	分銅形		c	大型			
		4	不明		d	特大			
					e	不明			
削器	形態	1	横長	刃部加工位置	a	剥片端部			
		2	縦長		b	三角			
		3	不明		c	台形			
					d	右側縁			
					e	左側縁			
					f	左右側縁			
加工痕ある剥片	形態	1	横長	加工部位置	a	剥片端部			
使用痕ある剥片		2	縦長		b	三角			
		3	巾広		c	台形			
		4	不明		d	右側縁			
					e	左側縁			
					f	左右側縁			
石核	形態	1	剥片						
		2	分割礫						
		3	原礫						
凹石	大きさ	1	大型	凹みの種類	a	集合打痕			
		2	中型		b	ロート状			
		3	小型		c	集合打痕＋ロート状			
		4	不明						
擦石	大きさ	1	大型	磨り面の位置	a	片面	敲打痕の位置	①	小口
		2	中型		b	両面		②	側縁
		3	小型					③	無し
		4	不明						

であるが、相対的には弧状となるものが多い。長さ8～12cmの石斧が主体を占める一方で、長さ5cm前後の小型例(第19図S65、第47図S256)も少量だが出土しており、機能差があった可能性も否定できない。側縁加工は交互剥離したのち敲石・台石等でエッジを潰しているもの、両極剥離的なもの、片側のみ剥離するものなど多様で、その加工法は素材となる剥片に影響されるものと思えた。石器刃部の磨耗例(第19図S62・第44図S188・S226)も明らかであった。

周辺域では、同種石斧が五目牛清水田遺跡(前期初頭)に多量に出土している。清水田例の最大の特徴は、短冊状の打製石斧とは異なる側縁加工にあることは明らかである。その加工法は裏面側を薄く剥離、背面側を厚く剥離するというものであり、エッジは明らかには裏面側に偏っていた。素材剥片の縁辺を加工することなく石器刃部に用いるもの(この場合、弧状刃部となることが多い)の他、素材剥片の縁辺を加工して直刃様となるものが存在した。形態的・技術的属性は打製石斧のそれと遜色のないものであったが、前期石斧に多い刃部磨耗が見られない点が特徴的で、その用途・機能については判然としなかった。

2類の石斧は清水田遺跡例のような裏面側にエッジが偏る側面観から、本遺跡例のような中央にエッジが位置する側面観に変わる。技法的には水平打撃から垂直打撃に変化するということになるのだろうが、交互剥離してから側縁を垂直打撃する手法もあるようである。本遺跡に限れば、その出土量は1類の石斧が2類を上まわるようである。短冊形(1類)と撥形(2類)の境界は曖昧であり、短冊状を呈する石斧の中にも側縁が開く石斧も多く、2類にも刃部磨耗の明らかなもの(第44図S188・S226など、第19図S62は紐擦れ痕の可能性)がある。石斧刃部の磨耗の有無が側面観の変化に対応、1・2類の石斧は機能的に親和的になるということなのだろうか。

裏面側からのみ加工する石斧例(左側縁を破損、第47図S269)は早期後半の甲高石斧の系統上にあるものであるが、その形態的特徴は2類の石斧の範疇に収まるものとなってしまっている。

また、3区表採の1点(緑色片岩製、第47図S330)は背面側に顕著な敲打痕を残しており、磨製石斧の未成品としてとらえるべきものかもしれない。

③石匙　4点(前期住居2点・包含層2点)が出土した。縦型石匙1点(黒色頁岩1)、横型石匙3点(黒色頁岩2・チャート1)という内訳で、1区23号住居出土の石匙(チャート製、第19図S70)と3区表採の石匙(黒色頁岩製、第48図S340)は加工量も多く、精製石匙としての特徴を備えている。

④ピエスエスキーユ　3点(前期住居2点・包含層1点)が出土した。3点中2点が珪質岩(珪質頁岩1点・チャート1点)であった。紡錘状の断面形状を呈する典型例は見られないことから、最終形態として機能した石器というより、素材の形を整えるなどといった剥離技術のひとつであろう。

⑤有茎尖頭器　1点のみ出土した。背面側中央には剥離による稜が形成されているのに対して、裏面側の稜形成は弱く、やや雑である。基部側の「返し」は左右でバランスを欠く。石器先端と基部を欠損する。現状で、長さ4.7cm・幅1.7cmを測る。黒色頁岩製。

⑥石鏃　7点(包含層のみ出土)が出土した。有茎石鏃1点・凹基無茎鏃6点からなる。凹基無茎鏃は抉りの浅いもの(第44図S235・S201・S202、第48図S293・S342)が6点中5点を占め、完成度の高い加工状態が看て取れた。1区表採の凹基無茎鏃(第44図S235)は「局部磨製石鏃」であり、研磨後の剥離が明らかであった。第44図S234は、石器先端と基部を欠損した有茎石鏃で、やや内湾気味の側縁が特徴的であった。

⑦削器・加工痕ある剥片　削器29点(前期住居・土坑11点・包含層18点)・加工痕ある剥片65点(前期住居・土坑24点・包含層41点)が出土した。両者とも縦長剥片の場合は両側縁に、横長剥片の場合は剥片端部に加工位置を選択し、剥片形状に応じて石器を作出していた。刃部形状の企画性・連続性を基準に器種分類しており、ある意味で同義的であるが、加工痕ある剥片には加工意図・製作意図の明らかでないものも含まれ、実態は多義的である。

⑧使用痕ある剥片　30点（前期住居19点・包含層11点）が出土した。削器・加工痕ある剥片と同様、剥片形状に即した剥片使用が明らかであった。

⑨器種不明の石器　５点（前期住居２点・包含層３点）が出土した。文象斑岩製の第46図Ｓ255を除く４点は、総て黒色頁岩製。石器のサイズは長さ6.1～9.5㎝・幅4.7～5.9㎝程度で、楕円形状を呈するタイプ（第21図Ｓ68・第46図Ｓ200・第48図Ｓ261）と、細身のタイプ（第28図Ｓ124・第48図Ｓ255）に二分することができる。剥離面構成・潰れた側縁等の在り方は打製石斧様であるが、それと異なる要素と言えば刃部に相当する部分が潰れて、打製石斧の刃部機能を放棄している点や、通常の側縁加工に比べて側縁が過度に潰れていることである。石核としての可能性も検討したが、最終的にはエッジが過度に潰れていることを重視して、敲石としての転用が想定できるだろう。

⑩三角錐形石器　２点（１区表採）が出土した。２点とも角柱状・棒状礫を石器素材に用いる。裏面側のみ礫面（礫を分割して平坦面を得る例もある）を残す典型例とは異なり、２点とも側縁や表裏両面に礫面を大きく残しており、石器製作上の省力化が看て取れる。第46図Ｓ238は底面部（機能部）を裏面側から一撃によって、第46図Ｓ237は底面部を周辺から求心的剥離によって作出している。類例は谷を挟んだ北側の荒砥北三木堂遺跡に多量に出土している。

⑪スタンプ形石器　１点（３区包含層）が出土した。変質安山岩製の扁平原石分割、底面部（機能部）を作出している。礫は末広がりになっており、その平面形態は「凡字状石器」に近い。分割面作出の打点側と反対のエッジに微細剥離を施し、底面部を平坦に整えている。（第50図Ｓ295）

⑫石核　23点（前期住居２点・包含層21点）が出土した。石核素材は原礫・分割礫・大形剥片からなり、多様な形状の剥片を剥離、各種用途に応じた形状の剥片を選択的に素材としたものと考えている。１例を除いた22例が黒色頁岩製であることや、石器類の大部分が黒色頁岩製であることを総合的に評価するなら、黒色頁岩製石器類については自己調達という理解が妥当かもしれない。しかし、全黒色頁岩片数1080点のうち石器が193点と17.8％を占めるという事態は通常の石器製作では想定できないほど高い完成率（達成率）であり、すべてが遺跡製作の石器ということはないのではないだろうか。

⑬凹石　20点（前期住居15点、包含層５点）が出土した。完存している20点のうち、１類（200ｇ台）は４点、２類（300～600ｇ台）７点、３類（600～900ｇ台）が７点であった。手頃な大きさの２類が主体を占めるものと思われたが、予想に反して礫重量700ｇを超える大型の凹石も多かった。ａ～ｃ類の凹石は各13・１・６点と、ａ類の凹石が主体を占めた。集合打痕（ａ類）については敲打によるものであろうが、ロート状の凹み部（ｂ類）については回転穿孔したような平滑な開口部と敲打痕の残る中心部からなり、その形成過程については明らかではない。堅果類等を敲き、擦る、というような単純な使用だけでは、多様な痕跡の説明ができなくなっているというのが現状である。

包含層の出土量は住居の１/３と少ない。これは、１区23号住居の埋土に多量の凹石（10点）が廃棄されていたという特殊事情によるものである。

⑭擦石　17点（前期住居９点・包含層８点）が出土している。１類は900ｇ程度、２類は500ｇ程度、３類は300ｇ程度の礫重量であった。磨耗面は表裏両面に見られるようであったが、その頻度は完形例より破損例に多い傾向が指摘できるかもしれない。打痕については礫重量の重い１類には少なく、２類に顕著である。「持ち易さ」からくる現象であるのであろうが、河床礫の選択基準が良く分かる。

⑮石皿　６点（前期住居５点・包含層１点）が出土した。１区23号住居から４点が集中出土したほか、３区１号住居から１点（第25図）が出土、住居出土の石皿は５点とも破損品であった。片側に掻き出し口を有する有縁の石皿（第23図Ｓ108・Ｓ111）や片側状を呈する有縁の石皿（第23図Ｓ109）が出土、いずれも河床礫を素材に用いていた。第25図Ｓ156は、３区１号住居の炉石として転用、その分割面を上にして出土し

たものである。意図的(？)破損後、石皿は破損面を粗く打ち欠き、分割面を平坦に整えている。分割面の集合打痕については、炉石として埋めたあと加撃したものか、それ以前のものなのか、不明である。

⑯敲石　5点(前期住居3点・包含層2点)が出土した。出土量が少ないようであるが、これは凹石・擦石等と機能的に重複しているためであろう。礫重量は300ｇ程度のものと、800ｇ程度のものからなり、凹石・擦石の礫重量の枠内にあることは上記推定を肯定する。

⑰砥石　3点(前期住居2点・包含層1点)が出土した。住居出土の2点(第29図Ｓ159・第32図Ｓ179)は粗粒輝石安山岩及び牛伏砂岩製で、粗粒石材を用いている。包含層出土の1点(第51図Ｓ326)は長さ5.9㎝・幅3.0㎝・重さ40ｇを測る黒色頁岩の偏平礫を用いたものである。表裏両面には若干の打痕と浅い線状痕、引っかき傷様の条痕が入り混じり判然としないが、側縁側には礫の長軸に直交する明瞭な線状痕が見られ、それによって稜線が形成されるほどであった。線状痕以外に機能や用途を示す材料はなく、便宜的に砥石ととらえた。孔を穿ったような痕跡はないが可能性として垂れ飾り等を製作しようとしたものということも考えておきたい。

⑱特殊擦石　3区包含層から1点のみ出土した。背面側に稜を持つ文象斑岩製の河床礫を用いる。右側縁に打痕と磨耗痕が著しい。

⑲台石　3点が1区23号住居から出土した。粗粒輝石安山岩製の偏平礫や板状礫を用いる。3点とも破損品であり、全体形状は不明。第23図Ｓ113・Ｓ114には打痕や磨耗面が見られる。

⑳多孔石　1点のみ1区23号住居から出土した。粗粒輝石安山岩製の河床礫を用いる。石器の下半部・左を欠損する。現状で、石器は945ｇを測る。完形品なら優に1㎏を超えるものとなろう。多数の孔は表裏両面にあるほか、側縁に打痕がある。

㉑軽石製品　2点が1区23号住居から出土した。第21図Ｓ118は背の低い糸巻き状で、上下面は平滑に磨かれている。第21図Ｓ117は小型の椀形で、内外面、特に内面は平滑に整形されている。

石器の分布　石器器種ごとの分布と剥片・砕片および礫片・礫の分布を、グリッド出土の石器106点、剥片・砕片・礫片・礫409点について図示したのが第41図である。

全体としては石器の分布と剥片・砕片・礫・礫片の分布はほぼ対応していた。ただし剥片・砕片・礫・礫片の分布がある1区東半部に石器の分布はほとんどない点が分布図から見てとれる。この分布傾向は縄文時代前期黒浜式土器、諸磯ａ式土器の分布(第39図)と重なっている。このことは本遺跡グリッド出土の石器類がほぼ黒浜式期・諸磯ａ式期の遺物であることを示していると考えられる。

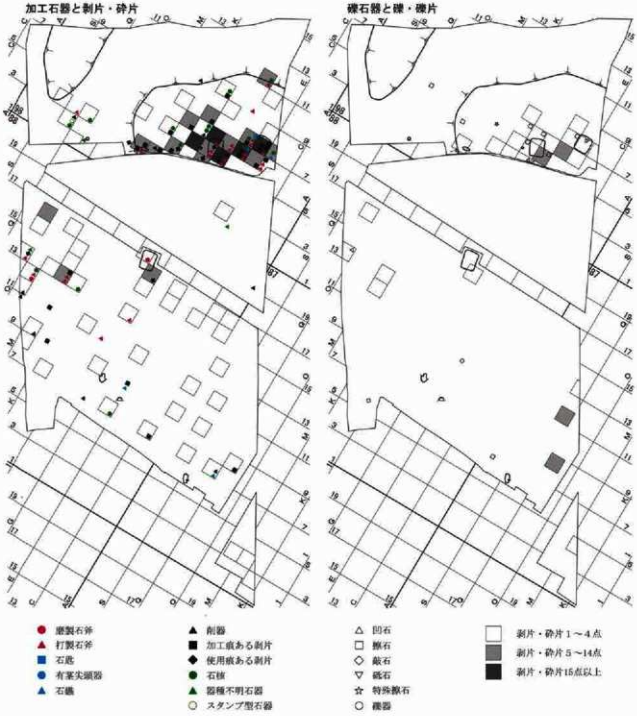
1区には北端に23号住居と南半部に陥穴15号・16号土坑と17号土坑が検出されている。石器は1区23号住居とほぼ同じ器種が、住居のあるグリッドおよび住居とは離れた西半部、特に88－Ｋ～Ｏ－9～13グリッドに集中して出土した。砕片・剥片は1区ほぼ全域に出土している。特に剥片の出土範囲は石器の分布より広く、1区東半分のグリッドに数片ずつ出土している。礫・礫片の分布には偏在があり、主として1区南東隅に出土している。(第41図)

1区グリッド出土の石器は31点である。23号住居のあるグリッド周辺からは磨製石斧1点(第43図・PL74－Ｓ183)、使用痕ある剥片(ＰＬ75－Ｓ209)1点が出土している。88－Ｋ～Ｏ－9～13グリッドでは磨製石斧1点(第43図・PL74－Ｓ184)、打製石斧4点(第44図・PL74－Ｓ187～Ｓ190)、削器3点(PL74・75－Ｓ193～Ｓ195)、加工痕ある剥片3点(第45図・PL75－Ｓ206・PL75－Ｓ207・Ｓ208)、使用痕ある剥片1点(PL75－Ｓ210)、石核2点(PL75－Ｓ198・Ｓ199)、器種不明石器1点(第46図・PL75－Ｓ200)が出土した。その他の東半のグリッドからは打製石斧(PL74－Ｓ185・第44図・PL74－Ｓ186)、削器(第45図・PL74－Ｓ191・Ｓ192)、石核(第46図・PL75－Ｓ197)、加工痕ある剥片(第45図・PL75－Ｓ203・Ｓ204・PL75－Ｓ205)、使用痕ある剥片(PL75－Ｓ209)、石鏃(第44図・PL74－Ｓ201・

S202)が各グリッドから単独で出土している。

１区で出土した石器を器種別にみると、剥離を伴う石器は８種27点出土しているが、凹石、擦石、敲石は１点ずつで少ない。この出土傾向は第９表に示した１区表採の石器にも同様にあらわれている。表採遺物は詳細な出土位置を記録できなかった遺物であるが、礫石器が少ない傾向は表採遺物の器種構成にも看取できる。しかし住居内にはある程度の数の礫石器が出土していることから、遺構内と遺構外に残存状況の差があることがわかる。

２区では遺構確認面の攪乱が著しく、縄文時代の遺構は検出できなかったうえに、遺物の残存もほと



第41図　グリッド出土の石器類の分布

んど無い状態であった。そのような状況で88－A－19グリッドで黒色頁岩製の削器が1点(PL76−S253)、表採で磨製石斧(第47図・PL76－S254)、砕片1点、剥片2点が出土している。1区と3区の遺構分布の状況から推しても2区に縄文時代前期の遺構が存在した可能性は高いであろう。

3区は南東部に台地縁辺が残り、北半と西半は北側の帯状低地に向かって傾斜している。この南東部台地上に1号住居、2号住居、2号土坑(陥穴)が、西部台地縁辺に1号土坑(円形)が検出されている。グリッド出土の石器類はその遺構周辺に集中して出土した。3区グリッドからは74点の石器が出土したが、特に3区1号住居と2号住居の間に集中域がある。また1号土坑西部の緩斜面部にも石器が出土した。砕片・剥片は石器とほぼ同様の分布状況を示すが、礫使用の石器は3区南東部の住居にごく近い位置に集中する傾向があった。(第41図)

3区のグリッドで出土した石器の器種は3区1号・2号住居から出土した石器とほとんど同じであった。しかし、出土比率からすると打製石斧、加工痕ある剥片、石核、擦石の出土数が多いのが特徴といえよう。

18点が出土した打製石斧(第47図・PL76－S256～S260、S262～S272)のうち14点が1号住居・2号住居周辺に偏在していた。16点が出土した加工痕ある剥片(第49図・PL77・78－S296～S311)は北半の低地部を除く3区のほぼ全域に散在していた。12点が出土した石核(第49・50図・PL78－S280～S291)は加工痕ある剥片と同様に北半の低地部を除く3区のほぼ全域に散在していた。3区2号住居の周辺にやや集中する傾向も見られる。7点が出土した擦石(第51図・PL79－S319～S325)は、北半の低地部を除く3区のほぼ全域に散在していた。その他の器種不明の石器(第48図・PL77－S255・S261)・削器(第49図・PL77－S273・S276～S279)・石匙(第48図・PL77－S292)・石鏃(第48図・PL77－S293)・使用痕ある剥片(第49図・PL78－S181・S312～S316)・凹石(PL79－S317・S318)・砥石(第51図・PL79－S326)は1～6点ずつで南東部台地上に散在していた。

これらに対して有茎尖頭器(第48図・PL77－S294)、スタンプ形石器(第50図・PL79－S295)、特殊擦石(第51図・PL79－S327)は3区の住居・土坑内からは出土がなく、グリッド、表採遺物すべてを含めても1点ずつしか出土していない。これらは形態的にも前期以外の石器と考えられる器種であり、出土状況が限られていることもその傍証となろう。1区グリッドで出土した三角錐形石器2点も同様に前期以外の石器と考えられる。

細分器種の分布　細分器種ごとの出土状況をみると、器種レベルと同様に細分レベルでも遺構出土のものと遺構外出土のものとがほとんど対応しており、遺構外の出土器種は遺構出土の器種に含まれている。

しかし、いくつかの器種では遺構外のみで出土しているものがある。今井遺上Ⅱ遺跡で出土した縄文土器の約90％が黒浜式土器もしくは諸磯a式土器であり、遺構の時期もその時期であることから、遺構外の石器も縄文時代前期に帰属するものと考えられる。しかし遺構外のみで出土している細分器種があることは、それが遺構に伴わない石器であるか、あるいは時期の異なる石器である可能性があることを示している。

第11表は石器器種の細分ごとに出土地点を示したものである。全体で29点出土した削器をみると、1区の住居では縦長の削器が出土していないが、2点の縦長の削器(2b・2f)が表採されている。また、幅広の削器(3)は1区・3区ともに遺構からは出土していない。また全体で65点出土した加工痕ある剥片は、ほとんどの細分器種が遺構内・遺構外ともに出土しているが、幅広(3)のものは3区遺構外からのみ出土している。使用痕ある剥片は30点が出土しているが、ほとんどの細分器種が遺構内から出土している。石核は23点が出土したが、遺構内外から出土している。特に3区にはグリッド・表採あわせて15点が出土しており、石器製作に伴う何らかの行動が住居周辺でおこなわれたのであろう。

第11表　細別器種の出土地点

剥器

	細　分	1区23号住居	1区16号土坑	3区1号住居	3区2号住居	3区2号土坑	3区3号土坑	1区グリッド	1区表採	2区グリッド	2区表採	3区グリッド	3区表採	合計
1 a	横長・剥片端部	1	1	1				3	2	1		1		10
1 b	横長・三角			2	1									3
1 c	横長・台形	1		2				1				1		5
2 a	縦長・剥片端部												1	1
2 b	縦長・三角			2					1				1	4
2 f	縦長・左右側面								1					1
3	幅広							1				3	1	5
	合　計	2	1	7	1	0	0	5	4	1	0	5	3	29

加工痕ある剥片

	細　分	1区23号住居	1区16号土坑	3区1号住居	3区2号住居	3区2号土坑	3区3号土坑	1区グリッド	1区表採	2区グリッド	2区表採	3区グリッド	3区表採	合計
1 a	横長・剥片端部	3		3				2	4			6	2	20
1 b	横長・三角								1			1	1	3
1 c	横長・台形	1							1					2
2 a	縦長・剥片端部	2		2	1			1						6
2 b	縦長・三角				1			1	2					4
2 c	縦長・台形	1		1					1					3
3 a	幅広・剥片端部	1										1		2
3 b	幅広・三角	1										2	1	4
4	不明	2		3	1		1	2	3			6	3	21
	合　計	11	0	9	3	0	1	6	12	0	0	16	7	65

使用痕ある剥片

	細　分	1区23号住居	1区16号土坑	3区1号住居	3区2号住居	3区2号土坑	3区3号土坑	1区グリッド	1区表採	2区グリッド	2区表採	3区グリッド	3区表採	合計
1 a	横長・剥片端部	5		3	2			1	1			4	2	18
1 b	横長・三角											1		1
2 a	縦長・剥片端部	1			1			1						3
2 b	縦長・三角	1		1								1		3
2 c	縦長・台形	1												1
3 a	幅広・剥片端部			2										2
3 b	幅広・三角	1												1
4	不明	1												1
	合　計	10	0	6	3	0	0	2	1	0	0	6	2	30

打製石斧

	細　分	1区23号住居	1区16号土坑	3区1号住居	3区2号住居	3区2号土坑	3区3号土坑	1区グリッド	1区表採	2区グリッド	2区表採	3区グリッド	3区表採	合計
1 a	短冊・小型			1										1
1 b	短冊・中型			2	1			1				1		5
1 c	短冊・大型	1		2				1	1			3	1	9
1 d	短冊・特大								2					2
1 e	短冊・不明				1			2	3			4		10
2 a	撥・小型	1		1				1				2		5
2 b	撥・中型	1							1			2	1	5
2 c	撥・大型	1		1	2			1	1			4	2	12
2 d	撥・特大											1		1
3	分銅								3					3
4	未製品											1		1
	合　計	4	0	7	4	0	0	6	11	0	0	18	4	54

石核

	細　分	1区23号住居	1区16号土坑	3区1号住居	3区2号住居	3区2号土坑	3区3号土坑	1区グリッド	1区表採	2区グリッド	2区表採	3区グリッド	3区表採	合計
1	剥片	1		1				1	3			4	2	12
2	分割礫							1				5	1	7
3	原礫							1				3		4
	合　計	1	0	1	0	0	0	3	3	0	0	12	3	23

凹石

	細　分	1区23号住居	1区16号土坑	3区1号住居	3区2号住居	3区2号土坑	3区3号土坑	1区グリッド	1区表　採	2区グリッド	2区表　採	3区グリッド	3区表　採	合計
1 a	大型・集合打痕	1		1	2									4
1 c	大型・集合打痕＋ロート	2												2
2 a	中型・集合打痕	3											1	4
2 c	中型・集合打痕＋ロート	1			1				1					3
3 a	小型・集合打痕											2		2
3 c	小型・集合打痕＋ロート			1										1
4 a	不明・集合打痕	3												3
4 b	不明・ロート							1						1
	合　計	10	0	2	3	0	0	1	1	0	0	2	1	20

磨石

	細　分	1区23号住居	1区16号土坑	3区1号住居	3区2号住居	3区2号土坑	3区3号土坑	1区グリッド	1区表　採	2区グリッド	2区表　採	3区グリッド	3区表　採	合計
1 a	大型・片面	2										1		3
1 b	大型・両面							1						1
2 a	中型・集合打痕											1		1
2 b	中型・両面	1			1									2
3 a	小型・片面	1										1		2
3 b	小型・両面											1		1
4 a	不明・片面	1			1									2
4 b	不明・両面			1	1							3		5
	合　計	5	0	1	3	0	0	1	0	0	0	7	0	17

一方、54点が出土した打製石斧は遺構内外からまとまった数が出土している。打製石斧にも細分レベルの偏在がみられ、短冊形・特大（1 d）や撥形・特大（2 d）、分銅形（3）は遺構内ではなく、グリッド出土や表採資料に出土地点が偏っている。特に大きな石斧は使用方法や使用後の管理にその他の石斧と異なった扱い方があった可能性はある。しかし、特大の石斧や分銅型が遺構内出土に皆無であることは時期的な違いがあることを示唆しているのだろう。

前述のように本遺跡では出土したほとんどの石器が縄文時代前期黒浜・諸磯ａ式期のものと考えられる。数が限られている出土状況からにわかに結論をだすことはできないが、遺構内と遺構外の出土器種が対応している器種と対比すれば、遺構外にしか出土しない細分器種の石器が異なる時期のものである可能性は高いと考えられる。

石器の石材と器種　今回の整理作業では、すべての石器類の石材同定をおこなった。その結果をもとに作成したのが第12表器種別・石材別一覧表である。最も多く出土したのは黒色頁岩である。全石器類1507点のうち1080点を黒色頁岩が占める。器種ごとにみると、打製石斧は54点中43点、石匙は４点中３点、削器は29点中28点、加工痕ある剥片65点中55点、使用痕ある剥片30点中28点、器種不明の石器５点中４点、三角錐形石器２点中２点が黒色頁岩であった。加工石器・石核石器の多くが黒色頁岩製であることになる。石核も23点中22点が黒色頁岩で、黒色頁岩を使用した石器製作が遺跡内でおこなわれていたことを示している。これらの作業の結果廃棄されたと考えられる黒色頁岩の剥片・砕片は1029点中873点で、全体の85％を占めている。

このような中で、石鏃と磨製石斧には黒色頁岩以外の石材が使われていた。石鏃は７点中２点と黒色頁岩は少ない。その他の５点はチャート１点、黒曜石２点、黒色安山岩２点であり、この時期に一般的に石鏃製作に用いられた石材でつくられていた。また、磨製石斧は12点中10点が変玄武岩製であり、他の２点は砂岩１点・黒色頁岩１点であった。変玄武岩製の磨製石斧は全面が磨かれ、一端が細くなるいわゆる乳棒形に限られ、石材の強い選択性がうかがわれる。

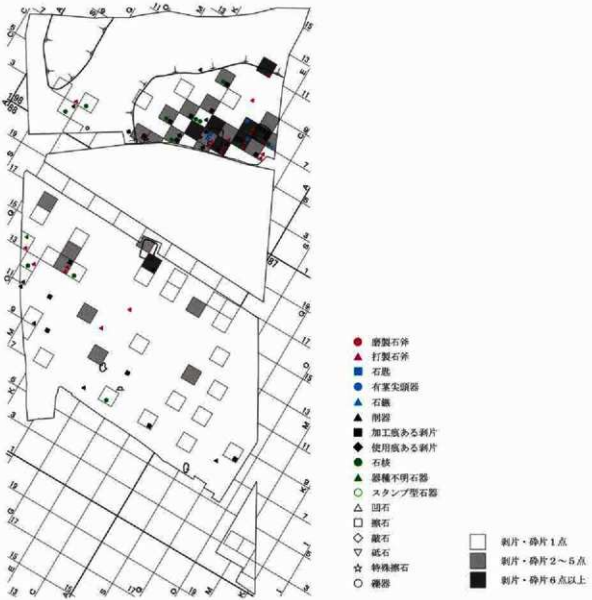
また、打製石斧の石材は54点中43点が黒色頁岩であった。他の10点の石材は磨製石斧にも使われていた変玄武岩２点、変質玄武岩１点、砂岩１点と、他

に珪質頁岩２点、細粒輝石安山岩３点、緑色片岩１点、点紋頁岩１点であった。打製石斧にも黒色頁岩を多用する傾向が見られる。黒色頁岩以外の石材と打製石斧の細分器種石材との相関関係は見受けられない。

一方礫石器には粗粒輝石安山岩が最も多く使われていた。全石器類1507点のうちでは粗粒輝石安山岩は170点にとどまるが、器種別にみると凹石20点中19点、擦石17点中13点、石皿６点中４点、敲石５点中２点、台石３点中３点という高率で粗粒輝石安山岩が使われていた。

以上のような限られた結果から、石器製作や使用・廃棄の状況をすぐに解釈することは困難であるが、今井道上Ⅱ遺跡で最も集中して出土した黒色頁岩の石核と砕片・剥片、および黒色頁岩製の石器の分布を示したのが第42図である。

黒色頁岩製の石核は22点中16点が３区から出土しており、明らかに３区への偏在傾向が認められる。剥片類はグリッド・表採遺物をあわせて３区で348点が出土している。分布は３区１号・２号住居周辺に集



第42図　黒色頁岩の石核と剥片・砕片

中しているが、台地縁辺や西側斜面にも黒色頁岩の石器剥片類の出土地点が散在している。３区南東部の黒色頁岩製石核の集中区で出土した加工石器の細分器種レベルの出土状況には強い偏在は認められなかった。もし仮に本遺跡内で製作された黒色頁岩製石器があるとすれば、分布傾向からは器種の特定は困難であるといわざるを得ない。また、前述のように黒色頁岩片数1080点のうち石器が193点と17.8％を占めるという状況は、すべてが遺跡内で製作された石器ではないことを示唆している。

石器の製作構造　石鏃・石匙・磨製石斧は石材面から搬入石器であることが確実であった。また、三角錐形石器も長さ９㎝ほどで、手に持って使う限界に近いサイズであり、使用限界に達した廃棄石器であると判断した。赤城山麓では、三角錐形石器の遺跡内製作例は確認されていないことから、これも搬入石器のひとつとして理解すべきだろう。

打製石斧については大部分が礫面を大きく残しており、河床礫の礫面を剥片に取り込み剥離した大形剥片を石器素材としていることは明らかであった。３区１号住居からは黒色頁岩の打製石斧調整剥片３点が出土しており、特に３区の１号住居周辺での打製石斧製作あるいは再生が確実である。包含層出土の剥片類の中にも石斧調整剥片としてとらえるべき剥片が含まれているようであるが、いざ剥片類とそれとを厳密に区別するのは困難であった。旧石器整理では、通常この困難性を接合作業や母岩分類を行い解決していくのであるが、このような剥片類の詳細な分析を行うには資料数が少なく充分な分析が期待できなかったため、今回は調整剥片類の抽出を見送った。

視点を変えて、打製石斧と石核の数量的関係と石材別に見た剥片類から石斧製作の在り方を考えてみると、打製石斧と石核の数量比は遺構外で2.3：1、遺構内で5.5：1であり、両者には明らかな差があった。廃絶住居に石斧を意識的に廃棄したというような状況はなかったが、礫石器の破損品も多く出土しており、そこには住居廃絶に伴う儀礼的要素が感じ取れた。石核は半数(23点中12点)が剥片素材の石核であり、残り半数が河床礫（４点）や分割礫（７点）を石核としたものであった。住居出土の石核２点は剥片を石核素材とした小形剥片専用の石核と見られ、サイズ的に石斧の製作は不可能であった。半数を占めた剥片系石核が石斧素材を提供した残核であり、礫素材の石核が将来の石斧製作に備えるものであったとすれば、それらから長さ10㎝を越える石斧素材を量産するのは難しく、実態は小形剥片の剥離が主体であったようである。

同様に、対石材関係で見ても、石斧には黒色頁岩以外に、変玄武岩・砂岩・変質玄武岩・珪質頁岩・細粒輝石安山岩・点紋頁岩等の石材を用いていることが分かっているが、剥片類の同種石材は５点・14点・11点・12点・52点・６点と出土が少なく、細粒輝石安山岩の52点を除いて打製石斧の遺跡内製作を主張するのは難しかった。相当量が搬入品か、素材剥片を他所から持ち込む石斧製作を想定するしかないだろう。

出土した黒色頁岩の石核類については便宜的使用に耐える削器等の素材提供を主として、狩猟具や石斧類の欠乏を補う程度に、それらの素材剥片を提供するものとして石核類が機能していたというのが、今井道上Ⅱ遺跡から出土した石器類を観察して得られた石器類の製作・再生・廃棄についての現時点での結論である。

縄文時代の遺跡における包含層出土石器類は、複数の細別型式の土器が混在して出土する資料が多い。このような資料では、形態的に時期を限定できる器種を除けば、石器類の時期を特定することは困難である。このような意味で今井道上Ⅱ遺跡の石器類は、縄文時代前期諸磯ａ式・黒浜式期にほぼ限定できる資料として注目された。ある一時期に限定した石器組成や使用石材の実態を分析できる資料として重要と考えたのである。整理作業では、全資料の器種分類・石材同定を経て計数した。未分析の内容も残されているが、基本的なデータと全体像の概要は提示したと考えている。

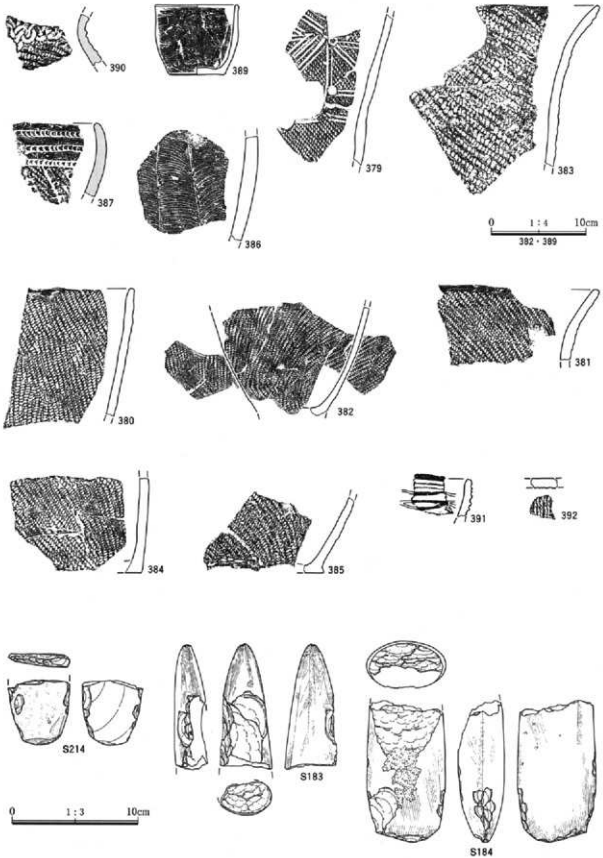
第12表　縄文時代石器類器種別石材別点数一覧表

器種	出土遺構名	点数	小計	変玄武岩	変質玄武岩	砂岩	黒色頁岩	珪質頁岩	安山岩	細粒輝岩石	緑色片岩	頁岩	砂質頁岩	点紋頁岩	チャート	黒曜石	石英	黒色安山岩
磨製石斧	１区23号住居	2		2														
磨製石斧	１区グリッド	2		2														
磨製石斧	１区表採	1					1											
磨製石斧	２区表採	1		1														
磨製石斧	３区１号住居	4		3		1												
磨製石斧	３区表採	2	12	2														
打製石斧	１区23号住居	4					3	1										
打製石斧	１区グリッド	6					6											
打製石斧	１区表採	11		1			10											
打製石斧	３区１号住居	7			1		3	1	2									
打製石斧	３区２号住居	4					4											
打製石斧	３区グリッド	18		1		1	15		1									
打製石斧	３区表採	4	54				2				1			1				
有茎尖頭器	３区グリッド	1	1				1											
石鏃	１区グリッド	2													1	1		
石鏃	１区表採	2					1									1		
石鏃	３区グリッド	1					1											
石鏃	３区表採	2	7															2
石匙	１区23号住居	1												1				
石匙	３区２号住居	1					1											
石匙	３区グリッド	1					1											
石匙	３区表採	1	4				1											
ピエスエスキーユ	１区23号住居	2						1							1			
ピエスエスキーユ	１区表採	1	3				1											
削器	１区23号住居	2					2											
削器	１区16号土坑	1					1											
削器	１区グリッド	5					5											
削器	１区表採	4					4											
削器	２区グリッド	1					1											
削器	３区１号住居	7					7											
削器	３区２号住居	1					1											
削器	３区グリッド	5				1	4											
削器	３区表採	3	29				3											
加工痕ある剥片	１区23号住居	11					8	1										
加工痕ある剥片	１区グリッド	6					6											
加工痕ある剥片	１区表採	12					12											
加工痕ある剥片	３区１号住居	9					9											
加工痕ある剥片	３区２号住居	3					2		1									
加工痕ある剥片	３区３号土坑	1					1											
加工痕ある剥片	３区グリッド	16			1		12		3									
加工痕ある剥片	３区表採	7	65				6	1										
使用痕ある剥片	１区23号住居	10					9		1									
使用痕ある剥片	１区グリッド	2					1	1										
使用痕ある剥片	１区表採	1					1											
使用痕ある剥片	３区１号住居	6					6											
使用痕ある剥片	３区２号住居	3					3											
使用痕ある剥片	３区グリッド	6					6											
使用痕ある剥片	３区表採	2	30				2											
器種不明の石器	１区23号住居	1					1											
器種不明の石器	１区グリッド	1					1											
器種不明の石器	３区１号住居	1					1											
器種不明の石器	３区グリッド	2	5				1											
三角錐形石器	１区表採	2	2				2											
スタンプ形石器	３区グリッド	1	1															
石核	１区23号住居	1							1									
石核	１区グリッド	3					3											
石核	１区表採	3					3											
石核	３区２号住居	1					1											
石核	３区グリッド	12					12											
石核	３区表採	3	23				3											

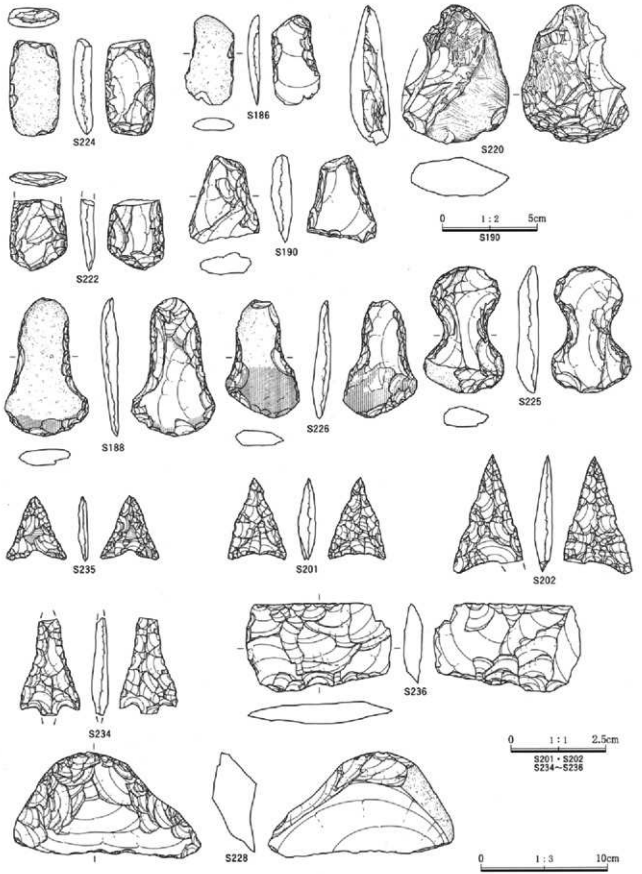
輝緑岩	ホルンフェルス	変質安山岩	文象斑岩	ひん岩	粗粒輝石安山岩	デイサイト	かこう岩	軽石	黒色片岩	雲母石英片岩	牛伏砂岩	石英閃緑岩	閃緑岩	流紋岩	デイサイト凝灰岩	溶結凝灰岩	輝緑凝灰岩	黄白色細粒凝灰岩	鶴嶋チャート	粘板岩	滑石	珪質変質岩
1	1																					
			1																			
		1																				

器種	出土遺構名	点数	小計	変玄武岩	変質玄武岩	砂岩	黒色頁岩	珪質頁岩	安山岩	細粒輝石岩	緑色片岩	頁岩	砂質頁岩	点紋頁岩	チャート	黒曜石	石英	黒色安山岩
砕片	1区23号住居	110			1	3	86		11						1			
砕片	1区グリッド	33					28		3	1						1		
砕片	1区表採	44				1	42											
砕片	2区表採	1					1											
砕片	3区1号住居	135		1	2	1	111	3	11					5	1			
砕片	3区2号住居	27					26		1									
砕片	3区3号土坑	11					9								2			
砕片	3区グリッド	118		2	1	2	108								2			2
砕片	3区表採	73	552	1	1	1	63		4			2				1		
剥片	1区23号住居	76				2	55	4	8					1	1		1	1
剥片	1区グリッド	50				1	41	1	3									2
剥片	1区表採	38					32	1	1									4
剥片	2区表採	2					2											
剥片	3区1号住居	77		1	1		63		2				1					
剥片	3区2号住居	25			1		24											
剥片	3区2号土坑	2					2											
剥片	3区3号土坑	11					10		1									
剥片	3区グリッド	149			3	2	127	3	8			1			1		1	1
剥片	3区表採	47	477		1	1	43											1
凹石	1区23号住居	10																
凹石	1区グリッド	1																
凹石	1区表採	1																
凹石	3区1号住居	2																
凹石	3区2号住居	3																
凹石	3区グリッド	2																
凹石	3区表採	1	20															
擦石	1区23号住居	5							1									
擦石	1区グリッド	1																
擦石	3区1号住居	1																
擦石	3区2号住居	3																
擦石	3区グリッド	7	17															
石皿	1区23号住居	4																
石皿	3区1号住居	1									1							
石皿	3区表採	1	6															
敲石	1区23号住居	1																
敲石	1区グリッド	1																
敲石	3区1号住居	2			1													
敲石	3区表採	1	5															
砥石	3区1号住居	1																
砥石	3区2号住居	1																
砥石	3区グリッド	1	3				1											
特殊擦石	3区グリッド	1	1															
台石	1区23号住居	3	3															
多孔石	1区23号住居	1	1															
軽石製品	1区23号住居	2	2															
礫器	1区グリッド	1	1				1											
不明	1区表採	1	1												1			
礫片	1区23号住居	20		1							2							
礫片	1区グリッド	18						2							1			
礫片	1区表採	22					1	1							2			
礫片	3区1号住居	14					2											
礫片	3区2号住居	10																
礫片	3区3号土坑	4																
礫片	3区グリッド	30			2		6											
礫片	3区表採	5	123												1			
礫	1区23号住居	10					1											
礫	1区グリッド	4					1								2			
礫	1区表採	21						1	1									
礫	3区1号住居	8																
礫	3区2号住居	4					2											
礫	3区グリッド	7					1											
礫	3区表採	5	59	1														
		1507		19	16	17	1080	22	64	5	3	1	7	18	4	2	13

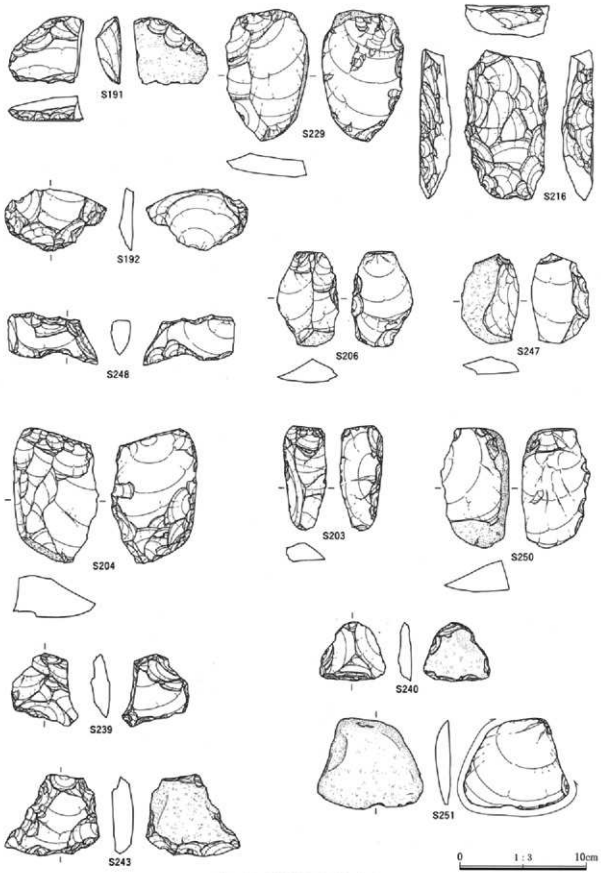
輝緑岩	ホルンフェルス	変質安山岩	文象斑岩	ひん岩	粗粒輝石安山岩	デイサイト	かこう岩	軽石	黒色片岩	雲母片岩	英岩	牛伏砂岩	石英閃緑岩	閃緑岩	流紋岩	デイサイト凝灰岩	溶結凝灰岩	輝緑凝灰岩	黄白色細粒凝灰岩	結晶性チャート	粘板岩	滑石	珪質変質岩
		1			7																		
															1								
		1																					
	1				2																		
					2																		
	1				8																		
	1				1																		
	1																						
				1	9																		
					1																		
					1																		
					2																		
					3																		
					2																		
					1																		
					4																		
					1																		
					1																		
					3																		
					4		1						1	1									
					3				1														
					1																		
					1																		
							1																
				1																			
					1																		
					1																		
												1											
			1																				
					3																		
					1																		
								2															
1					12				1	1	1	1											
		1			10													1		3			
					12				1					2			1				1	1	
		1			11																		
				3	7																		
					2											2							
				2	14								1			5							
					2										1								1
					7										1		1						
				1																			
	1				14					1					1	1			1				
		1			6											1							
					2																		
					6																		
		1			2				1														
2	6	7	2	8	170	1	1	2	4	2	2	3	3	4	9	2	1	1	3	1	1	1	



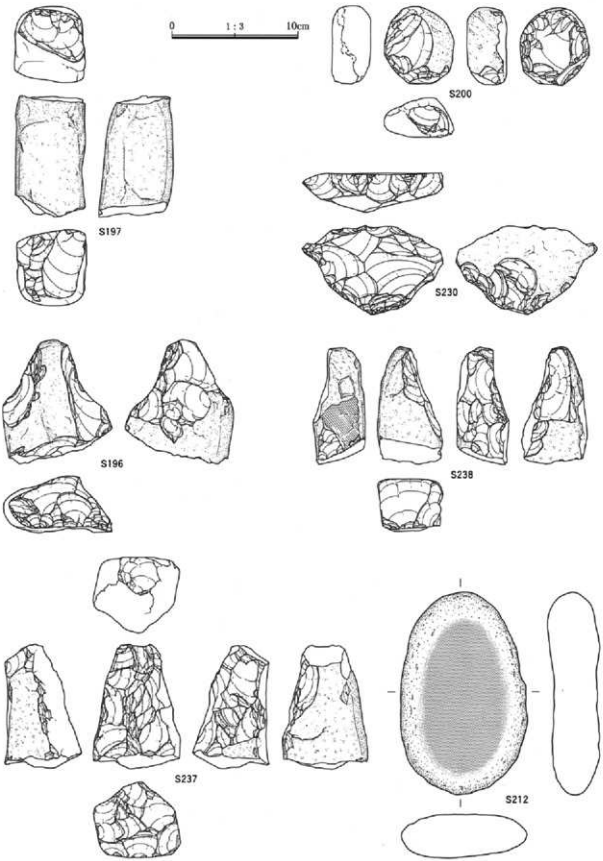
第43図　遺構外出土遺物（１）



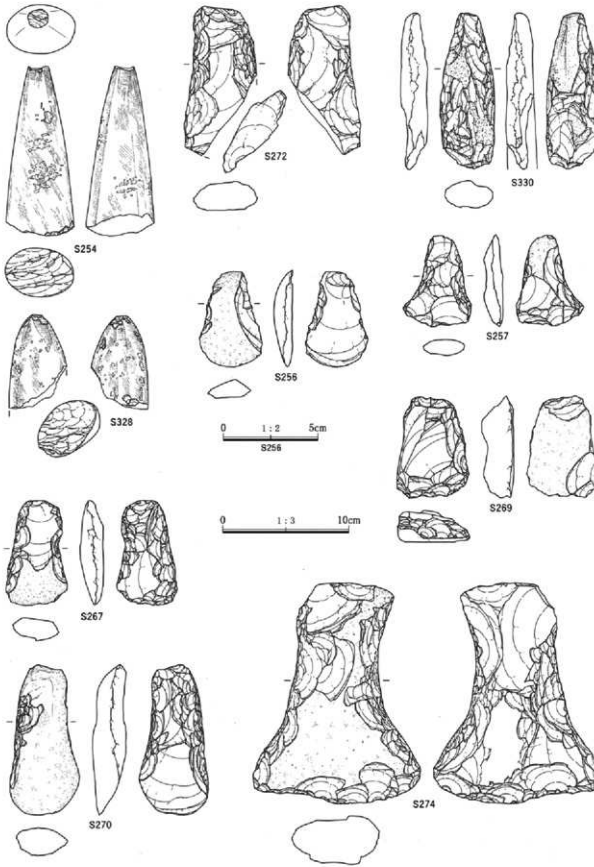
第44図　遺構外出土遺物（2）



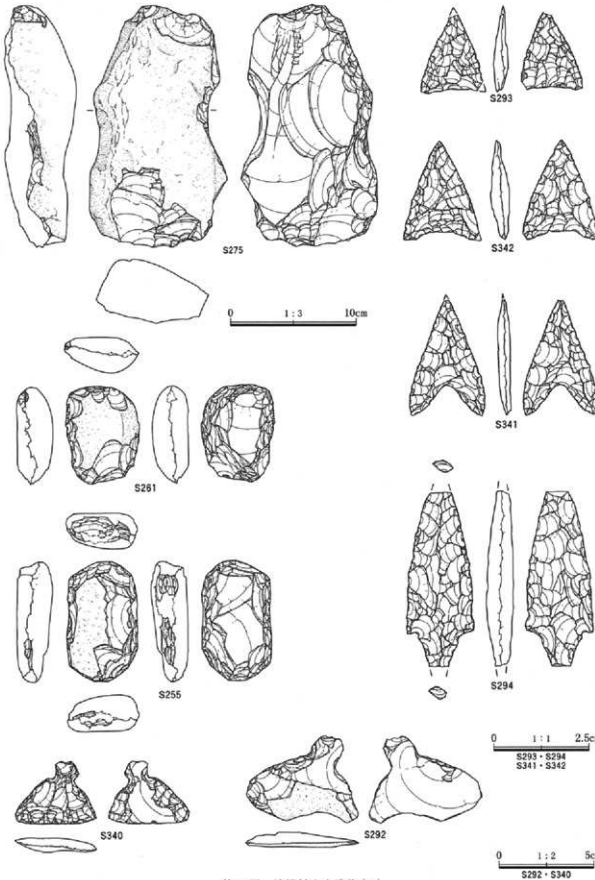
第45図　遺構外出土遺物（３）



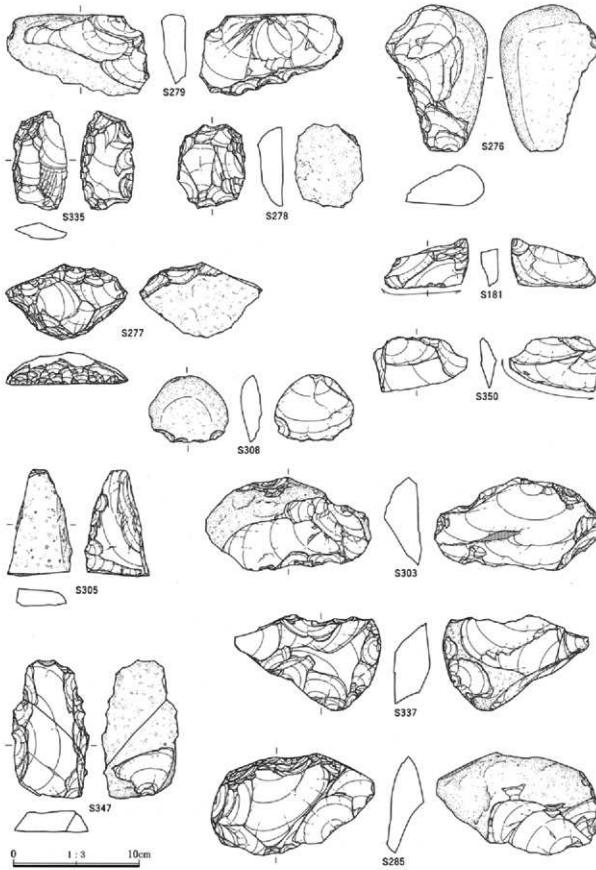
第46図　遺構外出土遺物（4）



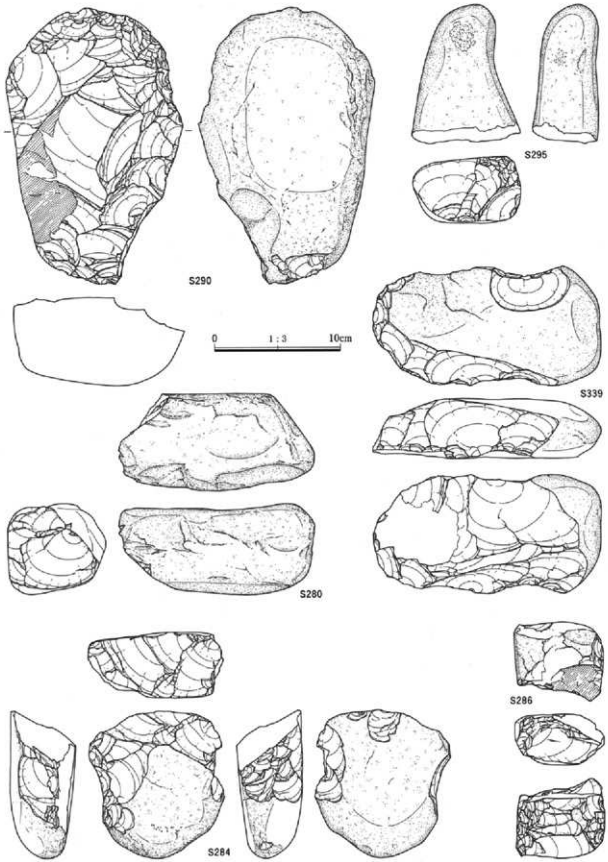
第47図　遺構外出土遺物（５）



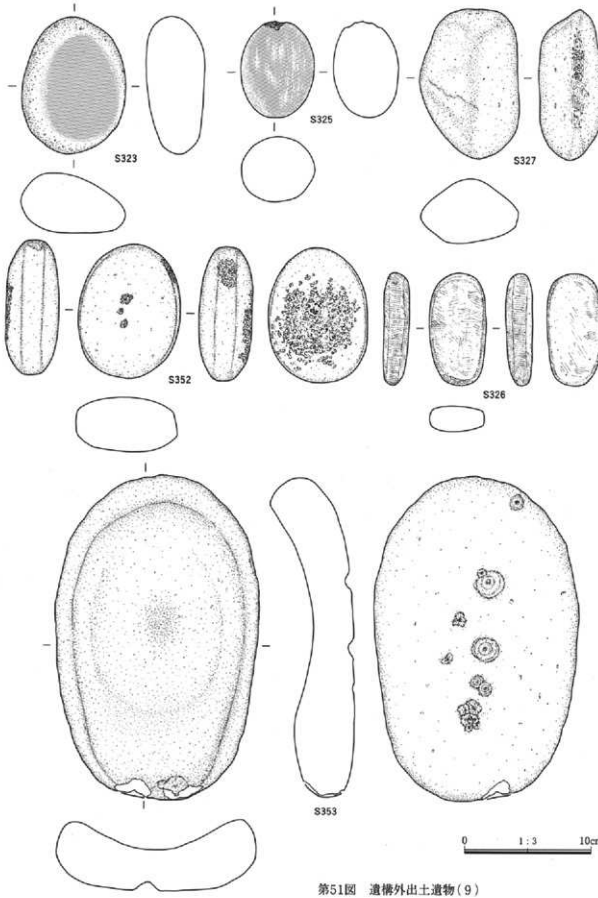
第48図　遺構外出土遺物（6）



第49図　遺構外出土遺物（7）



第50図　遺構外出土遺物（8）



第51図　遺構外出土遺物(9)

2．古墳時代以降の遺構・遺物

(1) 概要

古墳時代以降の遺構は、竪穴住居・掘立柱建物・井戸・溝・土坑・ピット・道跡が検出された。

竪穴住居は、1区で24軒、2区で1軒を調査した。概ね古墳時代後期～奈良時代初頭の時期のものである。このうち炉が施設されていたのは1区7号住居1軒のみで、他の24軒は竈が施設されていた。

竪穴住居の分布は、1区では南部に偏在する傾向があり、北部には空白部がある。2区では1軒のみ、3区では当該時期の遺構が分布していなかった。これは2区が調査前に宅地であったために遺構の残存状態が著しく悪かったことを考慮しても、竪穴住居の分布が北にいくにつれて希薄になっていることを示している。(第52図)

3区の北側には現今井沼のある帯状の開析谷が南西から北東方向に伸びている。この開析谷は、同じ上武道路に伴って荒砥北三木堂Ⅱ遺跡の1区として発掘調査が実施され、降下テフラ層の直下から、古墳時代前期・後期・平安時代の水田面を確認している。開析谷の北側台地にある荒砥北三木堂Ⅱ遺跡2区も古墳時代後期を中心とした集落であることからどちらの集落のものとは特定はできないものの、この開析谷が今井道上Ⅱ遺跡や周辺遺跡の古墳時代後期集落の生産域になっていたと考えられる。

1区北半から2区・3区は、南半の居住域北縁部にあたり居住以外の土地利用が想定されるが、今回の調査ではその痕跡を検出することはできなかった。1区の南側には、国道50号の拡幅工事に伴って、昭和62・63年と平成3年に発掘調査が行われた今井道上遺跡7区・9区が隣接している。その遺構分布を合わせてみると、遺跡の中心は隣接部以南にあることがわかる。今回の調査では今井道上遺跡全体の集落北限の一部が確認できたことになろう。

また今井道上遺跡では8世紀後半から9世紀中葉と考えられている方形区画の溝と、その内部に建てられていたと推定される掘立柱建物が検出されている。今井道上Ⅱ遺跡1区では同時期と確定できる遺構は見つかっていないが、時期不明の1・3号掘立柱建物やその周辺の土坑群は今井道上遺跡の遺構群の連続と考えられる。

なお、今井道上遺跡で調査報告されている竪穴住居のうち全掘できなかった3軒の竪穴住居の未調査部分を今回調査することができた。調査の都合上、下記のような異なる遺構番号が付いている。

今井道上遺跡	今井道上Ⅱ遺跡1区
18号住居	5号住居
20号住居	2号住居
25号住居	1号住居

今回の遺物整理作業にあたっては、既整理の遺物と接合作業を行なった。数例の接合ができたが、前報告書掲載の情報に変更が必要と認められた遺物はなかった。遺物実測図は今回の調査部分出土の遺物実測図に加え、前報告書掲載の出土遺物実測図を参考資料として併載した。また竪穴住居平面図は前回の平面図と合成した形で掲載した。

掘立柱建物は1区で3棟が検出された。南東隅で検出された1号・3号掘立柱建物は近接した位置で建て替えられたものと推定される。南に隣接する今井道上遺跡1号・2号掘立柱建物と柱筋の方向が近似しており、何らかの関連のある建物群と考えられる。しかし調査では掘立柱建物の明確な時期を確定することができなかった。5号住居と重複するが、新旧関係は確認できていない。2号掘立柱建物は北側に離れた位置に検出された。これも時期は不明である。

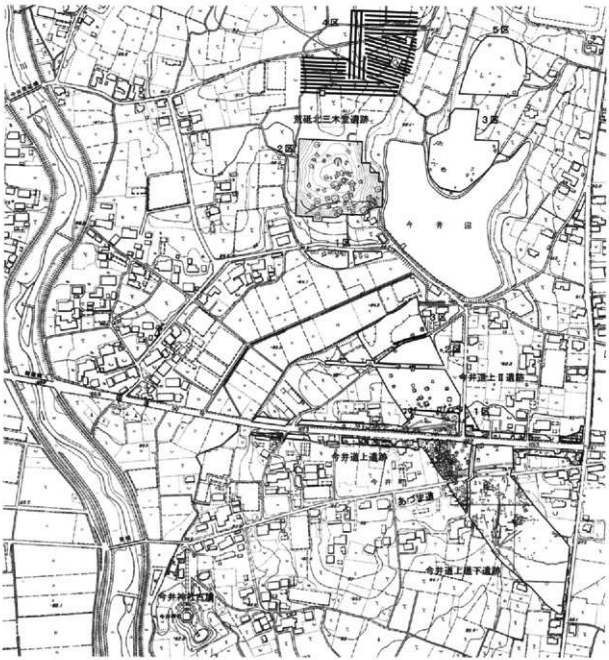
井戸は3号住居の竈前に重複して検出された1基のみである。3号住居より後出する。18世紀前半～中葉とみられる瀬戸美濃系の陶器碗が出土している。

溝は1区で1条、3区で5条検出されている。1区の1号溝は竪穴住居と同様に、今井道上遺跡45号溝の延長線上でみつかったので、同一遺構と考えられる。3区ではローム層上面での遺構確認作業で5条の平行する溝群を検出した。これらはローム塊を多量に含む黒褐色土で一様に埋まっており、出土遺

物には現代のものも含むことから、近年の耕作痕跡と判断し、土層の記録と全景写真を撮影するにとどめた。

土坑・ピットは１区でそれぞれ14基、25基が検出されている。いずれも時期は確定できなかった。その中で２号土坑は隅丸方形で硬化面をもち、土師器破片を出土している。また35号ピットは埋没土上面で土師器甕形土器の大形破片を出土しており、時期を示唆する資料が得られている。

また３区と２区の境とした現道のほぼ下層で硬化面をもつ道跡が検出された。1108年降下とされる浅間Ｂテフラに覆われた面と、その下層の浅間Ｂテフラより古い硬化面も残っていた。遺跡周辺は古代東山道の通過地域であり、中世以降の「あづま道」も残っている。本遺跡南東500mの今井道上道下遺跡でも浅間Ｂテフラを介在する道跡が検出されており、これらの道跡は古代から中世にいたる時期の遺構として重要である。



第52図　発掘された遺構群と周辺の地形

（2）竪穴住居

1区1号住居（＝50号拡幅今井道上遺跡25号住居）

（第53・54図　PL13・80　遺物観察表P.211・224）

位置　88－H・I－3・4G

形状　正方形と推定される。南側半分が50号拡幅今井道上遺跡25号住居として調査されている。今回の調査では北半分の東隅周辺を調査することができた。北西部は調査区域外である。

規模　長軸7.86m　短軸7.72m　残存壁高0.50m

面積　測定不能　　**長軸方位**　N－72°－E

竈　50号拡幅今井道上遺跡の調査において住居東壁中央よりやや南寄りで竈が調査されている。確認長0.88m、燃焼部幅0.68m。袖の残存長は向かって右側が0.74m、左が0.70m。屋外に0.20m突出して煙道部が残っていた。焚き口部で土師器坏（50号拡幅『今井道上遺跡』P.94－12）が出土している。

柱穴　主柱穴と思われるP1を北東隅で検出した。50号拡幅今井道上遺跡の調査においても主柱穴2本を掘り方面で検出している。P1の規模（長軸×短軸×深さ）は、0.35×0.29×0.74mで楕円形である。

周溝　周溝はほぼ全周する。概ね幅は0.15m、深さは0.05mである。

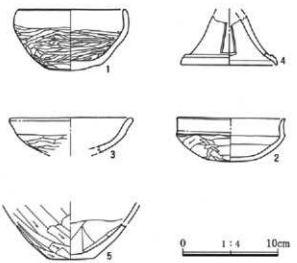
貯蔵穴　50号拡幅今井道上遺跡の調査において住居南東隅に長軸1.20m、短軸1.16m、深さ0.85mの円形の貯蔵穴が検出されている。

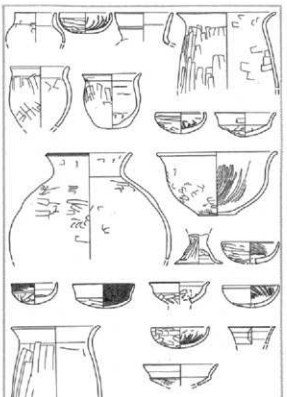
床面　床面は平坦である。南半部に認められた硬化面は北半部までおよんでいなかった。

掘り方　底面全体に凹凸があり、厚さ0.05～0.20mの掘り方充填土が検出された。特にP1周辺は不定形に落ち込んでいた。

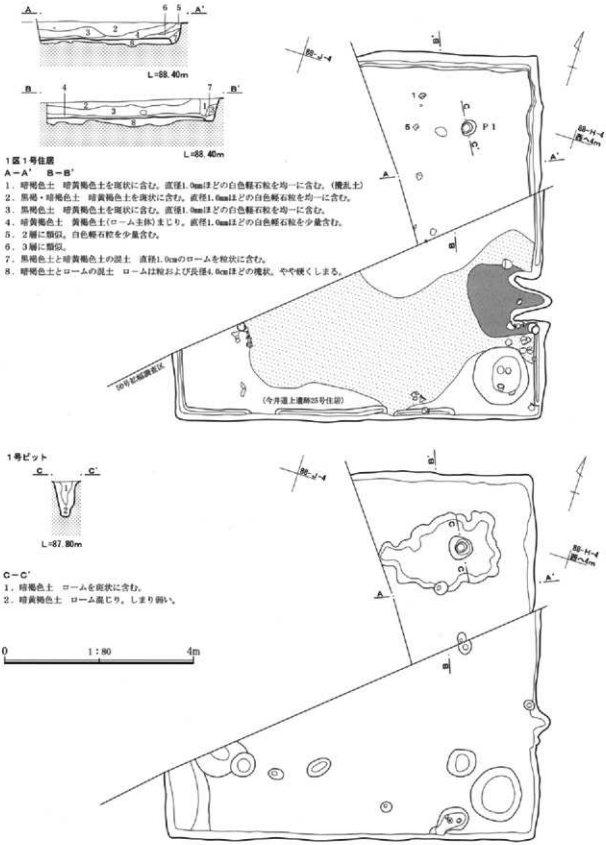
遺物と出土状況　50号拡幅今井道上遺跡25号住居出土遺物との接合作業をおこなったが、埋没土出土遺物どおしの接合が2例あったのみであった。今回の調査では住居北東部主柱穴P1の西側に土師器椀(1)、甕(5)が床面からそれぞれ8㎝、12㎝浮いた状態で出土した。また、須恵器高坏脚部(4)は埋没土中から出土した。その他図示した遺物のほかに土師器破片134点、須恵器破片1点が、円礫1点、剥片1点が出土した。

所見　出土遺物から今井道上Ⅱ遺跡1期の住居と考えられる。





第53図　1区1号住居出土遺物


A
A'
6
5
2
3
4
8
L=88.40m
B
B'
4
7
2
3
8
L=88.40m
1区１号住居
A－A'　B－B'
1．暗褐色土　暗黄褐色土を斑状に含む。直径1.0cmほどの白色軽石粒を均一に含む。（攪乱土）
2．黒褐・暗褐色土　暗黄褐色土を斑状に含む。直径1.0cmほどの白色軽石粒を均一に含む。
3．黒褐色土　暗黄褐色土を斑状に含む。直径1.0cmほどの白色軽石粒を均一に含む。
4．暗黄褐色土　黄褐色土(ローム主体)まじり。直径1.0cmほどの白色軽石粒を少量含む。
5．２層に類似。白色軽石粒を少量含む。
6．３層に類似。
7．黒褐色土と暗黄褐色土の混土　直径1.0cmのロームを粒状に含む。
8．暗褐色土とロームの混土　ロームは粒および長径4.0cmほどの攪拌。やや硬くしまる。
B8-J-4
B8-H-4
B8-H-4
1
5
P1
A
A'
B
B
B8-J-4
B8-H-4
B8-H-4
A
A'
B
B
1号ピット
C
C'
L=87.80m
C－C'
1．暗褐色土　ロームを斑状に含む。
2．暗黄褐色土　ローム混じり。しまり弱い。
0
1：80
4m

第54図　１区１号住居

1区2号住居（＝50号拡幅今井道上遺跡20号住居）

（第55～57図　PL14・80　遺物観察表P.211・212・224）

位置　88－H・I－5・6G

形状　台形。南東隅が50号拡幅今井道上遺跡20号住居として調査されている。今回の調査では隣接部の一部を除いて未調査部をすべて調査することができた。

規模　長軸5.92m　短軸5.70m　残存壁高1.00m

面積　測定不能　　**西壁方位**　N－28°－W

竈　50号拡幅今井道上遺跡20号住居において住居東壁中央よりやや南寄りで竈が調査されている。確認長1.06m、燃焼部幅0.49m。袖の残存長は向かって右側が0.79m、左が0.78m。屋外に0.25m突出して煙道部が残っていた。

柱穴　主柱穴と思われるピット3本（P1・P3・P4）を検出した。それぞれの規模（長軸×短軸×深さ）は、P1が0.56×0.47×0.97m、P2は掘り方の計測で0.80×0.65×0.38m、P3は0.50×0.41×0.59m、P4は0.42×0.40×0.67mである。50号拡幅今井道上遺跡20号住居の掘り方面調査でも主柱穴（P2）を検出している。また、南壁ほぼ中央の壁沿いに、周溝と連続する楕円形のP5が検出されている。P5の全体形状は楕円形で、長軸0.50m、短軸0.34m以上、深さは0.25m前後の二カ所の小さなピット状になっていた。そのほかに掘り方面でP6～P10の5本のピットを検出している。

周溝　周溝はほぼ全周する。幅は概ね0.13～0.28m、深さは0.01～0.09mである。主柱穴P4の西壁際には長軸0.68m、短軸0.38m、深さ0.11mの隅丸長方形に周溝が拡大した部分があり、自然礫3点が出土している。

貯蔵穴　貯蔵穴は検出されなかった。

床面　床面はほぼ平坦である。

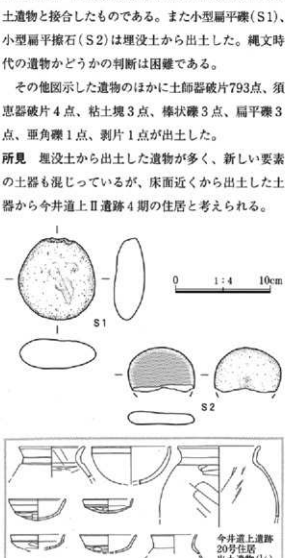
埋没土　白色軽石や炭化物粒・焼土粒を含む褐色土で埋まっていた。

掘り方　柱穴を結ぶ線上が幅0.80m、深さ0.10～0.20mの帯状に掘り込まれ、その中央部は直径1.80m、深さ0.30mほどの円形の床下土坑が検出された。

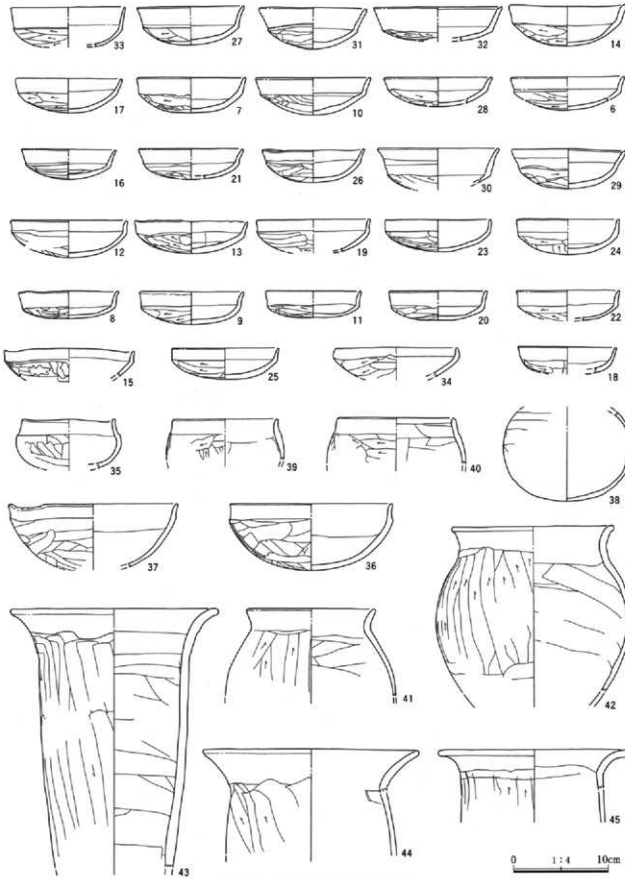
遺物と出土状況　50号拡幅今井道上遺跡20号住居出土遺物との接合作業をおこなったが、埋没土出土遺物どおしの接合が9例あった。今回の調査部分では土器40点、石器2点を図示することができた。このうち土器35点、石器2点は埋没土中の出土である。住居南西部主柱穴P3の北側で土師器坏(32)が床面から13cm浮いた状態で出土している。坏(14)はP3西壁際床面直上で出土している。坏(18・29)は南部壁際で床面に近い状態で出土した。また坏(16)はP4西の周溝内底面直上で出土した。本住居からは30点以上の土師器坏が出土しているが、上記以外は埋没土中から出土した。甕類は埋没土出土である。土師器甕(42・44)は50号拡幅今井道上遺跡20号住居出土遺物と接合したものである。また小型扁平礫(S1)、小型扁平擦石(S2)は埋没土から出土した。縄文時代の遺物かどうかの判断は困難である。

その他図示した遺物のほかに土師器破片793点、須恵器破片4点、粘土塊3点、棒状礫3点、扁平礫3点、亜角礫1点、剥片1点が出土した。

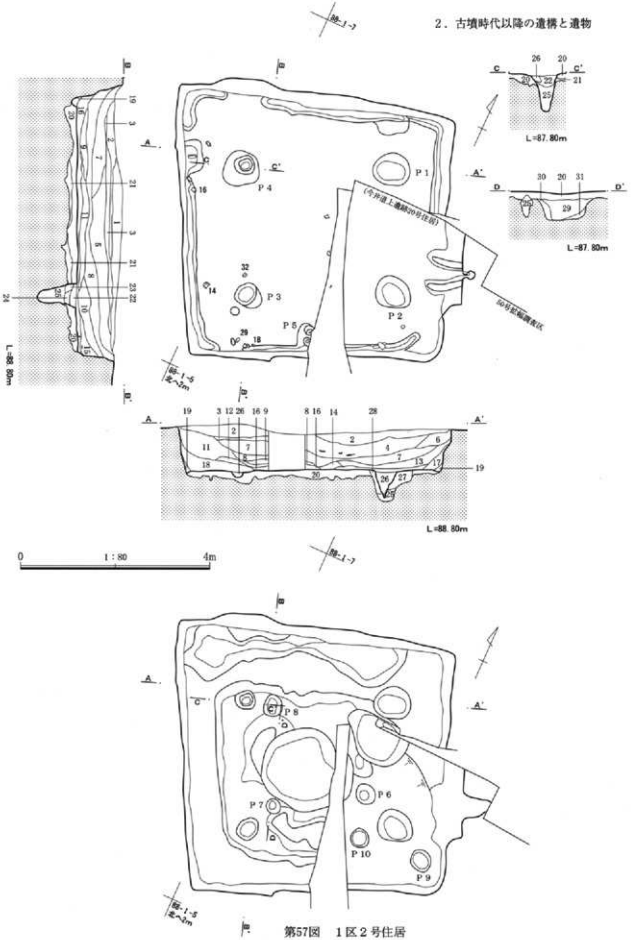
所見　埋没土から出土した遺物が多く、新しい要素の土器も混じっているが、床面近くから出土した土器から今井道上Ⅱ遺跡4期の住居と考えられる。



第55図　1区2号住居出土遺物（1）



第56図　１区２号住居出土遺物（２）


L=88.80m
L=87.80m
L=87.80m
L=88.80m
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
0
1:80
4m

第57図　1区2号住居

1区2号住居

A－A'　B－B'　C－C'　D－D'

1．褐色(上位)・暗褐色土(下位)　部分的に遺構確認面の上にのっていた土。直径1.0～5.0mの白色軽石粒を均一に含む。暗褐色土中に直径5.0mmほどの炭化物粒を少量。直径1.0～7.0mほどの焼土粒をごく少量含む。

2．暗黄褐色土　ローム粒および長径5.0cmほどのローム塊を均一にやや多く含む。直径1.0～5.0mmほどの白色軽石粒を均一に含む。

3．暗褐色土　ローム小粒を直径0.3cmの粒および長径5.0cmほどの塊状に含む。また、A－A'の西側では、上位に直径2.0～3.0cm粒の層状に認められる。直径1.0～5.0mmほどの白色軽石粒を均一に含む。

4．暗褐・黒褐色土　直径1.0～5.0mmほどの白色軽石粒を均一にやや多く含む。直径1.0～5.0mmほどの炭化物を粒状に含む。直径1.0～3.0mmほどの焼土粒少々含む。

5．褐色土　ローム粒および長径5.0cmほど、直径1.0cm前後のローム塊を均一にやや多く含む。直径1.0～3.0mmほどの白色軽石粒を少量含む。特に下位に黒褐色土(8層の土か？)少量含む。

6．褐色土　直径1.0～5.0mmほどの白色軽石粒少量含む。

7．暗・暗褐色土　直径5.0mm～長径3.0cmほど、直径1.0cm前後主体のローム粒・塊を均一に少～中量含む。直径1.0～5.0mmほどの白色軽石粒少量含む。

8．黒褐色土　ローム粒を長径5.0cm程、直径1.0cm前後主体の塊状に均一に中量から少々多く含む。直径1.0mmほどの白色軽石粒均一に含む。

9．黄褐色土　ローム主体。直径1.0mmほどの黄褐色土(やや明るい。ローム)を粒～塊状にやや多く含む。特に上位に黒褐色土(8層の土)を混じる。

10．暗褐色土　直径0.5～1.0cmほどのローム粒を均一に含む。直径1.0～長径4.0cmほどの黒褐色土を粒～塊状(8層のものに類似)に少量含む。直径1.0mmほどの白色軽石粒含む。

11．にぶい黄褐色土　9層に類似するが、ロームの含み方は9層より少ない。

12．にぶい黄褐色土と暗褐色土の混土　にぶい黄褐色土が主体で塊状に暗褐色土混じる。

13．暗褐色土　直径1.0mmほどの白色軽石粒少量～中量、直径5.0mmほどの焼土粒を極少量含む。酉側やや黒色味有り。

14．暗褐色土　12層より全体的に黄褐色味帯びる。直径5.0mmほどのローム粒を均一に含む。

15．黒褐色土　直径0.5～1.0mmほどの白色軽石粒と焼土粒(直径1.5cmほど1点)をごく少量含む。

16．褐色土　直径1.0cmほどのローム粒が部分的に層状に認められる。直径1.0mmほどの白色軽石粒少量含む。

17．褐色土　直径1.0～5.0cmほどのローム粒を下位に極少量含む。直径0.5mmほどの炭化物粒をごく少量含む。

18．暗褐・黒褐色土　上位は黒色味少ない。上位にぶい黄褐色土(11層の土)混じり。漸移的に変化。下位の方は斑状に含でいる。直径1.0～1.5cmほどのローム粒を特に下位に含む。直径0.5～3.0mmほどの白色軽石粒少量含む。

19．褐色土　ロームと暗褐色土の混じり。直径5.0mmほどの黄褐色土粒を均一に多く含む。

20．暗褐色土　ローム塊を多く、直径5.5～1.0cmの黒色土粒をやや多く含む。

21．黄褐色土　褐色土塊を多く、ローム粒、黒色土粒を少量含む。

22．褐色土　小ローム塊やや少く、黒色土塊を少量含む。

23．暗黄褐色土　黄褐色土を斑状に含む。ややしまりなし。

24．暗黄褐色土　大ローム塊をかなり多く含む。

25．暗褐色土　小ローム塊多量、黒色土粒少量含む。ボソボソしていてしまりなし。

26．暗褐色土　白色軽石粒多く、ローム粒、黒色土粒少量含む。

27．褐色土　大ローム塊多量に、黒色土少量含む。

28．暗黄褐色土　ローム粒、黒色土粒を少量、焼土粒をわずかに混入する。

床下土坑

29．褐色土　大・中・小それぞれのローム塊をかなり多く含む。黒色土も斑状に混入。

30．黄褐色土　ハードローム塊多く、黒色土粒少量混入。

31．黄褐色土　黒色土が少量、斑状に混入する。やや粘性あり。

1区3号住居

（第58・59図　PL15・16・81　遺物観察表P.212・213・224）

位置　88－I・J－5・6G

形状　台形と推定されるが、南西隅は発掘区域外のため、全体形状はとらえられなかった。

規模　長軸6.20m　短軸6.00m　残存壁高0.99m

面積　測定不能　　**長軸方位**　N－4°－E

重複　竈のすぐ西側に後出する1号井戸が重複していた。

竈　住居東壁中央よりやや南寄りに竈が構築されていた。確認長1.00m、燃焼部幅0.64m。袖の残存長は向かって右側が0.70m、左が1.06m。確認面では屋外に竈は伸びてない。

柱穴　主柱穴は床面では検出できなかったが、掘り方面でP1～P3の3本の主柱穴を検出した。もう1本の主柱穴は1号井戸が掘られた位置にあったと推定される。P1～P3の規模(掘り方面での計測・長軸×短軸×深さ)は、P1は0.70×0.50×0.68m、P2は0.70×0.40×0.68m、P3は0.63×0.45×0.68mである。

周溝　周溝はほぼ全周していた。概ね幅は0.15～0.34m、深さは0.03～0.08mである。

貯蔵穴　貯蔵穴は検出されなかった。

床面　床面はほぼ平坦であった。

埋没土　埋没土中には白色軽石や焼土粒が含まれた黒褐色土・黄褐色土で埋まっていた。

掘り方　全体に凹凸の著しい掘り方面で、厚さ0.10～0.20mの掘り方充填土が確認された。掘り方面は、北西・北東隅がやや深く南東隅は浅くなっていた。また住居北東隅に1基、中央部に3基の直径1m前後、深さ0.40～0.50mの床下土坑が検出された。主柱穴(P1～P3)も掘り方面で検出した。

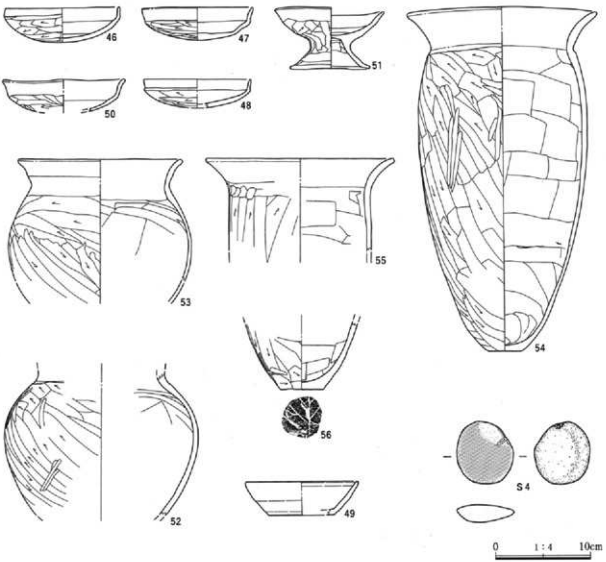
遺物と出土状況　土器11点、石器1点を図示することができた。このうち土器2点、石器1点は埋没土中の出土である。

図示できた土器は住居南東部、竈周辺に偏在している。土師器坏(46)は南部周溝内底面上2cm、47は東部床面直上で出土した。48は埋没土中から出土し

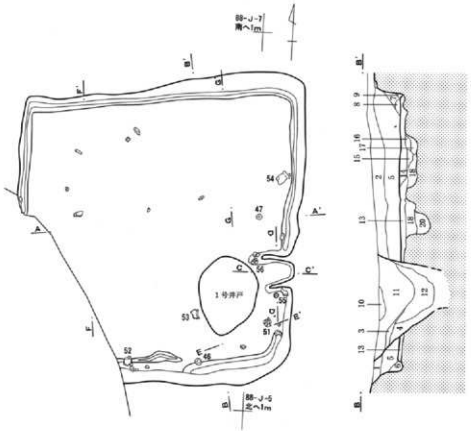
た。50は掘り方埋没土中から出土した。土師器高坏(51)は南東部隅周溝脇の床面上4㎝で出土した。土師器甕(52)は南壁際周溝底面直上で、53は南部床面上3㎝で、54は北東部壁際床面上5㎝で、55は竈右袖脇床面上4㎝、56は竈左袖前の床面上8㎝で出土した。須恵器坏(49)は埋没土中からの出土で混入と考えられる。また小型扁平擦石1点(S4)が埋没土から出土した。古墳時代の遺物かどうかの判断は困難である。

その他図示した遺物のほかに縄文土器破片7点、土師器破片815点、須恵器破片5点、棒状礫3点、扁平礫2点、礫片3点、剥片22点が出土した。

所見　出土遺物から今井道上Ⅱ遺跡4期の住居と考えられる。



第58図　1区3号住居出土遺物



床下土坑　E－E'

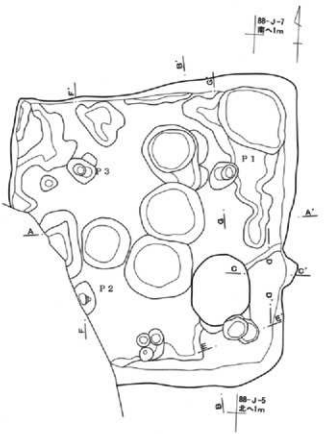
1．暗黄褐色土　ローム粒および長径2.0cmほどのローム塊を含む。長径1.0cmほどの黒褐色土塊を少量含む。
2．1層に類似。ローム塊の含み方、1層より多い。東側に直径5.0mmほどの焼土粒がごく少量認められる。
3．暗褐色土　ローム粒および0.3～1.5cmほどのローム塊を均一に含む。直径5.0mmほどの焼土粒を少量含む。
4．暗黄褐色土　ロームは1・2層より均一に混じっている。ローム粒および0.5～2.0cmほどのローム塊を均一に含む。ややしまり弱い。直径5.0～8.0mmほどの焼土粒を少量含む。

F－F'　G－G'

1．濃黄褐・暗黄褐色土　直径1.0～2.0mmのローム粒および長径5.0cmほどのローム塊を含む。直径1.0～2.0mmほどの白色軽石粒を含む。
2．暗黄褐色土　特に下位は同じ色調の土を粒および直径0.5～長径3.0cmほどの塊状に多く含む。塊状にボロボロ崩れる。
3．黒褐色土　ローム少量混じる。ローム粒および長径6.0cm、直径1.0cm以下のローム塊を少量含む。上位に直径1.0mmほどの白色軽石粒を少量含む。
4．暗黄褐色土　ローム粒および直径1.0cmほどのローム塊を均一に多く含む。下位に黒褐色土を少量混じる。
5．暗黄褐色土　ロームを含むが、粒・塊状ではなく、混じった状態が主体。
6．5層に類似。全体的にやや暗い色調。
7．暗黄褐色土　ややしまり弱い。
8．暗黄褐色土　長径1.0～4.0cmほどのローム塊を含む。

0　1:80　4m

第59図　1区3号住居



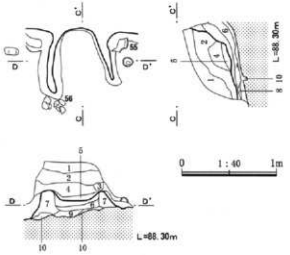


図　C－C'　D－D'

1．褐色土　直径1.0～4.0mmほどの白色軽石粒を均一に含む。焼土を直径1.5cmほど、1.0mm土体の粒状に、特に下位に含む。
2．褐色土　1層に類似するがやや黒色味有り。また焼土は均一にやや多く含む。
3．黒褐色土と褐色土の混土。直径1.0～2.0mmほどの白色軽石粒を含む。直径5.0mmほどの焼土粒を含む。ロームを直径0.8～1.0cmほどの粒状にごく少量含む。
4．褐色土　1層に類似。但し、焼土粒は均一に含む。
5．赤褐色土　焼土主体層。しまり弱い。炭を含みやや黒色味帯びる部分も有り。
6．暗褐色土　焼土粒および長径1.0cmほどの塊を均一に多く含む。
7．にぶい黄褐色土　硬くしまる。粗抽構築土。上位および内側にかけて被熱の為、赤色味帯びる。また上位に焼土混じる。直径1.0～3.0mmほどの白色軽石粒を均一に含む。炭化物を直径2.0mmほどの粒状に少量含む。
8．暗褐色土　6層に類似するが、焼土の混じりは6層より少ない。
9．8層に類似　焼土粒は直径5.0mmほどで均一に含む。
10．暗褐色土　直径5.0mmほどのローム粒、焼土粒を均一に含む。直径1.0mmほどの白色軽石粒を少量含む。

1区3号住居

A－A'　B－B'

1．暗褐・暗黄褐色土　直径1.0～3.0mmほどの白色軽石粒少量含む。
2．黒褐色土　直径1.0～5.0mmほどの白色軽石粒均一にやや多く含む。下位は暗褐色土と暗黄褐色土を斑状に含む。
3．暗褐・暗黄褐色土。
4．3層に類似するが、黒褐色土が混じる為、やや黒色味有り。
5．暗黄褐色土　黒褐色土少量混じる。直径5.0mmほどのローム粒を均一に少量含む。
6．4層に類似する。直径5.0mmほどのローム粒を少量含む。
7．暗黄褐色土　ローム混じり。5層より黄色味有り。黒褐色土を斑状に少量含む。
8．黒色土　焼土体層。上位にローム混じり。下位に直径1.0cmほどの焼土粒を含む。
9．暗黄褐色土　7層に類似するが、ロームや黒褐色土は均一に混じる。
10．淡褐色土　サラサラの土。
11．黒褐色土　10層より粒径の粗い砂質土。淡褐色～黄褐色土混じる。
12．記載なし
13．濃黄褐・暗黄褐色土　ロームを直径1.0～2.0mmの粒および長径5.0cmほどの塊状に含む。直径1.0～2.0mmほどの白色軽石粒を含む。ハードローム塊を多く含む。
14．暗黄褐色土　13層に類似するが、やや黒色味を帯びる。
15．濃黄褐・暗黄褐色土　13層に似た感じの土だが、ローム粒は混じっている。
16．暗褐色土　ロームを粒および長径2.0cmほど、直径0.5～1.0cmほどが主体の塊状に均一に多く含む。北端などに部分的に黒褐色土混じる。直径1.0～2.0mmほどの白色軽石粒を含む。
17．濃黄褐色土　ローム主体。直径1.0mmほどの白色軽石粒を少量含む。
18．17層に類似するが、全体的にやや明るい色調。
19．にぶい黄褐色土　部分的に直径0.5mmほどの黄白色粒子少量含む。地山か？
20．暗褐色土　にぶい黄褐色土を粒および長径2.0cmほどの塊状に含み、また混じった土層。全体的にやや黄色味有り。黄色味のない暗褐色土を長径1.0～3.0cmほどの塊状に含む。上位に直径1.0～1.5mmほどの白色軽石粒を少量含む。
21．18層に類似。
22．暗黄褐色土　特に下位は同じ色調の土を粒および直径0.5～長径3.0cmほどの塊状に多く含む。塊状にボロボロ崩れる。
23．暗褐色土　ローム粒および直径0.5～長径3.0cmほどの塊(下位は長径7.0～8.0cmほどに、特に下位に多く含む。

１区４号住居

（第60～63図　PL17・18・81・82　遺物観察表P.213・224）

位置　88・87－Ａ・Ｔ－６・７Ｇ　　**形状**　正方形

規模　長軸5.60m　短軸5.43m　残存壁高0.58m

面積　27.04㎡　　**長軸方位**　Ｎ－２°－Ｅ

竈　住居北壁中央よりやや東寄りに竈が構築されていた。確認長1.26m、燃焼部幅0.34m。袖の残存長は向かって右側が0.84m、左が0.79m。残存する燃焼部および煙道が0.44m壁外へ突出していた。袖先端には土師器甕が芯として使われており、その間の焚き口部には土師器甕が倒れ込んだ状態で出土した。また燃焼部中央には土師器坏(60)が使用面から８cm浮いた状態で正立で出土した。

柱穴　床面の対角線を結んだ線上にＰ１～Ｐ４の主柱穴を検出した。それぞれの規模（長軸×短軸×深さ）は、Ｐ１が0.70×0.67×0.69m、Ｐ２は0.65×0.54×0.67m、Ｐ３は0.78×0.68×0.66m、Ｐ４は0.66×0.59×0.72mである。

周溝　竈左側の北壁西半分沿いに周溝が検出された。概ね幅は0.12～0.17m、深さは0.02～0.04mである。

貯蔵穴　北東隅に長軸0.75m、短軸0.66m、深さ0.57mの楕円形の貯蔵穴が検出された。貯蔵穴と北壁の間からは土師器小型甕(62)と土師器鉢(63)が床面直上で出土した。また貯蔵穴南側の東壁近くからは土師器甑(72)が床面直上から出土した。

床面　床面は平坦である。

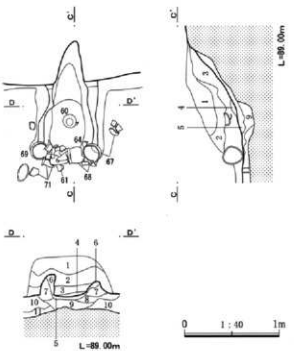
埋没土　白色軽石粒とローム粒を含め黒褐色土・褐色土で埋まっていた。北壁・東壁・西壁の一部の床面直上で厚さ１～３cmの焼土が残っていた。

掘り方　全体に厚さ0.05～0.15mの掘り方充填土が確認された。全体として幅1.50m、深さ0.15mほどの帯状Ｕ字形に周辺部が掘り込まれていた。中央には約2.5m四方に掘り残された部分が残っていた。

遺物と出土状況　竈と貯蔵穴周辺に遺物が集中して出土した。竈と貯蔵穴付近の土器出土状態は前述した通りである。また土師器小型甕(65)、甕(66・70)はほぼ完形で、竈左側に並んで床面直上で出土した。また土師器小型甕(169)が南部Ｐ２北西側の床面上４cmで出土した。主柱穴Ｐ３周辺からは扁平擦石（Ｓ５）、擦石（Ｓ７）、敲石（Ｓ６）がまとまって出土した。Ｓ５は床面から９cm浮いた状態で出土したが、他の２点は床面直上あるいはＰ３に落ち込むような状態で出土した。砥石（Ｓ10）は竈左前床面直上で出土した。他に扁平な自然礫（Ｓ９・Ｓ11・Ｓ12）がそれぞれ北部床面直上、埋没土中から出土している。

これら図示できた遺物のほかに縄文土器破片２点、土師器破片489点、須恵器破片９点、棒状礫５点、軽石１点、礫片１点、剥片20点が出土した。

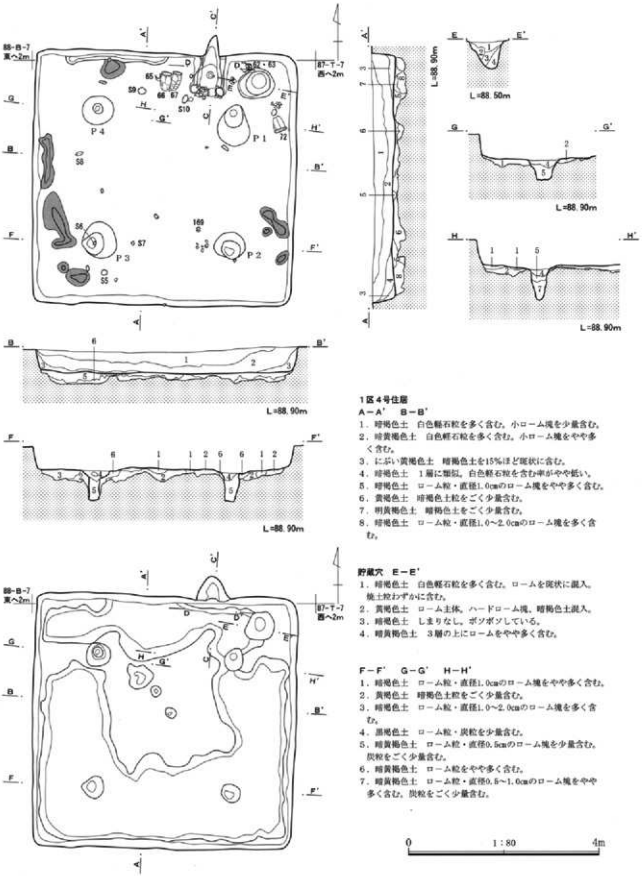
所見　出土遺物から今井道上Ⅱ遺跡３期の住居と考えられる。竈・貯蔵穴周辺からは完形に近い複数器種の煮沸具が出土しており、厨房空間であることを強く連想させる。



竈　C－C'　D－D'

1．暗褐色土　白色軽石粒、焼土粒、炭粒、ローム粒混入。
2．暗黄褐色土　白色軽石粒、焼土粒、炭粒、ローム粒混入。１層よりやや焼土が多い。
3．黄・赤褐色土　ロームと焼土塊が半々くらいで混入。
4．灰・赤褐色土　焼土を少し含む。
5．灰　焼土粒を多く含む。炭粒をやや多く含む。
6．焼土
7．暗褐色粘土　焼土をごく少量含む。しまって硬い。
8．暗褐色土　ローム粒を多く含む。焼土粒もごく少量含む。
9．暗褐色土　ローム粒を多く含む。焼土粒を少量含む。８層より焼土、ロームの混入が多い。
10．暗褐色土　ローム粒をやや多く含む。
11．暗黄褐色土　ローム粒をやや多く含む。直径1.0cmのローム塊を少量含む。

第60図　１区４号住居竈



1区4号住居

A－A'　B－B'

1．暗褐色土　白色軽石粒を多く含む。小ローム塊を少量含む。
2．暗黄褐色土　白色軽石粒を多く含む。小ローム塊をやや多く含む。
3．にぶい黄褐色土　暗褐色土を15%ほど斑状に含む。
4．暗褐色土　1層に類似。白色軽石粒を含む。硬さがやや低い。
5．暗褐色土　ローム粒・直径1.0cmのローム塊をやや多く含む。
6．黄褐色土　暗褐色土粒をごく少量含む。
7．明黄褐色土　暗褐色土をごく少量含む。
8．暗褐色土　ローム粒・直径1.0～2.0cmのローム塊を多く含む。

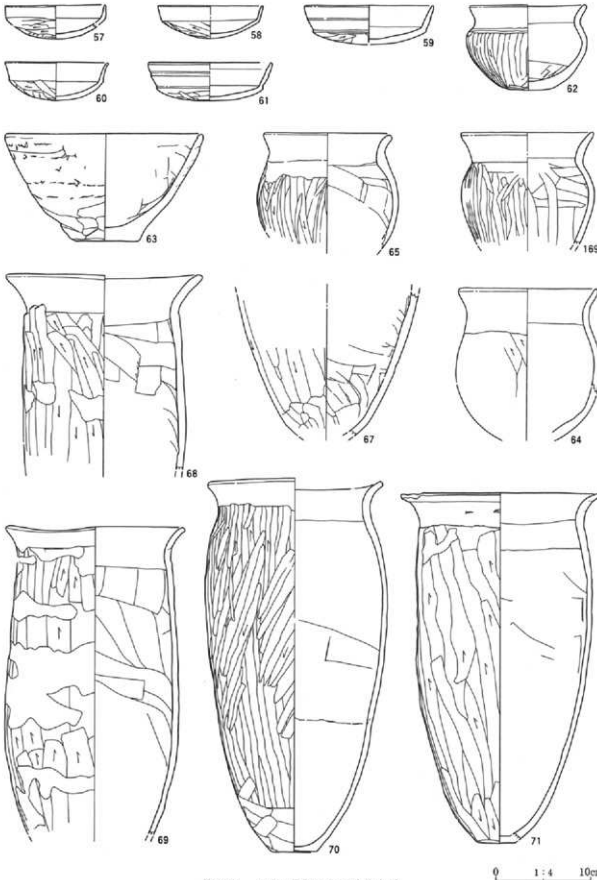
貯蔵穴　E－E'

1．暗褐色土　白色軽石粒を多く含む。ロームを斑状に混入。焼土粒わずかに含む。
2．黄褐色土　ローム主体。ハードローム塊。暗褐色土混入。
3．暗褐色土　しまりなし。ボソボソしている。
4．暗黄褐色土　3層の上にロームをやや多く含む。

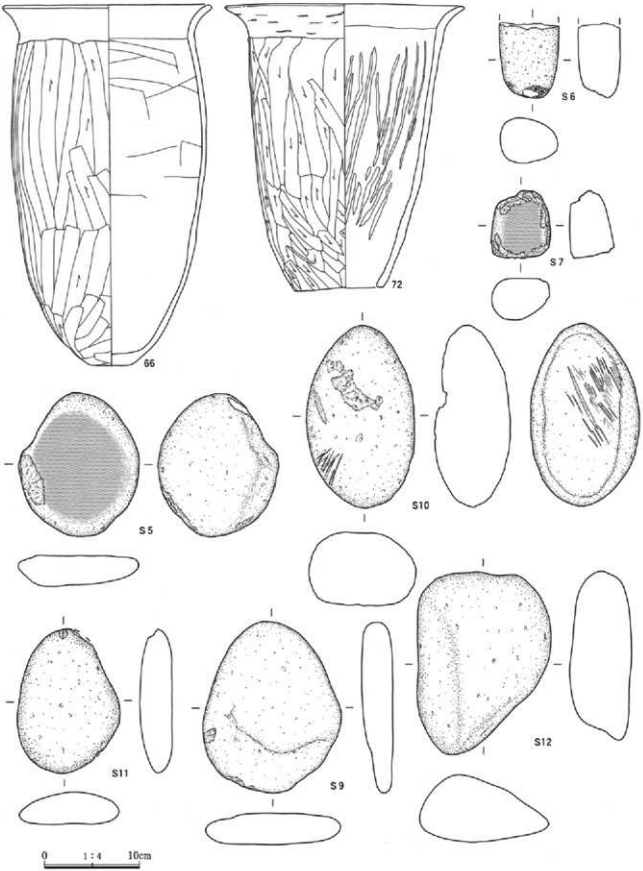
F－F'　G－G'　H－H'

1．暗褐色土　ローム粒・直径1.0cmのローム塊をやや多く含む。
2．黄褐色土　暗褐色土粒をごく少量含む。
3．暗褐色土　ローム粒・直径1.0～2.0cmのローム塊を多く含む。
4．黒褐色土　ローム粒・炭粒を少量含む。
5．暗黄褐色土　ローム粒・直径0.5cmのローム塊を少量含む。炭粒をごく少量含む。
6．暗黄褐色土　ローム粒をやや多く含む。
7．暗黄褐色土　ローム粒・直径0.5～1.0cmのローム塊をやや多く含む。炭粒をごく少量含む。

第61図　1区4号住居



第62図　1区4号住居出土遺物(1)



第63図　1区4号住居出土遺物（2）

1区5号住居(50号拡幅今井道上遺跡18号住居)

(第64～67図　PL19・83・84　遺物観察表P.213・214・225)

位置　87－Q－5・6G

形状　正方形。南側半分が50号拡幅今井道上遺跡18号住居として調査されている。今回の調査では北半分をすべて調査することができた。

規模　長軸3.30m　短軸3.10m　残存壁高0.67m

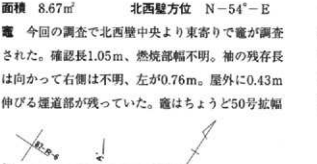
面積　8.67㎡　　**北西壁方位**　N－54°－E

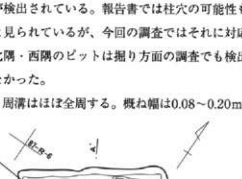
竈　今回の調査で北西壁中央より東寄りで竈が調査された。確認長1.05m、燃焼部幅不明。袖の残存長は向かって右側は不明、左が0.76m。屋外に0.43m伸びる煙道部が残っていた。竈はちょうど50号拡幅今井道上遺跡調査部分との隣接部にあり、調査が分断された為、詳細をつかめなかった部分もある。

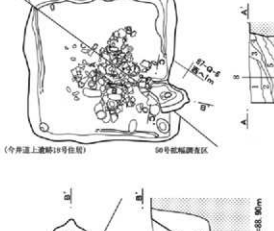
竈燃焼部中央で土師器甕(90)が倒立で使用面下に4cm埋まった状態で出土した。またその上に坏破片(80)が正立でのった状態で出土した。

柱穴　柱穴と思われるピットは検出されなかった。50号拡幅今井道上遺跡18号住居では東隅・南隅にピットが検出されている。報告書では柱穴の可能性もあると見られているが、今回の調査ではそれに対応する北隅・西隅のピットは掘り方面の調査でも検出されなかった。

周溝　周溝はほぼ全周する。概ね幅は0.08～0.20m、







1区5号住居

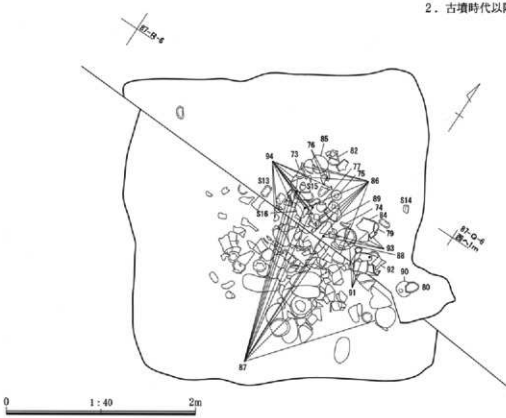
A－A'

1．黒褐色土と暗黄褐色土の混土。暗黄褐色土は斑状に均一に含む。直径1.0～4.0mmほどの白色軽石粒を均一に含む。
2．黒褐色土　上位と下位に暗黄褐色土混じる。直径1.0～2.0mmほどの白色軽石粒を含む。
3．黒褐・暗黄褐色土　中粒が黒褐色土で、上位と下位が顕著的に暗黄褐色土となる。直径1.0～2.0mmほどの白色軽石粒を含む。
4．暗黄褐色土　直径1.0～4.0mmほどの白色軽石粒を特に上位に含む。
5．濃黄褐色土　直径1.0～2.0mmほどの白色軽石粒を少量含む。下位(南側)はやや黒色味を帯びる。
6．暗黄褐・濃黄褐色土　5層に類似するが、やや黒色味を帯びる。
7．濃黄褐色土　直径2.0cmほどのローム粒を均一に多く含む。
8．黄褐色土　暗褐色土を少量含む。

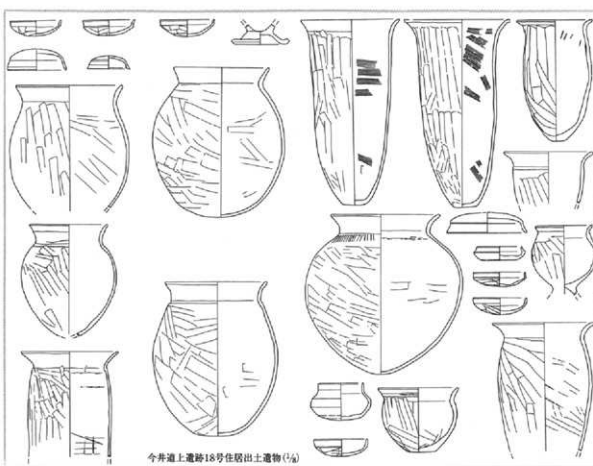
竈　B－B'　C－C'

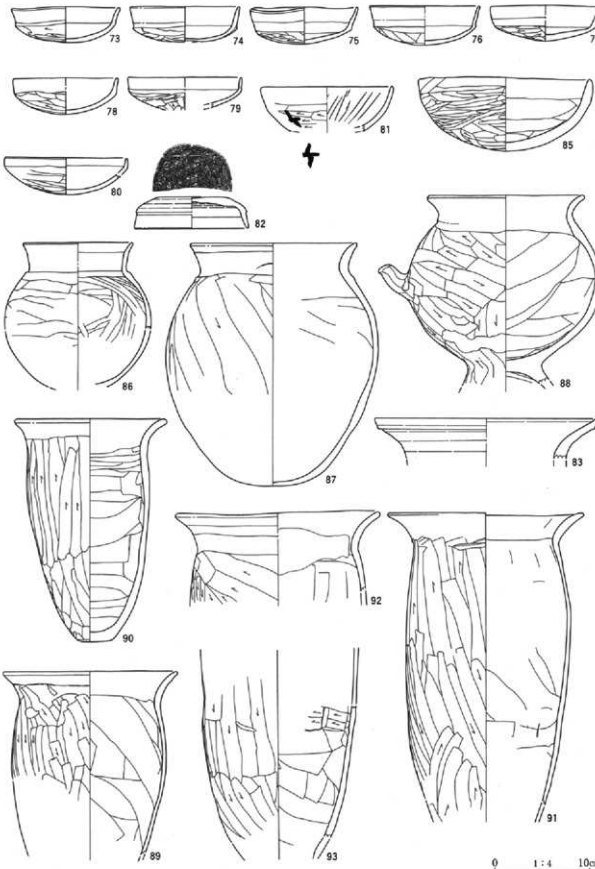
1．黄褐色土　ローム主体、焼土粒・ローム粒わずかに混入。
2．黄褐・赤褐色土　ローム主体にして、焼土を多く含む。
3．暗黄褐色土　ローム粒・焼粒・焼土粒を少量含む。
4．暗黄褐色土　焼土塊をやや多く含む。
5a．暗黄褐色土　ローム粒および直径0.5～長径1.0cmほどの塊を均一に含む。焼土粒少量含む。
5b．5a層に類似するが、比較してやや黒色味帯び、焼土量(粒？)もやや多く含む。
6．暗黄褐色土　ローム粒および直径0.5～長径5.0cmほど、直径1.0～2.0cmほどのローム塊を均一にやや多く含む。
7．暗黄褐色土とローム塊の混土。ローム塊50%ほどで、暗黄褐色土と混じる。

第64図　1区5号住居

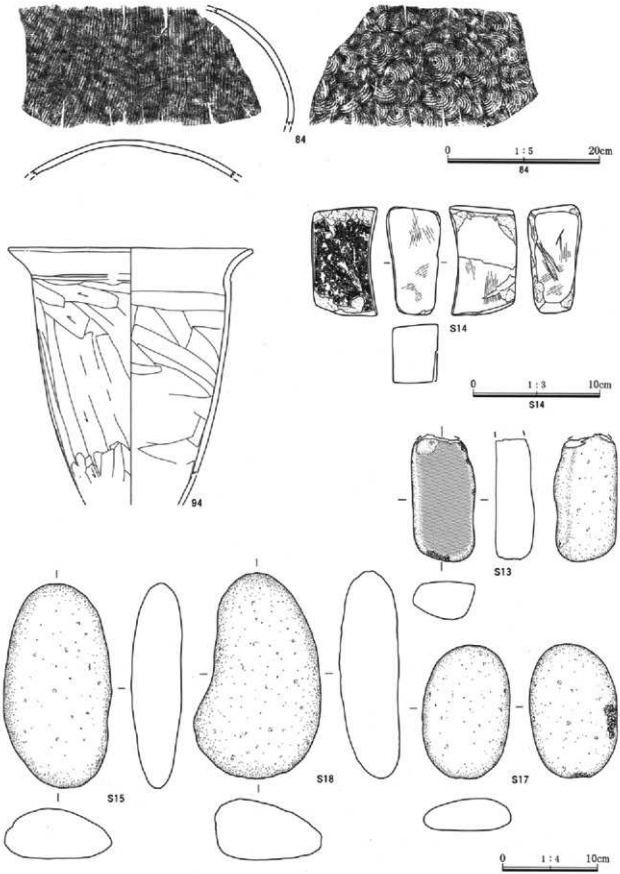


第65図　1区5号住居遺物出土位置





第66図　１区５号住居出土遺物（１）



第67図　1区5号住居出土遺物(2)

深さは0.05～0.13mである。

貯蔵穴　貯蔵穴は検出されなかった。

床面　床面は平坦である。

掘り方　今回調査部分の掘り方底面は平坦で、厚さ0.05mほどの掘り方充填土が検出された。

遺物と出土状況　床面直上およびそれに折り重なるように多量の遺物が出土した。この出土傾向は50号拡幅今井道上遺跡18号住居でも同様である。50号拡幅今井道上遺跡18号住居出土遺物との接合作業をおこなったところ、既に報告されている5個体の遺物に本住居出土の破片が接合する例があったが、実測図の変更になるような接合ではなかった。

土師器坏は9点を図示したが、ほとんどは中央部あるいは竈付近で床面から0～数cm浮いた状態で出土した。土師器坏(74)、鉢(85)は床面直上で出土した。土師器坏(81)は埋没土中から出土したもので混入と判断されるが、体部外面に「竹」の一部と見られる墨書が認められる。須恵器蓋(82)は北部の床面上3cmで出土した。土師器小型甕(86)、甕(87・91・93)、甑(94)は中央部あるいは竈周辺の床面直上で出土している。土師器台付甕(88)は取っ手のついた類例の少ない遺物であるが、竈左袖前の床面直上で出土した。取っ手は片側にしか残っていない。相向かう位置には取っ手をつけた痕跡はなく、少しずれた位置に穿孔があり、ここに取っ手がついていた可能性は残る。石器は敲石(S13)が中央部床面上2cmで、敲石(S17)が埋没土中、砥石(S14)が北東部壁際床面直上で出土した。

図示した遺物のほかに土師器破片271点、須恵器破片13点、棒状礫9点、円礫1点、亜角礫6点、礫片9点が出土した。

所見　出土遺物から今井道上Ⅱ遺跡4期の住居と考えられる。

1区6号住居

（第68・69図　PL20・21・84　遺物観察表P.214）

位置　87－P・Q－6・7G　　**形状**　縦長長方形

規模　長軸3.84m　短軸3.08m　残存壁高0.30m

面積　10.46㎡　　**長軸方位**　N－75°－E

竈　住居東壁中央よりやや南寄りに竈が構築されていた。確認長0.87m、燃焼部幅0.50m。袖の残存長は向かって右側が0.08m、左が0m。残存する燃焼部・煙道部は0.57m壁外に出ている。右袖部には自然礫が床面下に0.30m埋められており、袖芯にされていたものと推定される。

柱穴　主柱穴と思われるP1～P4を掘り方面で検出した。規模(長軸×短軸×深さ)は掘り方面での計測で、P1が0.20×0.18×0.16m、P2が0.20×0.18×0.27m、P3が0.23×0.20×0.24m、P4が0.25×0.20×0.68mである。いずれも小型であるが床面からの深さは掘り方充填土の厚さを含めると、0.2mほど深くなる。

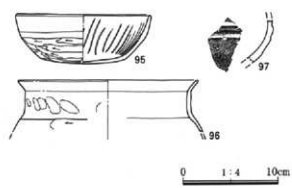
床面　床面はほぼ平坦である。

掘り方　掘り方底面には凹凸があり、0.05～0.30mの掘り方充填土が認められた。特に主柱穴周辺の住居四隅が深く掘られていた。また住居中央部にも深さ0.20mほどの小ピットが認められた。

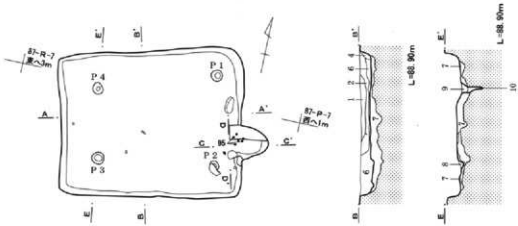
遺物と出土状況　竈周辺に遺物が出土した。竈燃焼部からは土師器坏(95)が出土した。土師器甕(96)は竈埋没土中から出土した。須恵器高坏破片(97)は埋没土中からの出土であり、混入と思われる。

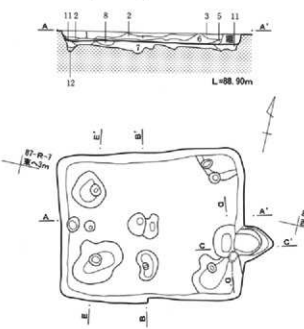
図示した遺物のほかに土師器破片289点、須恵器破片5点、礫片3点が出土した。

所見　混入と思われる遺物があり、住居の時期を考える上で難しいが、竈燃焼部から出土した土師器坏(95)からすれば9世紀中葉の住居と考えられる。



第68図　1区6号住居出土遺物



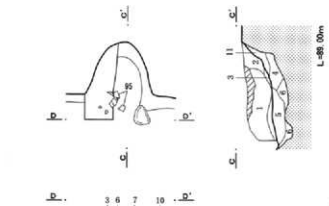


1区6号住居

A－A'　B－B'　E－E'

1．暗黄褐色土　直径1.0mmほどの白色軽石粒を含む。
2．黒褐色土と暗黄褐色土の混土。直径1.0～2.0mmほどの白色軽石粒を含む。ローム粒および直径0.5～長径5.0cmほどのローム塊を含む。
3．暗褐色土　暗黄褐色土(1層より黄色味が有。ローム主体)を層状に含む。撹乱土か?
4．ローム主体。暗褐色土混じり。
5．暗褐色土　ローム長径2.0～3.0cmほどの塊を含む。
6．暗黄褐色土　色調は1層に類似するが、より緻密な土。
7．明黄褐色土
8．暗黄褐色土　くずれやすくもろい。
9．暗黄褐色土と暗褐色土の混土。
10．黄褐色土と暗褐色土の混土。
11．暗黄褐色土　くずれやすくもろい。8層に類似。
12．黄褐色土　やや粘質。

0　1:80　4m



遺C－C'　D－D'

1．暗黄褐土　白色軽石粒、ローム粒、焼土粒、炭粒を含む。
2．赤褐色土　ローム主体。焼土を多く混入。
3．暗褐色土　ローム粒、焼土粒を少量含む。
4．黒褐色土　ローム粒、炭粒、焼土粒を少量含む。
5．暗黄褐色土　直径0.5～1.0cmのローム塊、焼土粒、炭粒を少量含む。
6．黄褐色土　直径0.1cmのローム塊をやや多く含む。炭粒をごく少量含む。
7．暗黄褐色土　焼土粒をごく少量含む。
8．黄褐色土　炭粒をごく少量含む。
9．暗黄褐色土　焼土粒、炭粒をごく少量含む。しまって硬い。
10．暗黄褐色土　しまって硬い。
11．黄褐色土　黄褐色土をごく少量含む。

0　1:40　1m

第69図　1区6号住居

１区７号住居

（第70図　PL21・22・85　遺物観察表P.214・225）

位置　87－Q・R－７G　　**形状**　台形

規模　長軸3.02m　短軸1.82～2.70m

残存壁高0.14m

面積　6.09㎡　　**南壁方位**　N－67°－E

炉　住居中央やや北西に長軸0.73m、短軸0.6mの不正楕円形で、厚さ0.08mの範囲に焼土が残されており、炉と考えられる。炉の長軸は住居の長軸に一致している。炉南西縁には砥石（S19）が出土した。

柱穴　柱穴の可能性のある小ピットＰ１～Ｐ３を掘り方面で検出した。規模（長軸×短軸×深さ）は掘り方面の計測で、Ｐ１が0.25×0.23×0.16m、Ｐ２が0.26×0.20×0.17m、Ｐ３が0.30×0.18×0.17mである。壁沿いに柱穴を想定できるが、北西部および南東部のそれは確認できなかった。

周溝　周溝は検出されなかった。

貯蔵穴　貯蔵穴は検出されなかった。

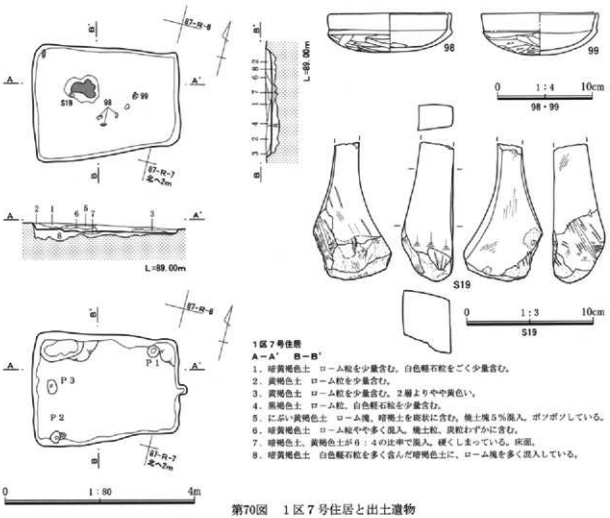
床面　床面は平坦であるが、炉の北西側はやや高くなっていた。

埋没土　焼土粒・炭化物粒・ローム粒を含む黒褐色土・黄褐色土で埋まっていた。

掘り方　掘り方底面にはやや凹凸があるが、規格性のある床下土坑等は検出されなかった。厚さ0.05～0.20mほどの掘り方充填土が検出された。

遺物と出土状況　中央やや南側で割れた状態の土師器坏(98)が床面上２cmで出土した。土師器坏(99)は中央やや東寄りで床面上８cmで出土した。図化できた遺物のほかに土師器破片26点、須恵器破片１点、棒状礫１点が出土している。

所見　出土遺物から今井道上Ⅱ遺跡３期の住居と考えられる。



第70図　１区７号住居と出土遺物

1区8号住居

（第71～74図　PL22～24・85・86　遺物観察表P.215・225）

位置　87－Q・R－8・9G　　**形状**　正方形

規模　長軸5.52m　短軸5.35m　残存壁高0.53m

面積　26.53㎡　　**長軸方位**　N－0°－E

竈　住居北壁ほぼ中央に竈が構築されていた。確認長0.75m、燃焼部幅0.43m。袖の残存長は向かって右側が0.38m、左が0.43m。壁外に0.39m突出して煙道部が残っていた。燃焼部中央には須恵器高坏脚部(104)が正立で使用面直上に置かれていた。竈支脚に使われていたと推定される。

柱穴　床面で主柱穴と思われるP1～P4を検出した。規模(長軸×短軸×深さ)は、P1が0.54×0.42×0.49m、P2が0.45×0.42×0.63m、P3が0.49×0.45×0.41m、P4が0.39×0.37×0.59mである。

周溝　周溝は検出されなかった。

貯蔵穴　北東隅に長軸1.00m、短軸0.87m、深さ0.64mの隅丸長方形の貯蔵穴が検出された。掘り方は二段になっていて0.20mほど掘り下げられた平坦面から、そのほぼ中央に長軸0.59m、短軸0.50m、深さ0.60mの楕円形の土坑が掘り込まれていた。下の土坑に落ち込むように土師器甕(106)が出土している。

床面　床面は平坦である。

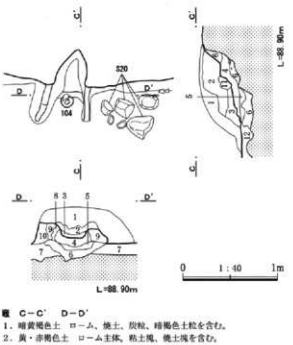
埋没土　白色軽石やローム粒を含む暗褐色土、黄褐色土で埋まっていた。

掘り方　住居東・南・西壁沿いが幅1.0～1.5m、深さ0.05～0.10mの帯状に掘り込まれていた。中央には約2.5m四方に掘り残された部分があるが、その中央には長軸0.33m、短軸0.90m、深さ0.05～0.12mの隅丸方形の床下土坑が掘られていた。全体には厚さ0.10～0.25mの掘り方充填土が認められた。

遺物と出土状況　竈周辺と住居南西部に遺物が多く出土している。竈の右脇には椹名二ツ岳起源と考えられる大型の軽石が割れた状態で散乱していた。これには焼土や粘土が付着しており、竈の構築材として使われていたものと推定される。また北東部壁際の床面直上で土師器甕(110)が出土した。また甕(109)は中央部床面直上で出土した。甕(108)は主柱穴P3の周辺で割れて散在していた破片が接合した。南壁沿いで出土した土師器甕(107)、土師器坏(100)、須恵器坏(103)、土師器壺(105)はそれぞれ床面から19cm、11cm、15cm、19cm浮いた状態で出土した。特に壺(105)は壁沿いに残された焼土塊の上から出土した。擦石(S24)、敲石凹石(S23)はそれぞれP3周辺、P4周辺の床面直上で出土した。また砥石破片(S26)が埋没土中から出土した。

以上の図化できた遺物のほかに、縄文土器破片3点、土師器破片655点、須恵器13点、棒状礫6点、扁平礫1点、亜角礫1点、円礫1点、剥片17点が出土した。

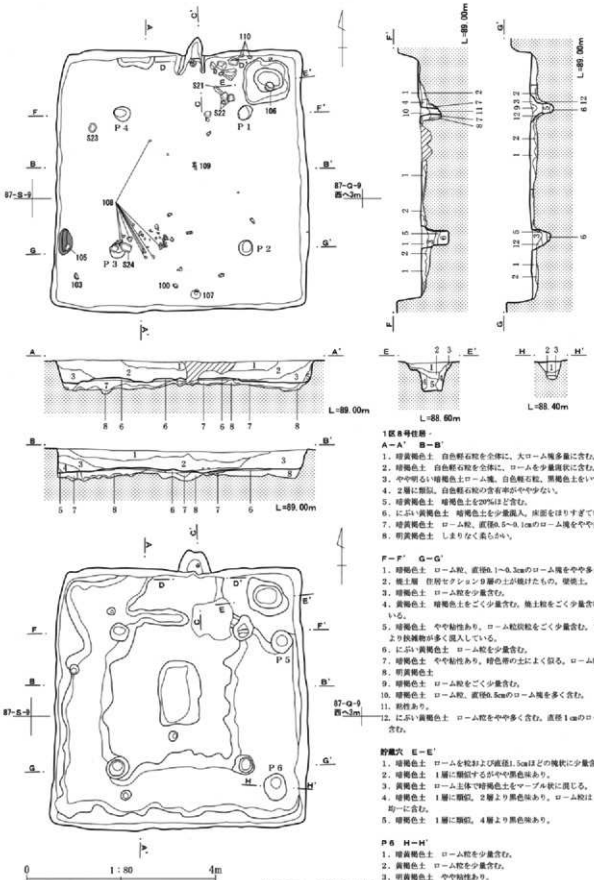
所見　出土遺物から今井道上Ⅱ遺跡3期の住居と考えられる。竈右前の凹みは攪乱である。大型の礫(S21・S22)が出土しているが、本住居に伴うものではない。



竈　C－C'　D－D'

1．暗黄褐色土　ローム、焼土、炭粒、暗褐色土粒を含む。
2．黄・赤褐色土　ローム主体、粘土塊、焼土塊を含む。
3．焼土塊主体、ローム少量混じる。
4．暗灰黄褐色土　ローム粒、炭粒、焼土粒混入。やや粘性あり。
5．黄・赤褐色土　ローム主体、焼土粒多量に含む。
6．黄褐色土　ローム主体。焼土粒わずかに含む。
7．暗褐色土　ローム粒、直径1.0～3.0cmのローム塊をやや多く含む。
8．焼土層(9層の土が焼けたもの。壁焼土)
9．暗褐色粘土　焼土粒を少量含む。しまって硬い。(柚)
10．暗褐色粘土　焼土粒をごく少量含む。しまって硬い。(柚)
11．赤褐色土　(焼土塊)
12．暗褐色土　焼土粒、炭粒をやや多く含む。しまりなし。

第71図　1区8号住居竈



1区8号住居

A－A'　B－B'

1．暗黄褐色土　自色軽石粒を全体に、大ローム塊多量に含む。
2．暗褐色土　自色軽石粒を全体に、ロームを少量斑状に含む。
3．やや明るい暗褐色土ローム塊、自色軽石粒、黒褐色土をいずれも少量含む。
4．２層に類似。自色軽石粒の含有率がややすくない。
5．暗黄褐色土　暗褐色土を20%ほど含む。
6．にぶい黄褐色土　暗褐色土を少量混入。床面をほりすぎている。
7．暗黄褐色土　ローム粒、直径0.5～0.1cmのローム塊をやや多く含む。
8．明黄褐色土　しまりなく柔らかい。

F－F'　G－G'

1．暗褐色土　ローム粒、直径0.1～0.3cmのローム塊をやや多く含む。
2．埴土層　住居セクション９層の土が焼けたもの。壁焼土。
3．暗褐色土　ローム粒を少量含む。
4．黄褐色土　暗褐色土をごく少量含む。埴土粒をごく少量含む。ややしまっている。
5．暗褐色土　やや粘性あり。ローム粒炭粒をごく少量含む。７層に似るが７層より炭雑物が多く混入している。
6．にぶい黄褐色土　ローム粒を少量含む。
7．暗褐色土　やや粘性あり。暗色帯の土によく似る。ローム粒をごく少量含む。
8．明黄褐色土
9．暗褐色土　ローム粒をごく少量含む。
10．暗褐色土　ローム粒、直径0.5cmのローム塊を多く含む。
11．粘性あり。
12．にぶい黄褐色土　ローム粒をやや多く含む。直径１cmのローム塊をごく少量含む。

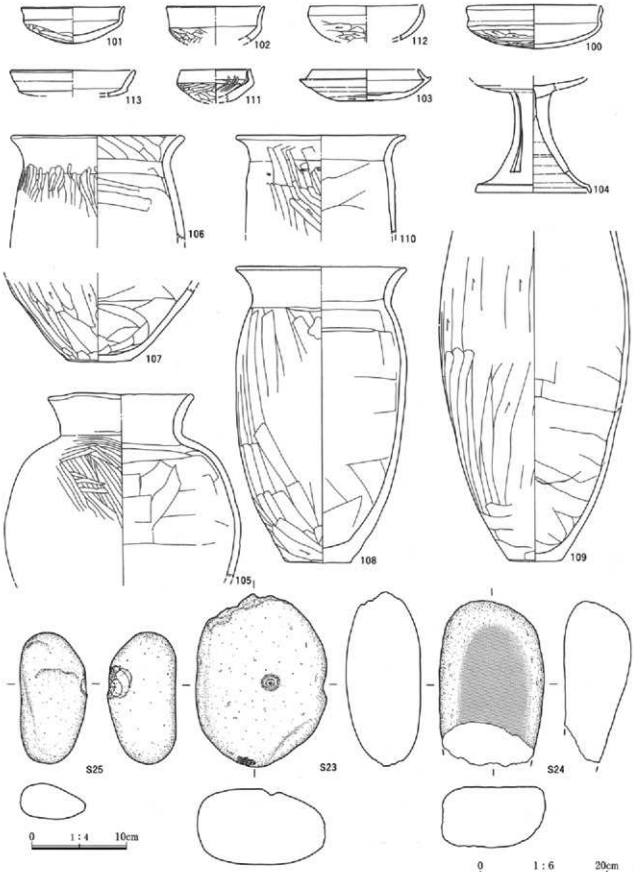
貯蔵穴　E－E'

1．暗褐色土　ローム粒および炭径1.5cmほどの塊状に少量含む。
2．暗褐色土　１層に類似するがやや黒色味あり。
3．黄褐色土　ローム土体で暗褐色土をマーブル状に混じる。
4．暗褐色土　１層に類似。２層より黒色味あり。ローム粒は１・２層より多く均一に含む。
5．暗褐色土　１層に類似。４層より黒色味あり。

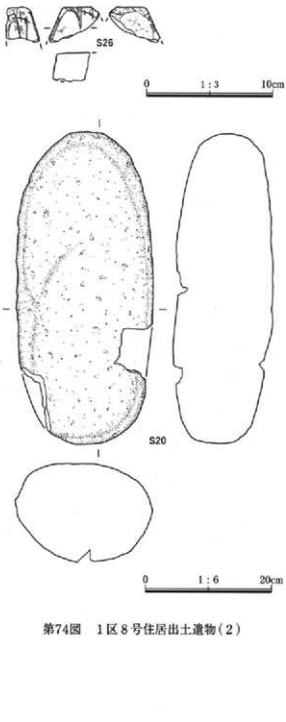
P６　H－H'

1．暗黄褐色土　ローム粒を少量含む。
2．黄褐色土　ローム粒を少量含む。
3．明黄褐色土　やや粘性あり。

第72図　１区８号住居



第73図　1区8号住居出土遺物（1）



第74図　１区８号住居出土遺物（２）

１区９号住居

（第75～77図　PL24～26·86　遺物観察表P.215·216·225）

位置　88－C・D－７・８G　　**形状**　不正方形

重複　北東壁の一部を接して先行する12号住居に重複している。

規模　長軸4.82m　短軸4.62m　残存壁高0.67m

面積　16.45m²　　**短軸方位**　N－60°－E

竈　住居東壁中央よりやや南寄りに竈が構築されていた。確認長1.17m、燃焼部幅0.39m。袖の残存長は向かって右側が0.89m、左が0.79m。屋外に0.26m突出して、燃焼部・煙道部が残っていた。竈燃焼部からは自然礫１点が出土している。竈焚き口部には完形に近い土師器坏(121・125)がそれぞれ15cm、20cm使用面から浮いた状態で出土した。竈右袖先端には土師器小型甕(127)が床面上８cmで出土している。袖芯にしていた可能性もある。

柱穴　ピットは床面で５本が検出されたが、主柱穴と考えられる規格性のある配置ではない。Ｐ１とＰ５は西壁に沿った対称的な位置にあるが、それに対応する東側の２本が検出されなかった。ピット５本の規模(長軸×短軸×深さ)は、Ｐ１が0.23×0.23×0.06m、Ｐ２が0.26×0.20×0.12m、Ｐ３が0.25×0.21×0.10m、Ｐ４が0.44×0.33×0.54m、Ｐ５が0.22×0.21×0.21mである。Ｐ４を除いていずれも小型で浅い。

周溝　周溝は検出されなかった。

貯蔵穴　南東隅に長軸0.47m、短軸0.34m、深さ0.60mの楕円形の貯蔵穴が検出された。北東縁には完形の土師器坏４個体（114・115・116・117）と、２個体(118・119)が重なった状態で並んで出土した。また南西縁には土師器甕(128)が貯蔵穴に落ち込むように出土した。

床面　床面は平坦で、中央部は堅く締まっていた。

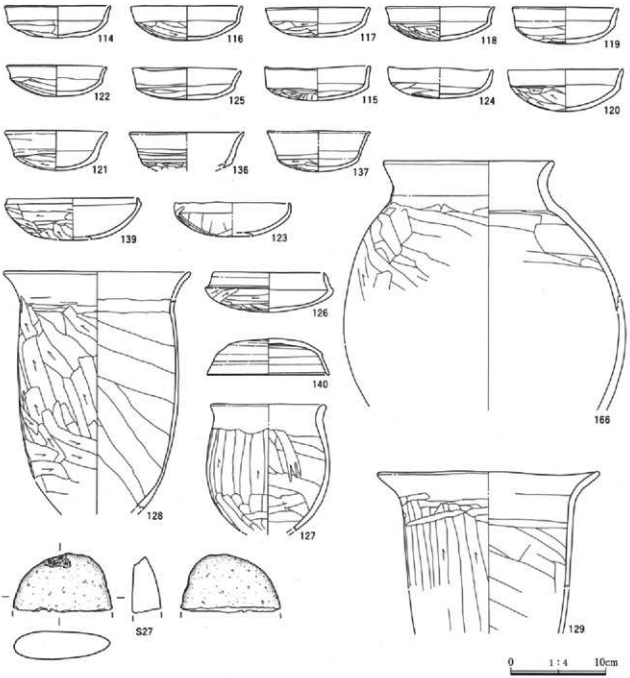
埋没土　ローム粒、少量の炭化物粒、焼土粒を含む暗褐色土で埋まっていた。

掘り方　全体に凹凸がある。中央部が0.10mほど不定形に掘り込まれていた。また掘り方面で先行する12号住居の主柱穴３本を検出した。

北西壁付近で検出された方形の土坑は、埋没土層から縄文時代の陥穴の可能性もあるが確証は得られなかった。同じ1区で検出された15号・16号土坑(いずれも陥穴)とは長軸方位が直交する位置になる。

遺物と出土状況　本住居の出土遺物は①9号住居床面近くで出土した遺物、②9号住居埋没土中と確認された遺物、③12号住居の埋没土中と区別できなかった遺物の3種に分けられる。図示した遺物は①を中心に選び、②・③の遺物でも同時期と思われる完形にちかいものを補足した。

土師器坏(114～119)は前述のように貯蔵穴から出土した。坏(120～126、139)はいずれも床面から数cm浮いた状態か、埋没土中から出土したものである。136は中央部の床面近くから出土した。土師器甕(129)は北西部の床面上7cmに散在していた破片が接合したものである。須恵器蓋(140)は埋没土中から出土



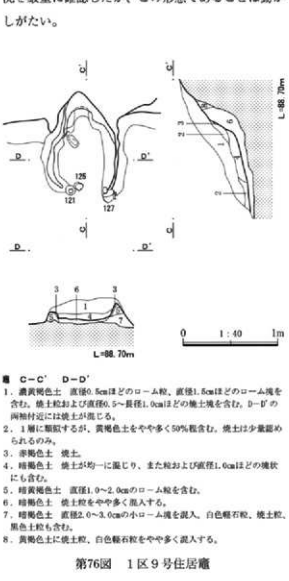
第75図　1区9号住居出土遺物

した。土師器壺(166)も南西部の床面から６cmほど浮いた破片が接合したものである。敲石(Ｓ27)は南西隅のＰ４近くで床面から17cm浮いた状態で出土した。縄文時代の石器との区別は難しい。

図化できた遺物のほかに、９号住居からは土師器破片176点、棒状礫３点、亜角礫１点、剥片２点が出土した。このほかに９号・12号住居埋没土出土遺物があり、縄文土器破片３点、土師器破片653点、須恵器破片17点、剥片13点にのぼる。

所見　竈・貯蔵穴周辺から出土した遺物から、今井道上Ⅱ遺跡４期の住居と考えられる。

本住居は古墳時代の竪穴住居に通有な方形ではない。調査の際にも埋没土の重複部分や地山の残存状況を厳重に確認したが、この形態であることは動かしがたい。



竈　Ｃ－Ｃ'　Ｄ－Ｄ'

1．濃黄褐色土　直径0.5cmほどのローム粒、直径1.5cmほどのローム塊を含む。焼土粒および直径0.5～長径1.0cmほどの焼土塊を含む。D－D'の両袖付近には焼土が高じる。
2．１層に類似するが、黄褐色土をやや多く50%程含む。焼土は少量認められるのみ。
3．赤褐色土　焼土。
4．暗褐色土　焼土が均一に混じり、また粒および直径1.0cmほどの焼状にも含む。
5．暗黄褐色土　直径1.0～2.0cmのローム粒を含む。
6．暗褐色土　焼土粒をやや多く混入する。
7．暗褐色土　直径2.0～3.0cmのホローム塊を混入、白色軽石粒、焼土粒、黒色土粒も含む。
8．黄褐色土に焼土粒、白色軽石粒をやや多く混入する。

第76図　１区９号住居竈

１区12号住居

（第77・78図　PL24～27-86-87　遺物観察表P.216-217-226）

位置　88－Ｃ～Ｅ－７・８Ｇ　　**形状**　正方形

重複　北東壁の一部が接して後出する９号住居と重複する。９号住居の方が深いため、12号住居の床面の半分以上が壊されている。

規模　長軸6.15m　短軸5.98m　残存壁高0.55m

面積　28.49m²　　**長軸方位**　Ｎ－64°－Ｅ

竈　本住居の竈は確認できなかった。本遺跡内の同時期の住居では北東壁あるいは東壁に竈が構築されることが多いが、北東壁には９号住居が重複しており本住居の竈は確認できなかった。

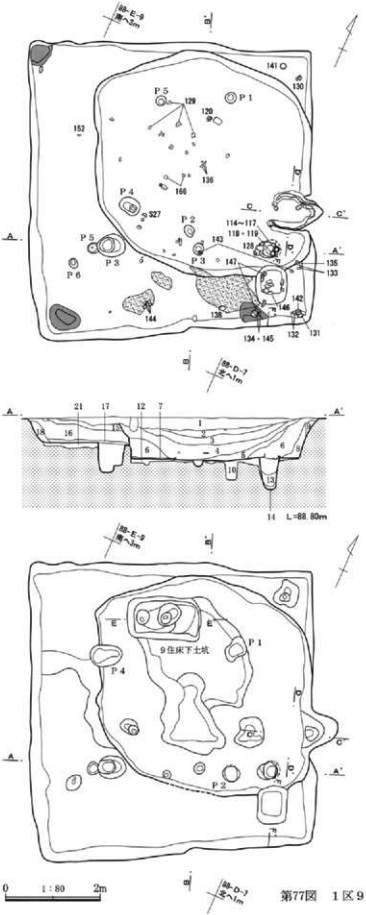
柱穴　主柱穴と思われるＰ３を床面で、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ４を掘り方面で検出した。規模（長軸×短軸×深さ）は、Ｐ１が0.56×0.37×0.42m、Ｐ２が0.36×0.33×0.72m、Ｐ３が0.59×0.45×0.59m、Ｐ４が0.69×0.46×0.31mである。またＰ３の南西側にＰ５(0.25×0.21×0.09m)、Ｐ６(0.21×0.17×0.31m)を検出したが、いずれも小型で浅い。

周溝　周溝は検出されなかった。

貯蔵穴　南東隅に長軸0.82m、短軸0.67m、深さ0.95mの隅丸長方形の貯蔵穴が検出された。貯蔵穴からは土師器甕(146)が底面上29cmのところで出土した。また土師器甕(147)は南東隅壁際床面上８cm出土の破片と貯蔵穴内出土の破片が接合した。また貯蔵穴内からは棒状礫７点が出土している。これらは埋没土上層から４点、縁から２点、底面直上で１点が出土した。いずれも自然礫で使用痕跡は認められなかった。

床面　床面は平坦である。貯蔵穴南側で掘り方調査時に床面として厚さ0.20mの粘土が貼られている部分を検出した。掘り方充塡土に粘土が使われていたものと考えられる。また、住居西隅・南隅に厚さ８～14cmの焼土が残されていた。

埋没土　上層はローム塊を多く含む暗褐色土で埋まっていた。床面に近いところはローム塊を多く含む暗褐色土で埋まっていた。



9号住居床下土坑　E－E'

1．黄褐色土　白色軽石粒、ハードローム大塊を多く含む。
2．暗黄褐色土　白色軽石粒、ハードローム大塊、暗褐色土混入。
3．にぶい黄褐色土　暗褐色土わずかに混入、ややしまりなし。
4．黄褐色土　ローム主体。
＊4層以下は土層の記載が無い。

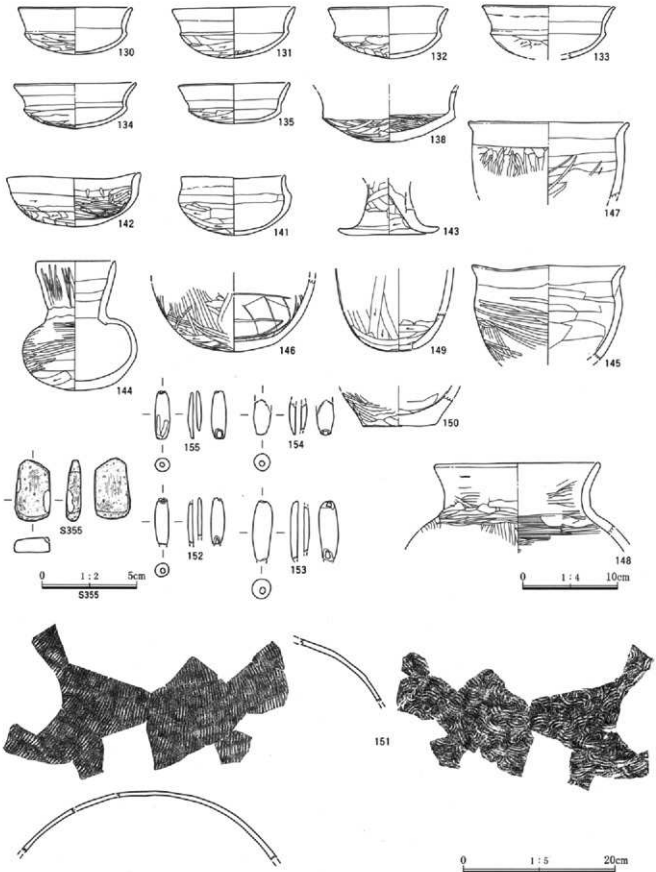
12号住居貯蔵穴　F－F'

1．暗黄褐色土　焼土粒、ローム粒をごく少量含む。
2．暗黄褐色土　ローム粒をごく少量含む。焼土粒、炭粒をやや多く含む。
3．暗黄褐色土　ローム粒をやや多く含む。焼土粒、炭粒をごく少量含む。

9・12号住居
A－A'　B－B'

1．黒褐色　白色軽石粒を多く含む。ローム粒少量混入。
2．暗褐色土　1層に類似するが、ロームの割合が1層よりやや高い。
3．やや明るい暗褐色土　1・2層に類似するが、さらにロームの割合が高い。焼土粒をわずかに含む。
4．暗褐色　白色軽石粒をやや少なく、炭粒、焼土粒少量混入。ローム土も含む。
5．暗褐色土　4層に類似。炭粒、焼土粒をやや多く含む。
6．やや明るい暗褐色　白色軽石粒を少量含み、炭粒、焼土粒、ローム粒を4層よりやや多く混入。
7．暗黄褐色土　ローム塊を多く含む。ややしまりなし。
8．暗褐色土　ロームをやや多く斑状に含み、ローム粒も含む。炭粒、焼土粒がやや多い。
9．褐色土　白色軽石粒を少量含む。ロームを斑状に含む。
10．暗黄褐色土　黄褐色土小粒、焼土粒を少量混入。
11．にぶい黄褐色土　暗黄褐色粘質土を斑状に含む。白色軽石粒、黒色土粒も少量混入。しまりなし。ボソボソ。
12．暗黄褐色土主体　白色軽石粒を含む。暗褐色土塊をやや多く含む。
13．暗黄褐色土　炭粒、焼土粒をごく少量含む。
14．黄褐色土　炭粒をごく少量含む。
15．やや明るい暗褐色土　ロームをやや多く含む。白色軽石粒をやや多く含む。炭粒をわずかに含む。
16．暗褐色土　白色軽石粒を多く含む。ローム粒を10層より少なく含む。炭粒、焼土粒を少量含む。
17．暗褐色土　ローム塊を20%、白色軽石粒を少量含む。
18．にぶい黄褐色土　暗褐色土塊を少量、ローム塊を多く含む。
19．灰褐色土　粘土主体。白色軽石粒、焼土粒、ローム粒、黒色土粒混入。しまりあり。
20．灰暗黄褐色土　暗黄褐色土主体。粘土、焼土粒、黒色土混入。
21．暗黄褐色土　黄褐色土と暗褐色土を含む。白色軽石粒混入。

第77図　1区9号・12号住居



第78図　１区12号住居出土遺物

掘り方　住居北西部が0.1mほど掘り込まれている。厚さ0.15～0.40mの掘り方充填土が検出された。

遺物と出土状況　本住居の出土遺物も①12号住居床面近くで出土した遺物、②12号住居埋没土中と確認された遺物、③9号住居の埋没土中と区別できなかった遺物の3種に分けられる。図示した遺物は①を中心に選び、②・③の遺物でも同時期と思われる完形にちかいものを補足した。

12号住居の遺物は貯蔵穴周辺に集中して出土した。土師器坏(131・132・142)は南東隅壁際床面上3cmで折り重なるように出土した。133・135は南東壁際で床面から8cm・12cm浮いたところから出土した。土師器坏(130・141)は北隅壁際床面上4～5cmで出土した。坩(144)は南東部の床面にあった厚さ5cmの粘土の直上から出土した。また掘り方充填土上層から土錘(152)が出土した。図示した153～155の土錘は9号・12号住居埋没土中から出土したが、同種の遺物であることから12号住居で扱うこととした。

図化できた遺物のほかに縄文土器破片2点、土師器破片129点、須恵器破片1点、棒状礫4点、扁平礫4点が出土した。このほかに9号・12号住居埋没土出土遺物があり、縄文土器破片3点、土師器破片653点、須恵器破片17点、剥片13点にのぼる。

所見　出土遺物から今井道上Ⅱ遺跡2期の住居と考えられる。

1区10号住居

(第79・80図　PL27～29・87・88　遺物観察表P.217・226)

位置　88－F－7・8G　　**形状**　台形

規模　長軸2.97～3.50m　短軸3.30m

残存壁高0.57m

面積　8.43m²　　**短軸方位**　N－48°－E

竈　住居北東壁ほぼ中央に竈が構築されていた。確認長1.09m、燃焼部幅0.36m。袖の残存長は向かって右側が0.78m、左が0.80m。煙道部が壁外に0.21m突出して残存していた。竈には燃焼部奥に脚痕部が欠損した土師器高坏(158)が倒立して使用面直上に置かれていた。支脚にしていたと思われる。両袖先端には礫が立てられており、袖芯にされていた。また袖石にわたされていたと推定される大きさの二ツ岳軽石が焚き口部をふさぐように使用面直上で出土した(PL88・S29)。焚き口天井部の芯に使われていたものと推定される。

柱穴　主柱穴は検出されなかったが、南東壁中央の壁際にP1を検出した。規模(長軸×短軸×深さ)は0.48×0.39×0.29mで隅丸方形である。用途は不明である。P1の北側には擦石(S28)が床面上4cmで出土した。

周溝　北東壁北半分から北西壁に沿って周溝が検出された。概ね幅は0.13m、深さは0.03～0.08mで、北西壁の南半は徐々に不明瞭になって検出されなかった。

貯蔵穴　東隅に長軸0.63m、短軸0.49m、深さ0.56mの隅丸長方形の貯蔵穴が検出された。貯蔵穴周辺には遺物が多量に出土した。貯蔵穴北縁には体部中位より下部を欠いた土師器壺(160)が床面上6cmで出土した。南西縁には土師器鉢(161)、甕(162)が床面上5cmで、甑(170)が床面直上で出土した。甑(164)は貯蔵穴内床面上13cmで出土した。

床面　床面は平坦である。竈前の床面は硬化していた。南西部床面には灰が残る地点が2か所あった。

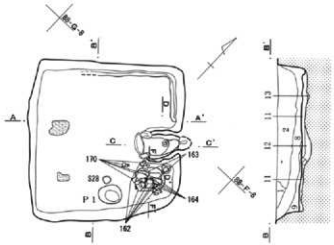
埋没土　白色軽石・焼土粒・ローム粒を含む暗褐色土で埋まっていた。西部には床面直上で炭化材が出土した。床面に灰が残っていた地点である。

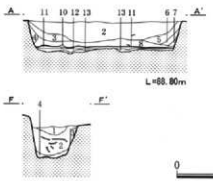
掘り方　全体に0.05～0.20mの掘り方充填土を確認した。特に中央部には長軸0.98m、短軸0.85m、深さ0.21mで隅丸方形の床下土坑が検出された。

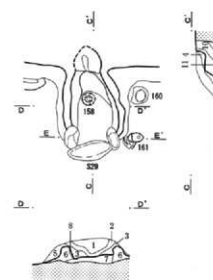
遺物と出土状況　遺物は竈および貯蔵穴周辺に集中して出土した。個々の出土状態は前述した通りである。また土師器坏(156・157)、土師器壺(159)、土錘(165)が埋没土中から出土した。

図化できた遺物のほかに縄文土器破片1点、土師器破片247点、須恵器破片1点、棒状礫1点が出土。

所見　出土遺物から今井道上Ⅱ遺跡2期の住居と考えられる。







1区10号住居

A－A'　B－B'

1．暗色土　直径1.0～3.0mmほどの白色軽石粒を含む。南側下位に長径1.5cmほどのローム塊を少量含む。
2．暗褐・黒褐色土　直径1.0～5.0mmほどの白色軽石粒を均一にやや多く含む。
3．暗褐色土　直径1.0～2.0mmほどの白色軽石粒・直径2.0～3.0cmの黄褐色砂質土小塊を少量含む。
4．黄褐色土　炭雑物をほとんど含まない。
5．暗褐色土　直径0.5～1.0mmの白色軽石粒、直径2.0～5.0mmの焼土粒、0.5～1.0cmの黄色土粒、長さ0.5～1.0cmの炭化材片を多く含む。
6．暗褐色土　炭化材、直径0.5～1.0cmの焼土粒を多く含み、直径0.5～1.0mmの白色軽石粒を少量含む。
7．暗褐色土　直径2.0～5.0mmの黄白色粘土塊を多く含む。
8．暗褐色土　直径1.0～2.0mmの白色軽石粒、直径1.0～2.0mmの焼土粒、直径0.5～1.0cmの炭化物片を多く含む。
9．暗褐色土　直径1.0～2.0mmの白色軽石粒、直径0.5～1.0cmの黄褐色土小塊を少量含む。
10．炭化材
11．黄色粘質土　直径2.0～3.0cmの黒色土塊を少量含む。
12．にぶい黄褐色土　褐色土、白色軽石粒、ローム粒を少量混入。しまりなし。
13．黄褐色土　褐色土を少量混入。

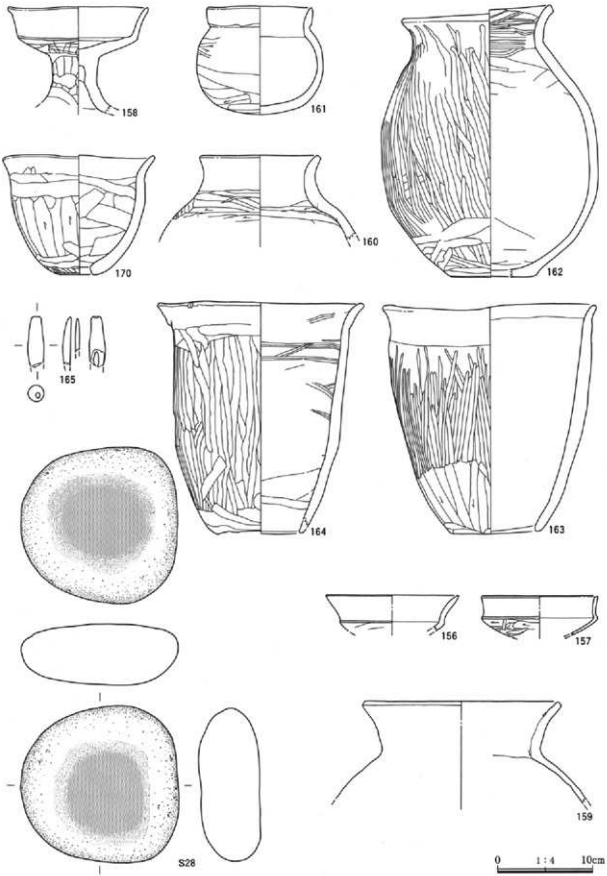
貯蔵穴　F－F'

1．暗黄褐色土　白色軽石粒、ロームを斑状に多く含み、焼土粒、炭粒を少量混入。ややしまりあり。
2．暗褐色土　黒褐色土を少量斑状に含み、やや大きい炭粒を少量含む。しまりなく、ぼそぼそしている。
3．暗黄褐色土　ハードロームと暗褐色土が斑状に混ざり合った土。
4．暗褐色土　炭粒とローム粒を少量含む。ややしまりなし。

竈　C－C'　D－D'

1．暗黄褐色土　直径8.0mmほどの焼土粒子を含む。直径1.0mmほどの白色軽石粒を特に上位に少量含む。ローム を少量含む。
2．暗褐色土　焼土粒および長径2.0cmほどの塊を均一に多く含む。
3．暗褐・黒褐色土　特に下位は炭が混じり黒色味帯びる。直径0.3mmほどの焼土粒を均一に含む。
4．1層に類似するが、焼土混じる。
5．暗褐色土　直径5.0mmほどの焼土粒、直径0.5～1.0cmほどのローム粒を少量含む。炭をごく少量混じる。
6．黄褐色土　白色軽石粒、暗黄褐色土を少量混入。焼土粒を少量含む。
7．暗黄褐色土　焼土粒をやや多く含む。白色軽石粒を少量含む。
8．赤褐色土　焼土。袖部の崩。
9．赤褐色土　焼土主体。暗褐色土ごく少量混入。
10．にぶい黄褐色土　焼土粒。暗褐色土粒を少量混入。
11．黄褐色土　焼土粒をわずかに混入。

第79図　1区10号住居



第80図　1区10号住居出土遺物

1区11号住居

（第81・82図　PL29・30・88　遺物観察表P.218・226）

位置　88－C－9G

形状　正方形

規模　長軸3.08m　短軸3.04m　残存壁高0.39m

面積　7.49㎡　　短軸方位　N－49°－E

竈　住居北東壁中央よりやや南寄りに竈が構築されていた。確認長1.03m、燃焼部幅0.48m。袖の残存長は向かって右側が0.63m、左が0.76m。煙道部が0.3m壁外に残存していた。竈からの出土遺物は破片がほとんどである。

柱穴　主柱穴は検出されなかった。

掘り方面で南東壁東部の壁際でP1を検出した。

周溝　床面では周溝は確認されなかったが、掘り方面で北西壁沿いに周溝状の掘り込みが検出された。

貯蔵穴　床面で確認できなかったが、掘り方面で住居南東隅に貯蔵穴と推定される土坑が検出された。

床面　床面は平坦である。

埋没土　ローム粒を含む黒・黄褐色土で埋まっていた。

掘り方　掘り方は北部がやや高く、西・南・東部がU字状に0.1m前後掘り込まれている。掘り方面では北西壁沿いに周溝状の掘り込みと南東隅に貯蔵穴と推定される土坑を検出した。周溝状の落ち込みは幅0.08～0.20m、深さ0.02～0.06mである。貯蔵穴と推定される土坑は長軸0.45m、短軸0.35m、深さ0.74mの楕円形である。南西縁から土師器高坏脚破片が出土したが混入と考えられる。

遺物と出土状況　出土遺物は少ない。図示した土師器坏(167)は竈左脇の床面直上で出土した。臼玉(S52・S53)は中央部床面直上で2個一緒に出土した。もう一つの臼玉(S54)は貯蔵穴埋没土中で出土した。

図示した遺物のほかに縄文土器破片2点、土師器破片60点、礫片2点が出土している。また南東壁際の床面直上や埋没土中から扁平礫3点、円礫1点、亜角礫1点が出土した。

所見　出土遺物から今井道上Ⅱ遺跡4期の住居と考えられる。

1区13号住居

（第81・83図　PL30・31・88　遺物観察表P.218・226）

位置　88－E・F－6・7G　　**形状**　縦長長方形

規模　長軸3.06m　短軸1.91～2.09m

残存壁高0.48m

面積　4.65㎡　　**長軸方位**　N－67°－E

竈　住居北東壁中央より北寄りに竈が構築されていた。確認長0.64m、燃焼部幅0.53m。袖の残存長は向かって右側が0.60m、左が0.60m。同袖先端には角礫が埋められており、袖芯にされていた。

柱穴　主柱穴は床面では確認できなかったが、掘り方面で主柱穴と推定される4本のピットを確認した。

周溝　周溝は検出されなかった。

貯蔵穴　貯蔵穴は検出されなかった。

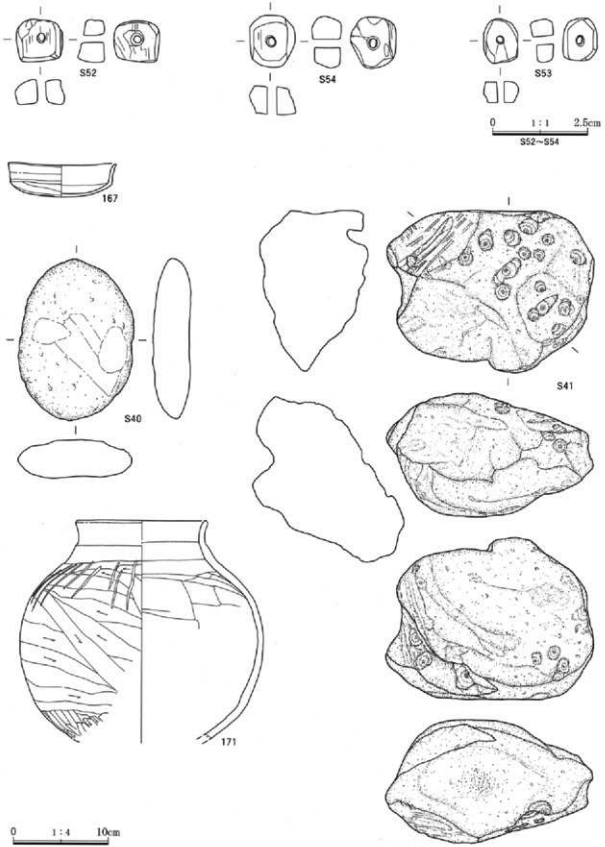
床面　床面は平坦であるが、南西半は床下が一段深く掘り込まれている状況を反映して、0.10mほど床面が下がっていた。

埋没土　白色軽石・焼土粒・ローム粒を含む暗褐色土・黄褐色土で埋まっていた。

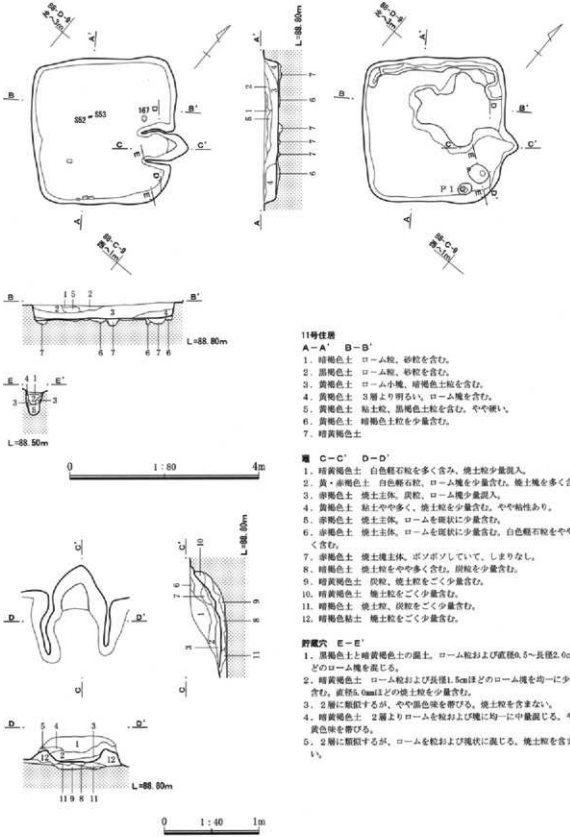
掘り方　北東壁から1.0～1.2m西にいったところから西側は深さ0.07～0.13mほど掘り込まれ、その内部に主柱穴と推定される4本のピット(P1・P2・P3・P4)を確認した。規模(長軸×短軸×深さ)は、P1が0.28×0.25×0.16m、P2が0.23×0.20×0.07m、P3が0.34×0.30×0.14m、P4が0.29×0.12×0.11mである。また、住居南東部には長軸0.60m、短軸0.50m、深さ0.24mの楕円形の床下土坑が検出された。

遺物と出土状況　床面上の遺物は南壁周辺に出土した。土師器甕(171)は南壁近くで床面上4㎝、扁平擦石(S40)は床面上7㎝で出土した。また多孔石(S41)は粗粒輝石安山岩製で埋没土中から出土した。不定型な礫面の一面に小孔が穿たれ、その隣の面には条線状の研磨痕跡が残る。図化できた遺物のほかに縄文土器破片2点、土師器破片67点、扁平礫1点、剥片3点が出土した。

所見　出土遺物からは住居の時期を特定できない。



第81図　1区11号・13号住居出土遺物



11号住居

A－A'　B－B'

1．暗褐色土　ローム粒、砂粒を含む。
2．黒褐色土　ローム粒、砂粒を含む。
3．黄褐色土　ローム小塊、暗褐色土粒を含む。
4．黄褐色土　３層より明るい。ローム塊を含む。
5．黄褐色土　粘土粒、黒褐色土粒を含む。やや硬い。
6．黄褐色土　暗褐色土粒を少量含む。
7．暗黄褐色土

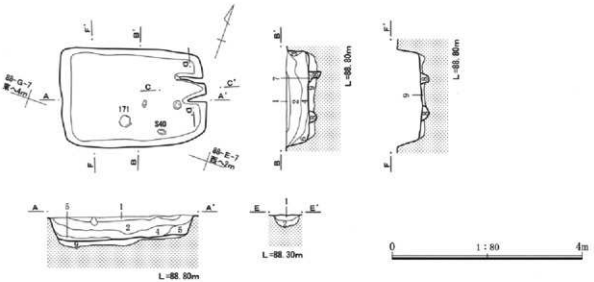
竈　C－C'　D－D'

1．暗黄褐色土　白色軽石粒を多く含み、焼土粒少量混入。
2．黄・赤褐色土　白色軽石粒、ローム塊を少量含む。焼土塊を多く含む。
3．赤褐色土　焼土主体。炭粒、ローム塊少量混入。
4．黄褐色土　粘土やや多く、焼土粒を少量含む。やや軟性あり。
5．赤褐色土　焼土主体。ロームを斑状に少量含む。
6．赤褐色土　焼土主体。ロームを斑状に少量含む。白色軽石粒をやや多く含む。
7．赤褐色土　焼土塊主体。ボソボソしていて、しまりなし。
8．暗褐色土　焼土粒をやや多く含む。炭粒を少量含む。
9．暗黄褐色土　炭粒、焼土粒をごく少量含む。
10．暗黄褐色土　焼土粒をごく少量含む。
11．暗褐色土　焼土粒、炭粒をごく少量含む。
12．暗褐色粘土　焼土粒をごく少量含む。

貯蔵穴　E－E'

1．黒褐色土と暗黄褐色土の混土。ローム粒および直径0.5～長径2.0cmほどのローム塊を混じる。
2．暗黄褐色土　ローム粒および長径1.5cmほどのローム塊を均一に少量含む。直径5.0cmほどの焼土粒を少量含む。
3．２層に類似するが、やや黒色味を帯びる。焼土粒を含まない。
4．暗黄褐色土　２層よりローム粒および塊に均一に中量混じる。やや黄色味を帯びる。
5．２層に類似するが、ローム粒および塊状に混じる。焼土粒を含まない。

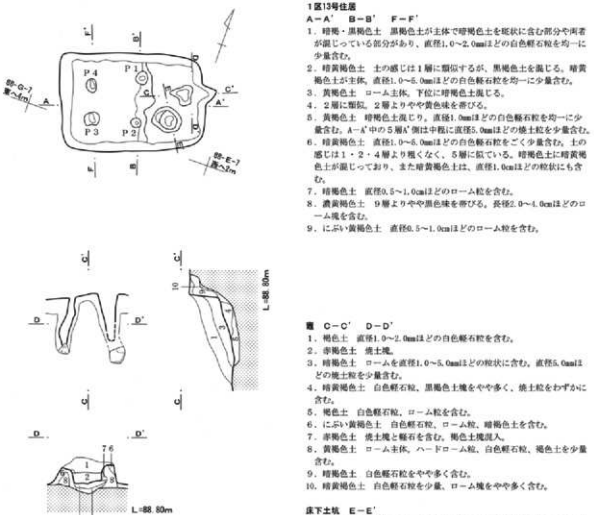
第82図　１区11号住居



1区13号住居

A－A'　B－B'　F－F'

1．暗褐・黒褐色土　黒褐色土が主体で暗褐色土を斑状に含む部分や両者が混じっている部分があり、直径1.0～2.0mmほどの白色軽石粒を均一に少量含む。
2．暗黄褐色土　土の感じは1層に類似するが、黒褐色土を混じる。暗黄褐色土が主体。直径1.0～5.0mmほどの白色軽石粒を均一に少量含む。
3．黄褐色土　ローム主体。下位に暗褐色土混じる。
4．2層に類似。2層よりやや黄色味を帯びる。
5．黄褐色土　暗褐色土混じり。直径1.0mmほどの白色軽石粒を均一に少量含む。A－A'中の5層A'側は中程に直径5.0mmほどの焼土粒を少量含む。
6．暗黄褐色土　直径1.0～5.0mmほどの白色軽石粒をごく少量含む。土の感じは1・2・4層より粗くなく、5層に似ている。暗褐色土に暗黄褐色土が混じっており、また暗黄褐色土は、直径1.0cmほどの粒状にも含む。
7．暗褐色土　直径0.5～1.0cmほどのローム粒を含む。
8．濃黄褐色土　9層よりやや黒色味を帯びる。長径2.0～4.0cmほどのローム塊を含む。
9．にぶい黄褐色土　直径0.5～1.0cmほどのローム粒を含む。



竈　C－C'　D－D'

1．褐色土　直径1.0～2.0mmほどの白色軽石粒を含む。
2．赤褐色土　焼土塊。
3．暗褐色土　ロームを直径1.0～5.0mmほどの粒状に含む。直径5.0mmほどの焼土粒を少量含む。
4．暗黄褐色土　白色軽石粒、黒褐色土塊をやや多く、焼土粒をわずかに含む。
5．褐色土　白色軽石粒、ローム粒を含む。
6．にぶい黄褐色土　白色軽石粒、ローム粒、暗褐色土を含む。
7．赤褐色土　焼土塊と軽石を含む。褐色土塊混入。
8．黄褐色土　ローム主体。ハードローム粒、白色軽石粒、褐色土を少量含む。
9．暗褐色土　白色軽石粒をやや多く含む。
10．暗黄褐色土　白色軽石粒を少量、ローム塊をやや多く含む。

床下土坑　E－E'

1．黄褐・濃黄褐色土　ローム混じりの土。特に上位に暗褐色土を少量混じる。また直径1.0cmほどのローム粒を含む。
2．濃黄褐・暗黄褐色土　直径0.5～1.0cmほどのローム粒を均一に含む。

第83図　1区13号住居

1区14号住居

（第84～86図　PL32・33・88　遺物観察表P.218・226）

位置　88－E・F－8～10G

形状　基本形は正方形であるが南壁より北壁の方が長くなっており台形を呈する。

規模　長軸4.54～5.06m　短軸4.92m
　　残存壁高0.35m

面積　21.91㎡　　**長軸方位**　N－56°－E

竈　住居北東壁中央より南寄りに竈が構築されていた。確認長1.07m、燃焼部幅0.47m。袖の残存長は向かって右側が0.85m、左が1.05m。燃焼部奥から右袖付け根にかけて掘乱が及び、使用面下位まで壊されている部分があった。燃焼部から土師器甕破片や棒状礫が出土している。

柱穴　床面で主柱穴と思われるP1～P4を検出した。規模（長軸×短軸×深さ）は、P1が0.25×0.18×0.53m、P2が0.27×0.26×0.57m、P3が0.20×0.18×0.63m、P4が0.33×0.30×0.63mである。また南西壁際中央に長軸0.43m、短軸0.29m、深さ0.06mの楕円形のP5を検出した。

周溝　周溝は検出されなかった。

貯蔵穴　東隅に貯蔵穴が検出された。直径0.68m、深さ0.85mの円形である。

床面　床面はほぼ平坦である。中央部には直径0.8mほどの掘乱孔があき、掘り方下位まで達している。貯蔵穴より南の南東壁沿いには周縁のやや高まった凹みがあり、壁沿いには床面直上の遺物が集中して出土した。凹みの西端には壁に接して、1号土坑が掘られていた。長軸0.68m、短軸0.66m、深さ0.18mの不正方形である。1号土坑と相対する北西壁際には2号土坑が掘られていた。長軸0.76m、短軸0.69m、深さ0.14mの楕円形の土坑である。底面直上で棒状礫が出土している。

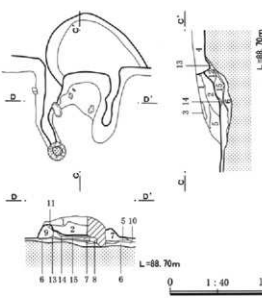
埋没土　焼土粒・白色軽石粒・ローム粒を含む暗褐色土で埋まっていた。

掘り方　全体的には底面にはほぼ平らで、厚さ0.02～0.10mの掘り方充填土が確認された。貯蔵穴南西側の南東壁沿いに、長軸0.64m、短軸0.44m、深さ0.14mの楕円形のピット（P6）が検出された。

遺物と出土状況　竈周辺・南東壁沿いに集中して遺物が出土した。土師器坏（174・175）、甕（179）は南東部壁際床面直上で、坏（173）は1号土坑底面直上で、坏（172）は南西壁際の床面上2㎝で出土した。土師器鉢（176）、土師器坏（177・178）や土師器小型甕（278）は埋没土中からの出土である。

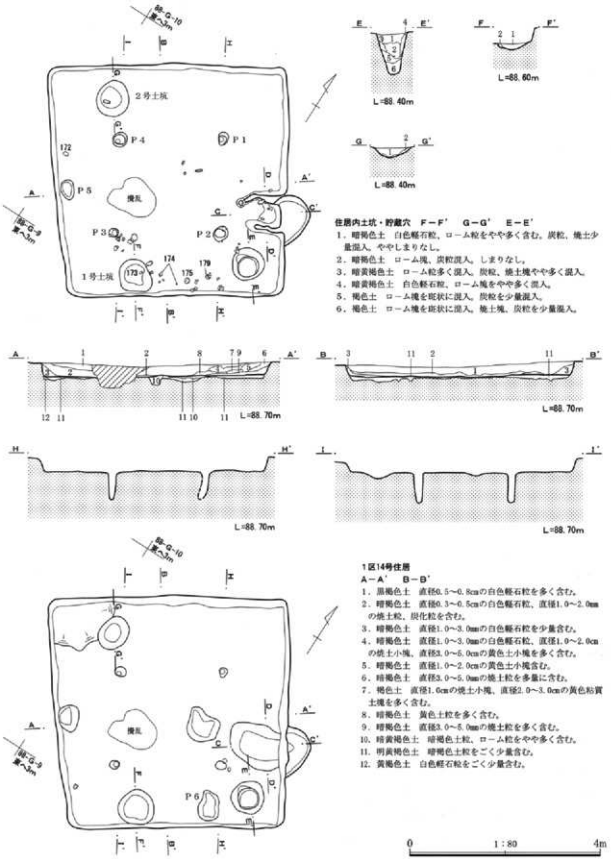
図化できた遺物のほかに縄文土器破片10点、土師器破片271点、須恵器破片2点、粘土塊2点、棒状礫3点、扁平礫3点、礫片1点が出土した。

所見　出土遺物から今井道上Ⅱ遺跡2期の住居と考えられる。

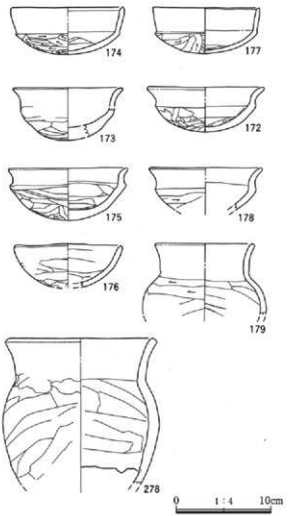


竈　C－C'　D－D'
1．褐色土　直径1.0～5.0mmほどの焼土粒を含む。直径5.0mmほどのローム粒を少量含む。
2．暗黄褐色土　直径1.0～5.0mmほどの焼土粒を均一に含む。
3．にぶい黄褐色土　ローム主体。にぶい黄褐色土を混じる。硬くしまる。
4．濃黄褐色土　2層より黒色味少なく、黄色味を帯びる。直径1.0～5.0mmほどの焼土粒を均一に含む。
5．濃黄褐色土　4層に類似した色調。にぶい黄褐色土を直径0.5～1.0cmほどの粒状に少量含む。焼土粒および直径0.5～長径3.0cmほどの塊を均一にやや多く含む。
6．明黄褐色土　暗褐色土粒をごく少量含む。
7．ローム塊。
8．暗褐色土　焼土粒、ローム粒をごく少量含む。
9．暗褐色土粘土　ローム粒、焼土粒をごく少量含む。
10．暗黄褐色土　ローム粒を多く含む。
11．焼土層
12．暗黄褐色土　焼土粒、炭粒、ローム粒をごく少量含む。
13．黒色土　ローム粒をごく少量含む。
14．暗褐色土　焼土粒、炭粒を多く含む。ローム粒をごく少量含む。
15．暗褐色土　焼土粒を多く含む。炭粒を少量含む。

第84図　1区14号住居竈



第85図　1区14号住居



第86図　１区14号住居出土遺物

１区15号住居

（第87～89図　PL33～35・88　遺物観察表P.218・226）

位置　88－C・D－11・12G

形状　正方形。北東壁の一部は帯状に掘られた攪乱によって床面まで壊されているが、全体形状は推定できる。

規模　長軸4.97m　短軸4.55m　残存壁高0.49m

面積　19.53㎡　　**長軸方位**　N－60°－E

竈　住居北東壁ほぼ中央に竈が構築されていた。確認長0.83m、燃焼部幅0.37m。袖の残存長は向かって右側が復元して0.87m、左が0.72m。壁外への突出部は攪乱によって壊されているために不明である。

壁のラインから内側へ0.33～0.18mの範囲に厚さ0.14mの粘土ブロックが残っていた。竈使用面および側面から連続する焼土面が内側に認められることから、竈の天井部が残存しているものと推定した。

右袖先端には礫が立てられており、袖芯にしたものと推定される。袖の前には角礫が出土しているが竈構築材の一部であろう。

柱穴　主柱穴と思われるＰ１～Ｐ４を床面で検出した。規模（長軸×短軸×深さ）は、Ｐ１が0.44×0.39×0.74m、Ｐ２が0.49×0.44×0.56m、Ｐ３が0.50×0.50×0.50m、Ｐ４が0.35×0.30×0.64mである。

周溝　周溝は検出されなかった。

貯蔵穴　北隅に長軸0.84m、短軸0.70m、深さ0.47mの隅丸長方形の貯蔵穴が検出された。貯蔵穴の掘り方は２段になっており、0.13mほど掘り窪めたテラス状の面から西側にやや寄った位置に長軸0.58m、短軸0.41m、深さ0.69mの楕円形の土坑が掘り込まれていた。

床面　床面は平坦であるが、中央部に掘削機械による攪乱が及んで床面が壊されている。

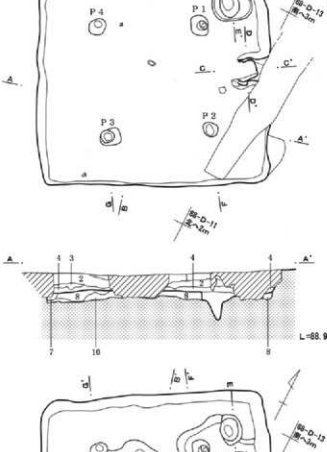
埋没土　白色軽石・焼土粒・ローム粒を含む褐色土で埋まっていた。

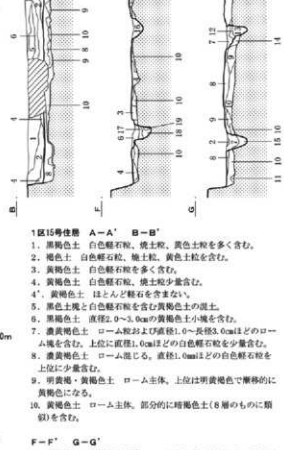
掘り方　南東壁から南西壁沿い、Ｐ４からＰ１にかけて、東隅が幅１mほどの帯状に周囲よりも0.1m前後の深さに掘り込まれていた。また、中央部には長軸1.24m、短軸0.77m、深さ0.12～0.20mの楕円形の床下土坑が検出された。全体としては厚さ0.10～0.25mの掘り方充塡土が確認できた。

遺物と出土状況　出土遺物はあまり多くない。床面に近い土器は図示できない破片のみであった。図示した土師器坏(180)は埋没土中の出土である。

図示できた遺物の他に縄文土器破片４点、土師器破片42点、棒状礫２点、大型礫１点、礫片１点、剥片２点が出土した。

所見　出土遺物が少ないので時期を決めるのは困難であるが、概ね今井遺上Ⅱ遺跡３期の住居と考えられる。





1区15号住居　A－A'　B－B'

1．黒褐色土　白色軽石粒、焼土粒、黄色土粒を多く含む。
2．褐色土　白色軽石粒、焼土粒、黄色土粒を含む。
3．黄褐色土　白色軽石粒を多く含む。
4．黄褐色土　白色軽石粒、焼土粒少量含む。
4'．黄褐色土　ほとんど軽石を含まない。
5．黒色土塊と白色軽石粒を含む黄褐色土の混土。
6．黒褐色土　直径2.0～3.0cmの黄褐色土小塊を含む。
7．濃黄褐色土　ローム粒および直径1.0～長径3.0cmほどのローム塊を含む。上位に直径1.0cmほどの白色軽石粒を少量含む。
8．濃黄褐色土　ローム混じる。直径1.0mmほどの白色軽石粒を上位に少量含む。
9．明黄褐・黄褐色土　ローム主体。上位は明黄褐色で層移的に黄褐色になる。
10．黄褐色土　ローム主体。部分的に暗褐色土(8層のものに類似)を含む。

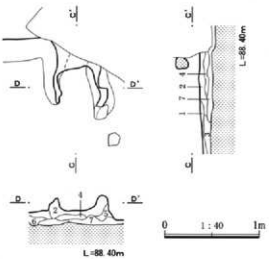
F－F'　G－G'

1．撹乱土？　暗褐色土主体。ローム粒および直径0.5～長径3.0cmほどのローム塊を均一に多く含む。
2．濃黄褐色土　直径1.0mmほどの白色軽石粒少量、直径1.0mmほどの焼土粒をごく少量含む。
3．濃黄褐色土　暗褐色土が混じり、10層よりやや黒色味あり。直径1.0mmほどの白色軽石粒を含む。
4．濃黄褐色土　暗褐色土混じり。ハードロームを斑状に含む。ハードローム中に直径1.0～5.0mmほどの白色軽石粒を含む。
5．褐色土　黄褐色土混じり。また中位にハードローム粒および直径0.5～1.0cmほどのローム塊を含む。
6．褐色土　黄褐色土混じり。また直径0.5～1.5cmほどのローム粒、直径1.0mmほどの白色軽石粒を含む。
7．濃黄褐色土　ローム混じる。直径1.0mmほどの白色軽石粒を上位に少量含む。
8．6層に類似するが、やや黄色味を帯びる。
9．明黄褐・黄褐色土　ローム主体。上位は明黄褐色で漸移的に黄褐色土になる。
10．黄褐色土　ローム主体。部分的に暗褐色土(8層のものに類似)を含む。
11．黄褐色土　ローム主体。10層より混じり少なく、黄色味あり。
12．濃黄褐・暗黄褐色土　北側は濃黄褐色土主体で、南側に行くに従い暗黄褐色土主体で、濃黄褐色土を斑状に含むようになる。
13．濃黄褐色土　ややサラサラした感じの土で、ややしまり弱い。
14．13層に類似。上位は比較して黒色味なくなる。
15．暗黄褐色土　13層に似る。
16．暗褐色土　黄褐色土混じり。
17．濃黄褐色土
18．13層に類似。
19．13層に類似するが、しまっている。

貯蔵穴　E－E'

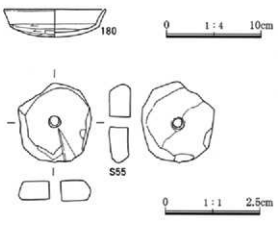
1．暗褐色土　白色軽石粒、ローム粒を多く含む。炭粒、焼土粒をわずかに混入。
2．暗黄褐色土　ローム粒をやや多く含み、白色軽石粒を少量含む。
3．にぶい黄褐色土　白色軽石粒、炭粒をわずかに混入。ロームを斑状に混入。
4．明黄褐色土　暗黄褐色土塊(ハードローム)を混入。

第87図　1区15号住居



竈　C－C'　D－D'
1．にぶい黄褐色土　直径1.0～2.0mmほどの焼土粒を均一に含む。
2．褐色土　直径1.0～5.0mmほどの黄褐色土を含む。直径1.0～5.0mmほどの焼土粒を特に使用面付近に含む。E－E'のベルト反対側中程では焼土主体。上位(袖付近)は直径1.0mmほどの白色軽石粒を含む。
3．黄褐色土主体でにぶい黄褐色土を混じる。
4．暗黄褐色土　暗褐色土と黄褐色土を斑状に含む。直径5.0mmほどの焼土粒を少量含む。
5．暗黄褐色土　黄褐色土を混じる。直径1.0mmほどの白色軽石粒を含む。
6．黄褐色土　ローム主体。
7．濃黄褐色土　ローム主体で6層より暗い色調。

第88図　１区15号住居竈



第89図　１区15号住居出土遺物

１区16号住居

（第90・91図　PL35～37・89　遺物観察表P.218・226）

位置　88－G・H－10・11G

形状　横長長方形。東壁南半は攪乱によって壊されていたが、南東隅がかろうじて残っており、形状を確認することができた。

規模　長軸4.45m　短軸3.59m　残存壁高0.62m

面積　14.35㎡　　**短軸方位**　N－68°－E

竈　住居北東壁中央より南寄りに竈が構築されていた。確認長0.62m、燃焼部幅0.52m。袖の残存は攪乱が及んでいるため、認められなかった。使用面と考えられる焼土面が検出されたのみである。焼土面の東端には割れた円礫が焼土面直上で出土している。竈構築材の一部と推定される。

柱穴　床面では主柱穴は検出されなかった。掘り方面で北西壁に沿って並ぶＰ１とＰ２を検出したが、主柱穴と断定できない。

周溝　周溝はほぼ全周する。概ね幅は0.15～0.25m、深さ0.01～0.10mである。

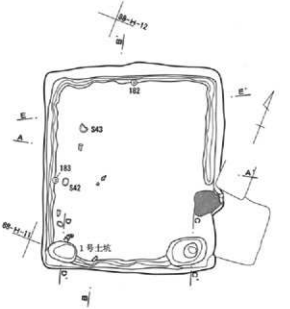
貯蔵穴　東隅に長軸0.84m、短軸0.59m、深さ0.65mの楕円形貯蔵穴が検出された。掘り込みは２段になっており、0.03～0.05m掘り込んだテラス状の面から、やや北東に偏った位置に長軸0.33m、短軸0.30m、深さ0.42mの円形の土坑が掘り込まれている。

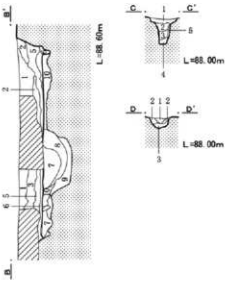
床面　ほぼ平坦であるが中央やや南西寄りが窪んでいた。床下土坑の位置と一致していることからその影響で沈んだものと考えられる。

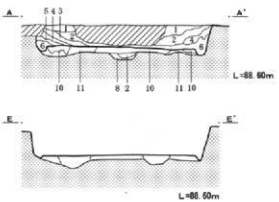
南西隅には長軸0.61m、短軸0.42m、深さ0.20mの楕円形の１号土坑が検出された。北縁には土師器甕破片が出土している。

埋没土　白色軽石粒・焼土粒・ローム粒を含む黒褐色土・褐色土で埋まっていた。

掘り方　四周の壁沿いが幅0.60～0.25m、深さ0.10mほど深く掘り込まれていた。その結果中央やや南西側に長軸３m、短軸２mの三角形に掘り残された平坦面ができている。平坦面の中央には長軸1.53m、短軸1.30m、深さ0.48mの不正楕円形の床下土坑が掘り込まれていた。



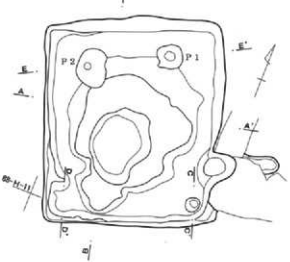




1区16号住居

A－A'　B－B'

1．暗褐色土　直径0.3～0.5cmの白色軽石粒、直径1.0mmの黄色土粒を多量に含む。
2．暗褐色土　直径0.3～0.5cmの白色軽石粒を含む。直径3.0～5.0cmの黒色土塊、直径2.0～3.0cmの黄色土塊を含む。
3．黄褐色土　黄色土粒、直径0.5～1.0cmの小塊、直径1.0～3.0mmの白色軽石粒を含む。
4．暗褐色土　直径1.0～3.0mmの白色軽石粒、直径1.0mmの焼土粒を含む。
5．黒色土　直径3.0～5.0mmの白色軽石粒、直径1.0～3.0cmの黄褐色土小塊を含む。
6．暗褐色土　直径1.0～5.0cmの黄褐色土小塊を含む。
7．暗褐色土　大および中ローム塊を多量に、黒色土少量混入。
8．暗褐色土　大および中ローム塊をやや多く含む。黒色土粒、ローム粒を少量含む。
9．褐色土　ローム塊をやや多く含む。
10．暗黄褐色土　白色軽石粒を少量含む。直径2.0～3.0cmの黒褐色塊を少量含む。硬くしまっている。
11．暗黄褐色土　小中ローム塊が少量混入。



貯蔵穴　C－C'

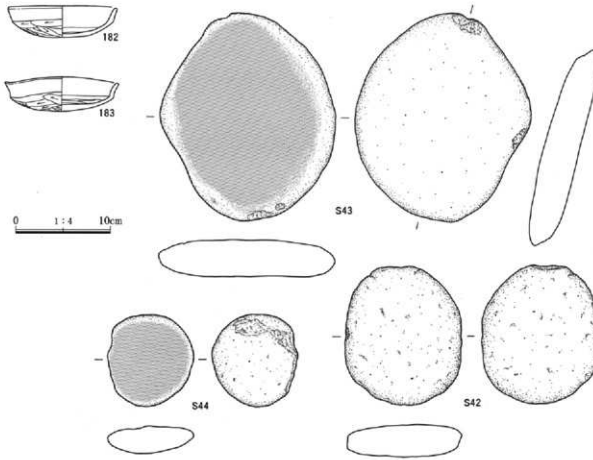
1．黒褐色砂質土　ローム粒を少量含む。
2．暗黄褐色土　直径1.0cmのローム塊をごく少量含む。
3．黄褐色土　直径0.5cmのローム塊をごく少量含む。
4．暗黄褐色土　2層よりやや暗い。
5．明黄褐色土

住居内土坑　D－D'

1．黒色砂質土　直径0.5cmのローム塊をごく少量含む。
2．暗黄褐色土　直径0.2cmのローム塊をごく少量含む。
3．赤褐色土　直径1.0cmのローム塊をごく少量含む。

0　1：80　4m

第90図　1区16号住居



第91図　1区16号住居出土遺物

また掘り方面で北西壁に沿って並ぶＰ１とＰ２を検出した。規模(長軸×短軸×深さ)は、Ｐ１が0.58×0.50×0.13m、Ｐ２が0.83×0.62×0.10mである。これに相対する南東壁沿いにはピットは検出されなかった。

遺物と出土状況　床面近くの遺物は西壁際に集中して出土した。図示した土師器坏(182)は北壁中央壁際の周溝内側の縁から床面上３㎝で出土した。坏(183)は西壁際周溝内側の縁床面上２㎝で出土した。扁平擦石(Ｓ43)は北西部床面上３㎝で、扁平礫(Ｓ42)は西部床面直上で出土した。小型扁平擦石(Ｓ44)は埋没土中から出土した。図化できた遺物のほかに、縄文土器破片36点、土師器破片36点、須恵器破片１点、棒状礫４点、扁平礫２点、剥片１点、礫片１点が出土した。

所見　出土遺物から今井遺上Ⅱ遺跡３期の住居と考えられる。

１区17号住居

(第92・93図　PL37～39・89　遺物観察表P.218・219・227)

位置　88－Ｂ・Ｃ－13・14Ｇ

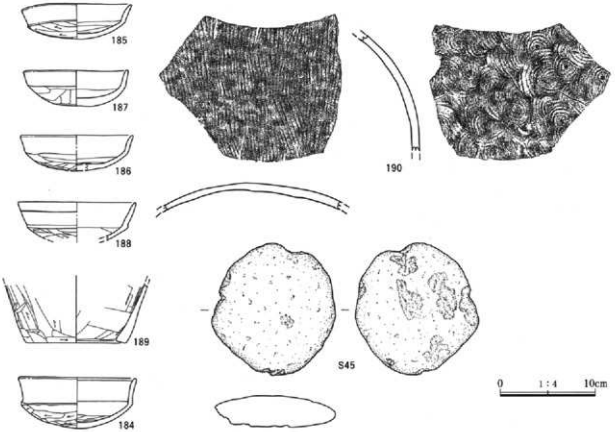
形状　台形。基本形は正方形であるが西壁より東壁の方が長くなっている。

規模　長軸3.12～3.45m　短軸3.21m
　　残存壁高0.53m

面積　9.18㎡　　**長軸方位**　Ｎ－2°－Ｅ

竈　住居東壁中央より南寄りに竈が構築されていた。確認長0.75m、燃焼部幅0.56m。袖の残存長は向かって右側が0.23m、左が０m。掘り方調査時に煙道部と思われる掘り込みが0.99m壁外に伸びているのを検出した。

柱穴　主柱穴と思われるＰ１からＰ３を床面で検出した。規模(長軸×短軸×深さ)は、Ｐ１が0.27×0.26×0.84m、Ｐ２が0.37×0.30×0.25m、Ｐ３が0.27



第92図　1区17号住居出土遺物

×0.27×0.16mである。もう1本南東部にあったと考えられる主柱穴は床面調査でも、掘り方面調査でも確認することができなかった。

周溝　周溝は検出されなかった。

貯蔵穴　南東隅に長軸0.70m、短軸0.47m、深さ0.38mの隅丸長方形の貯蔵穴を検出した。北縁には床面から0.05mほど掘り下げたテラス状の面があり、そこから東側に寄った位置に長軸0.53m、短軸0.48m、深さ0.31mの楕円形の土坑が掘られている。西縁からは角礫が床面直上で出土したが、使用痕はない。

床面　床面は平坦である。

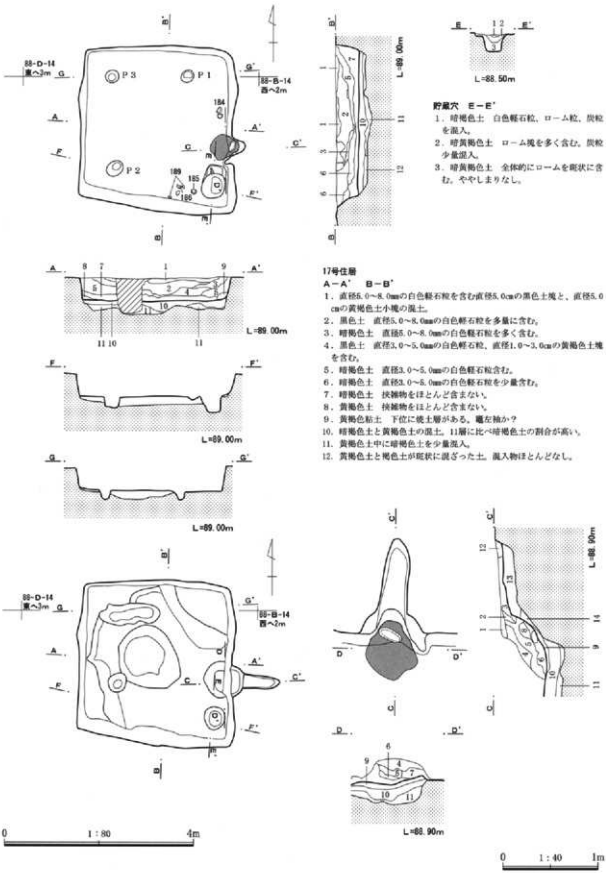
埋没土　白色軽石・焼土粒・ローム粒を含む暗褐色土で埋まっていた。

掘り方　貯蔵穴が掘られている南東隅を除く三隅が浅く、内側が0.10mほど深く掘り込まれていた。さらに中央部やや西寄りに長軸1.46m、短軸1.22m、深さ0.10mの楕円形に床下土坑が掘り込まれていた。

遺物と出土状況　出土遺物は竈および貯蔵穴周辺に集中して出土した。図示した土師器坏(184・185・186)はそれぞれ、竈左東壁際床面上4㎝、貯蔵穴西脇床面上2㎝、南壁中央部近く床面上3㎝で出土した。187・188は埋没土中出土である。土師器甑底部破片(189)が南壁際床面直上で出土した。また須恵器甕破片(190)が埋没土中から出土している。扁平礫(S45)は顕著な使用痕跡がない。しかし本遺跡には扁平礫を出土する住居が多く、大きさもいくつかのパターンを揃えていることから、選択的に持ち込んでいる可能性が高い。

図示できた遺物のほかに、縄文土器破片5点、土師器破片58点、須恵器破片2点、棒状礫1点、大型軽石1点、剥片2点、礫片3点が出土した。

所見　出土遺物から今井道上Ⅱ遺跡4期の住居と考えられる。土師器坏(184)はやや古い様相を呈しており混入と判断した。



貯蔵穴　E－E'

1．暗褐色土　白色軽石粒，ローム粒，炭粒を混入。
2．暗黄褐色土　ローム塊を多く含む。炭粒少量混入。
3．暗黄褐色土　全体的にロームを斑状に含む。ややしまりなし。

17号住居

A－A'　B－B'

1．直径5.0～8.0mmの白色軽石粒を含む直径5.0cmの黒色土塊と，直径5.0cmの黄褐色土小塊の混土。
2．黒色土　直径5.0～8.0mmの白色軽石粒を多量に含む。
3．暗褐色土　直径5.0～8.0mmの白色軽石粒を多く含む。
4．黒色土　直径5.0～5.0mmの白色軽石粒，直径1.0～3.0cmの黄褐色土塊を含む。
5．暗褐色土　直径3.0～5.0mmの白色軽石粒含む。
6．暗褐色土　直径3.0～5.0mmの白色軽石粒を少量含む。
7．暗褐色土　焼補物をほとんど含まない。
8．黄褐色土　焼補物をほとんど含まない。
9．黄褐色粘土　下位に焼土層がある。竈左袖か？
10．暗褐色土と黄褐色土の混土。11層に比べ暗褐色土の割合が高い。
11．黄褐色土中に暗褐色土を少量混入。
12．黄褐色土と褐色土が斑状に混ざった土。混入物ほとんどなし。

第93図　1区17号住居

■ C－C′　D－D′
1．暗黄褐色土　直径1.0mほどの白色軽石粒を少量含む。
2．暗黄褐色土　1層に類似するがやや黒色味を帯びる。
3．暗黄褐色土　1層に類似。
4．暗黄褐色土　ロームを斑状に含む。
5．濃黄褐色土　ロームを斑状に含む。
6．暗褐色土　ローム塊じり、また斑状に含む。直径1.0～8.0mの焼土粒を含む。
7．濃黄褐色土　ローム粒および直径1.0cmほどのローム塊をやや多く含む。
8．暗褐色土　ロームを斑状に含む。直径5.0mmほどの焼土粒をごく少量含む。
9．暗黄褐色土　直径5.0mmほど、1.0mm以下の焼土粒を均一に少量含む。
10．暗褐色土　直径5.0～8.0mmほどのローム粒を均一に含む。
11．にぶい黄褐色土　ローム主体。暗褐色土を斑状に含む。
12．3層の土に、焼土塊、ローム塊を含む。
13．褐色土　ローム塊、ローム粒、白色軽石粒、焼土粒を混入。
14．褐色土　軽石などをほとんど含まない。焼土塊を多く含む。

1区18号住居

（第94～97図　PL39～42・89・90　遺物観察表P.219・227）

位置　87－R・S－11・12G

形状　横長長方形。西壁が東壁よりやや長い。

規模　長軸3.95～4.23m　短軸3.50m
残存壁高0.47m

面積　12.49m²　**長軸方位**　N－1°－E

竈　住居西壁中央よりやや南寄りに竈が構築されていた。また、東壁中央やや南寄りに竈がつくられていた痕跡が検出された。前者を1号竈、後者を2号竈として報告する。

1号竈の確認長0.82m、燃焼部幅0.60m。袖の残存長は向かって右側が0.67m、左が0.81m。煙道部は竈脇に攪乱があることから、不明である。1号竈燃焼部および周辺からは土器が多量に出土した。燃焼部には甕が、周辺には坏などの供膳具が多い。土師器甕(204・206)はそれぞれ竈右袖・左袖の芯として逆位で立てられていた。甕(207・208)はその間に横たわっていたことから、袖の上に渡されていた焚き口天井部に利用されていたものと推定される。また甕(205)は燃焼部の使用面から8cmほど浮いて横立した状態で出土した。須恵器甑(202)は竈前床面上8cmで出土した。1号竈の1mほど右側壁際には土師器甑(210)が床面直上で出土した。竈左側の壁際には10個体の土師器坏が3カ所に積み重ねたような形で床面直上～床面上4cmで出土した。いずれも厨房空間を連想させる出土状態である。

2号竈は焼土が床面に散在していたのみで、袖の残存もなかったが、壁外に伸びる煙道部の掘り込みが検出されたことを考え合わせて、竈と判断した。2号竈は東壁の1号竈に対称的な位置にある。

柱穴　主柱穴と思われるピットは検出されなかった。

周溝　東壁北1/3～北壁～西壁北1/3のコの字形に周溝が巡っていた。幅は0.13m、深さは0.03～0.06m。

貯蔵穴　1号竈の左横住居南西隅と、2号竈の右横住居南東隅に貯蔵穴が検出された。前者を1号貯蔵穴、後者を2号貯蔵穴とする。

1号貯蔵穴は長軸0.65m、短軸0.49m、深さ0.33mの隅丸長方形である。南縁の壁際には土師器坏(191・192)が床面から6～7cm浮いた状態で出土した。位置関係からして1号貯蔵穴は1号竈に伴うと考えられる。2号貯蔵穴は長軸0.64m、短軸0.52m、深さ0.15mの楕円形である。2号貯蔵穴は2号竈に伴うと考えられる。

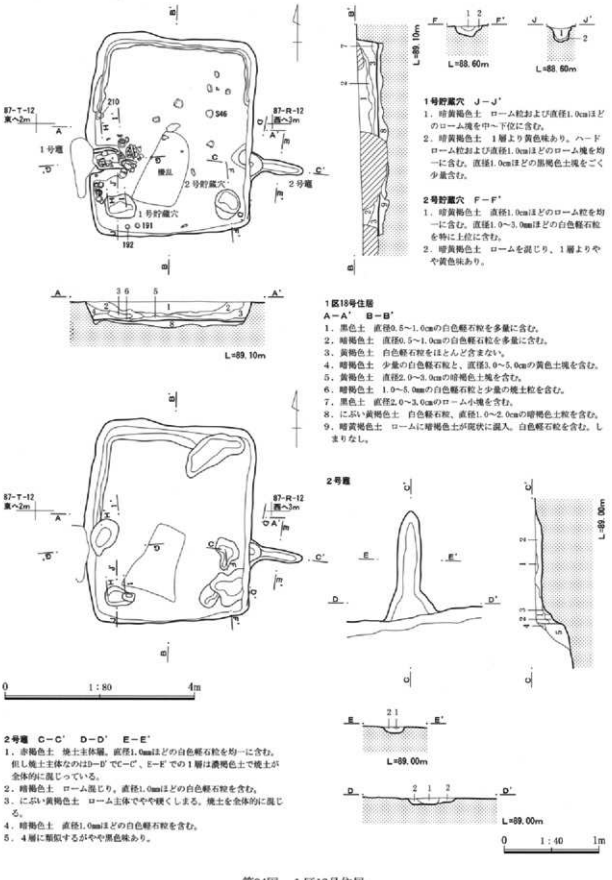
床面　床面はほぼ平坦で、竈前を中心にして硬化していた。中央部に長軸1.6m、短軸0.9mの掘削機械による攪乱がおよび、床面が壊されている。

埋没土　白色軽石・焼土粒・黄色土粒を含む暗褐色土で埋まっていた。

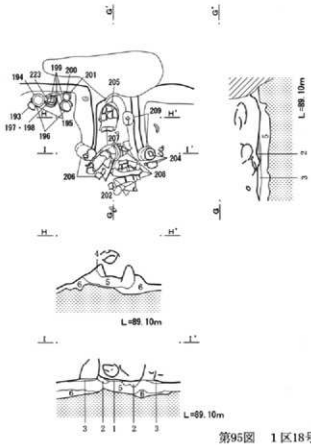
掘り方　竈燃焼部下面や北西隅がやや深く掘り込まれていた。厚さ0.05～0.20mの掘り方充填土が確認できた。

遺物と出土状況　出土遺物は1号竈周辺に集中して出土している。竈周辺の出土遺物は前述した。須恵器提瓶体部破片(203)は埋没土から出土した。北東部には礫が多く出土している。図示した扁平礫(S46)は床面上7cm、小型扁平擦石(S47)は埋没土中から出土した。竈左脇南西壁際の床面直上で出土した土師器坏(201)の内面には布目圧痕が残っている。図示できた遺物のほかに、縄文土器破片6点、土師器破片92点、須恵器破片1点、棒状礫4点、大型礫1点、亜角礫1点、剥片6点、礫片8点を出土している。

所見　出土遺物から今井道上Ⅱ遺跡4期の住居と考えられる。



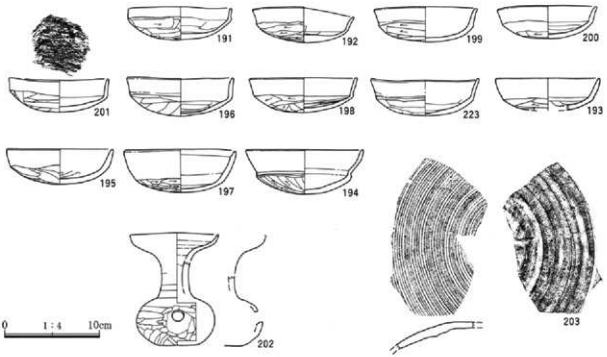
第94図　1区18号住居



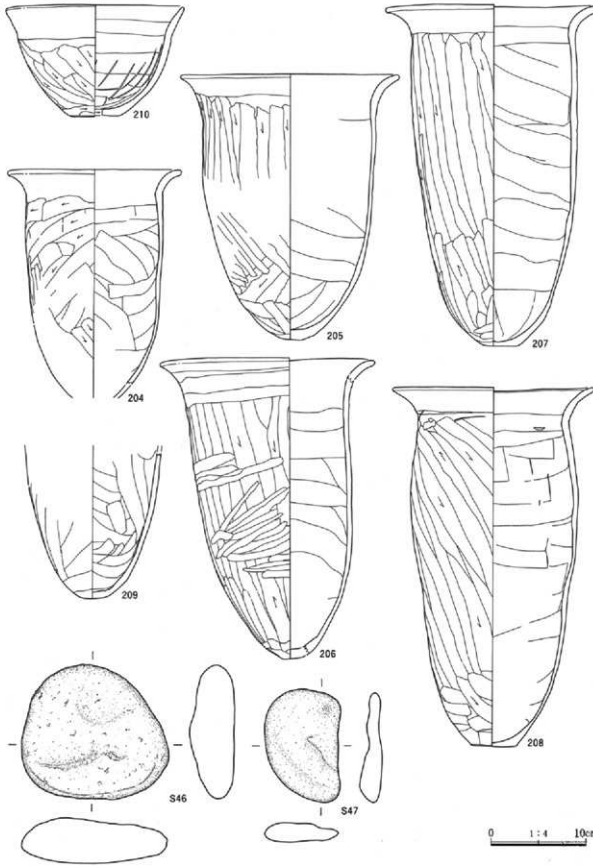
1号竈　G－G'　H－H'　I－I'
1．暗褐色土　ローム粒、焼土粒、炭粒をやや多く含む。(灰層)
2．黄褐色土　焼土粒、炭粒を少量含む。
3．暗黄褐色土　焼土粒、炭粒をごく少量含む。
4．赤褐色土　焼土粒、白色軽石粒、ローム粒を多量に混入。
5．暗褐色土　白色軽石粒、粘土粒、黒色土粒、焼土粒を含む。しまりあり。粘性ややあり。
6．暗黄褐色土　ローム粒、暗褐色土を混入。ややしまりなし。

0　1:40　1m

第95図　1区18号住居1号竈



第96図　1区18号住居出土遺物(1)



第97図　1区18号住居出土遺物(2)

1区19号住居

（第98図　PL42・43・90　遺物観察表P.220・227）

位置　88－L・M－12G

形状　横長長方形。竈左部を攪乱によって壊されているが、形状は推定することが可能である。

規模　長軸4.18m　短軸2.93m　残存壁高0.26m

面積　10.47m²　　**長軸方位**　N－22°－W

竈　北壁ほぼ中央に竈が構築されていた。焚き口部に攪乱があり、全体形状をみることはできなかった。竈の確認長0.39m、燃焼部幅0.22m。袖の残存長は向かって右側が0.20m、左側が0m。壁外に0.28m突出して残存していた。竈からの出土遺物はない。

柱穴　床面では主柱穴を確認できなかったが、掘り方面で主柱穴と思われるP1～P4を検出した。

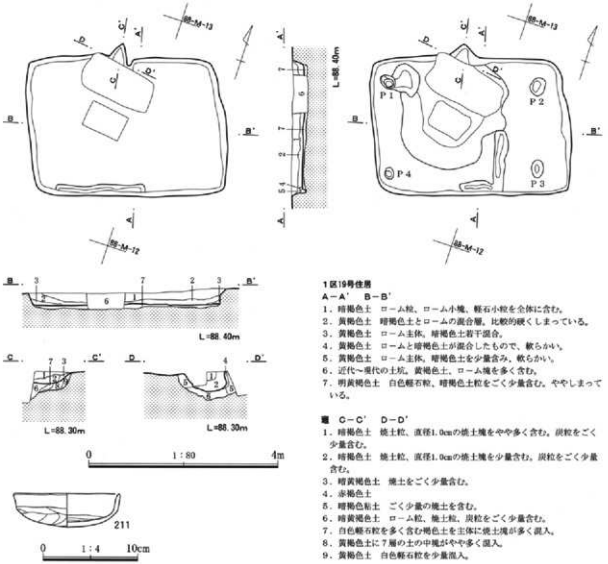
周溝　南壁西半分にのみ周溝を検出した。幅は0.15m、深さは0.04～0.06mである。

貯蔵穴　貯蔵穴は検出されなかった。

床面　床面はほぼ平坦である。竈前から中央部にかけての攪乱で、床面の一部は壊されていた。

埋没土　軽石粒・ローム粒を含む暗褐色土・黄褐色土で埋まっていた。

掘り方　掘り方面で主柱穴と思われるP1～P4を



1区19号住居

A－A'　B－B'

1．暗褐色土　ローム粒、ローム小塊、軽石小粒を全体に含む。
2．黄褐色土　暗褐色土とロームの混合層。比較的硬くしまっている。
3．黄褐色土　ローム主体。暗褐色土若干混合。
4．黄褐色土　ロームと暗褐色土が混合したもので、軟らかい。
5．黄褐色土　ローム主体。暗褐色土を少量含み、軟らかい。
6．近代～現代の土坑。黄褐色土、ローム塊を多く含む。
7．明黄褐色土　白色軽石粒、暗褐色土粒をごく少量含む。ややしまっている。

竈　C－C'　D－D'

1．暗褐色土　焼土粒、直径1.0cmの焼土塊をやや多く含む。炭粒をごく少量含む。
2．暗褐色土　焼土粒、直径1.0cmの焼土塊を少量含む。炭粒をごく少量含む。
3．暗黄褐色土　焼土をごく少量含む。
4．赤褐色土
5．暗褐色粘土　ごく少量の焼土を含む。
6．暗黄褐色土　ローム粒、焼土粒、炭粒をごく少量含む。
7．白色軽石粒を多く含む暗色土を主体に焼土塊が多く混入。
8．黄褐色土に7層の土の中焼がやや多く混入。
9．黄褐色土　白色軽石粒を少量混入。

第98図　1区19号住居と出土遺物

検出した。規模(長軸×短軸×深さ)は、P1が0.35×0.28×0.40m、P2が0.38×0.31×0.14m、P3が0.39×0.24×0.08m、P4が0.25×0.19×0.15mである。この柱穴は通例の竪穴住居よりは住居隅に寄った位置にある。また南壁の東から1.40m西の位置に長さ1.30m、幅0.28m、深さ0.04～0.07mの間仕切り溝を検出した。間仕切り溝南端は0.92mほど南壁にL字形に沿う位置にも掘られていた。

また竈前から中央にかけて長軸2.5m、短軸2.0m、深さ0.03～0.10mほどに掘り込まれていた。全体としては厚さ0.02～0.10mほどの掘り方充填土が確認できた。掘り方から出土した遺物はなかった。

遺物と出土状況　遺物の出土は少なく、床面から出土した遺物もない。図示した土師器坏(211)は埋没土中からの出土遺物である。図示した遺物のほかに縄文土器破片12点、土師器破片23点、棒状礫1点が出土した。

所見　出土遺物が少ないため住居の時期を推定するのは困難であるが、大形破片である土師器坏(211)から推せば、今井道上Ⅱ遺跡4期の住居と考えておきたい。

1区20号住居

(第99～101図　PL43～45・90・91　遺物観察表P.220・227)

位置　88－M・N－14・15G

形状　横長長方形。隅はやや丸みを帯びている。

規模　長軸4.15m　短軸3.61m　残存壁高0.64m

面積　13.09㎡　　**長軸方位**　N－74°－E

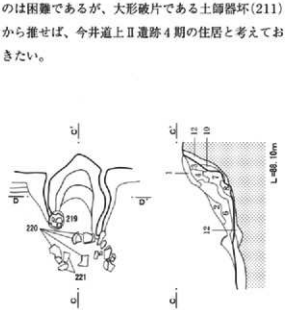
竈　住居東壁中央よりやや南寄りに竈が構築されていた。竈の確認長0.89m、燃焼部幅0.35m。袖の残存長は向かって右側が0.72m、左側が0.61m。壁外に0.17m出て煙道部が残存していた。

竈焚き口部に遺物が集中して出土した。土師器甕(219)は竈左袖先端に倒立しており、袖芯に使われていたと推定される。甕(220・221)は竈焚き口に横転していた破片群である。甕(222)は竈右袖前に散乱していた破片と南壁近くの破片が接合した。

柱穴　床面では主柱穴は検出できなかったが、主柱穴と推定されるP1～P4を掘り方面で検出した。

周溝　西壁南半分と北壁～竈左側の東壁北半に周溝が検出された。概ね幅は0.09～0.25m、深さ0.02～0.08mである。

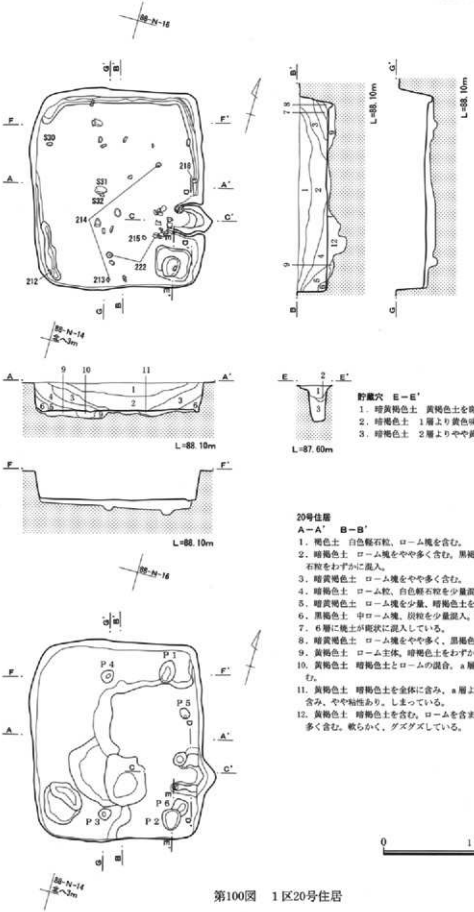
貯蔵穴　住居南東隅に長軸0.75m、短軸0.69m、深さ0.76mの隅丸方形の貯蔵穴が検出された。掘り方は2段になっており、床面から0.07～0.16m掘り下げ



竈　C－C'　D－D'

1. にぶい黄褐色土　ローム主体、直径1.0mほどの白色軽石粒を均一に含む。直径1.0mほどの地土粒を少量含む。
2. 濃黄褐色土　1層に似た色調だが全体的に黒色味あり。直径1.0～5.0mmほどのローム粒、直径1.0mmほどの白色軽石粒を含む。
3. 濃黄褐色土　直径3.0～5.0mmほどの地土粒を少量含む。
4. 濃黄褐色土　3層に類似するが、焼土粒および直径1.0～長径2.0cmほどの焼土塊を含む。直径2.0～3.0cmほどのローム塊を少量含む。直径1.0mmほどの白色軽石粒を少量含む。
5. 濃黄褐色土　直径1.0～2.0mmほどの白色軽石粒を均一に少量含む。直径2.0mmほどの焼土粒を少量含む。焼化物を直径0.5 mmほどの粒状に含み、全体的にやや黒色味を帯びる。直径0.5 mmほどのローム粒を少量含む。
6. 濃黄褐色土　5層に類似するが、炭は含んでいない。
7. 濃黄褐色および暗黄褐色土の間の土。全体的に地土風じる。
8. 焼土主体層。赤褐色土。濃黄褐色土を斑状に少量含む。
9. 濃黄褐色土主体。焼土混じり。また長径0.5～1.0cmほどの焼状にも含む。
10. 焼土、暗褐色土、ロームの混土。全体として赤褐色を呈す。
11. ローム塊、暗褐色土とロームの混合したものが、不均等に混合。ややしまりあり、粘質。
12. 黄褐色土　ローム主体、暗褐色土混合。(住居土層図の9層)

第99図　1区20号住居竈



貯蔵穴　E－E'

1．暗黄褐色土　黄褐色土を斑状に含む。砂質でもろい。
2．暗褐色土　1層より黄色味が少ない。砂質でもろい。
3．暗褐色土　2層よりやや黄色味あり。やや砂質の土。

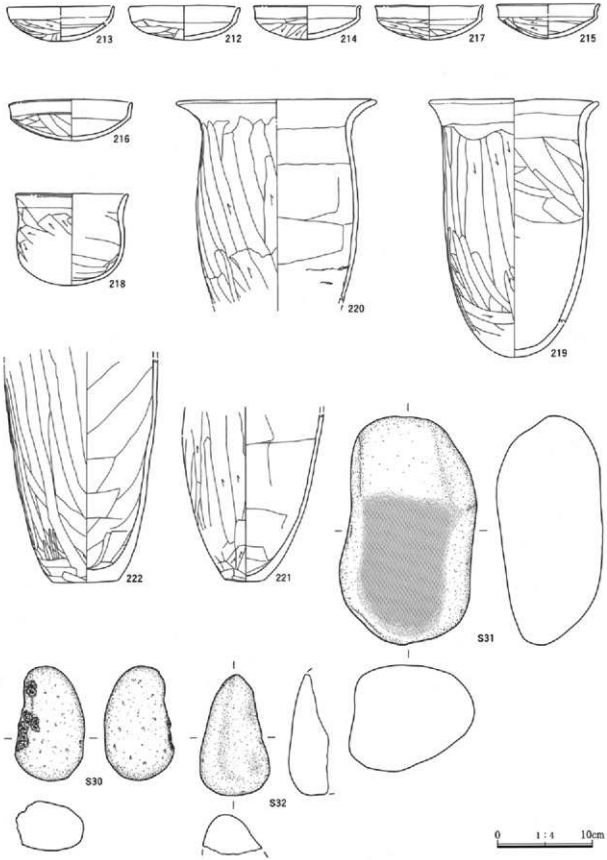
20号住居

A－A'　B－B'

1．褐色土　白色軽石粒、ローム塊を含む。
2．暗褐色土　ローム塊をやや多く含む。黒褐色土塊も少量混入。白色軽石粒をわずかに混入。
3．暗黄褐色土　ローム塊をやや多く含む。
4．暗褐色土　ローム粒、白色軽石粒を少量混入。
5．暗黄褐色土　ローム塊を少量、暗褐色土を斑状に含む。
6．黒褐色土　中ローム塊、炭粒を少量混入。白色軽石粒をやや多く含む。
7．6層に焼土が斑状に混入している。
8．暗黄褐色土　ローム塊をやや多く、黒褐色土を斑状に含む。
9．黄褐色土　ローム主体、暗褐色土をわずかに含む。
10．黄褐色土　暗褐色土とロームの混合。a層より暗い。ローム小塊を含む。
11．黄褐色土を全体に含み、a層よりも暗い。焼土粒を所々に含み、やや軟性あり。しまっている。
12．黄褐色土　暗褐色土を含む。ロームを含まない。親指大のローム塊を多く含む。軟らかく、グズグズしている。

0　1：80　4m

第100図　1区20号住居



第101図　1区20号住居出土遺物

たテラス状の中段から、長軸0.48m、短軸0.37m、深さ0.38mの楕円形の土坑が南側に偏った位置に掘り込まれている。この下段のピットは掘り方面でみつかった主柱穴群（P１・P２・P４）と対応する位置にあり、主柱穴の可能性もある。

図示できなかったが、底面から30cm浮いた位置で土師器坏破片が出土している。また埋没土中から土師器坏(217)が出土した。

床面　床面はほぼ平坦で、竈前を中心に硬化していた。

埋没土　白色軽石・ローム粒を含む暗褐色土で埋まっていた。

掘り方　本住居の掘り方はやや変則的で、短軸中央から西側と北壁に沿った幅１mほどの部分が南東部よりも0.05～0.10mほど深く掘り込まれている。この範囲の境に当たるライン上に主柱穴と思われるP１・P３・P４を検出し、南東隅の対応する位置にP２を検出した。柱穴の規模（長軸×短軸×深さ）は、P１が0.49×0.32×0.13m、P２が0.45×0.39×0.63m、P３が0.28×0.25×0.14m、P４が0.29×0.24×0.08mである。ただしP２の位置は貯蔵穴の下段ピットの位置であり、P２が主柱穴とすれば貯蔵穴でないことになる。これらの４つのピットは掘り方の段に一致しており、なんらかの構造上の施設に関わると考えられるが、断定はできなかった。

このほかに中央やや南寄りと南西隅に、長軸1.14m、短軸0.67m、深さ0.37mの楕円形と、直径0.8m、深さ0.2mの不正円形の床下土坑が検出された。全体として厚さ0.04～0.40mの掘り方充填土が確認できた。床下土坑にはローム塊や暗褐色土塊が混在した黄褐色土が充填されていた。

竈の掘り方は、ほかの住居とはやや異なり、袖部分に地山ロームの掘り残しが確認できた。

遺物と出土状況　前述したように竈周辺に土師器が集中して出土した。竈以外では土師器鉢(218)が東壁周溝床面上４cmで出土した。土師器坏(213)は南壁際床面上３cm、214は北東部床面直上で出土した。また住居北東部には床面に近いところで多くの棒状礫や扁平礫などが出土した。このうち敲石（S30）は北西部壁際床面直上で出土した。大型擦石（S31）は中央部床面に据えられていた。他の礫には目立った使用痕跡がなく図化しなかったが、棒状礫３点、扁平礫３点、剥片９点、礫片４点が出土した。

このほかに縄文土器破片25点、土師器破片73点、須恵器破片１点、不明１点が埋没土中から出土した。

所見　出土遺物から今井道上Ⅱ遺跡４期の住居と考えられる。

１区21号住居

（第102・103図　PL45・46・91　遺物観察表P.220・227）

位置　87－O・P－６・７G

形状　現道下は調査対象外であったため、本住居は北西隅しか調査できなかった。形状は方形と推定されるが、全形は不明である。

重複　22号住居に後出する。

規模　長軸測定不能　短軸測定不能
　　残存壁高0.54m

面積　測定不能　　**西壁方位**　N－33°－W

竈　調査範囲のなかでは竈は検出できなかった。

柱穴　北西隅の主柱穴と思われるP１を掘り方面で検出した。

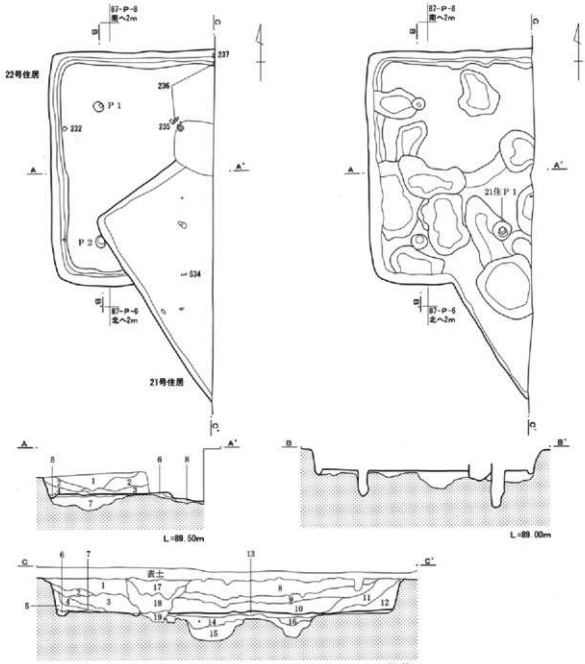
周溝　周溝は検出されなかった。

貯蔵穴　調査できた範囲の中では貯蔵穴は検出できなかった。

床面　床面はほぼ平坦である。

埋没土　上半部は白色軽石・ローム塊・粒を含む暗褐色土で、下半部はローム粒を含む黄褐色土で埋まっていた。

掘り方　掘り方面で主柱穴と思われるP１を検出した。P１の規模（長軸×短軸×深さ）は、0.40×0.38×0.54mである。また北西隅に長軸1.40m、短軸1.20m、深さ0.64mの楕円形の床下土坑が掘り込まれていた。全体としては厚さ0.05～0.60mの掘り方充填土を確認した。特に床下土坑内にはローム塊を多く含んだ黄褐色土が充填されていた。



1区21・22号住居　A－A'

1．暗褐色土　白色軽石粒を少量含む。ローム粒、直径1.0～2.0cmのローム塊をごく少量含む。
2．黒褐色土　白色軽石粒を少量含む。ローム粒、直径0.5cmのローム塊をごく少量含む。
3．にぶい黄褐色土　白色軽石粒をごく少量含む。ローム粒、直径0.5～2.0cmのローム塊をやや多く含む。
4．暗黄褐色土　白色軽石粒、ローム粒をごく少量含む。
5．黄褐色土　白色軽石粒をごく少量含む。
6．黄褐色土　黒褐色土を少量含む。しまって硬い。
7．明黄褐色土　黒褐色土をごく少量含む。ぼそぼそしている。
8．黒褐色砂質土　ローム粒、直径1.0～2.0cmのローム塊を多く含む。

C－C'

1．黒褐色土　白色軽石をやや多く含む。ローム粒をごく少量、直径0.5～1.0cmのローム塊を少量含む。
2．黒褐色土　白色軽石を少量含む。ローム粒、直径0.5～1.0cmのローム塊をごく少量含む。
3．黒褐色土　白色軽石を少量含む。ローム粒、直径1.0～3.0cmのローム塊をやや多く含む。
4．黄褐色土　黒褐色土をごく少量含む。ローム粒、直径1.0cmのローム塊をごく少量含む。
5．にぶい黄褐色土　ローム粒、直径0.5cmのローム塊をごく少量含む。黒褐色土を少量含む。
6．黄褐色土　黒褐色土をごく少量含む。
7．黄褐色土　黒褐色土を少量含む。しまって硬い。22号住居6層(セクションA－A')に相当。
8．黒褐色土　白色軽石を含む。ローム粒をごく少量含む。
9．暗褐色土　白色軽石、ローム粒をごく少量含む。
10．暗褐色土　白色軽石、焼土粒、炭粒をごく少量含む。ローム粒を少量含む。
11．にぶい黄褐色土　ローム粒、直径1.0cmのローム塊をごく少量含む。
12．黒褐色土　ローム粒をごく少量含む。
13．にぶい黄褐色土　ローム粒、直径0.5～1.0cmのローム塊を多く含む。しまって硬い。
14．にぶい黄褐色土　直径1.0～2.0cmのローム塊をやや多く含む。
15．黄褐色土　直径2.0～3.0cmのローム塊を多く含む。
16．黄褐色土　直径3.0～4.0cmのローム塊を多く含む。
17．暗褐色砂質土　直径1.0～2.0cmのローム塊を少量含む。
18．暗褐色砂質土と黒褐色土が互層に堆積した層。
19．暗褐色土　ローム粒、直径1.0～3.0cmのローム塊を多く含む。

0　1:80　4m

第102図　1区21号・22号住居

遺物と出土状況　床面近くから出土した土器はほとんど無く、図示した土師器坏（224・225・226）、須恵器坏(228)、須恵器蓋(227)、土師器高坏(229)、甑(231)、甕(230・251)はすべて埋没土中から出土した。砥石（S34）は住居北西部の床面上4㎝で出土した。

図化できた遺物のほかに、縄文土器破片1点、土師器破片319点、須恵器破片5点、棒状礫1点、剥片1点が出土した。

所見　出土遺物に新旧時期の違うものが混在している。これらのうち土師器坏(225)や土師器甕(251)の新しい要素を重視すれば今井道上Ⅱ遺跡4期の住居と考えられる。

1区22号住居

（第102・103図　PL45・46・91　遺物観察表P.221・227）

位置　87－O・P－6・7G

形状　東部調査対象外の現道下となり、調査できなかった。柱穴位置から推定すれば形状は東西にやや長い方形と推定される。

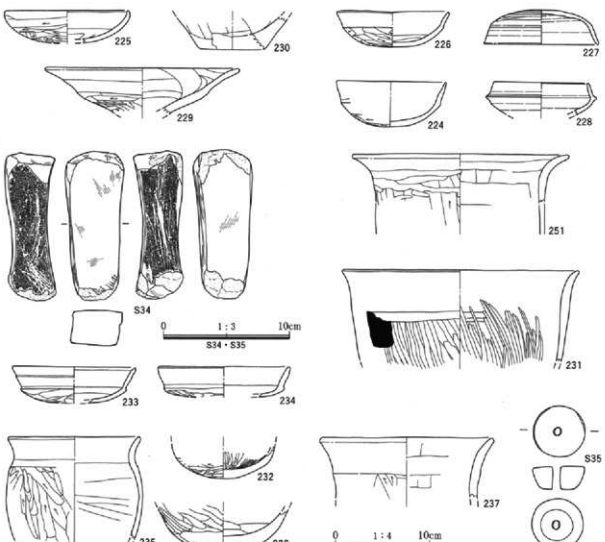
重複　21号住居に先行する。

規模　長軸測定不能　短軸4.94m　残存壁高0.43m

面積　測定不能　　**西壁方位**　N－1°－W

竈　調査できた範囲の中では検出できなかった。

柱穴　調査できた範囲の中では主柱穴と思われるP1・P2が検出された。規模(長軸×短軸×深さ)は、



第103図　1区21号・22号住居出土遺物

Ｐ１が0.29×0.25×0.53m、Ｐ２が0.35×0.32×0.76mである。

周溝　周溝は調査できた範囲の中では全周する。概ね幅0.13～0.24m、深さ0.03～0.10mである。

貯蔵穴　調査できた範囲の中では貯蔵穴は検出できなかった。

床面　床面は平坦で硬化していた。

埋没土　白色軽石・ローム粒を含む黒褐色土・黄褐色土で埋まっていた。

掘り方　規格的な掘り方の掘削痕ではないが、西壁際や北部・中央部に長軸1.00～1.70m、短軸0.80～1.00m、深さ0.05～0.10mほどの床下土坑が掘り込まれていた。全体としては厚さ0.04～0.34mの掘り方充填土が確認された。床下土坑には黒褐色土粒を含む黄褐色土が充填されていた。

遺物と出土状況　床面近くから出土した土器はほとんど無い。図示した土師器坏(232)は西壁際床面上16cm、土師器甕(236)は北部床面上３cmで出土した。土師器小型甕(235)は北部床面上３cmで出土した。石製紡錘車(Ｓ35)は南西隅周溝内から出土した。

図化できた遺物のほかに、土師器破片100点、須恵器破片１点、剥片１点が出土した。

所見　出土遺物から今井道上Ⅱ遺跡３期の住居と考えられる。

１区24号住居

（第104・105図　PL46・47・91・92　遺物観察表P.221・227）

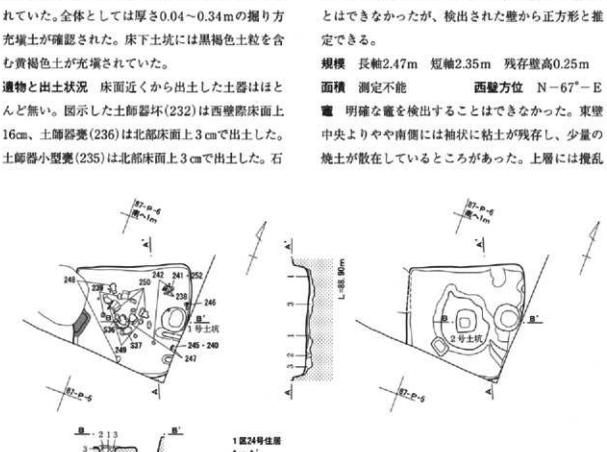
位置　87－Ｏ・Ｐ－５Ｇ

形状　南東隅・南西隅が発掘調査区域外であり、西壁北半には撹乱が及んでいるため全形を把握することはできなかったが、検出された壁から正方形と推定できる。

規模　長軸2.47m　短軸2.35m　残存壁高0.25m

面積　測定不能　　**西壁方位**　Ｎ－67°－Ｅ

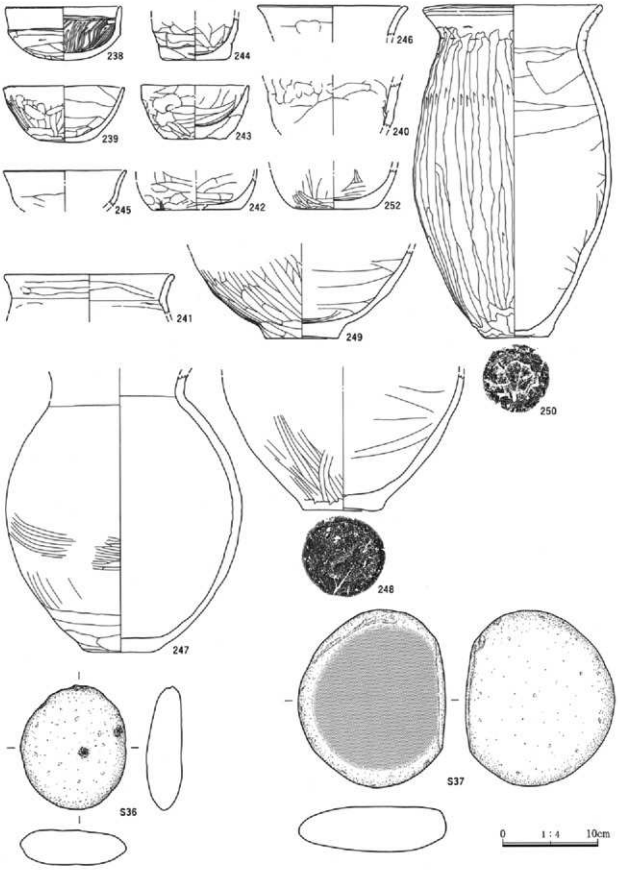
竈　明確な竈を検出することはできなかった。東壁中央よりやや南側には袖状に粘土が残存し、少量の焼土が散在しているところがあった。上層には撹乱



１区24号住居
Ａ－Ａ'
1．暗黄褐色土　暗褐色土を斑状に含む。ややしまりあり。
2．暗褐色土　ローム粒を少量混入。ややしまりなし。
3．にぶい黄褐色土　暗黄褐色土を全体に斑状に含む。

住居内２号土坑　Ｂ－Ｂ'
1．暗褐色土　黒褐色土塊をやや多く含む。ローム塊を少量混入。焼土粒をごく少量混入。
2．暗黄褐色土　小ハードローム塊を少量含む。ややしまりなし。
3．にぶい黄褐色土　暗褐色土を少量斑状に混入。ローム塊をやや多く含む。
4．暗黄褐色土　ローム粒やや多く、黒色土粒を少量含む。しまりなくフカフカしている。

第104図　１区24号住居



第105図　1区24号住居出土遺物

があり、竈と断定することは難しい。これが竈とすれば、確認長0.52m、燃焼部幅0.45m、袖の残存長は向かって右側が0.20m、左が0.58mの規模である。一方、西壁中央部にも壁に接して焼土が出土した。これも竈の可能性があるが、いずれも竈とは断定できない。

柱穴　調査できた範囲の中では検出されなかった。

周溝　調査できた範囲の中では検出されなかった。

貯蔵穴　通例の貯蔵穴とするには疑問もあるが、東壁中央に直径0.50m、深さ0.29mの円形の1号土坑が検出された。東壁の竈かもしれない施設の左側に隣接する。

床面　床面は平坦である。

埋没土　白色軽石・ローム粒を含む黒褐色土・黄褐色土で埋まっていた。

掘り方　住居中央を長軸1.08m、短軸0.95mの楕円形に掘り残すように住居周縁部が0.01～0.05m掘り込まれている。その中央には長軸0.46m、短軸0.43m、深さ0.35mの隅丸方形の2号土坑が掘られていた。この方形土坑の一辺の向きは住居の壁と一致している。全体としては厚さ0.06～0.16mの掘り方充塡土が検出された。

遺物と出土状況　遺物は住居中央部に集中して出土した。中央部の遺物は床面から5～12cm浮いた状態で出土し、接合する大型破片が多かった。土師器壺(247)は口縁部を欠くが、正立して床面上10cmで出土した。土師器甕(250)、土師器壺(249)、土師器鉢(239)は中央部床面上10～12cmで出土した。土師器坏(245)や鉢(240)は東壁際床面直上で出土した。北東隅には土師器坏(238)、土師器甕(242・252)が床面上5～6cmで出土した。土師器鉢(243・244)は埋没土中から出土した。

これらの鉢は通例の土師器とは異なり、手ずくねで粘土紐の巻き上げ痕跡を残すような作りの土器である。240、242、246も同様なつくりで、全体形状を確認できるように接合に努めたが、完形まで接合はできなかった。

また中央部には石器や礫も集中して出土した。扁平礫(S36)は中央部床面上3cm、扁平擦石(S37)は中央部床面上8cmで出土した。図示した以外は顕著な使用痕が見られない礫である。

図化できた遺物のほかに、縄文土器破片1点、土師器破片232点、棒状礫3点、扁平礫2点、亜角礫1点、円礫1点、剥片7点が出土した。

所見　出土遺物から今井道上Ⅱ遺跡2期の住居と考えられる。

本遺構は住居として調査したが、規模が小さいことや炉や竈が明確でないことなどから、住居とするには問題も残る。

1区25号住居

(第106～109図　PL47～51・92　遺物観察表P.222・227・228)

位置　87－M・N－4・5G

形状　西半部が発掘調査区域外であるため全形を把握することはできなかったが、検出された壁から正方形と推定できる。

規模　長軸6.70m　短軸測定不能　残存壁高0.60m

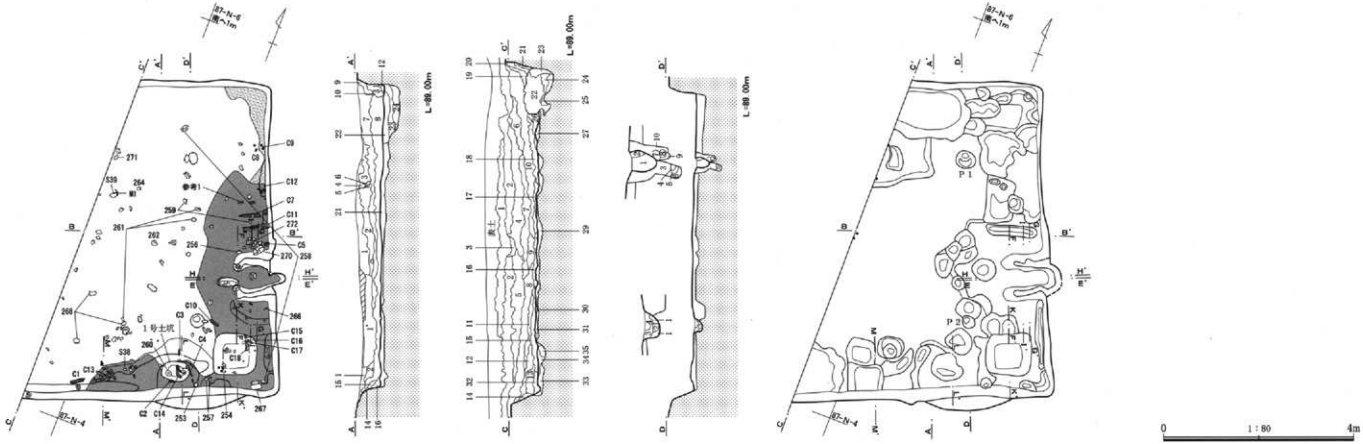
面積　測定不能　　**東壁方位**　N－22°－W

竈　住居東壁中央よりやや南寄りに竈が構築されていた。竈の確認長1.07m、燃焼部幅0.33m。袖の残存長は向かって右側が0.84m、左が0.78m。煙道部が壁外に0.17m出ていた。竈周辺の床面には焼土と灰が広がっていた。

両袖の先端には竈内側に偏って礫が据えられていた。袖芯として据えられたものと推定される。焚き口部には被熱した大型礫が竈主軸方向に長軸を向けて使用面直上で出土した。焚き口の天井部構築材として使われていたものであろう。

また燃焼部には中央やや左寄りに支脚が設備されていた。土師器高坏(263)を倒立させその上に土師器坏(255)をかぶせたものである。竈右脇には土師器小型甕(266)、左脇には土師器坏(256)、土師器瓶(270)、土師器甕(272)が床面直上で出土した。

煙道部の残存状況は顕著であった。燃焼部の再奥部は壁のすぐ外側で直径0.23mの筒状に立ち上がって



貯蔵穴 K－K'

1．黒褐色土(10YR2/2) 砂(軽石)を多く含む黒色土。ローム粒・炭を含むしまりの弱い土。
2．黒褐色土(10YR2/2・2/3) 砂を1・3層より少なく含む黒褐色土。ローム粒塊・焼土を少量含むしまりの弱い土。
3．黒褐色土(10YR2/3) 混入物は1層と同じだが、1層より明るい。
4．黒褐色土(7.5YR3/2) 1～3層の砂を含まない土で、ローム粒を少量含む黒褐色土。細粒でサラサラした質感の土。
5．黒褐色土(7.5YR3/2) 1～3層の砂を含まない土で、ローム粒を少量含む黒褐色土。細粒でサラサラした質感の土。
6．黒褐色土(10YR2/2) ローム粒・黒色土の混土。粘度にバラツキがあり、しまりの弱い土。炭を含む。
7．暗褐色土(10YR3/3) ローム粒塊混じりの暗褐色土。粘度にバラツキがあり、しまりの弱い土。
8．黒褐色土(7.5YR2/2) 6層と近似の土。黒色土をごく少量含む。細名山起源の白色軽石粒を含む。粘度にバラツキのある土。
9．暗褐色土(10YR3/4) 10層と近似の土。ローム粒塊を含む硬い土。
10．黒褐色土(10YR3/2) 9層と同質だが色調が暗色である。
11．極暗褐色土(7.5YR2/3) ローム塊・炭を含む。粗粒でしまりの弱い土。サラサラした質感。
12．黒褐色土(7.5YR3/2) 炭・灰・焼土を含む。しまり弱く、サラサラした土。

住居内1号土坑 L－L'

1．黄褐色土(10YR5/6) 炭化物・焼土塊・白色粒を含む。ローム粒主体土。
2．黄褐色土(10YR5/8) 1層に比べ炭化物・焼土が極端に少ないローム主体。ソフトローム。
3．暗褐色土(10YR3/3) 炭化物・焼土粒を4層の1/3ほど含む。ローム粒主体土。
4．黒・黒褐色土(10YR1.7/1・2/3) 炭片を多く含む。ローム粒主体土。
5．暗褐色土(10YR3/3) 炭化物・焼土を3層と同量に含む。3層と同質。

壁際床面下 M－M'

1．黒褐色土(7.5YR3/2) 焼土粒・ローム粒をごく少量含む。
2．黒褐色土(10YR3/2) 焼土粒・ローム粒をごく少量含む黒褐色土。粗粒土。しまり弱い。
3．暗褐・褐色土(10YR3/3・4/6) 壁ローム塊・ローム粒塊じりの暗褐色土。焼土粒を1・2層同様にごく少量含む。粘度にバラツキあり。
4．赤褐色土(5YR4/6) 赤色焼土層。
5．黒色土(10YR1.7/1) 炭層。赤色焼土粒塊を含む。
6．暗褐色土(10YR3/4) ローム塊混じり。5層の流れ込みと思われる炭、焼土塊。

床面下P 2 D－D'

1．黄褐色土(10YR5/8) 2層中に大煤軽石を含む。ハードローム塊を含む、やや しまる。
2．褐色土(10YR4/6) ソフトローム主体、やや黒ずむ。しまり弱い。
3．褐色土(10YR4/6) 炭化物・焼土粒を少量含む。ソフトローム主体。
4．黒褐色土(10YR2/3) 炭化物を多く含む。表層には細粒の焼土粒を含む。

床面下P 1 D－D'

1．褐色土(10YR4/4) ローム粒塊・白色粒を含む。パサパサした質感の土。
2．褐色土(10YR4/6) ローム粒塊を1層より多く含む。炭化物をごく少量含む。
3．褐色土(10YR4/4・4/6) ローム粒を多く含む暗褐色土。しまり弱い土。
4．黄褐・にぶい黄褐色土(10YR5/6・5/4) 大煤沢軽石を含む。ローム主体。硬くしまる。
5．黄褐色土(10YR5/8) 4層と同質だが、黒色土塊が水平の薄層に見える。硬くしまる。
6．黄褐色土(10YR5/6) 圧密変化域。
7．黄褐色土(10YR5/6) ローム粒主体層。硬くしまる。
8．にぶい黄褐色土(10YR5/4) 大煤沢軽石を含むローム塊。色調として多少黒味を帯び、しまった土。
9．黄褐・明黄褐色土(10YR5/6・6/6) 8層の土と類似。色調明色。
10．黄褐色土(10YR5/6) 樹痕機乱を受けたローム粒主体土。

1区25号住居

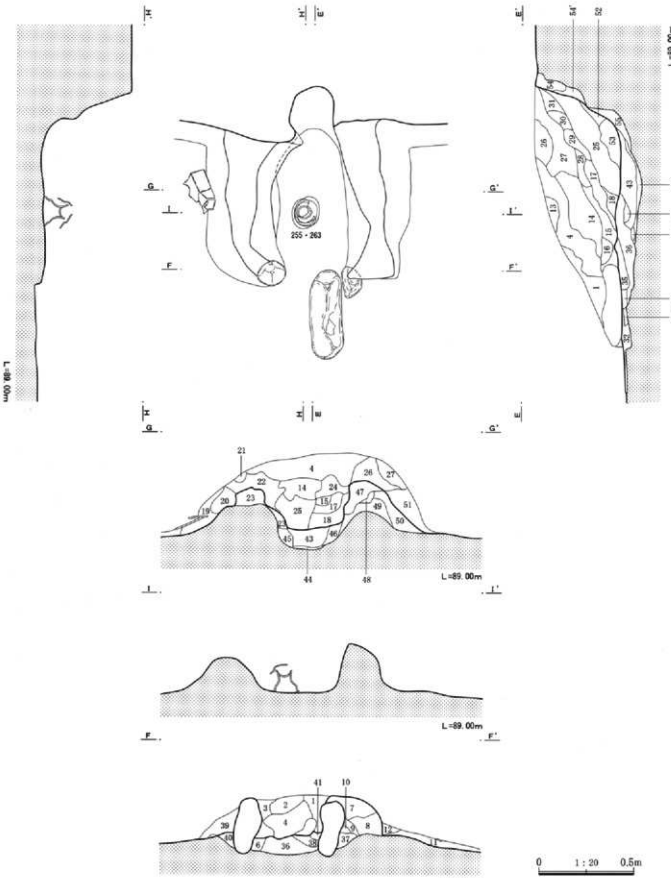
A－A' B－B'

1．黒・黒褐色土(10YR2/1・2/2) 軽石(浅間B軽石か?)が全面に見られ、黒味を帯びた土。1'層より粘度は細かく、焼土を少量含む。
1'．黒褐色土(10YR2/2) 1層同様軽石(浅間B軽石か?)が全面に見られるが、粗粒砂が多く目につき、しまりも良い。
2．黒褐色土(10YR3/2) 1・1'層の土より平分以下と少ないが、軽石(浅間B軽石か?)を含み、ローム粒塊、繊糸山起源の白色軽石粒、焼土を含む色調の明るい土。粘度にばらつきが見られるが、しまりのある土。
3．黒褐色土(10YR2/3) 混入物、土の性質は2層と変わらないが、しまりのある土。
4．黒褐色土(10YR3/2・2/2) 2層に似た土だが、色調で分層した。
5．樹根攪乱土。黒色を呈し、軟らかい土。
6．3層の土。
7．黒色土(7.5YR2/1) 浅間B軽石混じりの黒色土。8層に含まれるローム粒や、焼土(竈付近で直径5.0mm位の塊が多く見られる)を含む。全体的に粘度の粗一な土。
8．褐色土(7.5YR4/4) ローム粒塊主体土層。繊名山起源の白色軽石、7層の土の流れ込みも見られる。竈付近では直径1.0～2.0cm位のローム塊や、焼土塊が多く見られ、その中に褐色(10YR4/4)粘質土(焼土を含む)塊も含む。
9．黒褐色土(10YR2/3) 軽石(浅間C軽石か)を含む。ローム粒塊(焼土)混じり。
10．12層と色調は同じだが、ローム粒が多いことから分層した。しまりの弱い土。
11．ローム粒、塊混じりの9層土と10層土を足した土。
12．暗褐色土(10YR3/4) ローム塊状の混入は少なく、粗粒ながら均一な土。しまり弱い。
13．黒褐色土(10YR3/1) 直径5.0cmのローム塊と黒(褐)色土の混土。しまり弱い。
14．褐色土(10YR4/4) 地山崩土ローム主体。粘度は均一。しまり普通。
15．黒褐色土(10YR3/2) 地山崩土ロームと黒褐色土の混土。焼土・炭を少量含む。
16．褐・黒色土(7.5YR4/6・10YR1.7/) 焼土・灰・炭主体。
17．暗褐色土(10YR3/3) 7・8層に見られる焼土等は見られない。
18．褐色土(10YR4/4) 地山崩土ローム主体層。19層の炭の混入もわずかに見られる。
19．黒・暗褐色土(10YR1.7/・10YR3/3) 炭層。赤色焼土粒をわずかに含む。
20．褐色土(10YR4/6) ローム粒塊を含む8層土。18層の炭・焼土流れ込みもわずかに見られる。
21．2層土と同様だが、直径5.0mmほどの小さいローム塊主体の中に、斑点状に黒色土塊が見られる。硬くしまっている箇所が所々見られる。
22．ローム塊(大煤沢軽石)主体、細粒の暗褐色土(10YR4/4)が混じる。
23．黒色土(10YR2/1) 黒色土が層状に見られる層で、上下に2層同様のローム塊が入る。
24．黄褐色土(10YR5/8) ローム主体層で、塊状・粒塊状が混存している。

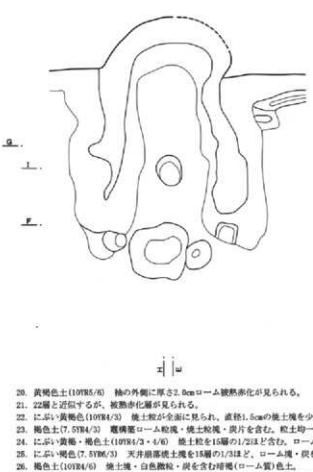
第106図 1区25号住居

西壁セクション　C－C'

1．黒色土(10YR2/1)　浅間B軽石または全面にまんべんなく見られ、榛名山起源の白色軽石も少量含む。黒味を帯びた砂質土。
2．黒色土(10YR2/1)　浅間B軽石または、浅間C軽石は1層に比して1/4ほど少なく、榛名山起源の白色軽石が多く見られる黒味を帯びた土。焼土を少量含む。
3．黒褐色土(10YR2/2)　1層と2層が混ざりあった感じの土。
4．黒・黒褐色土(10YR2/1・2/2)　軽石(浅間B軽石か？)が全面に見られ、黒味を帯びた土。1層より粒度は細かく、焼土を少量含む。
5．黒褐色土(10YR3/2)　軽石は2層に似るが、2層より黒味が薄れ、ローム塊を多く含む。焼土を少量含む。軽石は直径5.0mmと大きい。
6．黒褐色土(10YR3/1)　7層と比して軽石を多量に含む。色調もやや暗色。
7．黒褐色土(10YR3/2)　4層の土より半分以下と少ないが、軽石(浅間B軽石か？)を含み、ローム粒塊、榛名山起源の白色軽石粒、焼土を含む色調の明るい土。粒度にばらつきが見られるが、しまりのある土。
8．黒褐色土(10YR3/1・3/2)　軽石は5層に似るが、5層よりローム粒塊を多く含む。焼土を少量含む。
9．黒褐色土(10YR3/2)　軽石は8層に比して1/2ほど少なく、特に榛名山起源の白色軽石粒は見られない。ローム粒塊を多く含み、炭化物・焼土も含む。
10．黒色土(7.5YR2/1)　浅間B軽石混じりの黒色土。17層に含まれるローム粒や、焼土(竈付近で直径5.0mm位の塊が多く見られる)を含む。全体的に粒度の均一な土。
11．10層と同様
12．暗褐色土(10YR3/3)　浅間C軽石・ローム塊・ローム粒塊・11層の土(黒味の土)を含む。
13．暗褐色土(10YR3/4・3/2)　浅間C軽石・ローム塊・ローム粒塊・焼土粒・炭化物を含む。
14．黒褐色土(10YR3/2)　浅間C軽石・ローム塊を多く含む。13層の色調に近い土。
15．ローム粒塊・11層土粒塊の混土。粒度にばらつきが見られる。
16．15層と近似の土。
17．褐色土(7.5YR4/4)　ローム粒塊主体土層。榛名山起源の白色軽石、7層の土の流れ込みも見られる。竈付近では直径1.0～2.0cm位のローム塊や、焼土塊が多く見られ、その中に10YR4/4結質土(焼土を含む)塊も含む。
18．褐色土(10YR4/4)　17層と比してローム塊(As-BP)・ローム粒塊を多く含む。焼土粒も見られる。
19．黒褐色土(10YR3/2)　浅間C軽石か・榛名山起源の白色軽石・ローム粒塊・焼土粒を含む。しまり弱い。
20．暗褐色土(10YR3/4)　19層と比してローム粒塊を多く含み、しまりあり。焼土を少量含む。
21．黄褐色土(10YR5/6)　壁崩土ローム塊主体層。焼土を少量含む。
22．にぶい黄橙・黄褐色土(10YR6/4・5/6)　ローム粒・ローム塊(大窪沢)主体土に黒色土塊が少量見られる。
23．暗褐色土(10YR3/3・3/4)　ローム粒・少量の炭化物・焼土粒を含む暗褐色土。しまり弱く、軟らかい土。
24．黒褐・黄褐色土(10YR2/1・5/6)　ローム塊(大窪沢)。植物撹乱？黒色土混土。
25．黄褐色土(10YR5/6)　地山ローム。焼状にカチカチになっている所あり。
26．褐色土(10YR4/4)　ローム粒・ローム塊・白色粒を含む。黒色土粒塊を少量含む。
27．黄褐色土(10YR5/6)　ローム粒・ローム塊主体。
28．黄褐色土(10YR5/6)　地山ローム。
29．直径2.0mmほどの小さいローム塊主体の中に、底点状に黒色土塊が見られる。硬くしまっている箇所が所々見られる。地山ローム。
30．暗褐色土(10YR3/4)　ローム塊を含む。
31．暗褐色土(10YR3/4)　ローム塊を30層より多く含む。
32．黒褐色土(10YR3/2)　13層と比べローム粒塊・ローム塊が多く、焼土・炭化物は極端に少ない。しまりも弱い。
33．暗褐・黄褐色土(10YR3/3・5/6)　ローム塊(大窪沢)主体の暗黄褐色土。
34．褐色土(10YR4/4)　ローム粒・白色軽石粒を含む。
35．黄褐・にぶい黄褐色土(10YR5/6・5/4)　ローム粒・ローム塊主体。

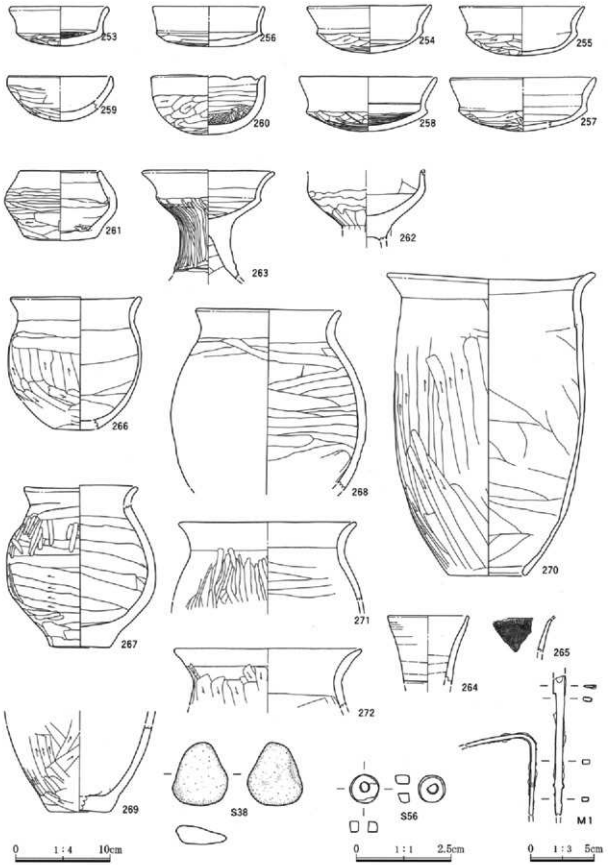


第107図　１区25号住居竈



凡　E－E'　F－F'　G－G'

1．暗褐色土(10YR3/4)　白色軽石(榛名山起源の白色軽石粒か?)・焼土粒・ローム塊を含む。やや砂質を呈する。
2．黒褐色土(10YR3/2)　白色軽石(榛名山起源の白色軽石粒か?)・焼土粒・ローム粒を含む。
3．褐色土(7.5YR4/4)　白色軽石(榛名山起源の白色軽石粒か?)をごく少量、焼土粒・ローム粒を含む。細粒。
4．暗褐色土(10YR3/3)　1層と類似するが、ローム粒塊を多く含む。
5．黒褐色土(10YR3/2)　焼土粒・ローム粒を含む。軽石をごく少量含む。細粒。
6．黒褐色土(10YR2/2)　覆灰層。焼土・炭・黒色土・ローム粒塊の混土。
7．黄褐・褐色土(10YR5/8・4/6)　ローム主体とする竈袖構築土。
8．黒褐・暗褐色土(10YR3/2・3/4)　ローム塊・白色粒の混土。竈袖構築土。焼土粒を少量含む。
9．黒褐・暗褐色土(10YR3/2・3/4)　8層に炭と10層の粘土を少量含む。竈袖構築土。
10．にぶい黄褐色土(10YR5/4)　極細粒焼土・極細粒炭を含む。粘質土。竈袖構築土。
11．焼土・炭・ローム の混土。竈炭カキ層が薄い水平層で見られる。
12．8層の崩落土に、ローム粒塊を多く含む土。
13．暗褐・黒褐色土(10YR3/3・3/2)　4層と同質の土だが、黒色粘質土小塊の混入が見られる。
14．暗褐色土(7.5YR3/4)　赤色ローム粒(焼土)・ローム粒塊の混土。粒度不均一、パサパサした質感の土。
15．黒褐色土(7.5YR3/2)　天井崩土焼土粒塊・ローム粒塊を含む。しまり良い。
16．黒褐色土(7.5YR3/2)　15層に類似するが、天井崩土焼土粒塊・ローム粒をほとんど含まない。
17．暗赤褐色土(2.5YR3/6)　天井崩落焼土塊主体土層。
18．黒褐色土(10YR2/2)　17層に比べ焼土塊状の塊が少なく、小粒。
19．黒褐色土(10YR3/2)　焼土粒・炭粒・白色微粒・ローム粒を含む。
20．黄褐色土(10YR5/6)　袖の外側に厚さ2.0cmローム被熱赤化が見られる。
21．22層と近似するが、被熱赤化層が見られる。
22．にぶい黄褐色(10YR4/3)　焼土粒が全面に見られ、直径1.5cmの焼土塊を少量含む。ローム粒・炭粒・白色微粒・灰を含む暗褐色土。
23．褐色土(7.5YR4/3)　竈構築ローム粒塊・焼土粒塊・炭片を含む。粒土均一な土。
24．にぶい黄褐・褐色土(10YR4/3・4/6)　焼土粒を15層の1/2ほど含む。ローム粒・炭小片を含む暗褐色土。
25．にぶい褐色(7.5YR6/3)　天井崩落焼土塊を15層の1/3ほど、ローム塊・炭を含む。14層より明るい色調。
26．褐色土(10YR4/6)　焼土塊・白色微粒・炭を含む暗褐(ローム質)色土。
27．褐色土(7.5YR4/4)　ローム塊・ローム粒(天井崩落土と同質の被熱を含む)・焼土塊炭を含む土。ローム質土を多く含む。
28．暗褐・褐色土(10YR3/4・4/4)　ローム質土の中に焼土粒・白色粒子を含む土。
29．褐色土(7.5YR4/3)　焼土塊(天井崩落土と同質を含む)・ローム塊・炭を含む。
30．黒褐色土(10YR3/2)　29・30層土に比し焼土が1/3位と少なく、土の粒度にばらつきが見られるパサパサした質感の土。
31．褐色土(7.5YR4/3)　焼土粒塊・ローム粒塊を含む。29層より焼土が少ないが同質の土。
＊32～34は記載なし
32．黒色土(10YR1.7/1)　黒色灰層(焼土粒を少量含む)
33．ローム主体層。
34．黒・黒褐色土(10YR1.7/1・2/2)　黒色灰色(層?)。下位に焼土粒を含む。
35．黒褐色土(7.5YR3/2)　覆灰層。
36．暗褐色土(7.5YR3/4)　38層より焼土を多く含む灰層。
37．褐色土(7.5YR4/3)　焼土粒・炭片・ローム塊の混土。やや軟質。
38．暗褐色土(10YR3/3)　直径0.5cmの焼土塊・少量の炭片・ローム粒塊を含む。
39．褐色土(10YR4/4)　乳白色粒・焼土小塊・ローム粒塊を含む。竈袖。
40．褐色土(10YR4/6)　焼土塊・少量の炭・白色粒を含む。ローム主体。竈袖。
41．黒色土(10YR2/1)　焼土粒・ローム粒を含む。
42．黒褐色土(10YR3/2)　焼土(2.5YR4/6)塊を多く含む。
43．暗褐色土(10YR3/4)　焼土・ローム粒塊の混土。結質をもつ灰層。
44．黄褐色土(10YR5/6)　ローム粒・ローム塊主体層。焼土粒を少量含む。
45．黒褐色土(7.5YR3/1)　少量の焼土粒とローム塊混じり。
46．黒褐色土(10YR3/1)　炭・ローム塊・少量の焼土混じり。粗粒の土。
47．にぶい黄褐色土(10YR4/3)　焼土塊・ローム・白色粒・炭混じりのローム質土。
48．黄褐色土(10YR5/6)　焼土塊・ローム・白色粒・炭混じりのローム質土。51層と同質だが色調で分層。
49．明黄褐色土(10YR6/6)　地山ローム(層りすぎ)。黒化度の違いから、軟らかい土。
50．褐色土(10YR4/4)　焼土粒を少量含むローム。
51．黒褐色土(10YR3/2)　26・27層に比べ白色微粒が1/2位と少ない。直径8.0～10.0mmのローム塊・炭を含む黒味を帯びた土。焼土をごく少量含む。
52．黒褐色土(10YR3/2)　焼土塊・崩落土・ローム粒を含む。
53．壁崩落焼土塊と灰の混土。
54．明赤褐色土(2.5YR5/6)　被熱による赤化硬化面をもつ。焼土・炭化物を含む。
54'．赤褐色土(2.5YR4/6)　被熱による赤化硬化面をもつ。焼土・炭化物を含む。
55．明赤褐色土(2.5YR5/6)　焼土主体土層。



第108図　1区25号住居出土遺物(1)

おり、その内壁は著しく焼土化していた。煙道が上方に向かって造られていたものと推定される。竈の掘り方は袖部分の地山ロームが掘り残されていた。

柱穴　主柱穴と考えられるＰ１・Ｐ２を掘り方面で検出した。規模（長軸×短軸×深さ）は、Ｐ１が0.42×0.36×0.40m、Ｐ２が0.30×0.25×0.19mである。

周溝　南東隅および南壁沿いに周溝状の凹みを検出した。概ね幅は0.13～0.20m、深さは０～0.03m。

貯蔵穴　南東隅に長軸0.91m、短軸0.88m、深さ0.64mの隅丸正方形の貯蔵穴が検出された。北東隅縁からは炭化材（Ｃ15～Ｃ18）が内部に落ち込むように出土した。炭化材（Ｃ15～Ｃ18）は破片１、柾目板状破片１、みかん割りの可能性のある破片２でいずれもクヌギ節と同定されている。また南東縁から落ち込むように土師器坏(254)が出土した。

床面　床面は中央部を中心に硬化していた。北東隅には床面に炭が広がり、竈左側の東壁沿いには壁に直交する方向にのびる炭化材（Ｃ６・Ｃ７・Ｃ11）や、炭化材破片（Ｃ５・Ｃ８・Ｃ９・Ｃ12）が床面直上あるいは斜位あるいは直立して出土した。

貯蔵穴の西側の壁際には長軸0.89m、短軸0.55m、深さ0.19mの楕円形の１号土坑が掘られていた。１号土坑の長軸は住居壁方向と一致している。土坑の周囲は長さ2.13m、幅0.72mの高まりになっており、そこにも炭や焼土が分布していた。炭化材（Ｃ１・Ｃ13・Ｃ２・Ｃ14・Ｃ３・Ｃ４）もあまり規則的な位置を示していないが、土坑に重なって出土した。１号土坑周辺からは土師器坏(260)が土坑底面直上で、土師器坏(253・257)が土坑東縁床面上５cmで出土した。東壁・南壁沿いの炭化材もクヌギ節と同定されている。

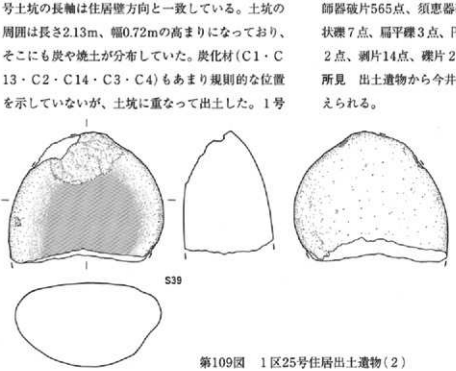
埋没土　軽石やローム粒・塊、焼土粒を含む黒褐色土・黄褐色土で埋まっていた。

掘り方　竈部分を除く壁沿いに幅1.10～1.90m、深さ0.02～0.18mの帯状に掘り込まれていた。深さは凹凸が著しく一定でない。全体としては竈前と中央部が高くなる掘り方面を呈している。竈の掘り方は袖部分にも地山ローム層の掘り残しがあった。

遺物と出土状況　竈・貯蔵穴周辺に遺物は集中して出土した。これらの出土状況については前述した。ほかに図示した土師器坏(259)が北東部床面上11cmで、土師器鉢(261)は北部中央寄り床面上３cmで出土した。鉄鏃（Ｍ１）は中央部北寄りの床面上７cmで出土した。また臼玉（Ｓ56）は土師器小型甕(266)内部の土砂を水洗選別して検出したものである。土師器甕(269)は埋没土中から出土した。灰釉陶器長頸壺(264)・須恵器甑(265)は埋没土出土で混入と思われる。

図示した遺物のほかに、縄文土器破片12点、土師器破片565点、須恵器破片３点、粘土塊９点、棒状礫７点、扁平礫３点、円礫１点、大型軽石（竈袖材）２点、鋼片14点、礫片２点が出土した。

所見　出土遺物から今井道上Ⅱ遺跡２期の住居と考えられる。



第109図　１区25号住居出土遺物（２）

2区1号住居

（第110・111図　PL51-52-92-93　遺物観察表P.223-228）

位置　98－L・M－1・2G

形状　正方形。西壁が東壁より短い。

規模　長軸3.74m　短軸3.10～3.74m
残存壁高0.70m

面積　9.78㎡　　**西壁方位**　N－25°－E

竈　南隅に竈が構築されていた。確認長0.56m、燃焼部幅不明、袖の残存はない。壁外に0.19m突出して煙道部が残っていた。

柱穴　主柱穴は検出されなかった。南西壁際の周溝に重なって長軸0.42m、短軸0.33m、深さ1.10mのピットが検出されている。住居に伴うかどうかは不明である。

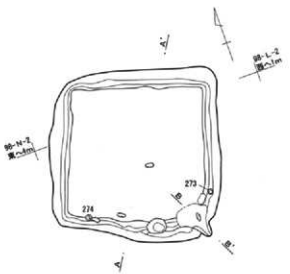
周溝　竈部分を除き全周する。概ね幅は0.14～0.24m、深さは0.02～0.06mである。

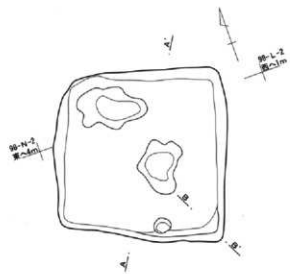
貯蔵穴　貯蔵穴は検出されなかった。

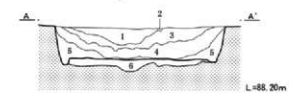
床面　床面はほぼ平坦である。

埋没土　上面には浅間Bテフラが塊状に堆積しており、最上層は浅間B軽石を含む暗褐色土で埋まっていた。中層はローム粒・小塊を含む褐色土、下層はローム粒を含む黄褐色土で埋まっていた。

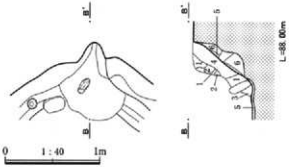
掘り方　中央部および北西部が不正楕円形に掘り込まれていた。その範囲には北西部の長軸1.50m、短







2区1号住居
A－A'
1．暗褐色土　黒褐色土がラミナ状にはさまる。浅間B軽石を全体に含む。ロームを含み黄色味がかる。
2．浅間B軽石層。
3．黒褐色土　ローム粒・ローム小塊を少量含む。
4．暗褐色土　ローム粒を全体に含み、明るい。
5．黄褐色土　ローム粒主体。暗褐色土を含む。
6．黄褐色土　ローム主体。暗褐色土を含む。地山ロームよりやや暗い。



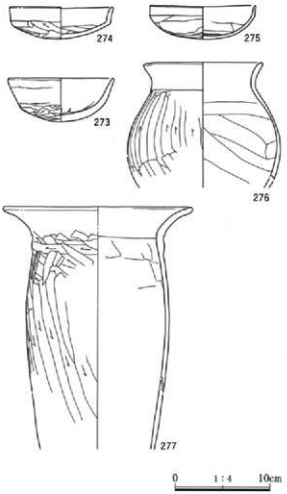
竈　B－B'
1．褐色土　焼土粒を少量含む。
2．明赤褐色土　焼土を全体に含む。
3．暗灰黄色土
4．暗色土　1層よりやや明るい。焼土粒、焼土小塊を含む。
5．黄褐色土　焼土塊および焼土粒を多く含む。
6．黄褐色土　焼土粒をわずかに含む。ローム主体。暗褐色土が若干混入したもの。

第110図　2区1号住居

軸1.38m、深さ0.20m、中央部は長軸1.19m、短軸1.00m、深さ0.13mである。全体としては厚さ0.20～0.30mの掘り方充　土が検出された。

遺物と出土状況　出土遺物はあまり多くない。土師器坏(273)が竈左脇の周溝内底面上2㎝で出土した。また土師器坏(274)が南西壁周溝内底面上2㎝で出土した。土師器小型甕(276)、長胴甕(277)、坏(275)は埋没土中から出土した。図示した遺物のほかに土師器破片36点、大型礫1点、棒状礫4点が出土した。

所見　出土遺物から今井道上Ⅱ遺跡4期の住居と考えられる。



第111図　2区1号住居出土遺物

（3）掘立柱建物

1区1号掘立柱建物（第112・113図　PL52～54）

位置　87－Q・R－5・6G

主軸方位　N－20°－W

重複　1区3号掘立柱建物と重複する。柱穴の直接の重複は無いことから新旧関係は不明である。建物構造や主軸(西辺)方向が一致することから建て替えられたものと推定される。ただし台形の斜辺は不一致で、規模は本建物の方が大きい。

また5号住居と南辺が重複するが、新旧関係の確認はできていない。

形態　3×3間(5.26×5.08m・17.5尺×17尺)、面積27.12㎡。正方形で棟方向不明。柱間は東西辺1.54～1.97m、南北辺1.56～1.83m。東辺は4°西へ軸を変えている。

北辺の柱穴は柱軸にのるが、柱間は一定でない。東辺はいずれの柱穴も柱軸にのるが柱間はP5・P6間がやや長くなっている。南辺は南東角のP7のみ検出した。南西角との間の3つの柱穴は5号住居との重複や国道50号拡幅工事調査区との境界にあたり調査区が分かれてしまったために遺構確認が不十分で確認できなかった。西辺は南西角の柱穴の他は3本ともほぼ等間隔に柱軸にのる。

いずれの柱穴でも柱痕跡は検出できなかった。柱穴は楕円形あるいは円形で、長径0.7～0.32m、短径0.51～0.29m、深さ0.49～0.07mと幅がある。

内部施設　無し　　**出土遺物**　無し

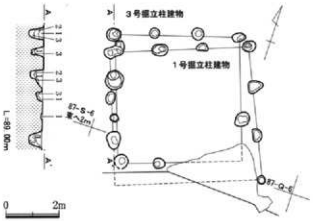
1区3号掘立柱建物（第112・114図　PL52・54・55）

位置　87－Q・R－5～7G

主軸方位　N－20°－W

重複　1区1号掘立柱建物と重複する。柱穴の直接の重複は無いことから新旧関係は不明である。建物構造や主軸(西辺)方向が一致することから建て替えられたものと推定される。ただし台形の斜辺は不一致で、規模は1号建物の方が大きい。

また5号住居と南辺が重複するが、新旧関係の確認はできていない。



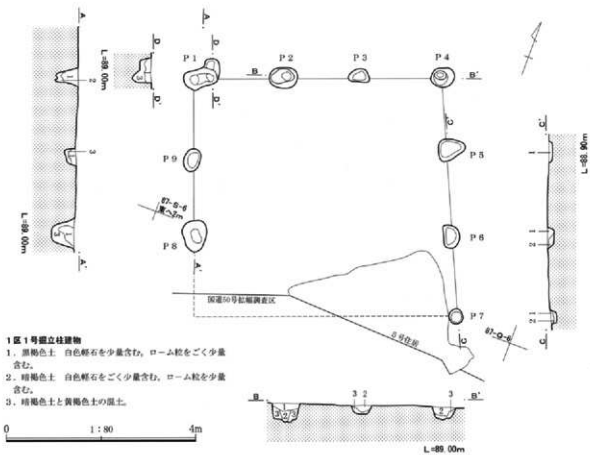
第112図　1区1号・3号掘立柱建物の重複関係

第13表　1区1号掘立柱建物跡ピット計測表

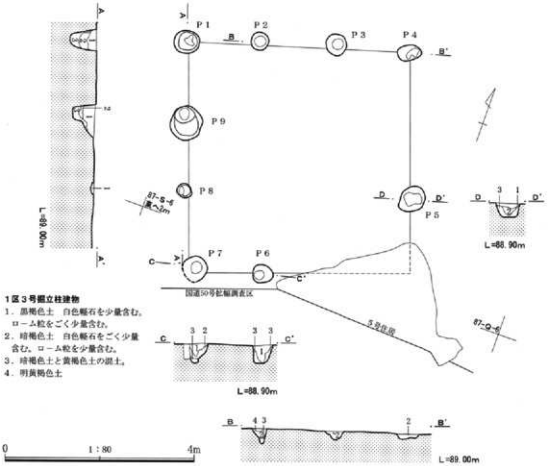
建物全体規模	3×3間		面積	27.12㎡	
主軸方向	N−20°−W		庇	無し	
桁・梁行の規模(m)	柱穴No	規模(m) 長径	規模(m) 短径	規模(m) 深さ	形状	次柱穴との間隔(m)
北辺　5.26	P 1	0.70	0.43	0.43	楕円形	1.97
	P 2	0.60	0.44	0.36	楕円形	1.54
	P 3	0.44	0.29	0.16	楕円形	1.71
東辺　5.08	P 4	0.50	0.41	0.30	楕円形	1.56
	P 5	0.57	0.47	0.07	楕円形	1.83
	P 6	0.48	0.34	0.12	楕円形	1.60
(南辺　5.55)	P 7	0.32	0.29	0.13	円　形	
(西辺　5.03)	P 8	0.66	0.51	0.49	楕円形	1.60
	P 9	0.48	0.34	0.25	楕円形	1.69

第14表　1区3号掘立柱建物跡ピット計測表

建物全体規模	3×3間		面積	22.11㎡	
主軸方向	N−20°−W		庇	無し	
桁・梁行の規模(m)	柱穴No	規模(m) 長径	規模(m) 短径	規模(m) 深さ	形状	次柱穴との間隔(m)
北辺　4.72	P 1	0.55	0.47	0.45	楕円形	1.50
	P 2	0.39	0.38	0.30	円　形	1.65
	P 3	0.45	0.45	0.30	円　形	1.55
(東辺　4.60)	P 4	0.49	0.32	0.31	楕円形	3.08
	P 5	0.62	0.49	0.30	円　形	
(南辺　4.65)	P 6	0.43	0.39	0.40	楕円形	1.35
西辺　4.76	P 7	0.53	0.52	0.41	円　形	1.63
	P 8	0.33	0.30	0.26	円　形	1.62
	P 9	0.73	0.68	0.47	円　形	1.51



第113図　1区1号掘立柱建物



第114図　1区3号掘立柱建物

形態　3×3間(4.72×4.76m・16尺×16尺)、面積22.11㎡。正方形で棟方向不明。柱間は南北辺1.51～1.63m、東西辺1.50～1.65m。北辺は3°北へ軸を変えている。

北辺の柱穴は両端のP1・P4が柱軸にのるが、間のP2・P3はやや北にはずれる。柱間はほぼ等間隔である。東辺は南端の柱穴を5号住居との重複で欠いている。また北から二つめの柱穴は確認漏れである。P4・P5とも柱軸にのる。南辺は東角と東から二つめの柱穴を5号住居との重複で欠いている。P6・P7ともに柱軸にのる。西辺は南端のP7がやや東に、P8がやや西に柱軸からずれるが、P9とP1は柱軸にのっている。柱間はP9・P1間がやや狭いが、南の二カ所は等間隔である。

いずれの柱穴でも柱痕跡は検出できなかった。柱穴は楕円形あるいは円形で、長径0.73～0.33m、短径0.68～0.30m、深さ0.47～0.26mと幅がある。

内部施設　無し　　**出土遺物**　無し

1区2号掘立柱建物(第115図　PL55・56)

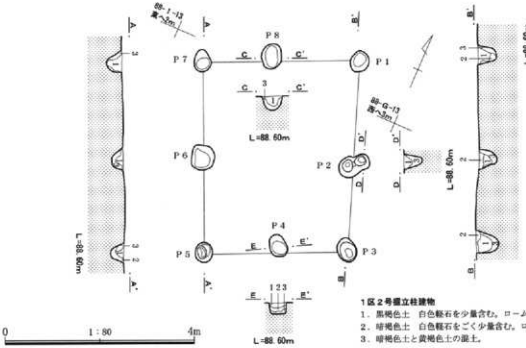
位置　88－G・H－12・13G

主軸方位　N－24°－W

重複　無し。

形態　2×2間(3.10～3.31m×4.00～4.04m・10～11尺×13.5尺)、面積12.28㎡の南北棟。柱間は桁側1.87～2.19m、梁側1.46～1.86m。

東辺は外側に外れるP2を除き柱穴が柱軸にのるが、柱間はP1・P2間の方がP2・P3間より長い。南辺は両端のP3・P5が柱軸にのり、P4は内側に外れる。柱間はほぼ等間隔である。西辺はP5～P7がほぼ等間隔に柱軸にのる。北辺はP7・P8・P1ともに柱軸にのるが、柱間はP7・P8



第115図　１区２号掘立柱建物

間よりＰ８・Ｐ１間の方が長くなっている。

いずれの柱穴でも柱痕跡は検出できなかった。柱穴は隅丸方形および楕円形・円形である。長径は0.53～0.42m、短径は0.49～0.35mで比較的そろっているが、深さは0.48～0.24mとやや幅がある。

内部施設　無し　　**出土遺物**　無し

第15表　１区２号掘立柱建物跡ピット計測表

建物全体規模		2×2間		面積	12.28㎡	
主軸方向		N－24°－W		庇	無し	
桁・梁行の規模(m)	柱穴No	規模(m) 長径	短径	深さ	形状	次柱穴との間隔(m)
東辺　4.04	P 1	0.45	0.38	0.31	楕円形	2.19
	P 2	0.45	0.39	0.41	楕円形	1.87
南辺　3.10	P 3	0.53	0.38	0.48	楕円形	1.50
	P 4	0.46	0.36	0.24	楕円形	1.60
西辺　4.00	P 5	0.42	0.35	0.28	円　形	1.96
	P 6	0.50	0.49	0.29	隅丸方形	2.04
北辺　3.31	P 7	0.48	0.35	0.32	楕円形	1.46
	P 8	0.53	0.43	0.30	楕円形	1.86

（４）井戸

１区１号井戸

（第116図　ＰＬ56・93　遺物観察表Ｐ.223・228）

位置　88－Ｉ・Ｊ－５Ｇ　　**形状**　楕円形

規模　長軸1.35m　短軸1.27m　残存壁高2.41m

長軸方位　Ｎ－15°－Ｅ

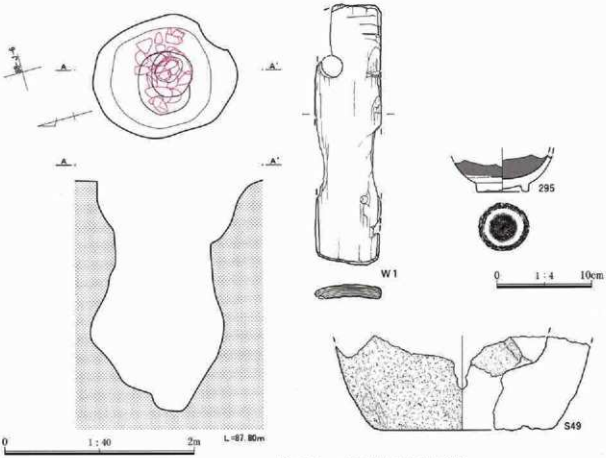
重複　３号住居に後出する。

断面形　上方がラッパ状に開く筒状である。また確認面から1.6m下のところで側方に抉れている。透水層があったものと推定される。

底面　直径0.5mほどの円形の小さな掘り込みになっていた。

遺物と出土状況　上層に26個の大型礫が集中して出土した。井戸埋設に伴って投げ込まれたと推定される。ほとんど自然礫であるが、図示した石鉢（Ｓ49）が含まれていた。また埋没土中から土器が出土している。出土土器の主体は土師器破片14片で、図示した18世紀前半から中葉の瀬戸美濃系の陶器碗(295)が唯一新しい遺物として出土した。

所見　出土遺物の幅からすれば、近世から近代の井



第116図　1区1号井戸と出土遺物

戸と考えられる。

（5）溝

1区1号溝（第117図）

位置　88－H－4・5G

形状　ほぼ南北方向の直線から、北端は東に屈曲を始めている。平面図を合成してみると、東側は国道50号拡幅工事の調査区で46号溝として調査された溝につながるものと推定される。

規模　調査長　4.67m　　最大幅　0.41m

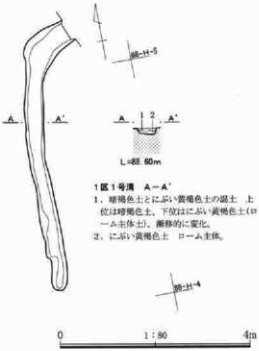
　　最小幅　0.33m　　深さ　0.24m

走向　N－1°－E

断面形　浅い箱形

遺物と出土状況　遺物の出土はほとんどない。埋没土中から縄文土器破片1点、土師器破片2点が出土したのみである。

所見　時期は不明である。



第117図　1区1号溝

3区1～5号溝（PL62）

3区の遺構確認作業中に、区の南東部で平行する5条の溝を検出した。いずれも幅0.5～1.0m、深さ1.0mほどの溝で、ローム塊を多量に含む黒褐色土で埋まっていた。底面は凹凸が著しく掘削行為の痕跡と思われた。

土層断面を観察・記録して全掘作業に入ったところ、縄文土器破片98点、土師器破片3点のほかに現代の遺物も出土した。そこで、遺構全体写真を撮影して調査終了とした。耕作に伴って残された溝群と考えられる。

3区6号溝（付図3　PL62・63）

位置　98－D～M－3～6G

形状　3区南端に東西方向に検出された道跡に重複して掘られていた2条の溝のうちの1条である。7号溝に後出する。

規模　調査長　45.6m　　最大幅　1.48m

　　最小幅　0.92m　　深さ（土層断面）　0.74m

走向　N－76°－E

断面形　下半部は箱形で上半部は大きく開く。

埋没土　ローム粒を少量含む黒褐色砂質土で埋まっていた。砂質なのは道跡を覆っていた浅間Bテフラの軽石層を掘り込んでいるためと推定される。

遺物と出土状況　遺物の出土はほとんどない。埋没土中から縄文土器破片3点、須恵器破片4点、陶磁器2点が出土した。

所見　時期は浅間Bテフラを掘り込んでいることから、天仁元(1108)年以降の溝である。道路であった地割りを踏襲して掘られた溝と考えられる。東西端部の底面標高は東が88.58m、西が87.56mで約1m西端が低いが、埋没土には流水があったような痕跡はなく、用水路ではなかったと考えられる。地割りの溝として掘られたものであろう。

その後溝が埋没しても、再び道路として地割りは調査直前まで残されていたことになる。

3区7号溝（付図3　PL62・63）

位置　98－D～M－3～6G

形状　3区南端に東西方向に検出された道跡に重複して掘られていた2条の溝のうちの1条である。6号溝に先行する。6号溝とは重複して掘られているが、東部では完全に重なっている。

規模　調査長　38.0m　　最大幅　0.60m

　　最小幅　0.40m　　深さ（土層断面）　0.40m

走向　N－75°－E

断面形　下半部は箱形で上半部は大きく開く。

埋没土　ローム粒を少量含む黒褐色砂質土で埋まっていた。砂質なのは道跡を覆っていた浅間Bテフラの軽石層を掘り込んでいるためと推定される。

遺物と出土状況　遺物の出土はほとんどない。埋没土中から土師器1点、陶磁器数点が出土したが、いずれも細片のため図化できなかった。

所見　時期は浅間Bテフラを掘り込んでいることから、天仁元(1108)年以降の溝である。道路であった地割りを踏襲して掘られた溝と考えられる。東西端部の底面標高は東が88.64m、西が87.71mで約0.9m西端が低いが、6号溝と同様に埋没土には流水があったような痕跡はなかった。用水路ではなく地割りの溝として掘られたものであろう。

その後溝が埋没し、6号溝が平行して掘られた後、再び道路として地割りは調査直前まで残されていたことになる。

（6）土坑

1区1号土坑（第118図　PL56）

位置　88－H－5G　　**形状**　楕円形

規模　長軸0.59m　短軸0.56m　残存壁高0.20m

長軸方位　N－65°－E

重複　1区2号住居に後出する。

断面形　皿形

埋没土　白色軽石を含む暗黄褐色土で埋まっていた。

底面　凹地状。

遺物と出土状況　埋没土中から土師器破片6点が出

出土しているが、いずれも細片で図化できなかった。
所見　土坑の時期および用途は不明である。

1区2号土坑（第118図　PL57　遺物観察表P.222）
位置　88－G－6G
形状　隅丸方形。南西部および北西隅に攪乱がおよび全体形状はつかめなかったが、北・東壁や西壁の一部で隅丸方形と推定できる。
規模　長軸2.18m　短軸1.97m　残存壁高0.15m
長軸方位　N－19°－W
断面形　浅い皿形
埋没土　白色軽石・焼土粒・炭を含む暗黄褐色土や灰混じりの褐灰色土で埋まっていた。その下層にはローム粒を含む暗褐色土の堅く締まった土があり、硬化面を形成していた。硬化面下はローム塊と暗黄褐色土の混土で埋まっていた。
底面　凹地状
遺物と出土状況　土師器甕(280)が硬化面上8㎝で、土師器坏(282)が硬化面上9㎝で出土した。また埋没土中から土師器坏(281)が出土した。土師器破片130点、粘土塊1点が出土しているが、いずれも細片で図化できなかった。
所見　本土坑には埋没土中位やや下に住居床面のような硬化面が検出された。硬化面には炉や柱穴、竈等の施設は検出されなかった。調査では土坑として記録したが、居住以外の用途をもつ家屋であった可能性もある。時期は出土遺物から今井道上遺跡Ⅲ期の遺構である可能性が高い。

1区3号土坑（第118図　PL57　遺物観察表P.228）
位置　87－S－6G　　**形状**　楕円形
規模　長軸0.59m　短軸0.54m　残存壁高0.52m
長軸方位　N－73°－W
断面形　筒形
埋没土　白色軽石を含む暗黄褐色土で埋まっていた。埋没土中央に柱痕のような堆積状況を示すが、周囲に展開する掘立柱建物跡はない。
底面　ほぼ平坦。
遺物と出土状況　埋没土中から擦石（S50）、扁平礫（S51）が出土した。また土師器破片16点が出土しているが、いずれも細片で図化できなかった。
所見　土坑の時期および用途は不明である。

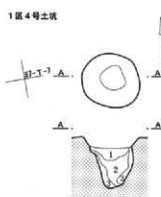
1区4号土坑（第118図　PL57）
位置　87－S－6・7G　　**形状**　楕円形
規模　長軸0.62m　短軸0.55m　残存壁高0.56m
長軸方位　N－71°－W
断面形　筒形
埋没土　少量の白色軽石・焼土粒を含む暗褐色土で埋まっていた。
底面　凹地状
遺物と出土状況　埋没土中から土師器破片6点が出土しているが、いずれも細片で図化できなかった。
所見　土坑の時期および用途は不明である。

1区5号土坑（第118図　PL57）
位置　87－T－7G　　**形状**　不定形
規模　長軸0.81m　短軸0.77m　残存壁高0.34m
長軸方位　N－50°－W
断面形　すり鉢形
埋没土　ローム粒を含む暗黄褐色土で埋まっていた。
底面　小ピット状。
遺物と出土状況　出土遺物はなかった。
所見　土坑の時期および用途は不明である。調査に際して掘りすぎてしまったため、平面図は遺憾ながら実態を示していない。

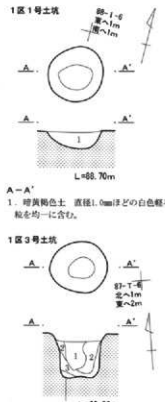
1区6号土坑（第118図　PL58）
位置　87－S－6G　　**形状**　不定形
規模　長軸0.85m　短軸0.70m　残存壁高1.57m
長軸方位　N－84°－W　　**断面形**　筒形
埋没土　ローム粒を含む暗黄褐色土で埋まっていた。
底面　凹地状
遺物と出土状況　出土遺物は無かった。
所見　土坑の時期および用途は不明である。

A－A'
1．暗黄褐色土　直径1.0mmほどの白色軽石粒を均一に含む。

A－A'
1．暗褐色土　白色軽石粒を少量含む。ローム粒を多く含む。焼土粒をごく少量含む。
2．黒褐色土　白色軽石粒を少量含む。ローム粒を少量含む。
3．暗褐色土　ローム粒、直径0.1cmをやや多く含む。
4．黄褐色土　ローム粒を少量含む。



A－A'
1．黒褐色土　白色軽石粒を少量含む。焼土粒をごく少量含む。ローム粒を少量含む。
2．暗褐色土　白色軽石粒・ローム粒を少量含む。
3．黄褐色土　暗褐色土を少量含む。

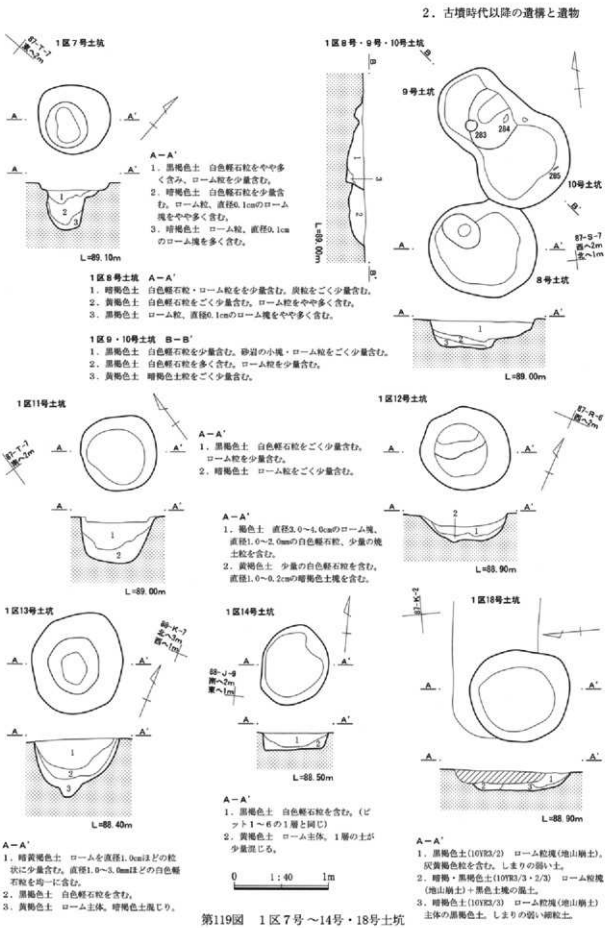


A－A'　B－B'
1．攪乱土。暗褐色土。長径2.0cmほどのロームを粒および塊状に含む。長径2.0～3.0cmほどの黒褐色土を塊状にごく少量含む。
2．攪乱土。暗褐色土。やや砂質。長径3.0cmほどのロームを粒および塊状に含む。
3．攪乱土。暗褐色土。1・2層より黄色味あり。直径1.0～5.0mmほどの白色軽石粒を均一に含む。下位はロームを斑状に含む。（下位は白色軽石は認められない）
4．暗褐色土。直径1.0mmほどの白色軽石粒を少量含む。部分的に長径1.0cmほどの焼土粒・塊や、長径1.0cmほどの炭主体の黒色土粒を少量含む。
5．褐灰色土。炭混じりの土。暗褐色土を斑状に含む。
6．暗褐色土　ローム粒を直径0.5～1.5cmほどに均一に含む。硬くしまる。硬化面。
7．暗黄褐色土　ロームと暗褐色土の混土。
8．7層に類似。ただしローム土体で7層より黄色味を帯びる。

A－A'
1．暗黄褐色土　ローム粒を少量含む。
2．黄褐色土　暗褐色土粒をごく少量含む。

A－A'
1．暗黄褐色土　少量の白色軽石粒を含む。炭粒をごく少量含む。
2．地山ローム。
3．黄褐色土　ローム粒をごく少量含む。
4．暗黄褐色土　ローム粒をごく少量含む。
5．黄褐色土　ローム粒をごく少量含む。

第118図　1区1号～6号土坑



第119図　1区7号～14号・18号土坑

１区７号土坑（第119図　PL58）

位置　87－S－6・7G　　**形状**　楕円形

規模　長軸0.77m　短軸0.73m　残存壁高0.51m

長軸方位　N－48°－E

断面形　筒形

埋没土　ローム粒・白色軽石を含む黒褐色土で埋まっていた。

底面　凹地状。

遺物と出土状況　埋没土中から土師器破片３点が出土しているが、いずれも細片のため図化できなかった。

所見　土坑の時期および用途は不明である。

１区８号土坑（第119図　PL58）

位置　87－S－7G　　**形状**　楕円形

規模　長軸1.13m　短軸1.04m　残存壁高0.32m

長軸方位　N－85°－W

重複　10号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

断面形　浅い箱形

埋没土　白色軽石・ローム粒・少量の炭粒を含む暗褐色土・黄褐色土で埋まっていた。

底面　ほぼ平坦。北西部底面に長軸0.4m、短軸0.3m、深さ0.12mのピットが掘られていた。

遺物と出土状況　埋没土中から土師器破片４点、粘土塊１点、剥片１点が出土しているが、いずれも細片で図化できなかった。

所見　土坑の時期および用途は不明である。

１区９号土坑（第119図　PL58　遺物観察表P.223）

位置　87－S－7G　　**形状**　楕円形

規模　長軸0.86m　短軸0.80m　残存壁高0.25m

長軸方位　N－40°－W

重複　10号土坑に後出する。

断面形　浅い皿形

埋没土　白色軽石を含む黒褐色土で埋まっていた。

底面　やや凹凸がある。南東部が深くなっている。

遺物と出土状況　須恵器蓋(283)は中央部底面上６cm、須恵器鉢(284)は南東部底面上10cmで出土した。また、埋没土中から土師器破片２点、須恵器破片２点、剥片３点が出土している。

所見　土坑の時期および用途は不明である。

１区10号土坑（第119図　PL58　遺物観察表P.222）

位置　87－S－7G　　**形状**　楕円形

規模　長軸1.08m　短軸0.75m以上
　　残存壁高0.19m

長軸方位　N－50°－E

重複　９号土坑に先行する。

断面形　浅い皿形

埋没土　白色軽石を多く含む黒褐色土で埋まっていた。

底面　ほぼ平坦である。

遺物と出土状況　須恵器坏(285)は南東壁際底面上６cmで出土した。また、埋没土中から土師器破片３点、須恵器破片１点、粘土塊５点が出土している。

所見　土坑の時期および用途は不明である。

１区11号土坑（第119図　PL59）

位置　87－S－6G　　**形状**　円形

規模　直径0.78m　残存壁高0.50m

断面形　箱形

埋没土　少量のローム粒、白色軽石を含む黒褐色土で埋まっていた。

底面　ほぼ平坦である。

遺物と出土状況　埋没土中から土師器破片１点が出土しているが、細片で図化できなかった。

所見　土坑の時期および用途は不明である。

１区12号土坑（第119図　PL59）

位置　87－R－5G　　**形状**　楕円形

規模　長軸0.96m　短軸0.89m　残存壁高0.41m

長軸方位　N－61°－E

断面形　浅い皿形

埋没土　ローム粒・白色軽石を含む褐色土・黄褐色土で埋まっていた。

底面　やや凹凸がある。北西部が深くなっていた。
遺物と出土状況　埋没土中から土師器破片４点が出土しているが、いずれも細片で図化できなかった。
所見　土坑の時期および用途は不明である。

１区13号土坑（第119図　PL59）
位置　88－K－７G　　**形状**　楕円形
規模　長軸1.12m　短軸0.99m　残存壁高0.55m
長軸方位　N－3°－E
断面形　椀形
埋没土　ローム粒・白色軽石を含む暗褐色土・黒褐色土で埋まっていた。
底面　中央部がピット状に深くなっていた。
遺物と出土状況　出土遺物は無かった。
所見　土坑の時期および用途は不明である。

１区14号土坑（第119図　PL59　遺物観察表P.223）
位置　88－I－８G　　**形状**　楕円形
規模　長軸0.87m　短軸0.72m　残存壁高0.22m
長軸方位　N－9°－E
断面形　浅い箱形
埋没土　白色軽石を含む黒褐色土、ローム塊を多く含む黄褐色土で埋まっていた。
底面　ほぼ平坦である。
遺物と出土状況　土師器坏(286)は埋没土中から出土した。また埋没土中から土師器破片１点が出土している。
所見　土坑の時期および用途は不明である。

１区18号土坑（第119図　PL59・60）
位置　87－K－１G　　**形状**　楕円形
規模　長軸1.07m　短軸0.98m　残存壁高0.21m
長軸方位　N－29°－W
断面形　浅い箱形
埋没土　上層には攪乱が及んでいる。ローム粒やローム塊を含む黒褐色土で埋まっていた。
底面　ほぼ平坦である。
遺物と出土状況　出土遺物は無い。
所見　土坑の時期および用途は不明である。

（7）ピット

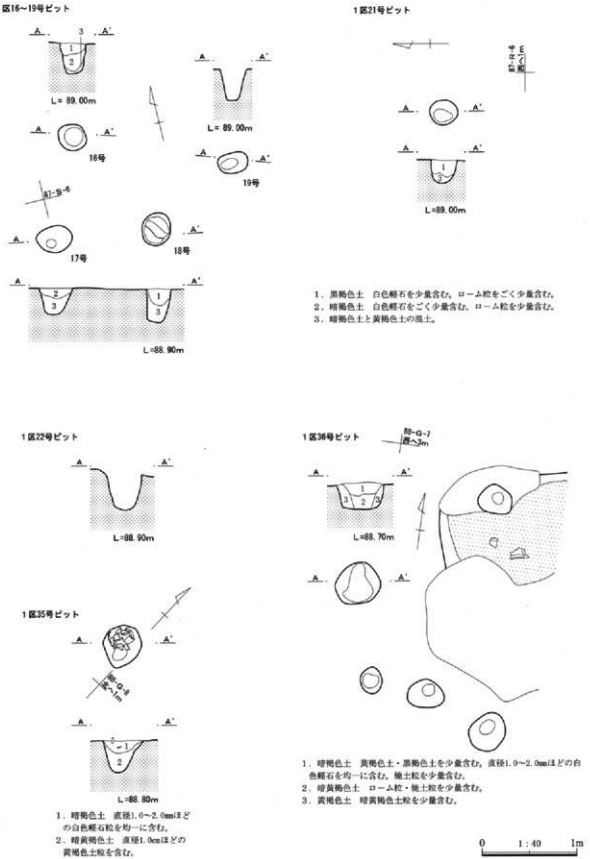
本遺跡では40基のピットを検出して番号を付けて記録したが、１～15号、20号、23～34号ピットは１～３号掘立柱建物の柱穴あるいは関連ピットとして認められたため、前項で報告した。しかしこの他のピットは建物の柱穴とは認められなかったため、それぞれ単独で図化し、本項で報告した。ピットの位置や規模は一覧表にまとめた。

いずれのピットも筒形の断面形を呈するが、形態や深さに規則性はない。遺物の出土量は少なく、35号ピットで土師器甕(279)の大型破片や土師器破片22点が出土した他は、17・18号ピットで土師器破片１点、22号ピットで土師器破片１点、須恵器破片１点、33号ピットで縄文土器破片39点、土師器破片41点、36号ピットで土師器破片２点、38号ピットで土師器破片６点が出土したにとどまる。

ピットの時期は不明といわざるを得ない。

第16表　時期不明ピット一覧表

ピット番号	グリッド	長軸m	短軸m	深さm	形　状
P16	87－R－６	0.51	0.28	0.33	楕円形
P17	87－R・S－５	0.38	0.29	0.30	楕円形
P18	87－R－５	0.36	0.30	0.44	楕円形
P19	87－R－５	0.32	0.21	0.31	楕円形
P21	87－R－６	0.29	0.24	0.24	楕円形
P22	不明	0.43	不明	0.42	不　明
P35	88－F・G－８	0.91	0.79	0.38	楕円形
P36	88－G－６	0.49	0.43	0.30	楕円形
P37	88－L－８	0.39	0.35	0.60	楕円形
P38	88－L－８	0.53	0.45	0.37	楕円形
P39	88－C－８	0.50	0.43	0.27	楕円形
P40	87－S－５・６	0.48	0.38	0.45	楕円形

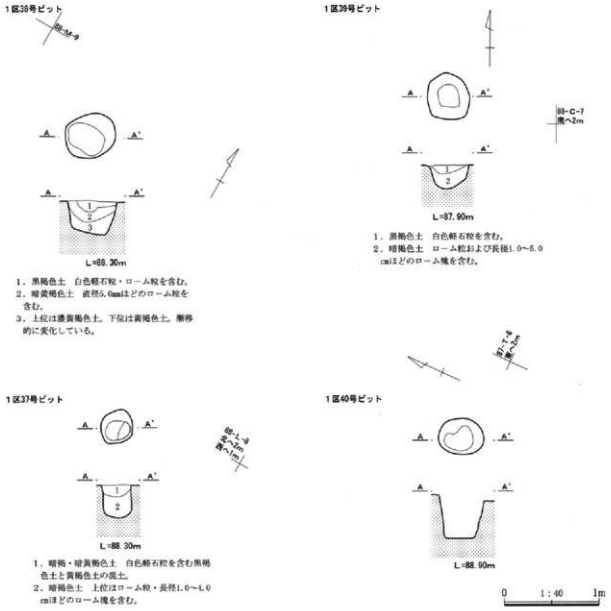


1．黒褐色土　白色軽石を少量含む，ローム粒をごく少量含む。
2．暗褐色土　白色軽石をごく少量含む，ローム粒を少量含む。
3．暗褐色土と黄褐色土の混土。

1．暗褐色土　直径1.0～2.0mmほどの白色軽石粒を均一に含む。
2．暗黄褐色土　直径1.0cmほどの黄褐色土粒を含む。

1．暗褐色土　黄褐色土・黒褐色土を少量含む，直径1.0～2.0mmほどの白色軽石を均一に含む，焼土粒を少量含む。
2．暗黄褐色土　ローム粒・焼土粒を少量含む。
3．黄褐色土　暗黄褐色土粒を少量含む。

第120図　１区16号～19号・21号・22号・35号・36号ピット



1区38号ピット

1．黒褐色土　白色軽石粒・ローム粒を含む。
2．暗黄褐色土　直径5.0mmほどのローム粒を含む。
3．上位は濃黄褐色土。下位は黄褐色土。漸移的に変化している。

1区39号ピット

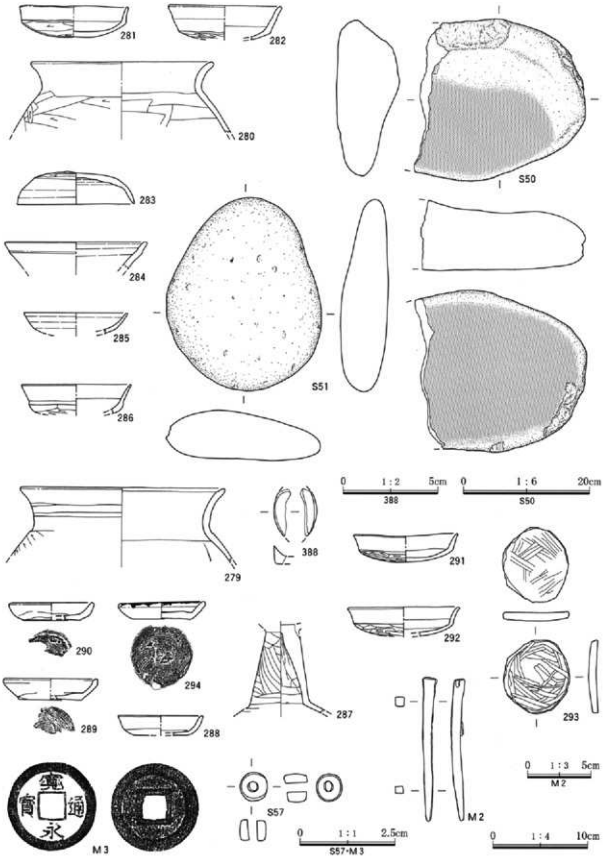
1．黒褐色土　白色軽石粒を含む。
2．暗褐色土　ローム粒および長径1.0～5.0cmほどのローム塊を含む。

1区37号ピット

1．暗褐・暗黄褐色土　白色軽石粒を含む黒褐色土と黄褐色土の混土。
2．暗褐色土　上位はローム粒・長径1.0～4.0cmほどのローム塊を含む。

1区40号ピット

第121図　1区37号～40号ピット



第122図　1区土坑・ピット・遺構外・3区遺構外の出土遺物

（8）道跡（付図3　PL62・63）

縄文時代前期諸磯式期の3区1号住居の南壁を確認中に浅間Bテフラに覆われた硬化面を検出したことから、3区南側の現道の舗装および基礎の採石を除去して全体を調査した。現道と多くの部分で重複するが、西端部はやや北にずれる。むしろ遺跡の方が走向は直線的である。

堅く硬化した路面は2面検出された。それぞれの位置はほぼ平行するが、ずれているところもある。新しい路面は浅間Bテフラの最初に降下した灰色火山灰に直接覆われていた硬化面である。硬化面が確認できた長さは43.20m、また道の全幅は不明であるが、現在確認できる範囲では最大1.40mである。

北端は深さ10～20cmの皿状に掘り込まれていることから道の端を示していると推定される。一方、南端は路面の南側に6号溝が平行して掘られていることから、もう少し南側に路面が広がっていた可能性もある。

硬化面のほぼ中央には7号溝が重複して掘り込まれているために硬化路面が2列に分断されていた。6・7号溝ともに路面より新しく、6号溝上層にはガラス破片も含まれていた。

路面は厚さ1～2cmの硬化層で形成されていた。路面は細かな凹凸はあるがほぼ平坦で、轍の痕跡等は確認できなかった。この硬化層の下部には深さ1～2cmの溝状の凹地があり、黒色土のロームの混土で埋まっていた。路面構築の際に混土を入れ固めたものと推定される。

路面を覆っていた浅間Bテフラは3つに分けられた。直接路面を覆っていたのは厚さ0.5cmほどの青灰色火山灰（付図3 土層断面B-B′13層）、その上に厚さ5～7cmの灰白色細粒軽石層（付図3 土層断面B－B′12層）、その上に厚さ5～10cmのくすんだ赤褐色の固結した火山灰層（付図3 土層断面B-B′11層）である。このうち13層と11層は硬化したままの堆積状況と見られるが、12層は通常本地域で見られる浅間Bテフラの軽石層に比べると攪乱されて塊状になっているように観察された。軽石降下後も往来があったことをしめすのかもしれない。

もう一つの路面は浅間Bテフラ下の路面を剥がして下部の構造を精査中に検出した。6号溝底面に切られており、浅間Bテフラ下路面の下部構造の混土で覆われていた。路面上には浅間Bテフラは全く残っていなかった。この路面は上層の浅間Bテフラ下路面や6号溝の掘削によって壊され、その一部が残存していたものであろう。東半部では6号溝に完全に削られていて、東端の一部で部分的に検出されたのみである。

道跡の時期は、上層の路面が浅間Bテフラに直接覆われていることから天仁元(1108)年のものといえる。しかし下層の路面は明確に路面に伴う出土遺物が無いことから明確にできなかった。重複する6号・7号溝からは陶磁器が出土しているが、平安時代末から中世前期にまでさかのぼる遺物はない。

本遺跡から南約200mにある今井道上道下遺跡2区では浅間Bテフラ層のすぐ上層につくられた道路跡が見つかっている。これは近世にさかのぼる「あずま道」の5m北側に平行してつくられていた。路面幅は3メートル弱で両側に幅1m前後の側溝をもっている。本遺跡の道跡とは規模が異なるが、浅間Bテフラの降下を前後する同一地域の道跡であり、地域構造を考える上で関連を考える必要があろう。

（9）遺構外の出土遺物

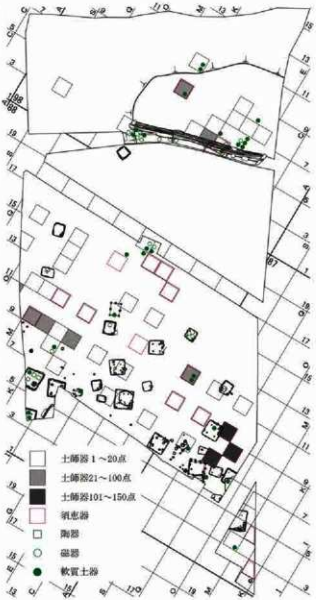
（第122・123図　PL93　遺物観察表P.223・224）

古墳時代以降の遺物も、遺構に伴わない形で多量に出土している。出土遺物数は第17表の通りである。**土師器**は住居が検出された1区に偏在している。その分布をみると住居の分布にほぼ一致していることがわかる。**須恵器**の出土量は少ないが土師器の分布域とほぼ一致している。3区には古墳時代の遺構は検出されなかったが、少量の土師器・須恵器の出土が認められた。居住域は1区周辺であったが、水田生産域は3区北側の沖積地に求められるので3区でも畠耕作等の行動が行われた可能性もあろう。

陶磁器類は全体で106点が出土している。江戸時代から近・現代の遺物が混在している。本遺跡の近世の遺構は、１区１号井戸と、道路建設に伴って改葬された墓地のなかにあって近世に遡るものが３区に認められただけである。遺構外の遺物は現代までも含めた撹乱土中に包含されているのであろう。

図化したのはいずれも坏形土器の大形破片(第122図291・292)、土製品(293)あるいは金属製品・玉類(Ｍ２・S57)で、最小限にとどめた。３区98－Ｇ－５および98－Ｋ－７・９グリッドで出土した灯明皿(294)・カワラケ(288～290)および古銭「寛永通宝」(Ｍ３)は近世と考えられる墓壙の副葬品と思われる。

３区北部の沖積地からは南側に小さな帯状低地が入り込んでいた。この低地では遺構は検出されなかったが少量の土師器が出土した。図示したのは土師器高坏(287)の脚部である。



第123図　グリッド出土の古墳時代以降土器の分布

第17表　古墳時代以降遺構外出土遺物一覧表

区		掲載遺物									非掲載遺物									総計
		土師器	須恵器	土製品	石器・礫	金属製品	陶器	磁器	軟質土器	合計	土師器	須恵器	埴輪	石器・礫	金属製品	陶器	磁器	軟質土器	合計	
1区	表採	2		1	1					4	2126	54	4			6		7	2197	2201
1区	グリッド					1				1	683	31				2		6	722	723
1区	他時期の遺構									0						9	2	7	18	18
2区	表採									0	16								16	16
2区	グリッド									0	5								5	5
3区	表採					1				1	43	2				8	7	17	77	78
3区	グリッド					1			4	5	42	1				8	1	12	64	69
3区	他時期の遺構									0						2	1	7	10	10
	合　計	2	0	1	1	3	0	0	4	11	2915	88	4	0	0	35	11	56	3109	3120

第５章　自然科学的分析報告

１．今井道上Ⅱ遺跡出土炭化材の樹種同定

植田　弥生（パレオ・ラボ）

１）はじめに

ここでは、古墳時代の25号住居から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。

２）試料と方法

複数破片がある試料については、形状や大きさの異なる炭化材を選び、樹種を確認した。

同定は、炭化材の横断面（木口）を手で割り実体顕微鏡で予察し、次に材の３方向（横断面・接線断面・放射断面）の断面を作成し、走査電子顕微鏡で拡大された材組織を観察した。走査電子顕微鏡用の試料は、３断面を５㎜角以下の大きさに整え、直径１㎝の真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM-T100型）で観察と写真撮影を行った。

同定した炭化材の残り破片は、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。

３）結果

25号住居から出土し建築材の可能性がある14点（Ｃ－１～14）はすべてクヌギ節であった。分割材やみかん割り材ではないかと思われる炭化材（Ｃ－２、Ｃ－10、Ｃ－11）や、柾目板状（Ｃ－８）の炭化材があった。クヌギ節の材は、放射組織に沿って割れ易いので、炭化後に割れた可能性も否定できないが、加工して利用していた可能性もある。

貯蔵穴から出土した炭化材と炭参考１も、すべてクヌギ節であった。

第18表　今井道上Ⅱ遺跡出土炭化材樹種同定結果一覧　　＊放射方向の長さ×接線方向の長さ

区	遺構番号	遺構	試料名	樹種	主な破片の横断面サイズ＊	およびその年輪幅(㎜)	備考	時代
1	25	住居	Ｃ－１	クヌギ節	2.0×2.0㎝	２～４㎜	破片（分割材？）	古墳
1	25	住居	Ｃ－２	クヌギ節		４㎜	破片	古墳
1	25	住居	Ｃ－３	クヌギ節	2.0×3.0㎝	１～1.5㎜	破片、18年輪有り	古墳
1	25	住居	Ｃ－４	クヌギ節		４㎜	破片	古墳
1	25	住居	Ｃ－５	クヌギ節	3.4×2.0㎝	２～５㎜	破片	古墳
1	25	住居	Ｃ－６	クヌギ節		３㎜	破片	古墳
1	25	住居	Ｃ－８	クヌギ節		５㎜	柾目板状破片	古墳
1	25	住居	Ｃ－９	クヌギ節		３㎜	破片	古墳
1	25	住居	Ｃ－10	クヌギ節	5.5×2.3㎝	３㎜	みかん割り（1/8）？15年輪有り	古墳
1	25	住居	Ｃ－11	クヌギ節	4.5×2.0㎝	１～３㎜	分割材？	古墳
1	25	住居	Ｃ－12	クヌギ節		１㎜	破片	古墳
1	25	住居	Ｃ－13	クヌギ節			破片	古墳
1	25	住居	Ｃ－14	クヌギ節	3.0×2.5㎝	１～２㎜	破片、39年輪	古墳
1	25	住居	炭参考１	クヌギ節		３～５㎜	破片	古墳
1	25	住居	貯蔵穴Ｃ－15	クヌギ節		２㎜	破片	古墳
1	25	住居	貯蔵穴Ｃ－16	クヌギ節	3.0×1.0㎝	３～５㎜	柾目板状破片	古墳
1	25	住居	貯蔵穴Ｃ－17	クヌギ節	2.5×2.0㎝	２～３㎜	みかん割り？破片	古墳
1	25	住居	貯蔵穴Ｃ－18	クヌギ節	6.5×4.0㎝	２㎜	みかん割り？破片22年輪あり	古墳
1	25	住居	貯蔵穴内の炭	クヌギ節	3.0×2.0㎝	２㎜	破片、17年輪あり	古墳
				クヌギ節	直径1.5㎝		４年輪あり	

樹種記載

コナラ属コナラ亜属クヌギ節　*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*　ブナ科

年輪の始めに大型の管孔が１～３層配列し、その後は小型で孔口は円形で厚壁の管孔が単独で放射方向に配列し、広放射組織をもち、接線状・網状の柔組織が顕著な環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、チローースが発達している。放射組織はほぼ同性、単列のものと集合状のものがあり、道管との壁孔は柵状である。

クヌギ節は落葉性のドングリの仲間で、そのうちのクヌギとアベマキが属する。いずれの種も暖帯の山林に普通の高木でクヌギ節は二次林に多く、関東ではクヌギ、瀬戸内海沿岸地方にはアベマキが多い。材は重厚で割裂性が良い。関東地方の発掘された住居材にはよく使用されている。現在は薪炭材として重要であるが建築材としては一般的ではない。

２．今井道上Ⅱ遺跡から出土した炭化種実

新山雅広（パレオ・ラボ）

１）試料と方法

炭化種実の検討は、住居址より出土した土器内土壌などの堆積物試料について行った。炭化物の採集方法は、堆積物試料を水洗洗浄して残渣を回収し、フローテーションを行った。炭化種実の採集・同定は、得られた炭化物から実体顕微鏡下で行った。

２）結果

検討した結果、同定された炭化種実は、イネ炭化胚乳、不明炭化核のみが僅かであり、いずれも１区５号住居（Ｐ－27）より得られた。

３）考察

炭化種実が得られたのは、１区５号住居（Ｐ－27）のみであり、イネ炭化胚乳、不明炭化核であった。イネは栽培植物であり、不明炭化核としたものは、おそらくオニグルミの類と思われるが、小さな破片であり、同定には至らなかった。

図版１　出土した炭化種実

（スケールは１mm）

１．イネ、炭化胚乳、１区５号住居Ｐ－27の土
２．不明、炭化核、１区５号住居Ｐ－27の土

第6章　調査の成果と問題点

1．調査のまとめ

今井道上Ⅱ遺跡の発掘調査によって、縄文時代前期の小規模な集落と、古墳時代中後期、および平安時代の集落の一部を明らかにすることができた。

縄文時代の集落は赤城山南麓の当該期の集落の特徴をよく示している。赤城山南麓地域では山麓の帯状低地沿いや谷頭湧水の周辺に小規模な前期集落が立地している。今井道上Ⅱ遺跡も今井沼のある谷に面した集落立地をとっている。住居は3軒が検出されたが、いずれも方形で土器埋設土坑を炉とする。外形に差はみられるが、住居構造特に柱と炉の位置関係に共通点がみられた。これについては本章－2で後述する。

住居から出土した土器群は3軒とも黒浜式土器を少量混在する諸磯a式土器が主体で、発掘された集落の時期はほぼ限定できるであろう。出土土器の特徴は文様要素が少ないことで、これは住居の時期がほとんど近接していることを示しているのかもしれない。そのなかで半截竹管文の施文方法が回転によるものと観察できる資料が含まれていた。これについても本章－3で詳述する。遺構外からも多量の土器が出土しているが、時期は住居同様、黒浜式・諸磯a式期に集中していた。このような限定された遺物の出土状況が本遺跡の特徴といえよう。

また本遺跡では少量ながら、中期・後期・晩期の加曽利E式土器や称名寺式土器、千網式土器が出土した。周辺には、加曽利E式や称名寺式土器を出土する遺跡は数多く分布している。今回の調査で遺構は検出されなかったが、中・後期の何らかの人間行動があったと考えられよう。

一方、晩期、特に晩期後半千網式期の遺跡は群馬県内でも数例にとどまる。そのような状況のなかで、本遺跡で2片の晩期終末の土器が出土したことは重要であろう。今井道上Ⅱ遺跡周辺では近年縄文時代晩期土器の出土する遺跡の報告例が増えてきており、今回の土器もさらに注目されるところである。

縄文時代の石器は遺構内外から出土している。土器が縄文時代前期にほぼ限定できることから、包含層出土や表採の石器も概ねその時期と考えることができる資料となった。石器類の器種分類・石材同定をおこなって、縄文時代前期の石器器種構成や黒色頁岩や粗粒輝石安山岩を多用する実態が明らかになったが、石器製作および再生の具体的な様相までを解明することはできなかった。

古墳時代の集落は、南側に隣接する今井道上遺跡で確認された集落に連続する部分を調査した。集落の広がりの北側縁辺部を確認できたことになる。検出された住居は5世紀後半から7世紀後半の23軒である。その形態や時期は、今井道上遺跡で検出された住居とほぼ共通していた。今回の調査および整理作業で、今井道上遺跡の発掘報告書で提示された出土土器の編年や住居分類を追認する結果となった。その詳細は本章－4で述べる。

本遺跡の北側には今井沼の谷があり、その北側の台地は県営荒砥南部ほ場整備事業に伴って調査された荒砥北三木堂遺跡である。ここでも5世紀から6世紀にかけての密集する住居群が報告されており、初期須恵器を含む古式須恵器の出土量が多いことで注目されている。近年になって上武道路建設に伴って、ほ場整備事業で発掘除外となった隣接部分が調査されている。未報告であるが、荒砥北三木堂遺跡と同様な内容をもつ調査成果があった。これらの調査報告を総合化することによって、今井道上遺跡周辺すなわち今井神社古墳を取り巻く古墳時代集落の動向も明らかになっていくものと思われる。

また本遺跡では**平安時代の住居**が1軒検出されている。9世紀中葉まで残る暗文土師器の坏が出土した。南側に広がる奈良時代以降の集落北限を示す遺構と推定される。

２．　縄文時代前期の住居について

縄文時代の竪穴住居は１区で１軒、３区で２軒確認された。いずれも前期諸磯ａ式期に位置づけられるものであり、形態上の共通性も看取できる資料である。調査された竪穴住居数は３軒と少ないが、各住居間に観察し得る共通性をみることとしたい。

A，分布

各住居は、それぞれ近接して確認されているが、重複関係はもたない。平面的な位置関係をみれば、同時期に存在したことも考えられる。

３区１号住居および３区２号住居は14m程の間隔であり、北側低地を望む台地縁辺に占地するという共通性からも、同一集落を形成していたように見える。また、１区23号住居は３区１号住居と37mほど離れているが同一台地に占地する。間にある２区では同期の遺構は検出されなかったが、１区23号住居と３区１号・２号住居が同時期に存在した可能性を否定するものではないだろう。地形に即したものであろうが３軒とも棟方向をほぼ同方向としている。

出土土器も概ね諸磯ａ式土器を中心とし、胎土中に繊維を含有する黒浜式土器も少数ながら混在する。諸磯ａ式土器は、文様要素や器形から同型式でも古式の段階とみられ、この時期の集落の一部ともみることができる。

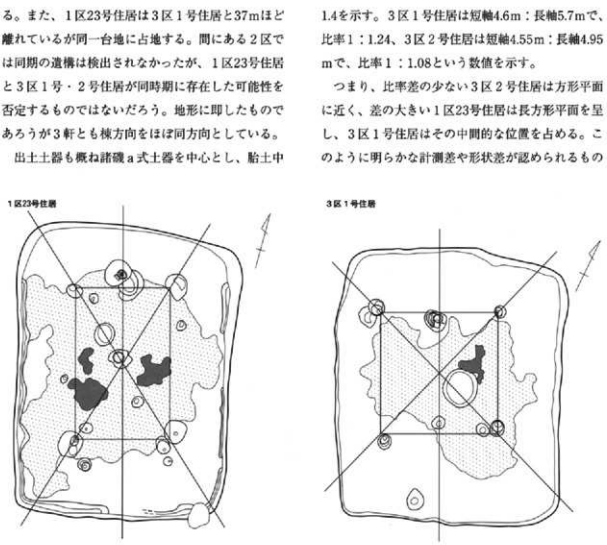
B，平面形

３軒とも長方形であるが、短軸：長軸比率が相違することで、平面形上に差が生じることになる。

なお、以下に示す平面形の計測値は下端である床面上で計測している。そのため、前章で報告した平面規模の計測値とは相違する点もあるが、計測比較にあたり同一基準により数値化しようと考えたことによる。同率を示す住居はないため、少しづつ差異がみられる。計測値は以下の通りである。

１区23号住居は短軸4.3m・長軸6.0mで、比率１：1.4を示す。３区１号住居は短軸4.6m：長軸5.7mで、比率１：1.24、３区２号住居は短軸4.55m：長軸4.95mで、比率１：1.08という数値を示す。

つまり、比率差の少ない３区２号住居は方形平面に近く、差の大きい１区23号住居は長方形平面を呈し、３区１号住居はその中間的な位置を占める。このように明らかな計測差や形状差が認められるもの



第124図　縄文時代前期住居の構造

の、共通点も看取することができる。それは、短軸長が近似値を示す点にある。計測差は最大30cm前後であり、ほぼ同規模を示すものとみられる。つまり、各住居間の平面形状の相違は、長軸長の差であり、棟方向の相違であることになる。

このように平面形の比較からみると、短軸長の共通性と理由は明らかではないが床面積を大きくする場合の棟方向への拡張という点が規格性として看取できる要素であろうと考えられる。

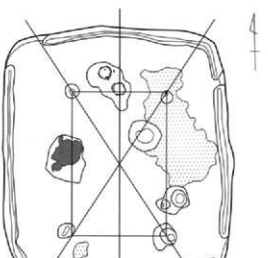
C，柱穴配置

4本主柱による柱穴構造であり、住居平面形とほぼ相似形を示す。柱穴配置の規模は各住居により相違するが、第124図では柱穴配置を模式的に示すため各柱穴を直角で結んでいる。

その計測値は、1区23号住居は、2.0m×3.2m、3区1号住居は、2.5m×2.6m、3区2号住居は、2.0m×3.0mとなる。

規模や図により気がつくことは、住居平面形では長軸長が相違することで形状差が顕著な1区23号住居と3区2号住居の柱穴配置が類似している点である。計測値では長軸長に20cmの差が生じるが、図上にて比較するとほぼ同規模であることがわかる。さらに、両住居の中間的な平面形をもっていた3区1号住居では、ほぼ方形の柱穴配置を示しているのである。

3区2号住居



このことから、住居平面形と柱穴配置はほぼ相似するとはいえ、平面形状の相違を反映するものではないことがわかる。住居平面形と柱穴配置の選択がどのような理由によるものかは不明である。しかし、住居内の柱穴位置については一定の規格性をみることができる。

それは、柱穴配置北辺の位置が、住居奥壁から125cm前後の位置に設定されるという共通性である。このことは、住居平面形および柱穴配置の相違に関わらず一貫した規格性と捉えることができる。

なお、このことにより、柱穴配置南辺から住居南壁の距離が各住居により相違するという際立った傾向が生じている。この南壁部の規模差により、北壁と柱穴配置北辺の距離の規格性が一層目立つことになる。加えて、炉(埋設土器)が北辺柱穴間中央に設置されることも極めて強い規格性となっている。

D，その他の内部施設

内部施設に伴う構造として、次の点があげられる。

周溝は、1区23号住居、3区2号住居で確認されているが、3区1号住居では認められていない。これは、周溝が住居構造に必須の条件とはなっていなかったことを示すことであるのか、遺存状況の差により不明となっているのか確定できない。

各住居とも円形土坑(1号土坑)が確認されている。深さは30～45cmであり、土坑自体に特異な要素は認められていない。いずれも床面上で検出されたものであり、新旧関係を示す所見は得られていないことから住居に伴うものとみられる。なお、土坑部で床面が途切れていることから、住居掘り方に伴うものではなく、住居使用時に存在した可能性が高い。

住居内の位置はそれぞれ一定していないが、柱穴配置との関係をみると、いずれも柱穴対角線上に位置していることがわかる。さらに、対角線交点である中央部と対角線上にあたる柱穴間に設置されるこ

とも共通する点である。このことが住居構造に関する共通性もしくは規格性といえるものか明確ではないが、観察し得た点を指摘するにとどめる。

以下、これまでの点をまとめておきたい。

- 平面形は長方形を基本とする。
- 短軸長は、比較的近似する数値を示すこと。
- 平面形状の相違は、短軸：長軸比の相違によるもので、長軸長の相違により生じる。
- 柱穴配置は4本主柱であり、住居平面形と相似形を示すものの、必ずしも平面形状の相違を反映しない。長方形平面をもつ1区23号住居と方形平面を示す3区2号住居にあってもほぼ同規模の柱穴配置がとられている。その選択理由は不明だが、特徴的な点であると考えられる。
- 柱穴配置は、住居平面形、規模の相違に関わらず住居北壁を基準としてほぼ同一間隔で配置される。そのため、南側では住居壁と柱穴南辺の距離が不規則なものとなっている。
- 炉は埋設土器が用いられ、北辺柱穴間中央に設置される。
- この柱穴が配置される際の住居北壁(奥壁)との位置および柱穴北辺中央部に設置される炉(埋設土器)の関係は最も重視される規格性であるとみることができる。
- 柱穴対角線上に径60cm前後、深さ30cm程度の円形土坑がみられる。性格は不明であるが、各住居に確認されている。住居内の位置は一致しないが、いずれも柱穴配置対角線上に設置される点は共通した傾向として捉えられる。
- 今回調査した3軒の竪穴住居はそれぞれ形態差をもつ。しかし、相違点ばかりではなく、上記のような共通する要素としての規格性も看取することができる。このような共通性が同時期のバラエティとしての企画性であるのか、系統的な規格性として理解するのかについては確定できない。が、出土土器からは諸磯a式期のあまり時間差をもたない時期に存在した住居の可能性が高いと考えられる。

3．円形竹管文の施文方法について

出土した諸磯a式土器については、文様のバラエティは少ないが、竹管文を主とし一部に櫛歯状工具による施文がみられる。

竹管文は、平行線文、連続爪形文等が観察されるが、今回注目されるものは「円形文」もしくは「円形竹管文」とされる文様である。

文様構成は、縄文面に縦列施文する単純な文様が表出される。しかし、その円形文の施文に特異な手法が観察されたため、ここで取り上げておきたい。

まず竹管文の分類についてみておきたい。

西川博孝氏による分類では次のような基準が示されている。(西川博孝「竹管文」『縄文文化の研究』第5巻　1983年　雄山閣)

- 竹管文は、原体・施文の方法・施文の角度により類別され、分類可能となる。
- 原体は、
  - Ⅰ　「円形竹管」
  - Ⅱ　「半截竹管」
  - Ⅲ　「劣截竹管」
  - Ⅳ　「多截竹管」
  - Ⅴ　「特殊な竹管」
- 施文の方法は、
  - 1　「刺突文」原体を単に刺突したもの。
  - 2　「沈線文」原体を単に引いたもの。
  - 3　「押引文」1，2の動作を複合したもの。
  - 4　「特殊」交互に支点をかえて施文するもの。
- 施文の角度は、
  - A　器面に直角にあてるもの。
  - B　器面に鋭角にあてるもの。
  - C　器面に鈍角にあてるもの。

基本的に竹管文については網羅しており、分類上問題は生じるものではなかった。

しかし、今回報告した諸磯a式土器の「円形竹管文」が施される資料の中に、上記分類の「円形竹管」原体の「刺突」方法によるものではないとみられる例が観察されたのである。

1区23号住居出土例をみてみよう。（写真2）

波状口縁の深鉢で、RL横位の縄文施文面に円形文が垂下する単純な文様構成をもつ諸磯a式土器である。

ここに加えられる円形文であるが、個々の円形文を観察すると1ヶ所に粘土の盛り上がりが認められるのである。このような文様は「円形竹管」の「刺突」では表出されないものとみられる。

円形文内に粘土の盛り上がりが境界状に残るような文様を「刺突」方法により表出しようとすれば、次の方法が考えられる。

原体とする円形竹管の1ヶ所に切れ目をもつ施文具を用いる方法と、半截竹管を円形になるように個々に刺突する方法である。今回の例についてもその可能性を考慮した。

しかし、施される円形文の状態を詳細に観察すると、円形文の末端がちょうど「の」字を描くようにもう一方の末端に重なっているような痕跡が残っていることが認められた。このような状態は、切れ目を有する円形竹管の刺突では得ることはできない。

この円形文は、刺突という手法により施文原体の形状を刻印して得られる文様ではないとみられる。

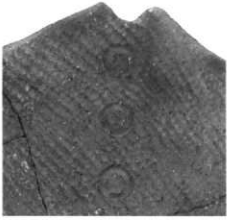
円形文の末端が「の」字状となるという特徴から考えると、施文原体の回転手法により表出される文様であるといえる。回転手法を前提に施文法を復元すると次のような施文方法が考えられる。

施文原体として半截竹管を用い、器面に対し直角にあて、さらにそのままの状態で回転することで、円形文を施す、という施文法となる。このような半截竹管による回転手法で施文すると、今回の例と同様な円形文を得ることができる。

しかし、実験的に復元したことでわかることだが、その施文効果は不規則で一定したものではないことに気がつく。施文原体を1回転以上回転してしまうと、円形竹管の刺突によるものと同様な円形文が形成され、円形文内には回転手法による痕跡は残らない。

また、1回転する手前で止めてしまえば、「C」字状の文様が施されることになる。しかし、今回の出土土器の文様にはこれに類する文様は認められない。このことは、回転手法による施文が円形文の表出を意図したものであることを示しているのかも知れない。

円形文の末端が「の」字状となるためには、半截竹管を器面に押し当て、回転させ、1回転する直前で施文を完了する必要がある。つまり、円形文内に残る粘土の盛り上がり、もしくは「の」字状の痕跡は、最初に押圧した半截竹管端部の痕跡が残っている必要があるからである。円形文内の筋状の粘土の盛り上がりは、この最初の押圧の際の粘土が、回転



回転施文とみられる痕跡が観察される。円形文内の筋状の粘土の盛り上がりから、右回転であることがわかる。

写真2　縄文土器につけられた円形竹管文（1区23号住居出土）

により押されて残ったものである。ということは、さらに回転を続け、1回転以上継続すれば、この粘土の痕跡は削りとられてしまうことになり、刺突手法によるものと同様なものとなる。

回転手法による円形文が、筋状の粘土の盛り上がりを残すことを意識したものかについては不明である。しかし、実験的に施文してみると施文具を押し当て、回転しはじめると、手の動きがちょうど1回転前後で無理なく施文が完了できるように感じる。

回転手法による施文は、円形文の表出を目的に行われたもので、回転による粘土の痕跡の有無は施文時のタイミングによる結果であるといえる。粘土痕跡が残る場合もあれば、それが残らず「刺突文」と類似する円形文となる場合もあるのだろう。今回の出土例にも同じ円形文列の中に、粘土の痕跡が残るものと残らないものが存在することも、このような理由によるものと理解できる。

なお、回転方向についてみると、右回転が多いことが指摘できる。右手を利き手とする製作者による結果なのだろう。

このような施文方法の類例、もしくは系統については今後の課題としたい。しかし、冒頭に掲げた竹管文の分類項目には「回転」手法を加え、類例検討の参考としておきたい。

施文具原体と施文方法による「円形竹管文」について次のように整理しておく。

円形竹管文

A　円形竹管を施文具とし、施文方法は刺突によるもの。「円形竹管刺突方法」

B　半截竹管を施文具とし、弧状部を対置して刺突し、円形文を施すもの。「半截竹管刺突方法」

C　半截竹管を施文具とし、回転手法により円形文を施すもの。「半截竹管回転方法」

　a　1回転する手前で施文を完了する場合。

　b　1回転で施文を完了する場合。

　c　1回転以上する場合。

A　円形竹管刺突方法

施文具である円形竹管を、土器面に垂直に押圧し文様を施す方法。施文具の形態がそのまま刻印され、安定した文様が得られる。

B　半截竹管刺突方法

半截竹管を施文具として、土器面に垂直に押圧する方法。
施文具の形態が刻印されるが、施文位置により不安定な文様となる。
同様の手法で「連続爪形文」を形成することもできることになる。

C　半截竹管回転方法

半截竹管を施文具として、土器面に垂直に押圧ながら回転する方法。
施文具形態の刻印ではなく、施文方法により円形文が得られる。
回転度合により、「の」字状の痕跡が残存する場合や、その回転痕跡が消失する場合もある。

写真3　円形竹管文の分類

4．古墳時代の集落構成とその変遷

今井道上Ⅱ遺跡では、今井道上遺跡(国道50号改良工事調査区)の北側に隣接して、23軒の古墳時代の住居が検出された。このうち3軒は今井道上遺跡ですでに一部が調査された住居である。今回調査した住居群は今井道上遺跡の古墳時代集落の一部であることは明白であることから、時期区分や分布傾向の変化を同一の視点で提示しておきたい。

(1)土器の分類と編年

土器の分類に際しては、竪穴住居に伴うと判断される出土状態を示している土器群を扱い、埋没土中の土器を補足した。分類にあたっては出土量の安定している土師器坏および甕を対象とし、坂口一氏による「古墳時代後期の土器の編年」(『群馬文化』208号、1986、以下坂口編年と呼ぶ)、および『今井道上遺跡』(群埋文第165集、1994、以下前報告と呼ぶ)で示された土師器坏および甕の分類を参照した。

1期　土師器坏は①体部が彎曲するもの、②彎曲した体部から口縁部が短く外反するもの、③体部と口縁部を画する段差から外反する口縁部に至るものの3種類に分けられる。いずれも体部外面に篦削り、内面に篦磨きが施される。今井道上Ⅱ遺跡では②の坏の出土量は少なく、図示できる大きさの破片もなかったが、小破片資料は出土している。

土師器甕も図示できる資料がなかったが、破片資料では中位に最大径をもつ膨らんだ胴部を呈し、外面に篦削り、内面に篦撫でを施すものを確認している。

須恵器高坏は端部に段をもつ短脚で四方に透かし孔をもつ。形状や比較的鋭い端部の稜線は、陶邑古窯址群資料の田辺昭三氏による編年(以下田辺編年と呼ぶ)のＴＫ-47型式に比定することができる。

2期　土師器坏は①体部が彎曲するもの、②彎曲した体部から口縁部が短く外反するもの、③体部と口縁部を画する段差から直立する高い口縁部に至るもの、④体部と口縁部を画する段差から外彎する口縁部に至るものの4種類に分けられる。いずれも体部外面に篦削りを施す。内面は一部に篦磨きを施すものがあるが、概ね撫でを施す。前報告で②として分類された「体部と口縁部を画す受部から彎曲気味に内傾する口縁部に至るもの」は実測可能な破片としてはほとんど見られなかった。④の体部と口縁部を画する段差から外彎する口縁部に至る土師器坏は、類例の少ない形態であり注意を要する。

土師器甕は中位に最大径をもつ膨らんだ胴部を呈し、外面に篦削り内面に篦撫でを施す。一部に長胴のものも見られる。

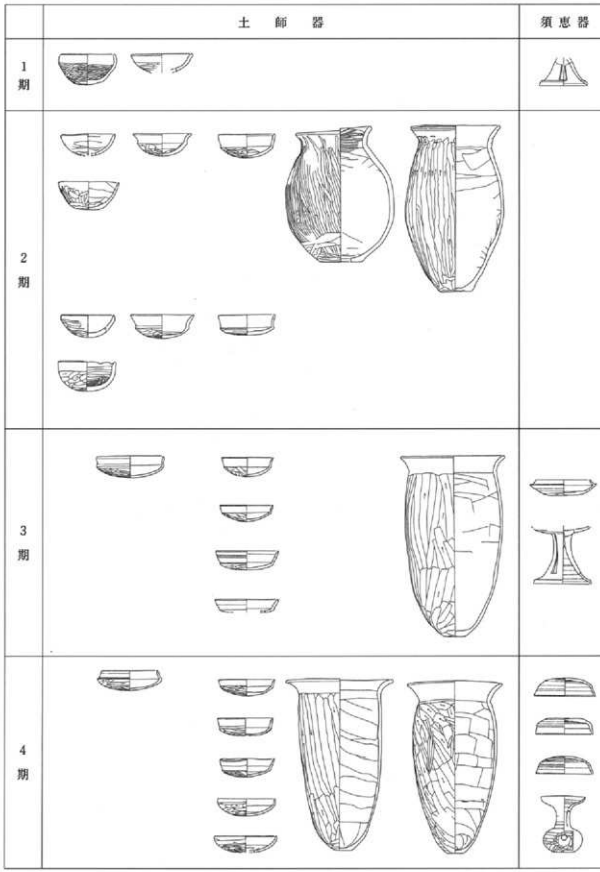
3期　土師器坏は①体部と口縁部を画する稜線から外反する口縁部に至るもの、②浅い体部と口縁部を画する稜線から大きく外反する口縁部に至り口縁部中位に弱い沈線状の窪みをもつもの、③体部と口縁部を画す受部から彎曲気味に直立する口縁部に至るものの3種類に分けられる。③は前報告で「体部と口縁部を画す受部から彎曲気味に内傾する口縁部に至るもの」として分類されたものと類似する。

土師器甕は口縁部に最大径をもち胴部上位が膨らんだ長胴で、外面に篦削り、内面に撫でを施す。

須恵器坏身は浅い体部からやや上向きに張り出した受部を経て内傾する口縁部に至る。浅い体部と内傾する口縁部の形状から田辺編年のＭＴ-85～ＴＫ-43型式に比定される。

須恵器高坏は端部に短い段をもつ長脚で、一段三つの三角形透かし孔をもつ。長脚一段の透かし孔からすれば田辺編年のＭＴ-15型式といえようが、端部のつくりや装飾の欠落等地域的なものと考えられる形状の差があり、陶邑の編年に同定できない。

4期　土師器坏は①体部と口縁部を画する稜線から外反する口縁部に至るもの、②浅い体部と口縁部を画する稜線から大きく外反する口縁部に至り口縁部に中位に弱い沈線をもつもの、③体部と口縁部を画す受部から彎曲気味に短く直立する口縁部に至るもの、④体部と口縁部を画す受部から内傾する口縁部に至るものの4種類に分けられる。④の出土数は少ない。



第125図　今井道上Ⅱ遺跡出土土器の分類

土師器甕は①胴部上位が膨らんだ長胴で口縁部が大きく外反するものと、②膨らみのない胴部から外彎する口縁部に至るものの２種類に分けられる。いずれも外面に箆削り、内面に箆撫でを施す。

須恵器坏蓋は平らな天井部から緩やかに彎曲して直線的に外傾する口縁部にいたる。この形状の特徴から、概ね田辺編年のＴＫ-209～ＴＫ-217型式に比定される。須恵器甕は小さな体部から細い頸部を経て大きく外反し端部が短く立ち上がる口縁部に至る。体部中位やや上に円形孔が穿たれ、孔下には受けが剥離した痕跡が残る。甕には地域的な形状の差が大きく見られ、陶邑編年に同定することはできない。

（２）土器の編年

前節の土器の分類で、今井道上Ⅱ遺跡出土の土器群は大きく４期に分けることができた。これを坂口氏の土器編年に同定して、４時期の編年的位置づけと今井道上遺跡との対比を示すこととしたい。

１期は出土資料が少なく、すべての器種を図示できていないが、体部が彎曲する坏、彎曲した体部から短く外反する坏、膨らんだ胴部をもつ土師器甕の特徴は坂口編年のⅡ段階に比定することができる。伴出する須恵器高坏はＴＫ-47型式と考えられることから、１期は５世紀末に位置づけられる。

２期は体部と口縁部を画す段差から直立する高い口縁部の土師器坏と、中位に最大径をもつ長胴の甕の特徴が坂口編年のⅢ～Ⅳ段階に比定することができる。この段階はＭＴ-15型式に平行するとされていることから、２期は６世紀前半に位置づけられる。

３期は体部から口縁部を画す稜線から外反する土師器坏と、口縁部の中位に弱い段差をもつ土師器坏の特徴が、坂口編年のⅤ～Ⅵ段階に比定することができる。伴出する須恵器坏身はＭＴ-85～ＴＫ-43型式に比定できることから、４期は６世紀後半と位置づけられる。

４期は体部から口縁部を画す稜線から短く外反する土師器坏の特徴が坂口編年のⅦ～Ⅷ段階に比定することができる。伴出する須恵器はＴＫ-209～ＴＫ-217型式に比定できることから、５期は７世紀前半と考えられる。

以上のような今井道上Ⅱ遺跡出土土器の分類・編年からは、７世紀後半の住居が今井道上Ⅱ遺跡にないことを除けば、今井道上遺跡と今井道上Ⅱ遺跡はほぼ同様な変遷をたどったことが明らかになった。すなわち、今井道上Ⅱ遺跡１期は今井道上遺跡Ⅰ期に、同２期は同Ⅱ期に、同３期は同Ⅲ期に、同４期は同Ⅳ期に対比することができる。

（３）竪穴住居の構成

ここでは今井道上Ⅱ遺跡で検出した23軒の古墳時代住居のうち、全形の推定ができ、伴出土器を先の分類に同定できる21軒を編年し、今井道上遺跡の住居構成と比較検討することとする。なお住居の分類基準については、今井道上遺跡と同様とし、凡例（Ｐ185）に掲げた。またこれ以降、時期の記載は前節で確認されたとおり、前報告の今井道上遺跡Ⅰ～Ⅳ期を用いることとする。

なお今井道上遺跡Ⅲ期とされていた「20号住居」（＝今井道上Ⅱ遺跡１区２号住居）は、今回の出土資料の分類結果を総合して、今井道上遺跡Ⅳ期（今井道上Ⅱ遺跡４期）に位置づけを変更した。また、今井道上遺跡Ⅴ期とされていた「18号住居」（＝今井道上Ⅱ遺跡１区５号住居）も、今回の出土資料の分類から、今井道上遺跡Ⅳ期（今井道上Ⅱ遺跡４期）に位置づけを変更した。

今井道上遺跡Ⅰ期　この時期に比定できるのは１区

第19表　今井道上Ⅱ遺跡の土器編年

今井道上Ⅱ遺跡	今井道上遺跡	坂口編年	須恵器型式	実年代
１期	Ⅰ期	古墳時代中期　Ⅰ～Ⅱ段階	ＴＫ-208～ＴＫ-47	５世紀後半
２期	Ⅱ期	古墳時代後期　Ⅲ～Ⅳ段階	ＭＴ-15～ＴＫ-10	６世紀前半
３期	Ⅲ期	古墳時代後期　Ⅴ～Ⅵ段階	ＭＴ-85～ＴＫ-43	６世紀後半
４期	Ⅳ期	古墳時代後期　Ⅶ～Ⅷ段階	ＴＫ-209～ＴＫ-217	７世紀初頭
	Ⅴ期	古墳時代後期　Ⅸ～Ⅹ段階	飛鳥Ⅱ期	７世紀後半

1号住居の1軒で、今井道上遺跡で全形が不明であった25号住居である。前報告の予測通り超大形正方形であった。

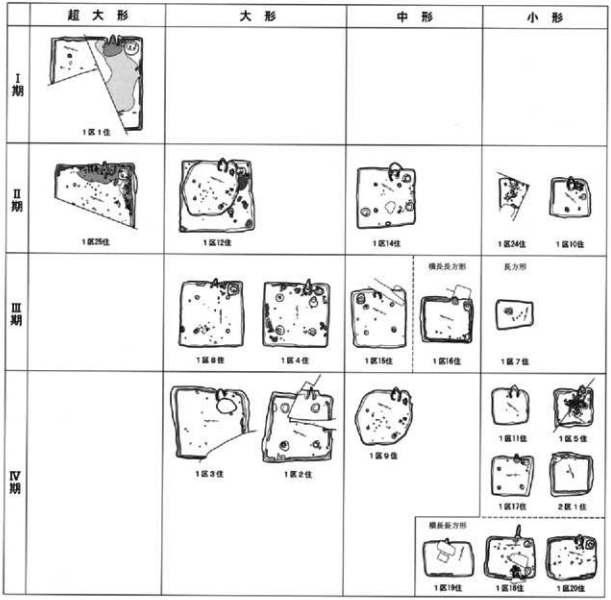
今井道上遺跡Ⅱ期　この時期に比定できるのは5軒で、超大形正方形と推定される住居が1軒、中形正方形1軒と大形正方形1軒、小形正方形2軒である。

今井道上遺跡Ⅲ期　この時期に比定できるのは6軒で、全形がわかるのは5軒である。大形正方形2軒、中形正方形1軒、中形横長長方形1軒、小形長方形1軒である。小形長方形の1区7号住居は唯一の炉敷設住居である。住居の軸線は、竈が北方向になるものとやや北東に傾くものの2者がある。

今井道上遺跡Ⅳ期　この時期に比定できるのは11軒で、このうち分類可能な住居は10軒である。大形正方形2軒、中形不整方形1軒、小形正方形4軒、小形横長長方形3軒である。1区9号住居は四辺のうち北と南の二辺が弧を描く不整方形で極めて異質である。この時期にも住居の軸線は、竈が北方向になるものとやや北東に傾くものの2者がある。

（4）竪穴住居の変遷

「今井道上遺跡の竪穴住居は5世紀後半から出現



第126図　今井道上Ⅱ遺跡の住居外形分類

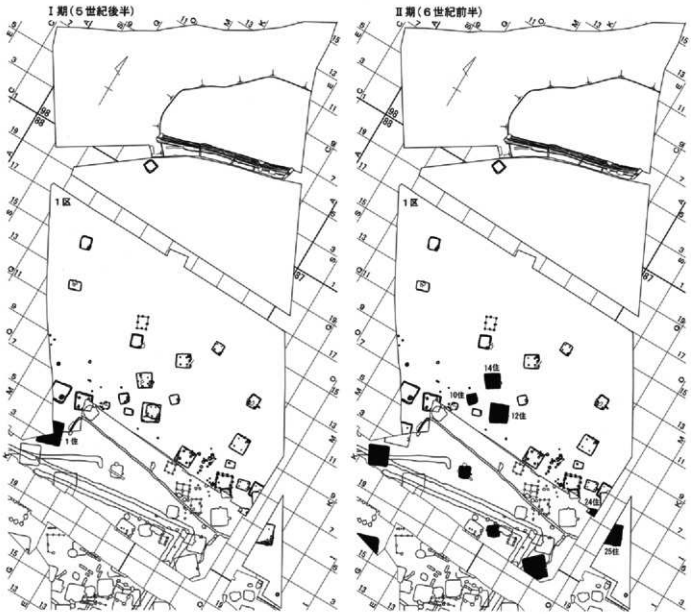
し、遺跡西半の沖積低地に近い部分に分布する」ことが前報告で指摘されている。今井道上Ⅱ遺跡の発掘区では今井道上遺跡の20号住居として調査された1区1号住居のほかには5世紀後半の住居は検出されなかった。前報告の指摘するように少なくとも台地北縁への分布域はなかったことが今回の調査で確認できたことになる。

6世紀前半になると、住居の分布は台地内部に移動が見られる。今井道上Ⅱ遺跡調査区側にも数軒の住居がまとまって分布する。小形と超大形が混在するという前報告の指摘を追認している。

6世紀後半も同様に台地内部に分布するが、やや東側に分布が移る傾向がある。小形と超大形が混在するという傾向は変わらない。

7世紀前半になると、竪穴住居の分布範囲は北側へ広がっている。前報告で指摘された超大形住居の消失は、今井道上Ⅱ遺跡の発掘区でも同様である。

7世紀後半の住居は今井道上Ⅱ遺跡の発掘区では検出されなかった。南にある今井道上道下遺跡等の遺構分布との関連を確認する必要がある。



第127図　今井道上Ⅱ遺跡の竪穴住居の分布（1）

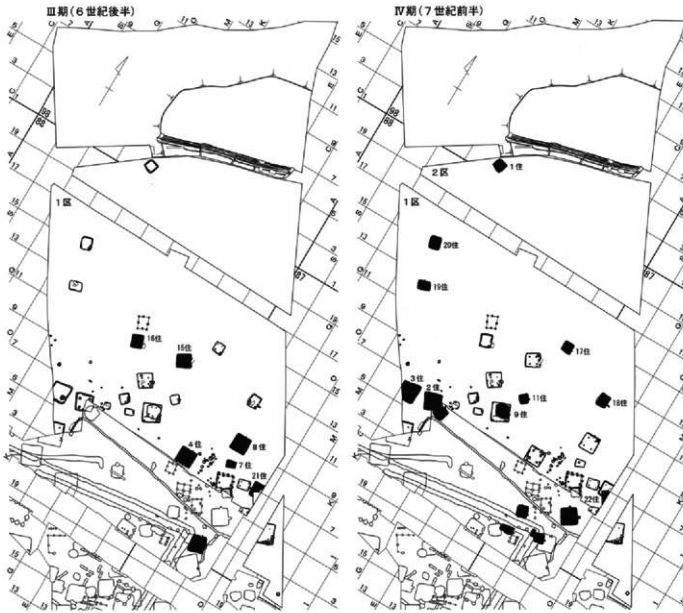
なお今井道上Ⅱ遺跡では9世紀中葉になると1区6号住居が台地中央部につくられる。

（5）今井道上遺跡周辺の農耕集落

今井道上遺跡の古墳時代の竪穴住居は、今井道上Ⅱ遺跡の発掘区の状況を加えても、「5世紀後半に出現した竪穴住居が7世紀後半まで継続し、その後は途絶えたことになる」という前報告の指摘に変更はない。両遺跡とも9世紀の前半あるいは中葉になると住居が再び分布するようになることも共通している。

前報告ではこのことについて、坂口一氏が言及し、今井道上遺跡の北側に沖積低地を挟んで立地する荒砥北三木堂遺跡の古墳時代住居数の推移とあわせることによって「5世紀前半から9世紀前半まで、時間的にほぼ連続した推移をたどることができることになる」とした。そして「個々の遺跡で断絶としていた空白期は、ひとつの農耕地を前提とした占地の変化」と解釈している。

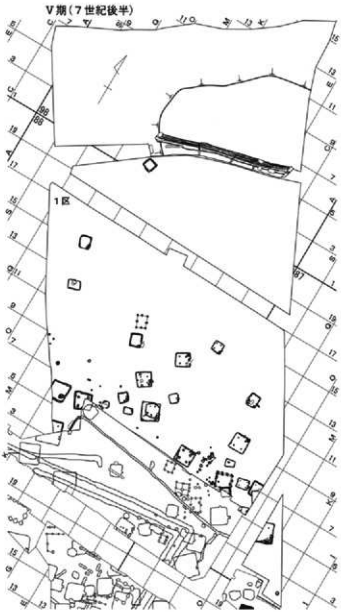
発掘調査では発掘区内の詳細な情報を記述する余



第128図　今井道上Ⅱ遺跡の竪穴住居の分布（2）

り、発掘区内で検出された遺構のみに注目しがちであるが、隣接する遺跡発掘区やさらには発掘区外の集落の広がりに目を向け、水田耕地を共通にした一つの集落という視点を持つことは重要である。今井道上Ⅱ遺跡調査区を含めた今井道上遺跡の７世紀後半から９世紀前半にかけての竪穴住居の激減と空白も、周辺の水田耕地をともに生産基盤とする集落内の竪穴住居の移動を示しているのだろう。

集落の開始時期については５世紀以前の可能性も考えられる。周辺には水田開発が浅間Ｃ軽石降下以前に遡る地点があるからである。

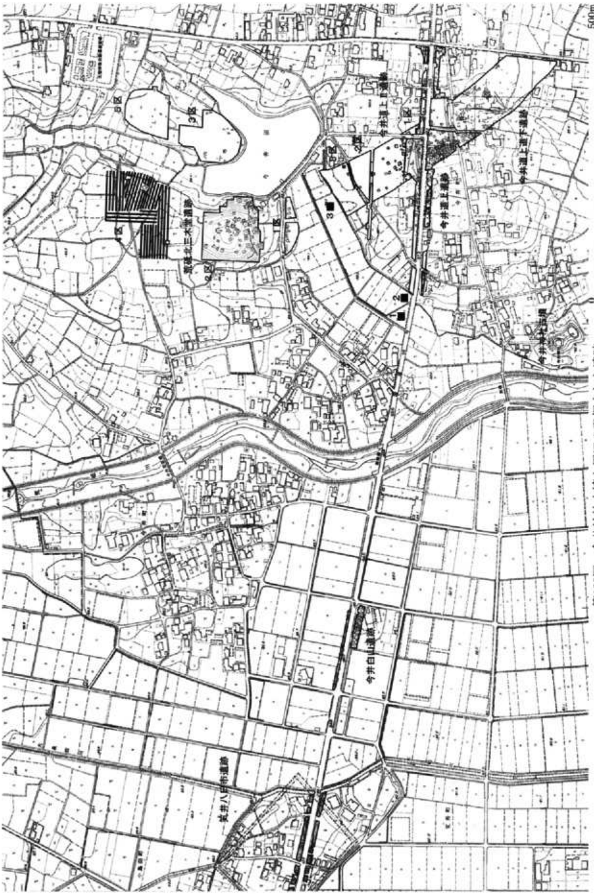


今井道上遺跡の調査に伴って分析土壌が採集された沖積地の自然科学第１地点（第129図■１）は今井沼の谷の谷口中央にあたる。ここでは浅間Ｃ軽石直下で700個／gのイネのプラントオパールが検出された。谷の縁にあたる第２地点（第129図■２）ではイネのプラントオパールは検出されなかった。また荒砥北三木堂Ⅱ遺跡１区（第129図■３）では、今井沼の谷の南半発掘区で浅間Ｃ軽石直下と浅間Ｂ軽石直下で水田の畦を検出している。北半の埋没地形は緩斜面で、発掘調査で水田面は検出されていない。

これらの調査所見によれば、谷の北半分は現在では水田化されているが、古墳時代には南側の本来の沖積地部分のみが小規模に開田されていたものと推定される。発掘区内で古墳時代前期の住居は未確認であるが、今井道上Ⅱ遺跡周辺の集落の開始時期は浅間Ｃ軽石降下の頃まで遡る可能性がある。実際に荒砥川西岸の今井白山遺跡の発掘区東部では、現水田下で４世紀の住居が３軒検出されている。東岸では上流800ｍにある荒砥前田遺跡で方形周溝墓群が、１㎞の荒砥前田Ⅱ遺跡では30軒の古墳時代前期の住居群が検出されている。

古墳時代前期の水田農耕集落は、用水と生産域の広さに恵まれた水田可耕地に面した台地縁辺に１～数㎞の間隔をもって点在する。古墳時代中後期になると、その周辺および傾斜地への水田耕地拡大に加えて、水利の乏しい谷水田への開発拡大を背景にして集落が新開あるいは拡大していく。５世紀後半以降の今井道上遺跡・同Ⅱ遺跡の集落動向は、古墳時代初頭の小集落から始まった水田農耕地の拡大過程にともなった移動との解釈も可能であろう。坂口氏が指摘するように、この農耕地拡大に今井神社古墳の被葬者が大きく関わった可能性が高いだろう。

今井道上遺跡周辺の古墳時代を明らかにしていくには、現在の土地利用に惑わされず埋没地形に留意した調査を進め、古墳時代の農耕環境を復元しながら、遺跡群を分析していく視点が必要であろう。



第129図　今井神社古墳と周辺の発掘された遺跡

参 考 文 献

群馬県 1981『群馬県史　資料編２　原始古代２』
群馬県 1986『群馬県史　資料編３　古墳』
群馬県 1990『群馬県史　通史編１』
西川博孝 1983「竹管文」『縄文時代の研究』雄山閣
田辺正三 1981「須恵器大成」
山崎　一 1971『群馬県古墳墓並の研究』上巻
能登　健 1984「集落変遷からみた農耕地拡大のプロセス」『地方史研究』191
能登　健 1986「里耕み集落の研究－集落変遷からみた農耕地拡大過程とその背景－」『内陸の生活と文化』地方史研究協議会編　雄山閣
坂口　一 1986「古墳時代後期の土器の編年－三ツ寺Ⅱ遺跡を中心とした土師器と須恵器の平行関係」『群馬文化』第208号
坂口　一 1991「首長墓成立の一背景－群馬県前橋市、今井神社古墳とその周辺集落の動向」『群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』13号
小島敦子 1986「初期農耕集落の立地条件とその背景」『群馬県史研究』24号
東国文化研究所・前橋育英高校郷土部・伊勢崎市教育委員会1973『八坂遺跡調査概報』
伊勢崎市 1987『伊勢崎市史』
前橋市教育委員会 1979『富田遺跡群・西大室遺跡群・清里南部遺跡群』
前橋市教育委員会 1981『富田遺跡群』
前橋市教育委員会 1982『富田遺跡群・西大室遺跡群』
前橋市教育委員会 1980『鶴谷遺跡群発掘調査概報』
前橋市教育委員会 1981『鶴谷遺跡群発掘調査概報Ⅱ』
前橋市教育委員会 1982『鶴谷遺跡群Ⅱ』
前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1990『荒子小学校校庭Ⅱ・Ⅲ遺跡発掘調査報告書』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1985『柳久保遺跡群Ⅰ』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1986『梅木遺跡』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1987『小幡所遺跡』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1988『柳久保遺跡群Ⅵ』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1988『柳久保遺跡群Ⅶ』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1993『原恢遺跡群Ⅵ』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1993『中原遺跡群』Ⅰ
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1994『中原遺跡群』Ⅱ
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1994『地田第Ⅲ遺跡』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1995『荒砥青柳Ⅱ遺跡』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1995『中原遺跡群』Ⅳ
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1996『中原遺跡群』Ⅲ・Ⅴ・Ⅶ
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1998『横手湯田Ⅲ遺跡・徳丸仲田Ⅱ遺跡・西善尺司Ⅱ遺跡・下増田越渡Ⅲ遺跡』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1998『荻原Ⅱ遺跡』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1998『新井大田関Ⅱ遺跡・荻原Ⅲ遺跡』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1999『恵丸高塚遺跡・徳丸仲田Ⅱ遺跡・西善尺司Ⅲ遺跡・下増田常木Ⅱ遺跡・下増田越渡Ⅳ遺跡』
群馬県教育委員会 1978『荒砥五反田遺跡』
群馬県教育委員会 1984『山崎遺跡・寺東遺跡・寺前遺跡・東前田北遺跡・東原西遺跡・新山遺跡』
群馬県教育委員会 1985『延東遺跡』
群馬県教育委員会 1984『頭無・大久保・川籠皆戸遺跡』
群馬県教育委員会 1990『下境Ⅰ・天神』
群馬県教育委員会 1991『舞台・西大室丸山』
群馬県教育委員会 1991『富士山Ⅰ遺跡１号古墳』
群馬県教育委員会 1992『丸山・北原』
群馬県教育委員会 1992『上諏訪山Ａ・Ｂ・中山Ａ・東原Ａ・Ｂ』
群馬県教育委員会 1996『下境Ⅰ・Ⅱ』
群馬県教育委員会 1997『西大室丸山遺跡』
群馬県教育委員会 1998『諏訪西遺跡・諏訪遺跡・柳久保遺跡・川籠皆戸遺跡・向原遺跡』
群馬県教育委員会 1999『上西原遺跡』
群馬県教育委員会 2000『村主遺跡・谷津遺跡』
群馬県教育委員会 2001『北田下遺跡・中畑遺跡・中山Ｂ遺跡』
群馬県教育委員会 2002『山王遺跡・大道遺跡・阿弥陀井戸道上遺跡・天神遺跡・元屋敷遺跡』
群馬県教育委員会 2003『中屋敷Ⅰ遺跡・明神山遺跡・伊勢山遺跡・中島遺跡・西裏遺跡』
群馬県企業局 1991『荒野・下田中・矢場遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1979『荒砥東原遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982『荒砥上川久保遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984『荒砥鳥原遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984『女堀』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985『荒砥洗橋遺跡・荒砥宮西遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985『荒砥二之堰遺跡』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985『荒砥前原遺跡・赤石城址』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988『荒砥天之宮遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988『二之宮宮下東遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991『荒砥北三本堂遺跡Ⅰ』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992『二之宮千足遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993『今井白山遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993『荒砥宮川遺跡・荒砥宮原遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994『荒砥大日塚遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994『今井道上遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994『笂井八日市遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994『小島田八日市遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994『二之宮谷地遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994『二之宮洗橋遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994『二之宮宮東遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995『荒砥上ノ坊遺跡Ⅰ』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995『今井道上・道下遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995『二之宮下西遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1996『荒砥上ノ坊遺跡Ⅱ』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999『荒砥下押切Ⅱ遺跡・荒砥中屋敷Ⅱ遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000『荒砥荒子遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001『波志江中野面遺跡』(1)(2)
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002『荒砥諏訪西遺跡Ⅰ』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003『荒砥諏訪西遺跡Ⅱ・荒砥源訪遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003『荒砥宮田遺跡Ⅰ』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003『下増田綿渡遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004『荒砥宮田遺跡Ⅱ・荒砥前田遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004『上増田島遺跡・下増田笛木遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997『年報16』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998『年報17』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999『年報18』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000『年報19』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001『年報20』

遺構一覧・遺物観察表

凡　　例

1．遺構一覧表は、遺構ごとに作成した。
2．遺構は、発掘区の番号順で並べた。
3．掲載頁・図は本文で報告した頁・図番号を、掲載写真は写真図版のＰＬ番号を記載した。
4．遺構の計測値は、重複等で計測できないものは計測不可とした。
5．住居の分類は下記のような『今井道上遺跡』(群埋文第165集　1994)の分類基準に拠った。

竪穴住居外形分類基準

上　段：長軸長（単位　m）
下　段：長軸比（長軸長/短軸長）

規模＼形状	正　方　形	縦長長方形	横長長方形
超　大　形	6.5m以上 1.0～1.1未満	6.5m以上 1.1以上	6.5m以上 1.1以上
大　形	5.4～6.5m未満 1.0～1.1未満	5.4～6.5m未満 1.1以上	5.4～5.6m未満 1.1以上
中　形	4.3～5.4m未満 1.0～1.1未満	4.3～5.4m未満 1.1以上	4.3～5.4m未満 1.1以上
小　形	3.2～4.3m未満 1.0～1.1未満	3.3～4.3m未満 1.1以上	3.3～4.3m未満 1.1以上

6．遺物観察表は土器・石器・金属器・木製品ごとに、本文第４章の掲載順に並べた。
7．土器観察表の法量欄の単位はcmである。また、(　)は復元値、残と付記したのは残存値である。
8．出土位置欄は、住居出土の遺物については竈・貯蔵穴・壁際・住居隅等の平面的位置と、床面比高を併記した。住居以外の遺物についてはそれに準じた。
9．外観の特徴のうち、土器の胎土は特徴的な挟雑物について記載した。
10．外観の特徴のうち、土器の焼成は酸化焔焼成か還元焔焼成かを記載した。
11．外観の特徴のうち、色調は『標準土色帖』を用い、最も大きな面積を占める器面の色名を記載した。なお焼成に伴う黒斑は別途記載した。
12．整形技法や文様については土器種類ごとに書式を変えている。

目　　次

1．竪穴住居一覧表・・186
2．土坑一覧表・・186
3．掘立柱建物一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・187
4．井戸一覧表・・187
5．溝一覧表・・・187
6．縄文土器観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・188
7．縄文時代石器類一覧・観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・195
8．土師器・須恵器・陶磁器観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・211
9．古墳時代石器・石製品・礫計測表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・224
10．金属器観察表・・228
11．木製品観察表・・228

1．竪穴住居一覧表

区	遺構番号	時期	グリッド	平面形	規模	長軸／短軸	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)
1区	23	住居	諸磯a	88－G・H－16・17	隅丸長方形			6.12	4.50	0.47
3区	1	住居	諸磯a	98－G・H－5・6	隅丸長方形			5.88	4.79	0.35
3区	2	住居	諸磯a	98－E・F－7・8	隅丸長方形			5.32	4.88	0.27
1区	1	住居	1期	88－H・I－3・4	正方形	超大形	1.02	7.86	7.72	0.50
1区	2	住居	4期	88－H・I－5・6	正方形(台形)	大形	1.04	5.92	5.70	1.00
1区	3	住居	4期	88－I・J－5・6	正方形(台形)	大形	1.03	6.20	6.00	0.99
1区	4	住居	3期	88－A－6・7、87－T－6・7	正方形	大形	1.03	5.60	5.43	0.58
1区	5	住居	4期	87－Q－5・6	正方形	小形	1.06	3.30	3.10	0.67
1区	6	住居	9C中葉	87－P・Q－6・7	縦長長方形	小形	1.25	3.84	3.08	0.30
1区	7	住居	3期	87－Q・R－7	長方形(台形)	小形	1.49	3.02	1.82～2.70	0.14
1区	8	住居	3期	87－Q・R－8・9	正方形	大形	1.03	5.52	5.35	0.53
1区	9	住居	4期	88－C・D－7・8	不正方形	中形	1.04	4.82	4.62	0.67
1区	10	住居	2期	88－F－7・8	正方形(台形)	小形	1.06	2.97～3.50	3.30	0.57
1区	11	住居	4期	88－C－9	正方形	小形	1.01	3.08	3.04	0.39
1区	12	住居	2期	88－C～E－7・8	正方形	大形	1.04	6.15	5.98	0.55
1区	13	住居	不明	88－E・F－6・7	縦長長方形	小形	1.46	3.06	1.91～2.09	0.48
1区	14	住居	2期	88－E・F－8～10	正方形(台形)	中形	1.03	4.54～5.06	4.92	0.35
1区	15	住居	3期	88－C・D－11・12	正方形	中形	1.09	4.97	4.55	0.49
1区	16	住居	3期	88－G・H－10・11	横長長方形	中形	1.24	4.45	3.59	0.62
1区	17	住居	4期	88－B・C－13・14	正方形(台形)	小形	1.07	3.12～3.45	3.21	0.53
1区	18	住居	4期	87－R・S－11・12	横長長方形	小形	1.20	3.95～4.23	3.50	0.47
1区	19	住居	4期	88－L・M－12	横長長方形	小形	1.43	4.18	2.93	0.26
1区	20	住居	4期	88－M・N－14・15	横長長方形	小形	1.15	4.15	3.61	0.64
1区	21	住居	4期	87－O・P－6・7	不明		不明	不明	不明	0.54
1区	22	住居	3期	87－O・P－6・7	不明	中形	不明	不明	4.94	0.43
1区	24	住居	2期	87－O・P－5	正方形	小形	1.05	2.47	2.35	0.25
1区	25	住居	2期	87－M・N－4・5	(正方形)	超大形	不明	6.70	不明	0.60
2区	1	住居	4期	98－L・M－1・2	正方形	小形	1.00	3.74	3.10～3.74	0.70

2．土坑一覧表

区	遺構番号	時期	グリッド	平面形	断面形	長軸方位	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	本文	遺構図	遺構写真	遺物図	遺物写真
1区	1	土坑	88－H－5	楕円形	皿形	N－65°－E	0.59	0.56	0.20	P.154	第118図	PL56		
1区	2	土坑	88－G－6	隅丸方形	浅い皿形	N－19°－W	2.18	1.97	0.15	P.155	第118図	PL57	第122図	PL93
1区	3	土坑	87－S－6	楕円形	筒形	N－73°－W	0.59	0.54	0.52	P.155	第118図	PL57	第122図	PL93
1区	4	土坑	87－S－6・7	楕円形	筒形	N－71°－W	0.62	0.55	0.56	P.155	第118図	PL57		
1区	5	土坑	87－T－7	不定形	すり鉢形	N－50°－W	0.81	0.77	0.34	P.155	第118図	PL57		
1区	6	土坑	87－S－6	不定形	筒形	N－84°－W	0.85	0.70	1.57	P.155	第118図	PL58		
1区	7	土坑	87－S－6・7	楕円形	筒形	N－48°－E	0.77	0.73	0.51	P.158	第119図	PL58		
1区	8	土坑	87－S－7	楕円形	浅い船形	N－85°－W	1.13	1.04	0.32	P.158	第119図	PL58		
1区	9	土坑	87－S－7	楕円形	浅い皿形	N－40°－W	0.86	0.80	0.25	P.158	第119図	PL58	第122図	PL93
1区	10	土坑	87－S－7	楕円形	浅い皿形	N－50°－E	1.08	0.75以上	0.19	P.158	第119図	PL58	第122図	PL93
1区	11	土坑	87－S－6	円形	船形		0.78	－	0.50	P.158	第119図	PL59		
1区	12	土坑	87－R－5	楕円形	浅い皿形	N－61°－E	0.96	0.89	0.41	P.158	第119図	PL59		
1区	13	土坑	88－K－7	楕円形	椀形	N－3°－E	1.12	0.99	0.55	P.159	第119図	PL59		
1区	14	土坑	88－I－8	楕円形	浅い船形	N－9°－E	0.87	0.72	0.22	P.159	第119図	PL59	第122図	
1区	15	土坑	縄文	87－R－5・6	隅丸長方形		N－23°－W	3.04	1.44	0.96	P.47	第34図	PL11	
1区	16	土坑	縄文	88－F－8・9	楕円形		N－21°－W	2.78以上	2.14	1.75	P.47	第35図	PL11	第35図	PL73
1区	17	土坑	縄文	88－D－E－8	方形		N－61°－E	1.40	1.02以上	0.67	P.47-48	第35図	PL11	
1区	18	土坑		87－K－1	楕円形	浅い船形	N－29°－W	1.07	0.98	0.21	P.159	第119図	PL59-60	
3区	1	土坑	縄文	98－O－1・2	円形			1.01	－	0.74	P.48	第36図	PL11	第36図	PL73
3区	2	土坑	縄文	98－K・L－3	隅丸長方形		N－76°－E	2.38	0.98	1.09	P.48-49	第36図	PL12	
3区	3	土坑	縄文	98－H－5	楕円形		N－27°－E	0.72	0.64	0.20	P.51	第37図	PL12	第37図	PL73

方　位	方位計測位　置	床 面 積 (㎡)	火　処	本　文	遺構図	遺構写真	遺 物 図	遺物写真
N－15°－W	長軸	24.03	土器埋設土坑	P.21～24・36	第10～13図	P L 3～6	第14～23図	P L 64～69
N－29°－W	長軸	24.74	土器埋設土坑	P.36・38	第24図	P L 7・8	第25～29図	P L 69～71
N－2°－E	長軸	22.49	土器埋設土坑	P.43	第30図	P L 9・10	第31～33図	P L 72・73
N－72°－E	長軸	測定不能	竈	P.83	第54図	P L 13	第53図	P L 80
N－28°－W	西壁	測定不能	竈	P.85	第57図	P L 14	第55・56図	P L 80
N－4°－E	長軸	測定不能	竈	P.88・89	第59図	P L 15・16	第58図	P L 81
N－2°－E	長軸	27.04	竈	P.92	第60・61図	P L 17・18	第62・63図	P L 81・82
N－54°－E	北西壁	8.67	竈	P.96・100	第64・65図	P L 19	第66・67図	P L 83・84
N－75°－E	長軸	10.46	竈	P.100	第69図	P L 20・21	第68図	P L 84
N－67°－E	南壁	6.09	炉	P.102	第70図	P L 21・22	第70図	P L 85
N－0°－E	長軸	26.53	竈	P.103	第71・72図	P L 22～24	第73・74図	P L 85・86
N－60°－E	短軸	16.45	竈	P.106～108	第76・77図	P L 24～26	第75図	P L 86
N－48°－E	短軸	8.43	竈	P.111	第79図	P L 27～29	第80図	P L 87・88
N－49°－E	短軸	7.49	竈	P.114	第82図	P L 29・30	第81図	P L 88
N－64°－E	長軸	28.49	竈	P.108・111	第77図	P L 24～27	第78図	P L 86・87
N－67°－E	長軸	4.65	竈	P.114	第83図	P L 30・31	第81図	P L 88
N－56°－E	長軸	21.91	竈	P.118	第84・85図	P L 32・33	第86図	P L 88
N－60°－E	長軸	19.53	竈	P.120	第87・88図	P L 33～35	第89図	P L 88
N－68°－E	短軸	14.35	竈	P.122・124	第90図	P L 35～37	第91図	P L 88・89
N－2°－E	長軸	9.18	竈	P.124・125	第93図	P L 37～39	第92図	P L 89
N－1°－E	長軸	12.49	竈	P.127	第94・95図	P L 39～42	第96・97図	P L 89・90
N－22°－W	長軸	10.47	竈	P.131・132	第98	P L 42・43	第98図	P L 90
N－74°－E	長軸	13.09	竈	P.132・135	第99・100図	P L 43～45	第101図	P L 90・91
N－33°－W	西壁	測定不能	竈	P.135・137	第102図	P L 45・46	第103図	P L 91
N－1°－W	西壁	測定不能	竈	P.137・138	第102図	P L 45・46	第103図	P L 91
N－67°－E	西壁	測定不能	竈	P.138・140	第104図	P L 46・47	第105図	P L 91・92
N－22°－W	東壁	測定不能	竈	P.140・147	第106・107図	P L 47～51	第108・109図	P L 92
N－25°－E	西壁	9.78	竈	P.148・149	第110図	P L 51・52	第111図	P L 92・93

3．掘立柱建物一覧表

区	遺構番号	時期	グリッド	規模	建物の向き	主軸方位	本文	遺構図	遺構写真
1区	1 掘立	古代か？	87－Q・R－5・6	3×3間	不明	N－20°－W	P.149	第113図	P L 52～54
1区	2 掘立	古代か？	88－G・H－12・13	2×2間	南北棟	N－24°－W	P.151・152	第115図	P L 55・56
1区	3 掘立	古代か？	87－Q・R－5～7	3×3間	不明	N－20°－W	P.149・151	第114図	P L 52・54・55

4．井戸一覧表

区	遺構番号	時期	グリッド	平面形	長軸方位	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	本文	遺構図	遺構写真	遺物図	遺物写真
1区	1 井戸	近世か	88－I・J－5	楕円形	N－15°－E	1.35	1.27	2.41	P.152	第116図	P L 56	第116図	P L 93

5．溝一覧表

区	遺構番号	時期	グリッド	走　向	調査長 (m)	最大幅 (m)	最小幅 (m)	深さ (m)	本文	遺構図	遺構写真	遺物図	遺物写真
1区	1 溝	不明	88－H－4・5	N－1°－E	4.67	0.41	0.33	0.24	P.153	第117図	P L 61	－	－
3区	1 溝	現代								－	P L 62	－	－
3区	2 溝	現代								－	P L 62	－	－
3区	3 溝	現代								－	P L 62	－	－
3区	4 溝	現代								－	P L 62	第43図	P L 73
3区	5 溝	現代								－	P L 62	－	－
3区	6 溝	平安以降	98－D～M－3～6	N－76°－E	45.60	1.48	0.92	0.74	P.154	付図1	P L 63	－	－
3区	7 溝	平安以降	98－D～M－3～6	N－75°－E	38.00	0.60	0.40	0.40	P.154	付図1	P L 63	－	－